新潟県埋蔵文化財調査報告書　第199集

県内遺跡発掘調査報告書Ⅰ

山　元　遺　跡

２００９

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

県内遺跡発掘調査報告書Ⅰ

山元（やまもと）遺跡

2009

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

日本海沿岸東北自動車道は、新潟市を起点とし日本海に沿って北上し、青森県に至る高規格幹線道路です。新潟県内では平成14年度に胎内市の中条インターチェンジまでが開通しました。

高速自動車道建設を取り巻く状況は厳しく、平成15年度末の国土開発幹線自動車道建設会議（国幹会議）において、日本海沿岸東北自動車道の中条－朝日Ｉ.Ｃ間は、日本道路公団が有料道路として建設を進めることとなりました。その後、公団の民営化に伴い、平成17年10月に設立された東日本高速道路株式会社に引き継がれましたが、平成18年２月の国幹会議において、荒川－朝日Ｉ.Ｃ間は国土交通省が新直轄道路として建設することとなりました。日本海沿岸東北自動車道は、この地域内外の経済的な交流・連携を促進するだけではなく、救急患者の搬送・災害時の緊急輸送等「命の高速道」としての役割を期待されており、早期の開通が望まれます。

本書は、この高速自動車道建設に先立って試掘確認調査を実施した「山元遺跡」の調査報告書です。調査の結果、弥生時代後期を主体とする「高地性環濠集落」であることが判明しました。この形態の集落は、記紀にある「倭国大乱」を反映しているという解釈があります。日本海側では旧新津市の国指定史跡古津八幡山遺跡が最北でしたが、山元遺跡の発見によって阿賀野川以北の越後平野最北部まで北上することが明らかになりました。出土土器は器面に縄文施文された東北系土器が主体です。東北系土器文化圏では、高地性環濠集落が確認されていませんでしたので、山元遺跡が初例となります。１つの墓から出土した70個余りのガラス小玉は、東日本でも有数の出土量であり、西方地域との交流が予想されます。山元遺跡の発見によって、従来の解釈を再検討しなければならない項目も少なくありません。

県教育委員会では学術上価値が高い遺跡であることから、有識者からの助言を踏まえて調査を行うと共に、国土交通省と協議を重ね、現状保存要望書を提出しました。これを受けて国土交通省は工事計画をトンネル工法に変更し、遺跡を現状保存することが決定しています。

今回の報告が県内のみならず、全国的視野で古代史を解明する研究資料として活用され、埋蔵文化財の理解と認識を深める契機となれば幸いです。

最後に、発掘調査に際して多大な御協力と御援助をいただきました、旧神林村教育委員会・村上市教育委員会並びに地元の方々、また調査から報告書刊行に至るまで格別の配慮をいただいた有識者の先生方、文化庁文化財保護記念物課、国土交通省北陸地方整備局及び、同新潟国道事務所、東日本高速道路株式会社北陸支社及び、同村上工事事務所に対し、厚くお礼を申し上げます。

平成21年３月

新潟県教育委員会

教育長　武　藤　克　己

例　　言

1．この報告書は、村上市（旧岩船郡神林村）大字下助渕字山元に所在する山元遺跡の試掘確認調査記録である。

2．試掘確認調査は、日本海沿岸東北自動車建設に先立ち東日本高速道路株式会社・国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所から依頼を受け、新潟県が実施したものである。

3．この調査は国庫補助事業（県内遺跡発掘調査等）を受けて、平成17・18・20年度に新潟県教育委員会（以下、県教委）が調査主体となり、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）が受託して実施した。

4．出土遺物及び調査・整理作業に係る各種資料（含む観察データ）は、一括して県教委が保管・管理している。

5．遺物の注記は「山元」とし、出土地点・層位を併記した。

6．本書の図中で示す方位は全て真北である。基準杭の打設は（株）帆苅組が行った。

7．報告書掲載遺物の番号は土器・土製品と石器・石製品があるが、通し番号とした。本文及び観察表・図面図版・写真図版の番号は全て一致している。

8．本文中の註は脚註とし、頁ごとに番号を付した。また、引用文献は著者及び発行年（西暦）を文中に[ ]で示し、自然科学分析を除いて巻末に一括して掲載した。

9．「第Ⅵ章　自然科学分析」は独立行政法人奈良国立文化財研究所肥塚隆保氏・田村朋美氏、東京大学吉田邦夫氏に委託した。なお、本書には編集したものを掲載した。

10. 本書の編集は滝沢規朗が担当した。執筆は、第Ⅰ章２・第Ⅳ章２Ｂを澤田　敦、第Ⅴ章４Ａ・Ｂ・Ｃ(１)～(７)を斉藤　準が行った以外は、滝沢である。

11. 調査の内容については以下の刊行物に概要を報告したが、本書の記述をもって正式な報告とする。また、以下の刊行物と本書に齟齬がある点は、本書の記述をとるものとする。

滝沢規朗　2006　「荒川Ｉ.Ｃ～朝日Ｉ.Ｃ間　推定地５（村上Ｉ.Ｃ）試掘調査」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報　平成17年度』　（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

滝沢規朗　2007ａ『埋文新潟』第58号　（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

滝沢規朗　2007ｂ「新潟県山元遺跡」『考古学研究』第54巻第１号　考古学研究会

滝沢規朗　2007ｃ「山元遺跡」『発掘された日本列島2007　新発見考古速報』　朝日新聞社

滝沢規朗　2007ｄ「新潟県神林村山元遺跡」『月刊考古学ジャーナル』565　ニューサイエンス社

滝沢規朗　2007ｅ「荒川Ｉ.Ｃ～朝日Ｉ.Ｃ間　村上Ｉ.Ｃ（山元遺跡）確認調査」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報　平成18年度』　（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

12. 発掘調査から本書の作成に至るまで下記の方々から多大なご教示とご協力をいただいた。厚くお礼申し上げる（五十音順　敬称略）

相澤清利、相田康臣、赤澤徳明、阿部明彦、阿部泰之、甘粕　健、石川日出志、磯部保衛、伊藤秀和、植松暁彦、潮田憲之、岡田康弘、岡村道雄、大木紳一郎、小野隆志、加藤由美子、金子拓男、小林圭一、小林　徳、小林正史、小林　克、斉藤　力、酒井亜紀、坂井秀弥、佐藤　慎、柴田昌二、笹沢正史、須藤　隆、関　雅之、高瀬克範、高濱信行、田嶋明人、田中耕作、田辺早苗、立木宏明、富樫雅彦、栃木英道、錦田剛志、西川修一、禰宜田佳男、野田豊文、野村忠司、野水晃子、橋本博文、浜崎悟司、濱田竜彦、久田正弘、古沢妥史、守屋豊人、宮尾　亨、水澤幸一、安　英樹、吉井雅勇、渡邊朋和、村上市教育委員会、文化庁、独立行政法人奈良国立文化財研究所、財団法人山形県文化財調査事業団

目　　次

第Ⅰ章　序　　章

1　平成17・18年度の調査に至る経緯と経過 …… 1
A　調査に至る経緯…… 1　　B　調査経過…… 1
2　平成20年度の調査に至る経緯と経過 …… 5
3　整理作業と調査体制…… 5
A　整理作業…… 5　　B　調査体制…… 5

第Ⅱ章　遺跡を取りまく環境

1　地理的環境 …… 7
2　歴史的環境 …… 8
A　弥生時代…… 8　　B　古墳時代……10

第Ⅲ章　調査の概要

1　トレンチと小グリッドの設定 ……11
2　層　　序 ……12

第Ⅳ章　遺　　構

1　概　　要 ……13
A　概　　略……13　　B　各地点の概要……13
2　各　　説 ……14
A　平成17・18年度……14　　B　平成20年度……17
3　小　　結 ……18

第Ⅴ章　遺　　物

1　概　　要 ……19
2　土　　器 ……19
A　分　　類……19　　D　土器組成……21
B　観察表……20　　E　各　　説……22
C　実測図の表現と文様帯の呼称……21
3　土製品 ……29
4　石器・石製品 ……29
A　資料の提示方法……29　　C　石器の分類と分析……30
B　石器の出土位置……30
5　ガラス製品 ……39

第Ⅵ章　化学分析

1　山元遺跡出土のガラス小玉について ……41

A　はじめに……41　　C　調査結果……42

B　調査方法……41　　D　まとめ……44

2　山元遺跡の放射性炭素年代 ……45

A　年代測定資料……45　　B　放射性炭素年代測定……45

第Ⅶ章　まとめ

1　出土遺物について ……51

A　石器について……51　　C　土器の年代について……54

B　ガラス小玉について……53

2　遺跡の動向について……60

A　山元遺跡で確認された遺構について……60

B　県内における高地性集落・環濠集落……62

《要　　約》 ……68

《引用・参考文献》 ……69

《観　察　表》 ……74

挿図目次

第１図　瀬波郡絵図と山元遺跡位置推定図……7
第２図　山元遺跡の位置と周辺の弥生～古墳時代等の遺跡…9
第３図　小グリッドの設定……11
第４図　基本層序……12
第５図　文様帯の呼称……21
第６図　剥片類の計測基準と名称……31
第７図　主な器種の部位名称と計測基準等……31
第８図　石鏃の分類別長幅図……32
第９図　石鏃の分類別厚さ……32
第10図　石鏃の分類別重量……32
第11図　不定形石器の分類別長幅図……34
第12図　磨石類分類別長幅図……37
第13図　磨石類凹痕分類模式図……37
第14図　顕微鏡写真……42
第15図　ガラス小玉のＣＲ画像からの画像強調処理…42
第16図　ガラス小玉のＡＲ画像……43
第17図　資料15（30T濠５の続縄文土器）……47
第18図　№15弥生土器付着炭化物……47
第19図　分析資料の年代……48
第20図　測定資料の採取地点……49
第21図　弥生時代中後期の石器組成検討遺跡……52
第22図　県内における弥生時代のガラス小玉出土遺跡…54
第23図　砂山遺跡・滝ノ前遺跡の土器……56
第24図　山元遺跡出土土器の時期区分……57
第25図　山元遺跡出土の後期北陸系土器と類似資料…58
第26図　時期別の集落立地（周辺との比高）……62
第27図　県内の防御的集落……63
第28図　県内における弥生時代後期後半の主体的土器…63
第29図　県内の環濠集落（１）……64
第30図　県内の環濠集落（２）……65

表 目 次

第１表　周辺の遺跡と動向……9
第２表　時期・系統・器種別の口縁部残存率……22
第３表　時期・系統・器種別の口縁部破片数……22
第４表　トレンチ・時期別出土状況（口縁部残存率）…22
第５表　トレンチ・時期別出土状況（口縁部破片数）…22
第６表　石器の器種別出土数と図化・縮尺率……29
第７表　種別出土地点……31
第８表　石鏃の分類別石材……32
第９表　石鏃の分類別破損状況……32
第10表　不定形石器分類別厚さ……35
第11表　不定形石器分類別重量……35
第12表　不定形石器分類別石材……35
第13表　剥片類の石材……36
第14表　磨石類の分類別重量……37
第15表　磨石類の分類別石材……37
第16表　ガラス小玉の長さと厚さ……40
第17表　ガラス小玉の長さと孔径……40
第18表　ガラス小玉の長さと重量……40
第19表　蛍光Ｘ線分析結果……44
第20表　資料の化学処理……48
第21表　年代測定値と較正暦年代……48
第22表　遺跡別石器・石製品出土数……52
第23表　機能別出土点数と比率……52
第24表　本遺跡の時期区分と併行関係……59
第25表　県内の防御的集落……63
第26表　地域毎・時期別の環濠集落・高地性集落……63
第27表　新潟県における後期環濠集落の存続期間……67

図 版 目 次

［図　面］

図版１　遺跡全体図
図版２　Ａ地点全体図
図版３　Ｂ地点全体図
図版４　Ａ地点1T・2T・9T
図版５　Ａ地点3T・52T・17T、Ｃ地点37T・38T
図版６　Ｂ地点18T・33T・28T
図版７　Ｂ地点19T・20T
図版８　Ｂ地点68T・34T
図版９　Ｂ地点21T・22T
図版10　Ｂ地点62T・64T・67T・68T
図版11　Ｂ地点35T
図版12　Ｂ地点36T（１）
図版13　Ｂ地点36T（２）・26T
図版14　Ｂ地点25T
図版15　Ｂ地点61T
図版16　Ｂ地点31T・32T
図版17　Ｂ地点29T・47T
図版18　Ｂ地点30T（１）
図版19　Ｂ地点30T（２）
図版20　Ｂ地点27T・69T
図版21　土器（１）
図版22　土器（２）
図版23　土器（３）
図版24　土器（４）
図版25　土器（５）
図版26　土器（６）
図版27　土器（７）
図版28　土器（８）・土製品
図版29　石器・石製品（１）
図版30　石器・石製品（２）
図版31　石器・石製品（３）
図版32　石器・石製品（４）・ガラス小玉
図版33　平成20年度調査（１）
図版34　平成20年度調査（２）

［写　真］

図版35　カラー写真（１）　遺跡遠景、Ｂ地点西側全景
図版36　カラー写真（２）　Ｂ地点北西斜面、Ｂ地点20T縦堀２
図版37　カラー写真（３）　Ｂ地点36T濠１西側断面、Ｂ地点最西端から越後平野を望む、遺跡遠景、Ｂ地点61T縦堀２ほか
図版38　カラー写真（４）　Ｂ地点21T縦堀１東西断面、Ｂ地点61T縦堀２・濠２、Ｂ地点61T縦堀２・濠３、Ｂ地点30T濠４西側断面、Ｂ地点30T濠５西側断面、Ｂ地点30T濠５遺物（236～238）出土状況、Ｂ地点36T濠１西側断面、Ｂ地点36T濠１遺物（101など）出土状況
図版39　カラー写真（５）　Ａ地点全景、Ａ地点１T土坑墓全景

図版40　A地点（1）　遠景、西側遠景、1TSK1南北断面、1TSK1覆土上層石鏃出土状況、1T土坑墓、2T、3T、3T埋甕
図版41　A地点（2）　3T埋甕断面、3T埋甕断面2、5T、9T、10T、10T土層断面、11T、12T
図版42　A地点（3）　13T、13T土層断面、14T、15T、16T、49T、17T、17T土層断面
図版43　A地点（4）、B地点（1）　A地点（51T、52T、53T土層断面、56T、56T土層断面、57T土層断面、B地点（43T、59T）
図版44　B地点（2）　18T、18T北側、18TSK2遺物出土状況1、18TSK2遺物出土状況2、33T、19T、20T縦堀2検出状況、20T縦堀2土層断面
図版45　B地点（3）　20T縦堀2遺物出土状況、20T縦堀2上層遺物出土状況、20T東側、20T東側P1遺物出土状況、66T、65T、21T縦堀1土層断面、縦堀1
図版46　B地点（4）　68T西側、68T西側土層断面、68T中央、34T、22T、22T土層断面、22TSB1、22TSB1
図版47　B地点（5）　62T、62T、62T土層断面、62T土層断面、63T、23T、35T南側、35T北側
図版48　B地点（6）　26T、26T濠1付近、26T濠1土層断面、26T、36T全景、36T濠1東側土層断面、36T濠1遺物出土状況1、36T濠1西側土層断面
図版49　B地点（7）　25T、25T濠2東側土層断面、25T濠2内遺物出土状況、25T斜面、61T縦堀2土層断面、61T縦堀2土層断面と遺物（131）出土状況、61T縦堀2上層の遺物（119）出土状況、61T縦堀2の上層遺物（159等）出土状況
図版50　B地点（8）　61T中央の土層断面、61T南側の土層断面、61T濠2土層断面、61T・20T間の表土現況、南側斜面、31T斜面、31T土層断面、31T濠3土層断面
図版51　B地点（9）　32T、32T濠3西側土層断面、47T、47T土層断面、29T、29T東側土層断面、29T濠4西側土層断面、29T3Ⅱ層土器（228）出土状況
図版52　B地点（10）　北側斜面遠景、北側斜面遠景2、30T（1）、30T（2）、30T（3）、30T（4）、30T濠4土層断面、30T濠4遺物出土状況
図版53　B地点（11）　30T濠5東側土層断面、30T濠5西側土層断面、30T濠5遺物（236～238）出土状況1、30T濠5遺物出土状況2、30T濠5遺物出土状況3、30T濠5遺物出土状況4、27T、27T濠5東側土層断面
図版54　B地点（12）　67T、69T、69T南側土層断面、69T北側縦堀2土層断面、69T北側縦堀2土層断面2、北側斜面縦堀2遠景1、北側斜面縦堀2遠景2、北側斜面縦堀2遠景3
図版55　C地点・平成20年度調査　C地点（37T、38T）、H20（70T完掘、70T北東壁土層断面、74T完掘、74Tテラス1・2土層断面、74T遺物出土状況、73T西壁）
図版56　出土遺物（1）
図版57　出土遺物（2）　文様アップ（1）
図版58　出土遺物（3）　文様アップ（2）
図版59　出土遺物（4）　土器（1）
図版60　出土遺物（5）　土器（2）
図版61　出土遺物（6）　土器（3）
図版62　出土遺物（7）　土器（4）
図版63　出土遺物（8）　土器（5）
図版64　出土遺物（9）　土器（6）、土製品、石器・石製品（1）
図版65　出土遺物（10）　石器・石製品（2）
図版66　出土遺物（11）　石器・石製品（3）、ガラス小玉、H20年度調査分

第Ⅰ章　序　　章

1　平成17・18年度の調査に至る経緯と経過

A　調査に至る経緯

日本海沿岸東北自動車（以下、日沿道とする）は、新潟中央ジャンクションから日本海に沿って北上し、青森県に至る高規格幹線道路である。新潟県側は新潟空港・中条Ⅰ.C間が平成14年度に開通した。中条Ⅰ.C以北は平成元年及び平成３年に基本計画が決定され、本遺跡が所在する荒川・村上Ⅰ.C間は、平成10年12月に施工命令が出された。これを受けて、東日本高速道路株式会社（以下、「東日本高速道路」とする）と新潟県教育委員会（以下、県教委とする）との間で、道路法線内の埋蔵文化財の取り扱いについての協議が本格化した。

分布調査：調査は県教委から委託を受けた財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団とする）が、平成14年度に村上Ⅰ.C事業予定地内として168,500㎡を対象に実施した。調査対象範囲内に周知の遺跡は存在しない。調査の結果、現地は草木に覆われているため遺物は採集できなかったが、尾根上に平坦地が認められること、近年、狭い尾根上の平坦地で確認される縄文時代の遺跡例が散見されることから、計９地点（合計90,050㎡、山元遺跡は①地点）について試掘調査が必要である旨を県教委に報告した。

試掘確認調査：分布調査の結果を受け、平成16年３月25日に東日本高速道路から県教委へ試掘調査の要望がだされた。県教委から受託した埋文事業団は、平成16年８月30日～９月30日の21日間で、９地点のうち、②・④・⑤地点と③・⑨地点の一部について試掘調査を実施した［滝沢2006］。

平成17年３月28日には、残りの地点についての試掘調査要望が出された。埋文事業団は、平成17年10月３日から試掘調査を行った。山元遺跡が確認された①地点は、周辺に支障があることから②～⑨地点の調査が終了した後に、11月９日から着手した。

B　調 査 経 過

試掘確認調査は、平成17年11月９日～12月12日（実質16日間）、平成18年４月11日～６月15日（実質45日間）に行った。以下では年度毎に調査経過を記す。

（1）平成17年度

調査対象の地点①は３か所の平坦地と、谷部とからなる。便宜的に調査区北側をＡ地点、南側をＢ地点、東側をＣ地点とした。現地は山林で、保安林区域があることや事業予定の関連から樹木は未伐採であり、平坦地では高さ１ｍ程、斜面部では高さ２ｍ程のササも茂っていた。重機進入路の確保や、地形観察のため、必要最小限の樹木伐採と刈払いを先行した。当初の調査終了予定は11月22日であった。

ａ）11月９日～11月18日の現地調査

Ａ地点の調査：平坦部にトレンチ（以下、必要に応じて「T」とする）を設定して、重機で掘削を行った結果、地表下約20㎝の暗緑灰色土層で遺物を検出した。基盤層（地山）の認定に苦慮したが、地表下約50㎝の黄褐色土層で柱穴を検出したことから、この層を遺構確認面とした。出土土器は縄文施文されたもので、弥生時代後期の可能性があったが、細片のため確定できない。遺構・遺物が検出され、遺跡の存在が確実と

なった。広がりを捉えるため斜面にトレンチを設定して人力で掘削したが、遺構・遺物は検出されなかった。A地点のトレンチは合計17か所である。

B地点の調査：11月14日から着手した。平坦地にトレンチを設定して、重機で掘削を行った。A地点に比して遺物の出土量も多く、柱穴と思われる遺構も数多く検出され、集落を思わせる遺構・遺物の検出状況であった。出土土器のうち、比較的大きな破片は弥生時代後期のものであった。越後平野を一望できる立地であること、周辺との比高36～37mの高所に立地することから、環濠と土器捨て場の有無を確認するため斜面部にトレンチを設定した。

11月15日に、調査区南側（越後平野側）の斜面部に26Tを設定して人力で掘削した。遺物は希薄であったが、11月16日には、標高34～35m付近で２か所の落ち込みを確認した。平坦部側の落ち込みは幅約２m、深さ約70cmであり、環濠の可能性が想定しえた。ただし、26Tの南西側斜面は地滑りの痕跡が認められたため、落ち込みは自然災害により地割れの可能性も残る。評価が定まらなかったが、重要性を考慮して文化行政課に報告した。斜面部の環濠の有無を確認するため、重機で掘削可能な地点に30Tを設定して調査を行った。その結果、標高38m付近と、標高35m付近で環濠の可能性がある溝を検出した。

11月18日には県教委が現地を訪れ、B地点における環濠の有無、調査対象範囲内での遺構・遺物の広がりを確認するよう指示があり、調査期間を12月中旬まで延長することとなった。なお、本地点以外にも試掘調査要望か所があったため、11月18日～22日までは他地区の調査を行い、11月24日から再開した。

b）11月24日～12月12日の現地調査

B地点斜面部の調査：30T付近以外、地盤が急傾斜であることに加え、降雨時期も重なり重機による調査が不可能となった。このため11月28日からは作業員を増員して人力で掘削を行った。当初、重機掘削した25・27・29Tは斜面部に向かって拡張した。また、新たに31・32・35・36Tを設定して調査を行った。その結果、南東斜面では標高35m付近で、北西斜面では30T両脇のトレンチで環濠の可能性がある痕跡を確認した。いずれも斜面の傾斜変換点にあたり、現地表面からでも比較的容易にその存在を推定することが可能であった。それぞれ半裁をし、層序と遺物の出土状況を確認しながら掘り進めた。各トレンチで検出された落ち込みは規模が小さく、断面形も逆台形・L字形が多い。出土遺物には弥生時代後期の土器が多く、２条検出した30Tの溝では、谷側のものから残存率の高い土器が出土した。

C地点の調査：調査を再開した11月24日以降、平坦面に４か所のトレンチを設定して、B地点と併行して調査した。その結果、若干の遺物と、柱穴の可能性がある落ち込みを確認した。出土土器は弥生時代後期が主体であり、A・B地点と共通する。

12月８日文化庁の現地指導：遺跡の重要性から12月８日には文化庁記念物課埋蔵文化財部門の岡田調査官から現地指導を受けた。その結果、①溝の規模が小さいものの環濠の範疇で理解されるため、環濠集落としては日本海側最北端であること、②出土土器は東北系が主体であり、環濠集落としては後期東北系土器分布圏の初例となること、③遺跡の保存状態が非常に良いとの評価を得た。今後の課題として、㋐調査途中であり、集落の様相を把握できる段階ではないので、継続して調査を行う必要があること、㋑現状保存できる方策があるなら、協議を第１に考える必要があるとの指導を受けた。

現地調査の終了と遺跡の周知化：岡田調査官の指導の受け、調査を継続する予定であったが、12月12日に大量の降雪に見舞われた。その後も雪が降り続いたため年内の雪解けは不可能と判断し、12月後半に撤収した。平成17年度の実質調査面積は607㎡で、調査対象範囲（23,100㎡）の2.6%にあたる。現地調査終了後に新発見の遺跡として、字名から山元遺跡として周知化した。

c）現地調査終了後の動向（開発側との協議と現地指導）

開発側との協議：現地調査終了後の１月18日に、東日本高速道路村上工事事務所、国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所に現地調査の結果を報告した。県教委は遺跡の重要性から文化庁の指導等を踏まえて平成18年度も範囲内容確認調査を実施して遺跡の評価を定めた後、取り扱いについて判断することを伝えた。山元遺跡付近の当初事業計画では工事工法は開削であり、掘削土を盛土等に利用する。現状保存を行うには、トンネル工法など工法変更が必要となるため、これが可能か否か検討して欲しい旨を伝えた。

18年３月29日の現地指導：新潟県文化財審議委員の明治大学石川日出志氏から現地で指導を受けた。遺跡の評価は以下のとおりである。①弥生時代中期後葉から集落が形成されている。②規模は小さいが、斜面の溝は環濠と考えるべきで、掘削時期は後期後半か。③出土土器から東北系の集団が環濠を掘削している希少な遺跡である。また、次年度の調査については、㋐環濠の途切れ具合の確認、㋑平坦面における住居の有無を中心に行うように指導を得た。

（２）平成18年度

前年度の現地指導内容を踏まえてトレンチ設定か所の検討を行い、調査を再開した。当初の現地調査予定は４月11日～５月19日（24日間）である。地形観察・記録写真撮影のため樹木の伐採等をしたのち、平坦部は重機と人力で、斜面は人力で掘削した。調査体制は調査員２名、作業員15人である。

a）５月12日までの現地調査

環濠の調査：平成17年度にはＢ地点で環濠が確認されたが、Ａ・Ｃ地点でも再度斜面にトレンチを設定し、環濠の有無を確認することとした。調査の結果、環濠の可能性がある痕跡を確認できず、環濠はＢ地点にのみ存在することが明らかとなった。Ｂ地点では新たに46・47Tを設定して環濠の有無を確認した。いずれのトレンチでも環濠が確認されなかったことから、環濠が部分的に途切れることが明らかとなった。また、昨年度設定したトレンチで確認した環濠覆土の掘削を併行して行った。25Tでは環濠の末端が検出された。濠は全周せずに最低でも４か所で途切れることが明らかとなった。

平坦面の調査：Ａ・Ｃ地点では遺構の内容を確認するため、埋土を除去して遺構を半裁した。Ｂ地点では竪穴建物を確認するため、昨年度の調査トレンチを拡張した。Ｂ地点で新たに設定したトレンチは、地表面から凹みが確認できるか所である。斜面の環濠は地表面で存在が推定でき、土砂の堆積が薄い平坦部では、妙高市斐太遺跡群のように竪穴建物が半埋没の可能性がある。昨年度調査した20Tではこの傾向が顕著であり、竪穴建物の存在が予想された。調査の結果、多くのトレンチで柱穴と推定される土坑を検出したが、竪穴建物は確認できなかった。また、20T周辺の凹みは、溝の痕跡であることが判明した。

上記の結果から、Ｂ地点平坦部では竪穴建物の有無を確認するため、平坦部から斜面への変換点付近で新たにトレンチを設定すると共に（62～67T）、20Tで確認された溝の広がりを確認するため、61Tを設定した。作業量が増加したことに伴い、調査期間の延長を検討した。

b）５月12日の文化庁現地指導

昨年度に引き続き、文化庁記念物課埋蔵文化財部門の禰冝田調査官から現地指導を受けた。指導内容は多岐に及ぶが、現地調査では以下の指摘があった。①遺跡範囲の広がりを確認するため、Ａ・Ｃ地点の再精査、②Ｂ地点では建物の典型的な類型が竪穴か平地式か示す必要がある、③61Tを拡張して環濠と縦堀の関連を明らかにすること等である。このため、調査期間の見直しの必要性を指摘された。検討課題を解消するため、調査期間を延長して６月上旬を目途とすることとした。

c） 5月15日～6月中旬

現地指導：遺跡の評価を固めるため、有識者の方々から現地で指導をいただいた。現地で指導をいただいた方、日程は以下のとおりである。

5月15日・6月15日　甘粕　　健　　5月16日　関　　雅之　　5月24日　橋本　博文

6月9日　石川日出志　　6月12日　金子　拓男

指導内容は多岐に及ぶため、ここでは割愛する。ただし、各氏共通の指摘としてB地点で建物が明確でない点が挙げられる。この点を最も重視し、すでに設定したトレンチを拡大して検出に努めた。

現地調査：B地点の平坦部ではトレンチ範囲を拡張すると共に、新たに68Tを設けて建物の検出に努めた。これまでの状況と同様に、柱穴と思われる遺構は確認されるものの、竪穴建物は検出されない。また、22Tでは柱穴の配列が確認できたことから、平地式住居が存在する可能性が想定できた。

一方、A地点では再精査の結果、墓の可能性がある土坑を検出した。半裁や十字にベルトを残して掘削した結果、1～3Tで計7基の土坑墓が確認でき、1TSK1からガラス小玉が出土した。A地点は土坑墓以外の遺構が明瞭でないことから、墓域として使用されていたことが分かる。B地点を居住域、A地点を墓域とする集落形態で、事業予定地内の遺跡の広がりは約2万㎡であることが明らかとなった。

文化庁の現地指導：現地調査最終日の6月15日には、文化庁記念物課埋蔵文化財部門の坂井主任調査官が来跡した。新潟県は南北（東西）文化の流れの接点にあたり、日本列島全体の中でも重要な地域である。これまで実態がよく分からなかった後期東北土器文化圏の集落が、この遺跡で解明できる可能性がある。きちんと保護を図るべき遺跡であり、国の文化財審議委員に現地を視察してもらうように指導を受けた。

現地調査は6月15日で終了した。平成18年度の調査面積は793㎡で、平成17年度と合わせて1,400㎡（調査対象面積23,100㎡の6.0%）である。なお、トレンチ内で検出された遺構は、環濠・埋甕のみ全面掘削、柱穴は半裁を原則とした。土坑墓は半裁・十字ベルトを残して掘削した。

d） 6月16日～9月

現地指導：7月5日・6日には国文化財審議委員の須藤　隆氏、7月22日には県文化財審議委員の岡村道雄氏から現地で指導を受けた。現地調査が終了していたため、調査方針など有益な指導を反映できなかったが、記録としてとどめ、今後の調査に活かすこととした。

国土交通省との協議：調査終了後、山元遺跡の概要説明と共に学術的価値について報告を行った。国土交通省は文化財保護法にのっとり、6月30日に94条に基づく通知を県教育委員会教育長に行った。これを受けて県教育委員会では、文化財保護法第94条により山元遺跡の現状保存勧告を行い、国土交通省に受理された。国土交通省は、山元遺跡の保存に関する工法の見直しを検討し、7月30日にトンネル工法に変更して、遺跡の現状保存を行うことを決定した。

普及活動：8月12日に現地を一般に公開するため説明会を実施した。8月12日は午前中が悪天候であったにもかかわらず、175名もの参加者があった。悪天候のため、現地説明会の参加をあきらめた方のため8月19日にも現地を公開した。2回にわたる現地説明会の参加者は220名であった。

埋め戻し：8月後半から実施した。掘削した遺構を保護するため、環濠・縦堀・土坑墓などは川砂の入った土嚢袋を詰めた。柱穴は直接川砂で埋め戻した後、遺構確認面にシートを敷き、掘削土で上面を覆った。

2　平成20年度の調査に至る経緯と経過

平成19年度に国土交通省によるトンネルの設計が終了した。県教委と国土交通省は協議して、トンネル坑口予定地における遺構・遺物の有無を確認する発掘調査を実施することとした。平成20年４月17日～５月８日、６月30日～７月14日の２回にわたって発掘調査を実施した。１回目は新潟側・村上側のトンネル坑口を調査し、２回目は１回目の調査で遺物の出土した村上側の74Tを拡張して調査した。

a）４月17日～５月８日

新潟側坑口の調査：４月17日に調査に着手し、斜面方向のトレンチを３か所設定した。調査前の地表面観察から当該地は地滑り地形と推定されたが、調査によって地滑りに伴う亀裂跡（図版33・55）や液状化の痕跡を検出した。これらは地震を要因とする可能性があるという（高濱信行新潟大学教授のご教示）。遺構は検出されず、出土遺物は時期不明の土器片１点のみであり、当該地まで遺跡は及ばないと判断した。

村上側坑口の調査：４月28日に着手した。斜面にトレンチを設定して調査した結果、平坦部側（南西）の黒褐色土から土器片数点が出土し、谷側（北東）からも土器片が１点出土した。平坦部側出土の土器は最大約７㎝で弥生時代後期のものと思われた。土器片は風倒木痕の上層出土であることが判明し、周辺に遺構が存在する可能性も想定されたため、周辺を拡張したが、遺構・遺物は確認できなかった。このほか、水場遺構の有無を確認するため、沢部に４か所のトレンチを設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。

b）６月30日～７月14日

１回目調査の結果、村上側坑口には遺構・遺物が存在する可能性が想定されたため、調査区を拡張して調査を実施した。その結果、調査区中央から東側にかけて土器片や剥片が出土したが遺構は確認できなかった。また、調査区の東西側には新しい段切りや地滑り地形が存在し、弥生時代の遺構・遺物は失われていることが判明した。したがって、村上側坑口範囲に遺跡が伸びないことが判明したため調査を終了した。調査面積は２回合計で305㎡である。

3　整理作業と調査体制

A　整理作業

出土遺物量は、浅箱で約30箱である。平成17・18年度調査分は、年度内に洗い・注記と簡単な接合作業を行った。本格的な整理作業は現地調査終了後の平成18年９月からで、石器の選別・計測・実測を行った。そのほかは、試掘確認調査が終了した平成19年１月から行った。また、原稿の作成等は平成18年度から行い、平成20年度の調査と合わせ、20年度11月から編集を行った。

B　調査・整理体制

各調査の整理体制は、以下のとおりである。

（1）現地調査

期　　間　平成17年度（11月９日～12月12日）、平成18年度（４月11日～６月15日）、
平成20年度（４月17日～５月８日、６月30日～７月14日）

調査主体　新潟県教育委員会（教育長　武藤克己）

調　　査　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

総　　括　波多　俊二（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団事務局長）平成17・18年度
木村　正昭（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団事務局長）平成20年度

管　　理　長谷川二三夫（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団事務局長総務課長）平成17年度
斎藤　　栄（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団事務局長総務課長）平成18・20年度

庶　　務　長谷川　靖（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団総務課班長）

調査総括　藤巻　正信（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団調査課長）

指　　導　寺崎　裕助（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団調査課試掘確認担当課長代理）平成17年度
田海　義正（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団調査課試掘確認担当課長代理）平成18・20年度
鈴木　俊成（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団調査課日沿道担当課長代理）平成20年度

調査担当　滝沢　規朗（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団調査課班長）平成17・18年度
澤田　　敦（新潟県教育庁文化行政課埋蔵文化財係主任調査員）平成20年度

調 査 員　斎藤　　準（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団調査課嘱託員）平成17・18年度

（2）整理作業

期　　間　平成18年度（18年９月１日～12月31日、19年２月１日～３月31日）、
平成20年度（20年11月４日～20年12月26日）

主　　体　新潟県教育委員会（教育長　武藤克己）

整　　理　財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団

総　　括　波多　俊二（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団事務局長）平成18年度
木村　正昭（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団事務局長）平成20年度

管　　理　斎藤　栄（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団総務課長）

庶　　務　長谷川　靖（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団総務課班長）

調査総括　藤巻　正信（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団調査課長）

指　　導　田海　義正（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団調査課試掘確認担当課長代理）平成18・20年度
鈴木　俊成（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団調査課日沿道担当課長代理）平成20年度

調査担当　滝沢　規朗（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団調査課班長）

調 査 員　澤田　　敦（新潟県教育庁文化行政課埋蔵文化財係主任調査員）平成20年度
斉藤　　準（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団調査課嘱託員）（平成18年９月１日～12月31日）

第Ⅱ章　遺跡を取りまく環境

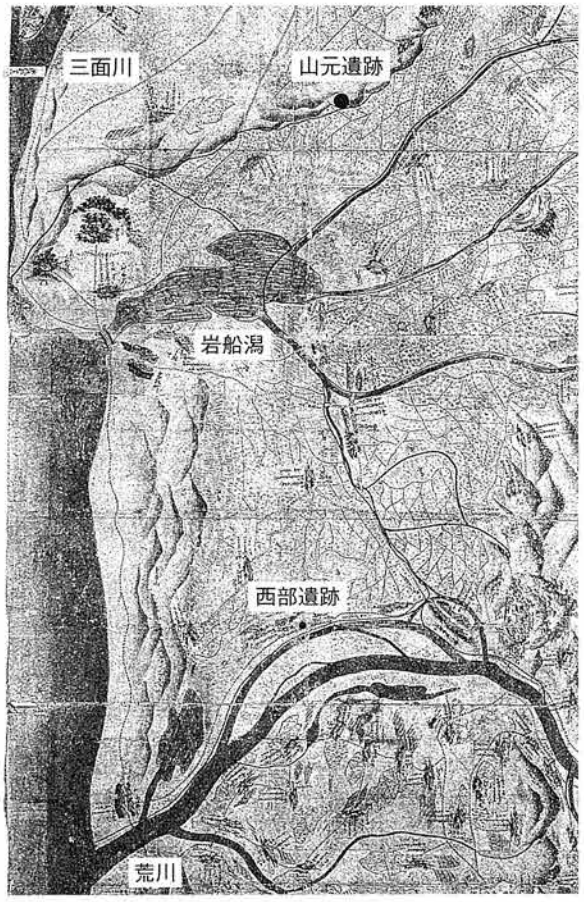
1　地理的環境

山元遺跡が位置する村上市（旧岩船郡神林村）は県北部に所在しており、日本海側最大の穀倉地帯である越後平野の最北端にあたる。旧神林村は西で日本海に面し、北側・東側は丘陵で旧村上市・関川村とそれぞれ境を、南側では荒川挟んで旧荒川町と接している。村内にはＪＲ羽越本線と国道７号線が南北に走っており、山形県や村上市と新潟市を結ぶ重要な交通網の一端を担っている。

周辺の地形を概観すると、北・東側には山地から伸びる丘陵と水田の広がる沖積地、南北方向に延びる海岸線に沿った砂丘列に分かれる。本遺跡は標高約40mの村上丘陵の最も平野側の平坦地に位置する。眺望が良く、約80km南の角田・弥彦山が見える日もある（図版37）。村上丘陵は国道７号付近を境に西側を浦田山丘陵、東側を岩船丘陵と区分されることもある。比較的低位な丘陵で、最高所は村上城がある臥牛山の標高135mで、それ以外は標高90m弱と低く、傾斜も比較的緩やかとなっている［新潟県農地部1989］。

遺跡の南側には沖積地が広がるが、江戸後期に干拓された岩船潟が丘陵付近まで及んでいたことが予想される。江戸期の干拓後、明治後期・昭和20年代の耕地区画整理事業によって、河川改修や用・排水路の建設等が行われ、岩船潟の復元が困難なほど改変された。ただし、遺跡の分布等からその範囲はおおむね推定可能で、現在の石川を通じて日本海に流れ込んでいたという点ではおおむね意見の一致をみる。一方で、山形県に水源を発する荒川河口との関連について、重要な指摘が行われている。

金子拓男氏は、岩船潟に流れ込んでいた荒川が大化４（648）年の磐舟柵造営に伴う古代の砂丘開鑿工事で、現在の河口に変更されたとする［金子1996］。根拠として以下の①～④を挙げている。①現河口部周辺の砂丘の規模が幅約1,500m、最高点30mで、自然の力だけでは荒川の河口形成が不可能。荒川より遥かに水量が多い阿賀野川も砂丘を断ち切れていない。②慶長２（1597）年作成の「瀬波郡絵図」（第１図）から、荒川は既に現河口へ続く直線的な流れになっている一方、分流が「田中村」「九日市村」付近を流れて岩船潟に流れ込み、更に現在の石川を通じて日本海に流れ込んでいる。③現在の荒川の河口幅は約700～800m。現在の石川の河口幅は約40mであるが、長さ約750mの岩船砂洲そのものを河口幅とすれば、おおむ



第１図　瀬波郡絵図と山元遺跡位置推定図
（東京大学史料編纂所1985『越後国郡絵図二瀬波郡』東京大学出版会に加筆）

ね一致する。④現在の荒川の氾濫原内に古代遺跡の発見がなく、鎌倉遺跡を上限とする中世遺跡が確認されている。従って、少なくても鎌倉初期には砂丘を切断している現在の河口が存在していた。

一方で小林貴郎氏は、西部遺跡の調査成果から7世紀前半には現在の荒川河口付近への流れを想定する［小林2006］。7世紀前半に比定される文化層が確認された西部遺跡は、現海岸線から約2km内陸の自然堤防上に位置する。この自然堤防は河川起源の土砂であり、「たとえ本流ではないにせよ、現在の荒川と方向を同じくする流れの存在が想定できる」とした。ただし小林氏は、金子氏の「荒川放水路」[1]説を否定はしてはおらず、「瀬波郡絵図」からも岩船潟に注ぐ流路があったことは想定できる。問題となる荒川－岩船潟間の流路の大きさは、ボーリングデータの解析も含め周辺地域の資料蓄積を待たざるをえない。

2　歴史的環境

ここでは岩船潟周辺の遺跡状況について概観したい。周辺の遺跡分布図を第2図に示した。旧神林村における大規模圃場整備や日沿道に伴う発掘調査により、岩船郡域の様相が把握されつつある。以下では弥生時代、古墳時代を中心に当地域の様相を概観する。

A　弥生時代

（1）前期～中期

前期の遺跡は明瞭ではなく、桜林遺跡（21）［石川・継ほか2008］で当該期の可能性がある遺構が1基確認されているにすぎない。SX203は出土土器を欠くが、木製品に使う材を採取した残りとされる木材の放射性炭素の年代測定から弥生時代前期頃に位置付けられている。

県内の他地域と同様に（主に海岸平野部）、中期では中葉以降に遺跡数は増加する。荒川右岸では砂山遺跡［小片・上原1972、石丸ほか2003］（12）・長松遺跡［田辺1991］（13）、左岸で道端遺跡［前川ほか2006］（24）でまとまって遺物が出土している。このうち道端遺跡では当該期の集落様相を垣間見ることができる。竪穴建物2棟のほか、狭小な周溝が巡る建物が確認されている。また、石包丁が出土していることからも、集落の周辺で稲作農耕が行われていたことが暗示される。

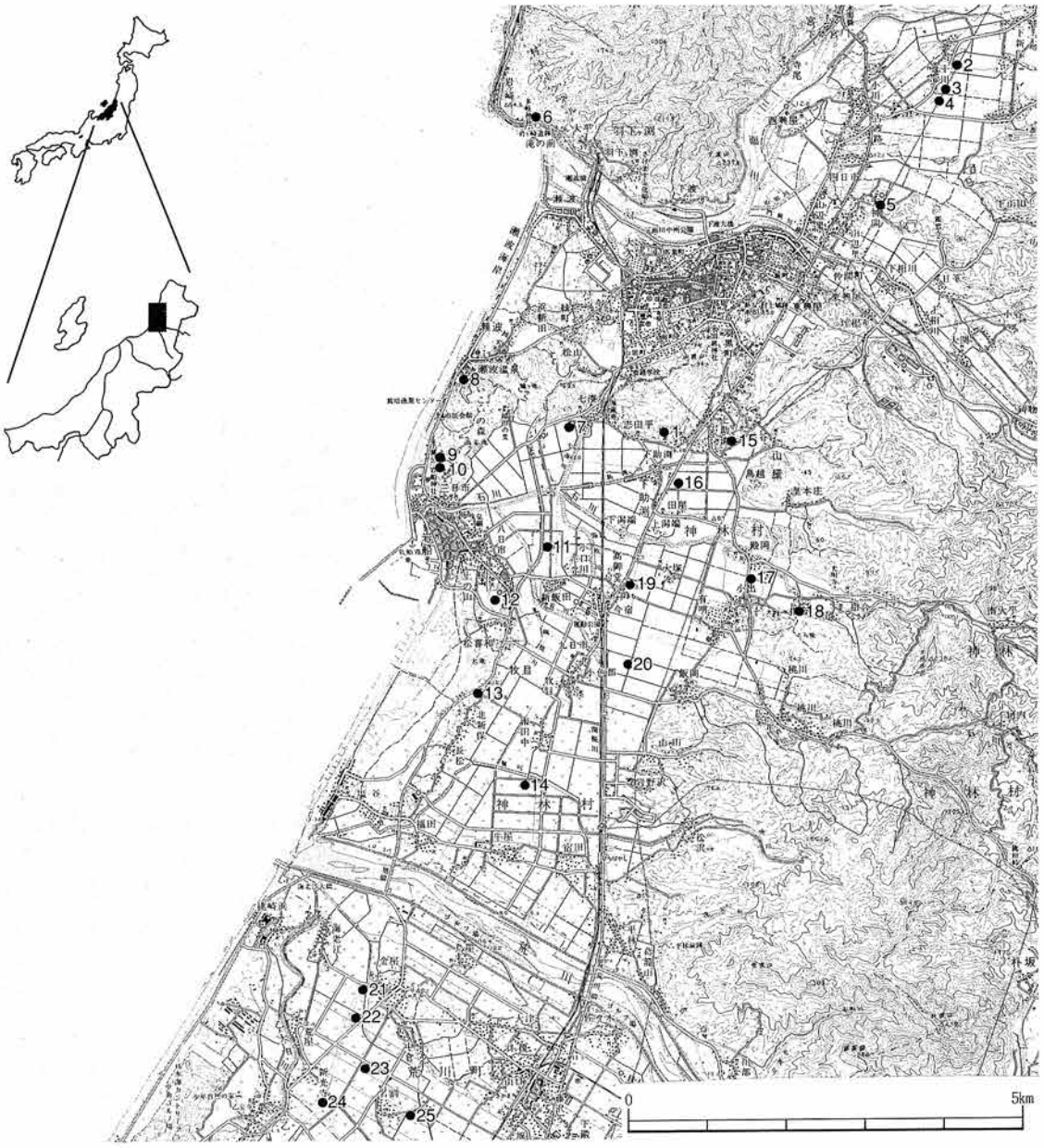
土器は文様構成等が崩れているものの、北陸の小松式の要素を色濃く残すものと、東北の宇津ノ台式の範疇で理解されるものが主体となる。道端遺跡では仙台平野の中在家南式（又は高田B式）土器が検出されており、東西の土器がクロスする地域と評価できる。また、荒川右岸の沖積地では遺跡が増加しており、城田遺跡（17）［田辺ほか2001］・六百地遺跡（7）［田辺・大賀2001］・金曲遺跡（16）［田辺・松田2002］が挙げられる。中期中葉では北陸の小松式の範疇で理解できる土器が目立つものの、後葉では宇津ノ台式が増加する。また、低地における遺跡数の増加、道端遺跡における石包丁の存在などから、農耕集落が一定量増加する大きな画期と考えたい。北陸地方の影響が大きいと考えるが、当該期に北陸で検出例が多い「広溝式平地式建物」［岡本2003］は確認されていない。土器様相は類似しながらも、広溝式平地式建物を受容していない点は阿賀北の地域性を示す可能性があり、重要と考える。

（2）後　期

弥生時代後期では、丘陵上で滝ノ前遺跡［関1972、石丸ほか2003］（6）、沖積地では中曽根遺跡［青木

---

[1] 金子氏の説［金子1996］を小林氏の表現［2006］に従い、「荒川放水路」説とする。



第２図　山元遺跡の位置と周辺の弥生～古墳時代等の遺跡

国土地理院　平成15年９月１日発行５万分の１地形図「中条」、平成10年２月１日発行「村上」、平成15年10月１日発行５万分の１地形図「塩野町」、平成15年９月１日発行「小国」を合成、縮尺を10万分の１に変更の上、加筆

第１表　周辺の遺跡と動向

No	遺跡名	調査	時代・時期							備　考
			弥生時代			古墳時代			古代	
			前期	中期	後期	前期	中期	後期	7c代	
1	山元	試掘		○	◎					本遺跡
2	下新保高田	本掘				◎				建物多数
3	堂の前	本掘			◎					建物多数
4	桂木田	本掘		△？						弥生中期中葉？
5	大館	本掘		△	△					
6	滝ノ前	本掘			◎	△				竪穴建物３棟
7	六百地	本掘		○			○	○		
8	磐舟浦田山	本掘						◎		古墳群
9	三角点下	本掘							◎	７世紀後半
10	宮の上	本掘				◎				
11	大野池			△？						
12	砂山			△多	△多	△				弥生中後期主体
13	長松	本掘		○	○？				◎	
14	衣田	本掘			△	△	△	△		
15	八幡山			△	△					緑色凝灰岩製管玉
16	金曲	本掘		△	△	○	○			
17	城田	本掘		△			△			
18	大聖寺				△					アメリカ式石鏃
19	千作り	本掘			△？			○		
20	高田	本掘	○？		△			○		
21	桜林	本掘								木材の年代
22	中曽根	本掘			◎					竪穴？２棟
23	古谷地B	本掘				○				
24	道端	本掘		◎		◎	◎	△		
25	坂町宮ノ腰D	本掘		○						炉跡・石器集中地点

調査で「本掘」は本発掘調査。時代・時期で、○は建物有り、○遺構は有り、△は遺物のみ

・鈴木ほか2006］(22) や堂の前遺跡［(財) 埋文事業団ほか2008］(3) で建物が検出された。土器様相は中期中葉～後葉とやや異なり東北系が主体となる点や、丘陵上の遺跡が明確になるなどの相違がある。
滝ノ前遺跡は道路建設に伴う緊急調査で、後期の竪穴建物3棟が確認されている。土器は東北系を主体に北陸系が認められる。調査区内で環濠は検出されていないが、周辺との比高約40mの河岸段丘上に位置することから高地性集落と捉えられる場合もある［菅沼1993など］。竪穴建物の平面プランは円形を呈しており、北陸系土器分布圏が隅丸方形であるのと様相を異にする。

中曽根遺跡・堂の前遺跡は沖積地の遺跡として特筆される。中曽根遺跡では明確な掘り込みが検出されていないものの、炭化物の集中範囲から建物の範囲が推定されており、平面形はSI40が（楕）円形、SI41が隅丸長方形を呈する。確認された土器は後期前葉を主体して、一部は中期末葉まで遡る可能性が指摘されている。堂の前遺跡は平成20年度の調査であり、詳細は正式報告を待つこととなるが、自然流路沿いに竪穴建物が検出されている。中曽根遺跡・堂の前遺跡の存在から、東北系土器分布圏の集団が沖積地にも集落を構えることが把握できた点は大きい。

建物が確認されていないものの、注目される遺跡はいくつか存在する。山元遺跡の約800m東側の丘陵上に位置する八幡山遺跡 (15) では、アメリカ式石鏃4点、緑色凝灰岩製管玉（細型1・太型4）、天王山系の土器片が採集されている［磯部1996］。丘陵上の大聖寺遺跡［磯部1996］(18) ではアメリカ式石鏃が採集されており、沖積地の衣田遺跡［鶴巻・磯部1990、田辺・土生2001］(14) や高田遺跡［田辺ほか2003］(20) では弥生時代後期の土器が出土している。また、東北系天王山式併行期の日本海側型式とされる「砂山式」［石川2004］の標識遺跡である砂山遺跡 (12) は中期から継続している。

数量は限定されるものの、弥生時代中期後葉～後期では土器様相の変化も大きく、中期中葉で顕在化したと予想される北陸系は後期に入ると数量を減じ、東北系土器が主体となる。後期前葉の段階では中曽根遺跡例のように北陸系土器が確認できないが、後葉に入ると北陸系の量比が若干ではあるが増加しているようである。末葉の様相は、滝ノ前遺跡・衣田遺跡例から東北系と北陸系が拮抗する可能性がある。

B　古墳時代

荒川以南では沖積地で集落数が飛躍的に増加している。岩船潟周辺では、荒川左岸の道端遺跡 (24)［前川ほか2005］が象徴的な存在である。荒川以北では金曲遺跡などで若干の生活の痕跡が確認されたに過ぎず、浦田山丘陵上の村上市宮ノ前遺跡［椎名1962］(3) などの存在から、沖積地への進行がやや遅い可能性を想定していたが、平成20年度に調査を行った下新保高田遺跡［(財) 埋文事業団ほか2008］(2) では竪穴建物20棟程が確認されており、荒川以南とほぼ同じ時期に集落が営まれていたことが確実となった。越後平野と山形・庄内平野間の集落として特に注目される。

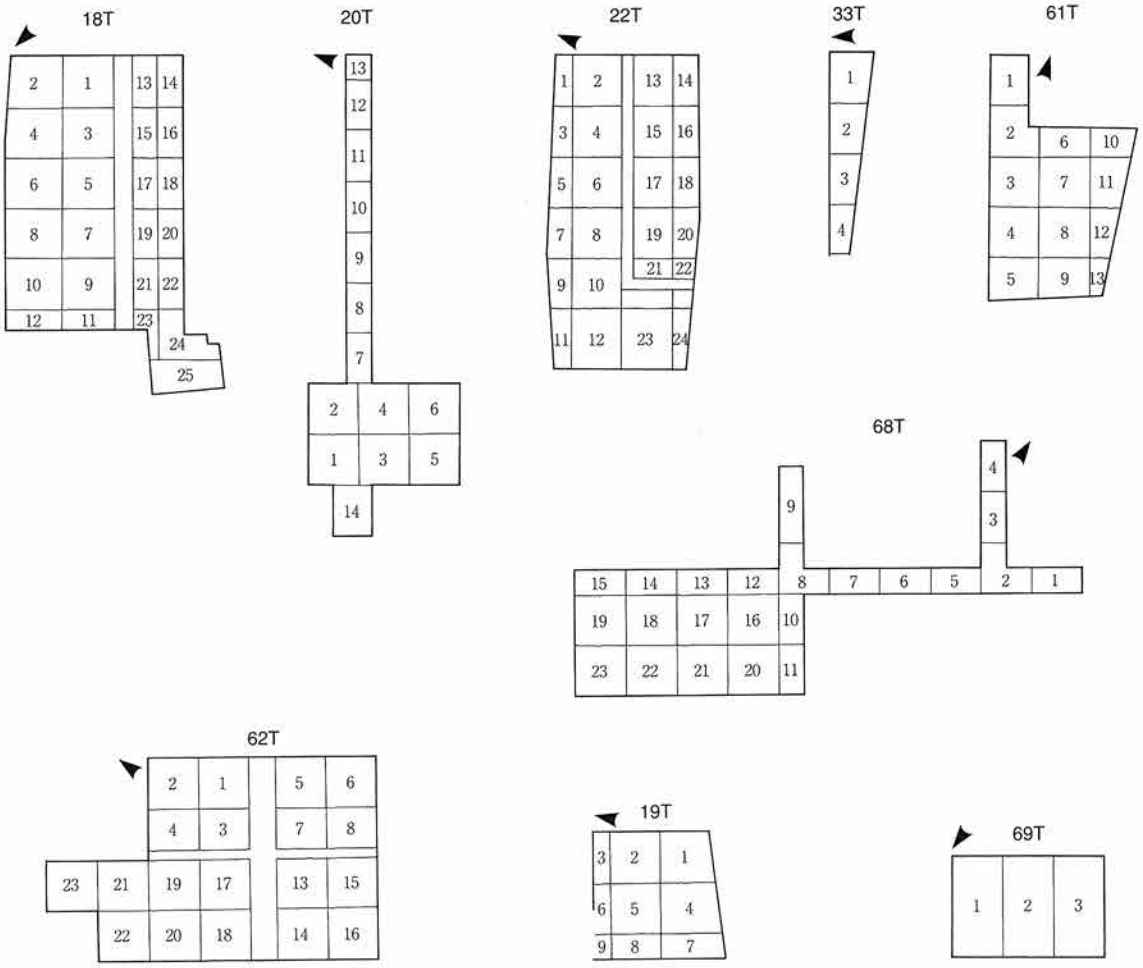
一方で、中期後半～後期前半では、前期から継続する遺跡は途絶え、弥生時代中・後期に活用されたか所で再び遺跡の築造が顕著になる。特に後期に入ると遺跡数は増加している。発掘調査では明確な建物に恵まれないものの、遺物は一定量出土しており、須恵器も含まれる。高田遺跡［鈴木ほか1990］(20) では発掘調査面積は少ないものの、6世紀前半代の須恵器杯・杯蓋が8個体出土している。金曲遺跡では5世紀後半代の須恵器高杯が確認されており、TK47～MT15型式期に集落の増加が見込まれる。浦田山丘陵では6世紀代に磐舟浦田山古墳群［甘粕ほか1996］が築造されており、古墳時代中期後半～後期前半に入り、沖積地等の開発がより積極的に行われた可能性が想定できる。このような傾向と、後に築造されたとされる「磐舟柵」との関連が不明であるが、ひとつの傾向として指摘しておきたい。

第Ⅲ章　調査の概要

1　トレンチと小グリッドの設定

トレンチの位置・設定数・大きさの基本方針は、遺跡の重要性が認識された平成17年12月以降、文化庁や有識者の指導・助言を基に内部で検討を行い、遺跡内容を把握できるように設定し、実質調査面積を必要最小限にとどめた。平坦面は竪穴建物を検出するため、遺構の分布状況等を加味して、何度か拡張したものが多い。斜面は、遺構・遺物の広がりを把握すると共に、基盤層の傾斜角度を把握するため、可能な限り事業予定地内境界付近まで伸ばした。なお、平成20年度に行ったトンネル坑口付近の調査は、上記の基本方針と異なる。２か所の坑口のうち、村上側については遺物が若干出土したため、ほぼ工事が及ぶ範囲を面的に調査している。

トレンチ調査のため、通常の本発掘調査で行うようなグリッドは設定していない。１か所当たりの面積が大きく、遺物が比較的多く出土したトレンチのみ小グリッドを設定した（基本は２×２m）。小グリッド番号は、トレンチ毎として算用数字を用い「１Ｔ１」「18T25」などと呼称している（第３図）。北東隅を基点として番号を付したが、度々拡張したトレンチの番号は、その都度付したためこの限りではない。



第３図　小グリッドの設定

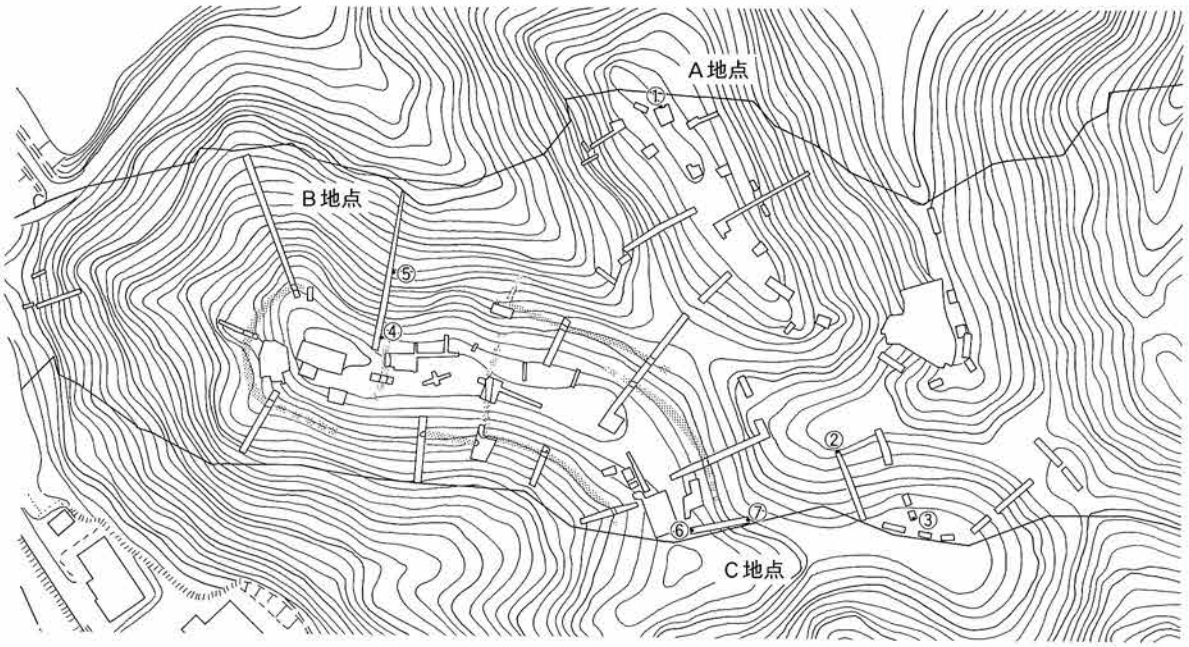
2 層　　序

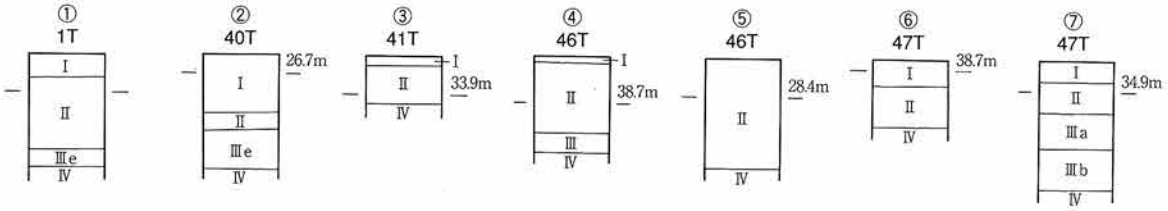
各トレンチで土層の堆積状況を確認した。丘陵上の平坦面はA～C地点でほぼ一致するが、斜面部や谷部では各トレンチで土層の堆積状況が若干異なる。平坦面は土層の侵食が、斜面・谷部は平坦面で侵食された土層の堆積が予想される。暗褐色の表土、暗緑灰色となる遺物包含層、基盤層となる黄褐色土層～赤褐色土層は各トレンチで確認できることから、以下のようにⅠ～Ⅳ層に区分した。

Ⅰ層は表土で、全面にわたり堆積する暗褐色土層である。丘陵平坦部では薄く、斜面部・谷部では若干厚く5～10cm堆積する。Ⅱ層は暗緑灰色土層で、遺物包含層である。平坦面～斜面にかけて堆積する。丘陵平坦部と斜面部では堆積の厚さに大きな変化はなく、20cm前後である。

Ⅲ層は斜面部～谷部にかけてのみ分布する。色調が明確なものは以下のように区分したが、各トレンチとの整合性に課題を残す。Ⅲa層は暗褐色土層で遺物を多く包含する。Ⅲb層は褐色土層で、遺物を包含する地点もある。Ⅲc層は黒褐色土層で、遺物を包含する地点もある。Ⅲe層は暗黄褐色土層でⅣ層との漸移層にあたる。遺物はほとんど包含しない。

Ⅲa層出土の木炭で放射性炭素を測定した結果、36Tのものは、3,125±40という年代測定地が得られた（第Ⅵ章2参照）。斜面部に堆積した黒色土系の土層は、遺跡形成時以前に堆積していた可能性もある。丘陵平坦部～斜面、谷部に認められる黄褐色～赤褐色土層（谷部は青灰色粘土層）をⅣ層とした。遺構確認面である。礫混じり、小砂利混じり、ローム質と各地点で若干様相は異なるが、基盤層と捉えた。





第4図　基本層序（位置図1：2,000、土層柱状図1：40）

第Ⅳ章　遺　　構

1　概　　要

A　概　　略

今回の調査は77か所のトレンチを設定して行った。年度別では平成17・18年度が69か所（1～69T）、平成20年度が８か所（70～77T）である。遺構を検出したトレンチは、平成17・18年度調査分の32か所である。種別はピット495基、土坑15基、土坑墓７基、埋甕１基、溝２条、縦堀２条、環濠、掘立柱建物１棟である。以下では必要に応じ、ピットはP、土坑・土坑墓はSK、溝はSD、掘立柱建物はSBの略号でしめす。ピットに比して大型で浅いものを土坑とし、このうち平面形が小判形で、坑底が比較的平坦なもの、覆土が基盤層（Ⅳ層）に近いものを土坑墓とした。この区分では課題を残すものもある（1TSK4、18TSK2等）。縦堀は丘陵平坦面を直行するもの、環濠は斜面に平行するもので共に幅１ｍを越すが、これらに比して規模の小さいものをSDとした。建物は現地で認定したもので、整理作業段階で可能性を確認したものは文中での記述にとどめ、図版に示していない。具体的には18T・62Tのピットの組み合わせである。

遺構は複数のトレンチにまたがる環濠や縦堀を除き、トレンチ毎に番号を付した。平成18年度からは現状保存を念頭においた調査であることから、遺構は全面掘削していない。半裁を基本に、平面形を確認したにとどめたものもあるため、評価が難しいものも含まれる。遺構の時期は、出土土器から弥生時代後期後半のものが多いと考えるが、中期後葉のものも確実に存在する（Ｂ地点18TSK2）。

トレンチの位置は、トータルステーションで記録を行い、国土交通省作成の地形測量図に合体した。現地で認識した微地形と国土交通作成の地形測量図が一致しない地点もある。

B　各地点の概要

Ａ地点は標高38m以上が比較的平坦な地形となり、東西約75m、南北は西側が約15m、東側が約10mである。平坦地は西側で10～20m程、事業予定外に伸びている。北～東側の斜面は、植林のためのテラス状の平坦面が造成されている以外、おおむね旧地形を保っていると考える。検出した遺構は土坑墓７基、埋甕１基、ピット23基、土坑２基である。柱穴が明確でないこと、土坑墓が多いことから墓域と考える。１Ｔで多くの土坑墓を検出したことから、墓域は更に事業予定地外に伸びる可能性が高い。調査面積が限定されることから、各土坑墓を区画する施設の有無は不明である。

Ｃ地点は標高33m以上に平坦面があり、東西が約60m、南北は西側が約25mと東西方向に長い。標高・平坦面の面積共に、Ａ・Ｂ地点よりも劣る。平坦面の約２／３が事業予定地外に伸びる。ピット４基が検出したにとどまり、遺物量も少ない。若干、生活の痕跡を残す地点と考える。

Ｂ地点は標高38m以上が比較的平坦な地形となる。東西が約180m、南北は西側が約30m、東側の最も狭い地点で約10m、広い地点で約50mである。東西に長く、最東端が広い「長靴状」の平坦面である。おおむね旧地形をとどめているが、南西側斜面の26T－36T間は地滑りのため等高線が乱れる。検出した遺構は斜面で環濠が、平坦面では縦堀２条、掘立柱建物１棟、土坑13基、ピット468基である。ピットは数量が多く、掘り方が深いものがあることから居住域と考える。環濠は途切れる部分があり、それぞれを単

位として若干形態も異なるため、南西側から濠１、濠２と名称を付し、濠１～５を総称して環濠とする。

以下では、調査年度、地点、トレンチ毎に遺構の状況を記す。検出数の多いピットは、径・深さ共に20cm前後のものが多く、この傾向に当てはまらないものを中心に記す。

2　各　　説

A　平成17・18年度

（1）A地点

1T（図版２・４・39・40）　土坑墓４基（SK１～3・5）と土坑１基（SK４）、ピット３基を検出した。SK４は平面形が不整形で、底が平坦でないため土坑墓と認定していないが、覆土は土坑墓とほぼ同じである。

土坑墓はSK１がトレンチ外に伸びる以外は、いずれも全形が把握できる。主軸はSK３が北東－南西である以外、おおむね丘陵平坦面の主軸と一致しており、北西－南東である。大きさは長軸100cm前後・短軸50～70cmの小型、長軸150cm前後・短軸100cm前後の中型、長軸200cm弱・短軸90cmの大型に区分が可能である。覆土は淡灰褐色土を呈するものが多く、色調は遺構確認面であるⅣ層との区分が困難であった。おおむね単層であるが、SK１のみ複数層が存在し、土層断面でピット状の落ち込みを確認した。

副葬品と思われる遺物が検出されたのはSK１とSK２である。いずれも覆土のふるいで検出したもので、調査か所内での分布状況は明らかでない。SK１は南側のみの調査であったが、ガラス小玉の完形品68点、半損品４点を検出した（図版32－353～424）。ガラス小玉の出土か所は、未掘削の北西部に比べて幅広くなっていること、出土数から頸ないし頭に装着されたと推定できることから、頭位は南東方向と考える。また、SK１の未掘削部分からは石鏃１点が出土した（図版29－284）。SK３の覆土からは、二枚貝の一部が出土している（図版66）。先端は磨耗しており、使用された可能性がある。

2T（図版２・４・39・40）　土坑墓１基（SK１）とピット４基を検出した。土坑墓であるSK１は長軸112cm、短軸64cmと小型である。深さは10cm程で、覆土は１Tのものと同様に淡灰褐色を呈し、主軸もA地点平坦面と平行する北西－南東方向である。副葬品と思われる遺物は出土していない。

3T（図版２・５・39～41）　土坑墓２基（SK1・2）、埋甕１基、ピット６基を確認した。土坑墓のうちSK１は全体のほぼ半分が調査区外に伸びる。SK２はトレンチを拡張して全体のプランを確認した。長軸155cm・短軸72cmと中型の規模である。主軸はSK２が丘陵平坦面の長軸方向とほぼ一致するが、SK１は丘陵平坦面とほぼ直行する。埋甕は直径15cm・深さ23cmの土坑内に、土器が直立して出土したものを指す。土器の設置面よりも土坑の掘り方が深い。６基検出したピットは、P１・P２が40cm弱と深い。

52T（図版２・５・43）　平坦面際でピット２基を検出した。直径30～35cmとやや大きい。

9T（図版２・４・41）　ピット４基を検出した。遺構確認まで行い、半裁は行っていない。

17T（図版２・５・42）　土坑１基、ピット４基を検出した。土坑は楕円形で、長軸56cm・短軸40cmである。ピットは直径40cm弱・深さ35cmのもの（P１）と、直径・深さ共に20cm前後のもの（P3～5）に分かれる。

（2）C地点

37・38T（図版５・55）　37Tで３基、38Tで１基のピットを検出した。直径・深さ共に20cmに満たない。

（3）B地点

18T（図版３・６・44）　土坑３基、溝１条、ピット130基を検出した。遺構密度はB地点平坦面で最も高い。土坑の平面形は円形（SK１・SK116）と、小判形（SK２・SK３）に分かれる。円形のSK１は直径168cm

と大型である。確認面で弥生時代後期の土器が出土している（図版21－13・14）。半裁していないことから、断面形態等は不明である。平面形が小判形の土坑のうちSK２は長軸96cm・短軸46cm・深さ17cmである。覆土上面から弥生時代中期後葉の土器が出土しており、当該期の遺構と判断した。SK３は深さが22cmであるが、長軸192cm・短軸92cmとSK２のほぼ倍である。一部を半裁したが、遺物は出土していない。

ピットは径15～30cmのものが多い。深さは30cmを超えるものも少なくない。現地調査時点では、明確な配列は確認しえなかった。整理作業段階で東側中央と北西端で深さ25cm以上のものが、略円形に配置された状況を確認した。東側のものは東西3.6m、南北3.2mである。深さ25cm以上のものは、東側から時計回りで、P５・114・115・42・27・28・19、推定ライン上には深さ25cmに満たないP１がある。北西端では深さ20cm以上のものが径3.6m程の円形にめぐる。東側から時計まわりで、P74・73・84・85・94・101・102・103、推定ライン上には深さ20cmに満たないP73・84・105がある。この他に、両者の中間に半径４mのピット列がある。深さ30cm以上のものが、東側から時計回りで、P37・39・47・45・66・68で、ライン上ないしは延長上にP40・48・75がある。いずれも壁立ち式の円形建物の可能性がある。

33T（図版３・６・44）　ピット15基を検出した。33Tは平坦面と緩やかに傾斜する南側の２か所に分かれるが、遺構は平坦面で多い。半裁を行った２基以外は、平面プランを確認したにとどめた。直径20cm前後のものが多いが、P13のみ46cmと大きい。半裁したものの深さは25～29cmである。

19T（図版３・７・44）　土坑１基、ピット31基を検出した。SK１は平面形が小判形を呈し、長軸99cm・短軸60cm、深さ12cmである。当初、土坑墓の可能性を考えたが、覆土が黒色であること、浅いことから土坑とした。ピットは直径20～30cm前後が多いが、中には40cmを超えるものもある（P７）。深さは10cm前後のもの、20cm前後のもののほか、40cmを超えるものもある（P15・P20）。遺構確認当時はP17～21・27～29・24の組み合わせを想定したが、それぞれの深さが異なることから、１棟の建物として認定していない。

20T（図版３・７・36・44・45）　地表面で緩やかな凹みを確認でき、遺構の存在が想定された。調査の結果、縦堀１条、ピット25基を検出した。地表面の凹みは、縦堀２が半埋没のため認識できたことを確認した。縦堀２は幅約184～200cmで、北側が若干広い。掘削した南側の断面形は箱形で、深さ70cmである。遺構確認面上のもの（図版22－42）や覆土中・下層出土土器（図版22－43～47）から後期中葉に埋没したと考える。ピットは深さ20cm前後である。P１から弥生時代後期の土器が出土した（図版22－40・41）。

68T（図版３・８・35・46）　土坑４基、ピット88基、縦堀１を検出した。トレンチは東西に細長く、西側のみ南北を広く設定した。遺構分布密度は西側が高い傾向にある。半裁したのは８基にとどまる。縦堀１は隣接する21Tから南北に伸びたものと思われ、トレンチ内では東側のラインのみ検出した。土坑は平面形が円形のものが多く、径50cm程のもの（SK85）、径80～90cmのもの（SK55・SK69）、径120cm程のもの（SK80）に分かれる。柱穴は他のトレンチと同様に径・深さ共に20cm前後のものが多い。

34T（図版３・８・46）　現地表面において緩やかに凹むことから、遺構の存在が想定された。調査の結果、ピット２基を検出したにとどまる。径約20～30cm前後で、深さも20cmに満たない。

21T（図版３・９・35・38・45）　縦堀１、ピット６基を検出した。縦堀１は幅172cm、深さ24cmである。覆土から若干土器が出土しており（図版22－67・68）、後期後半に埋没したものと考える。

22T（図版３・９・35・46・47）　土坑１基、ピット87基、掘立柱建物１棟を検出した。遺構の分布密度は高い。SK１はトレンチ内の西端に位置し、長軸124cm・短軸94cm・深さ33cmである。覆土はレンズ状に堆積する。自然堆積の可能性が高いため土坑墓とはしていない。復元したSB１は長軸3.6m、短軸は東側が3.0mであるのに対し、西側は3.36mとやや歪な形態を呈する。柱穴は径26～38cm、深さ29～46cmである。

これ以外のピット径・深さが20～30cm前後のものが多い。比較的深いものが西側に多い。

62T（図版３・10・47）　土坑２基、ピット54基、溝１基を検出した。遺構はトレンチ内の北西側に多い。土坑はいずれも長径80cm弱、短径50～66cmで、深さは22～24cmである。ピットは他のトレンチに比して大きく、深いものが多く、直径は40cmを超えるものが７基（13.0%）、深さ50cm以上のものは13基（24.1%）である。深さ50cmを超えるものがトレンチ内の北側に集中する。南側からP37・38・43・45・49はほぼ直線的に位置しており、何らかの構築物が予想されるが、現地調査の時点で建物等を復元できなかった。

64T（図版３・10）　平坦面から斜面に位置するか所に設定したトレンチで、地表面が凹むことから竪穴建物等の存在が予想されたが、土坑１基、ピット２基を検出したにとどまる。

67T（図版３・10・45）　平坦面から斜面に位置するか所に設定したトレンチで、地表面が凹むことから竪穴建物等の存在が予想されたが、７基のピットを検出したにとどまる。Ｐ７のみ30cmと深い。

66T（図版３・10・45）　平坦面から斜面に位置するか所に設定したトレンチで、地表面が凹む凸ことから竪穴建物等の存在が予想されたが、14基のピットが検出されたにとどまる。

35T（図版３・11・47）　濠１を検出した。標高37.5m付近で掘り込まれている。幅約144cm、深さは丘陵平坦面側で64cmである。このトレンチで確認したⅣ層は比較的緩やかな傾斜で、傾斜角度は約15～20度である。濠が掘削された地点の傾斜角は15度程である。濠の覆土は10層に区分されるが、遺物は出土していない。また、トレンチ内において濠掘削時の発生土は確認できなかった。

26T（図版３・13・47）　濠１を検出した。標高約35～36m地点に掘り込まれている。幅256cm、深さは丘陵平坦面側で96cmである。このトレンチで確認したⅣ層は標高35m付近で傾斜角が変換し、35m以下が約25度、35m以上が約35度である。この傾斜変換点に濠が掘削されている。濠の覆土は12層に区分されるが、遺物は出土していない。覆土の西側が乱れていること、東側でテラス状の平坦面があることから、再掘削された可能性もある。また、トレンチ内において濠掘削時の発生土は確認できなかった。

36T（図版３・12・13・37・38・48）　濠１を検出した。標高36m地点で掘り込まれている。幅192cm、深さは丘陵平坦面側で62cmである。このトレンチで確認したⅣ層は標高36m付近で傾斜角が変換しており、36m以下が約28～30度、36m以上が約35度である。この傾斜変換点に濠が掘削されている。濠の覆土は８層に区分される、上～下層にかけて多くの土器が出土した（図版23－92～101）。略完形の土器もあり、環濠の埋没年代は後期後半と考える。また、トレンチ内において濠掘削時の発生土は確認できなかった。

25T（図版３・14・49）　濠２を検出した。標高36m付近で掘り込まれている。幅136cm、深さは丘陵平坦面側で88cmである。濠２はトレンチの西側で幅・深さ共に減じており、トレンチ外の西側で途切れると判断した。このトレンチで確認したⅣ層は比較的傾斜が一定しており、約25度である。濠の覆土は９層に区分され、上層～下層にかけて土器が出土した（図版24－102～104）。環濠の埋没年代は後期後葉と考える。また、トレンチ内において濠掘削時の発生土は確認できなかった。

61T（図版３・15・37・38・48～50）　縦堀２、濠２、濠３を検出した。縦堀は標高33m付近で、濠２・３もトレンチ内で途切れることを確認した。縦堀２と濠３は重複関係が認められ、縦堀２は濠３埋没後に構築されている。縦堀２は幅約260cm、深さは最大で120cmと平坦面に比して深い。出土遺物は多く（図版24－119～131）、後期中葉頃に埋没したと考える。濠２は幅約176cm、深さ112cmで覆土は12層に区分される。このトレンチで確認したⅢｃ層は比較的傾斜が一定しており、約25度である。出土遺物は少ないが（図版24－132～135）、後期後葉に埋没したと考える。濠３は南端を確認したのみで、掘り方は明確でない。

31T（図版３・16・50）　濠３を検出した。標高約35m地点で掘り込まれている。幅160cm、深さは丘陵平

坦面側で50cmと浅く、断面形はＬ字状を呈する。このトレンチで確認したⅣ層は標高35m付近で傾斜角変換しており、35m以下が約20度、35m以上が約30度である。この傾斜変換点に濠が掘削されている。濠の覆土は５層に区分される、上層～下層にかけて土器が出土した（図版26－173・174）。環濠の埋没年代は後期後半頃と考える。また、トレンチ内において濠掘削時の発生土は確認できなかった。

32T（図版３・16・51）　濠３とピット11基を検出した。濠３は標高約35m地点で掘り込まれている。幅152cm、深さは丘陵平坦面側で40cm程である。断面形はＬ字状を呈する。このトレンチで確認したⅣ層は比較的傾斜角が一定であり、約20度である。濠の覆土は単層で、遺物は出土しなかった。また、トレンチ内において濠掘削時の発生土は確認できなかった。濠３は、現地での土層断面観察結果から、埋没後にⅢｃ層とした暗褐色に近い黒色土が堆積したと推測した。ただし、Ⅲｃ層と濠３の覆土の区分は困難であり、他トレンチとの土層堆積状況との整合性から、今後、検討が必要と考える。ピットは平坦面際で９基、濠３よりも標高が低い地点では２基を検出した。

47T（図版３・17・51）　平坦面際で３基のピットを検出した。深さ20cm未満のものに限られる。

29T（図版３・17・51）　濠４とピット９基を検出した。濠４は標高35m付近で掘り込まれている。幅184cm、深さは丘陵平坦面側で92cmである。谷側で掘り込みが急角度で深いのに対し、平坦面側は緩やかで、断面形はＬ字状に近い。このトレンチで確認したⅣ層は比較的傾斜角が一定で、約20度である。濠の覆土は５層に区分されるが、遺物はわずかに出土したにとどまる。また、トレンチ内において濠掘削時の発生土は確認できなかった。ピットは環濠よりも標高の高い地点に限られ、径20cm以下のものが多い。

30T（図版３・18・19・36・38・52・53）　濠４と濠５を検出した。濠４は標高37.5m付近で掘り込まれ、幅128～160cmと若干西側が狭い。深さは丘陵平坦面側で80cm前後、断面形は逆台形である。このトレンチで確認したⅣ層は約20度と比較的緩やかな傾斜となっている。覆土はトレンチの東側と西側で対応しない。西側では12層に区分したが、Ⅳ層を基本とする黄褐色土ブロックが多く含まれ、他トレンチの濠覆土とは異なる。自然堆積ではなく、意図的に埋め戻された可能性がある。

濠５は標高35.5m付近で掘り込まれている。幅172～200cmと若干西側が狭い。深さは丘陵平坦面側で80cm前後、断面形は逆台形である。覆土は８層に区分した。中～下層の４・５層で残存率の高い土器が出土した（図版19・27－236～241）。出土土器から弥生時代後期後葉に埋没したと考える。

27T（図版３・20・52・53）　濠５とピット３基を検出した。濠は標高35m付近で掘り込まれている。幅132cm、深さは丘陵平坦面側で56cmである。断面形は逆台形である。このトレンチで確認したⅣ層は標高35mライン以下が約25度、36m以上が約20度で、傾斜変換点付近に環濠が掘削されている。濠の覆土は７層に区分されるが、遺物は出土しなかった。また、トレンチ内において濠掘削時の発生土は確認できなかった。検出したピットは環濠よりも標高の高い地点に限られる。

69T（図版３・20・54）　縦堀２・濠５の有無を確認するため設定したが、縦堀２は確認できず、斜面途中で途切れることを確認した。トレンチの北東で濠５の可能性がある落ち込みを部分的に検出した。

69T北側の重機進入路（図版３・20・54）　Ｂ地点平坦面に重機が進入するために掘削した部分で縦堀２を検出した。幅136cm、深さ56cmである。縦堀２は平坦面から斜面に伸び、谷付近まで続くものと考える。

Ｂ　平成20年度

Ａ地点で５か所、Ｂ地点で３か所のトレンチを設定した。いずれも明確な遺構は検出されていない。ここでは比較的調査面積が大きい74Ｔ（Ａ地点）の概要を記す。

74T（図版２・34・55）　風倒木痕１基を検出した。平面プランは長軸径約2.5mの楕円形である。埋土は持ち上げられた地山と流入土からなる。Ⅱ層が上部に堆積していることから、確認面はⅢ層上面であり、弥生時代の遺構と同じと推定する。土器はⅡ層もしくは流入土の上部から出土した。

3　小　　結

以下では複数のトレンチにまたがって検出した環濠、縦堀について概要を記す。

環壕：濠１～５からなる。各トレンチでの検出状況から、それぞれで途切れていることが明らかである。

南側斜面の濠１は標高34～37mの地点にあり、北側では標高が高い地点に築かれている。北側斜面の46Tで確認できなかったこと、25Tの標高34m付近で検出できないことから、Ｂ地点最西端を取り囲むように築造されたと考える。26T－36T地点の斜面は途中で傾斜が急角度になる地点に掘削されている。深さは１m未満であるが、幅は26T・36Tで幅２m前後と濠のなかでは最も規模が大きい。北側斜面で濠１が途切れる地点は、46Tの状況から傾斜角度が更に大きくなる地点である。一方、南側斜面では途切れる地点が明確でないが、平坦面から続く縦堀１付近と考える。濠２は25T－61T間で両端の立ち上がりを検出した。標高34～36mに位置しており、長さ約15mと濠の中で最も短い。断面形は台形で、幅・深さ共に濠１より小さい。濠３は61T－32Tで確認したが、東側は事業予定地外に伸びる可能性がある一方で、32Tでの掘り込みの浅さやⅢ層との前後関係などで課題を残す。標高34～35mの地点に位置しており、31T地点では傾斜の変換点で掘削されている。掘削幅・深さ共に濠１・２よりも更に浅く、断面Ｌ字状を呈する。

北側斜面の濠４は標高35～37m地点に位置する。東側では47Tで、西側では27Tで確認できないことから、延長30m程と考える。30Tで環濠５と重複しており、内環濠との呼称も可能と考える。断面形は30Tが逆台形、29TはＬ字形に近い。濠５は標高34～35m付近で掘削されたもので、総延長40m強である。東側は29Tで、西側は46Tで確認できないことから、両端が途切れる形態と考える。27T・30Tのものは、いずれも断面形が逆台形を呈するものの、幅約120㎝、深さ50㎝と極めて浅い。

濠はそれぞれ途切れる部分が存在するが、30Tでは現状で唯一重複している。30T付近はＡ地点との関連において、最も谷部が浅くなる地点である。濠の掘削に伴う発生土を利用した土塁の存在は、トレンチ内では確認できなかった。濠を再掘削した可能性は26Tであるものの、明瞭ではない。覆土は、堆積状況から人為的に埋められた可能性を示すものは30Tの濠４のみで、それ例外は自然堆積の可能性が高い。

縦堀：縦堀１は21T－68T間の長さ7.5mで検出した。21Tの南東側平坦面及び68T北でも地表面が若干凹んでいることから、更に南北方向に延びる可能性が高い。

縦堀２は61T－20T－69Tと谷側の重機進入路で検出した。南側斜面は61Tで途切れることを確認した。20T－61T間は地表面が凹むことから、つながっていると考える。北側斜面では69Tで検出されていないが、20Tから69T付近までは地表面の凹みが確認できることから続いていた可能性がある。一方、69T北側の重機進入路では平面・断面を検出したことから、部分的に途切れていても谷部まで続いている可能性もある。南側斜面でも61Tで断絶後、更に南側へ掘削されている可能性も考慮する必要がある。

縦堀１・２の掘削に伴う発生土を利用した土塁の存在は、いずれのトレンチ内でも確認できなかった。再掘削した痕跡も明瞭ではない。覆土の堆積状況から、自然堆積の可能性が高い。

第Ⅴ章　遺　　物

1　概　　要

山元遺跡の調査で出土した遺物には、弥生土器、土製品、石器・石製品、ガラス製品がある。出土量は整理箱（54×35cm、深さ10cm）で約30箱に及ぶ。出土土器は弥生時代中期後葉～後期に限られ、他の時代は含まれない。土器以外の遺物は、特徴から他時期・時代のものとする根拠がなく、出土土器の時期幅内に収まる所産と考える。地点別ではＢ地点が最も出土量が多く、Ａ地点がこれに次ぐ。Ｃ地点ではごくわずかであった。以下では、種別毎に概要を記す。

2　土　　器（図面図版21～28・34－１～273・426、写真図版56～64）

弥生時代中期後葉～後期のものがある。環濠覆土出土の中には残存率が高いものも存在するが、細片が主体である。報告にあたり残存率が低いものでも、情報が多い口縁部は可能な限り図化した。また、胴部破片であっても文様が残存するものは、系統・時期の推定が行ないやすいため図化を行った。

Ａ　分　　類

時期・系統で大別した後、器種で細別をし、文様・器形で更に細別した。なお、文様・器形での細別は、出土量が多いものに限る。

（１）中期後葉

東北日本海側の宇津ノ台式［須藤1970］、山草荷式［大木・中村1970］、北陸系の小松式［増山1990ほか］がある。従来の山草荷式は、宇津ノ台式様式圏内の地域様式で、新潟県内の地域性を示すとの見解があり［石川2004］、旧加治川村山草荷遺跡出土土器から、一時期を構成するものと考えられている［高橋1979・石川2000］。以下、様式毎にその特徴を記す。

１群　在地の山草荷式［石川2004］に比定されるもの。これまで、甕は宇津ノ台式［須藤1970］、壺は川原町口式ないしは山草荷式［大木・中村1970］とされたものを一括した。甕のみ区分した。

Ａ類：頸・胴部文様帯に重菱形文を持つもの（12など）。

Ｂ類：頸・胴部文様帯に鋸歯文と平行沈線文を組み合わせた文様を持つもの（271など）。

また、口縁部内面に文様を持つものをa類、文様を持たないものをb類とした。

２群　北陸の小松式土器系統に属するもの。甕（186）と壺（86・163など）がある。なお、底部輪台法ではない底部で、底面近くまで縦ハケ調整されたものも本類として捉えた。

（２）後　期

東北系の土器を主体に、北陸系、北海道の続縄文式土器がある。

３群　縄文施文されたものを中心に、東北系の範疇で理解できるものである。本遺跡では主体となる。器形が東北系であっても、全面ハケ調整されたものは別に分類した。器種は甕を主体に、壺・蓋がある。出土数が多い甕のみ、器形・文様で分類をおこなった。

a）口縁部・頸部

文様を加味せず、頸部の作出で大別し、口縁部形態で細別した。

頸部が不明瞭なもの（Ⅰ類）、直立した頸部をもつもの（Ⅱ類）、Ⅱ類に比して頸部の直立具合が明瞭でないもの（Ⅲ類）である。口縁部は、肥厚せず、短く、わずかに内湾して立ち上がるもの（1類）、肥厚せず、長く、内湾して立ち上がるもの（2類）、肥厚せず、長く、外傾・外反して立ち上がるもの（3類）、肥厚して、短いもの（4類）、肥厚して、長いもの（5類）に区分した。

頸部と口縁部の関連では、Ⅰ類には1類（167）と2類（168など）、3類（29）、Ⅱ類は2類（11）と4類（264）、Ⅲ類は2類（238）、5類（101・119など）がある。

b）文　様（図版57・58）

区画文には平行沈線間の刺突列（a類）、交互刺突文（b類）、上下の沈線を欠き、一方向からの刺突文が施されたもの（c類）、沈線のみ（d類）、欠くもの（e類）がある。頸部・胴部文様は、重菱形文、流水文、連弧文、楕円形文などがある。文様の組み合わせから以下に区分した。

A類（167）　頸部・胴部に連弧文が施され、区画文がa類のもの。器形はⅠ1類である。

B類（42・47・119）　胴部に重菱形文が施されたもの。口縁部と頸部界に交互刺突文が施されたもの（42）と、これを欠くもの（47・119）がある。区画文はb・d類である。

C類（243・264）　頸部に横長の楕円形文が施されたもの。区画文はd類である。

D類（4）　胴部に流水文が施されたもの。区画文はd類か。

E類（101・237）　頸部が無文ないしは、全体に文様を欠き、粗製的なもの。

4群　北陸北東部系とされるものである。器種には甕、壺、高杯（器台の可能性を持つものを含む）がある。

5群　東北系の器形で、ほぼ全面がハケ調整された折衷タイプ。八幡山式［渡邊2001］と呼称されるものと考える。なお、ハケ調整されていても、沈線で文様が施されたものは3群に含めた。ハケメは北陸北東部系（4群）に比べて粗く、口縁部内外面が横方向、胴部外面は縦方向のものが多い。

6群　続縄文式土器ないしは、その影響を色濃く受けたものである。2点出土している（117・236）。微隆起線文を欠くなど細部は異なるものもあるが、後北C_1式に類似する特徴を示す。

B　観　察　表

（1）胎　土

胎土は生地と混和材とからなるが、主に混和材と思われる鉱物を主体に以下のように区分した。

Ⅰ類：大きめの白色粒子（花崗岩？）を主体に、石英・雲母を含むもの。わずかに海面骨針を含むものもある。出土土器中、最も多い。

Ⅱ類：Ⅰ類に比して精製された生地に、細かな白色小粒子（花崗岩？）を多く含み、雲母・長石を若干含むものである。

Ⅲ類：精製された生地に白色小粒子（花崗岩？と石英を含む）を含むもの。焼き上がりは白っぽい色調を呈する。出土例はごくわずかである。

Ⅳ類：Ⅰ類に類似するが、粘土粒を特に多く含むものを本類とした。

Ⅴ類：白色小粒子（花崗岩？）を多く含み、赤～黄褐色を呈する砂っぽい生地のものを一括した。

Ⅵ類：角閃石・長石・雲母などキラキラした鉱物を含み、色調が黒色～黄褐色を呈するもの。

Ⅶ類：精製された胎土で、特に海面骨針を多く含むものである。

（2）土器の焼成方法・色調・残存状況・使用痕跡

野焼き方法は、小林正史氏らにより開放型野焼き・覆い型野焼きの復元が行われている[小林2005など]。県内の弥生時代後期は、北陸系は覆い型、東北系は開放型野焼きである［滝沢2007ａ］。野焼き方法の推定には残存率の高い土器での観察が必要で、この条件を満たすものの観察を行って結果を記した。

色調は焼成時の黒斑や、土器焼成後の使用痕跡であるスス・コゲ付着部位以外の部位の色調について記した。ただし、残存率が低いものでは、黒斑付着部位・使用痕跡部位を観察したものも含まれる。

焼成が「良好」「不良」は、焼成完了時の状況のみならず、廃棄後の状況にも大きく左右されると思われることから、観察表では現状の残存状況を○・△・×で示した。○は文様・調整・付着物の観察が十分に行えるもの、△は摩耗・剥落が進んでいるが、内外面いずれか一方で上記の観察が行えるもの、×は磨耗・剥落が進み、内外面共に上記の観察が十分に行えないものである。

土器焼成後の使用痕跡について、煮沸具のみ観察した。詳細については観察表に記すが、内面の黒色付着物をコゲ、外面の黒色付着物はスス等を観察した。

C　実測図の表現方法と文様帯の呼称

残存率が低い土器は、断面実測図と外面の拓影図を作成した。また、内面に文様がある場合や特徴的な調整が施されたものも拓影図を作成した。表現方法は、右から断面図・内面の拓影図、外面の拓影図である。文様帯は第５図のように呼称する。

第５図　文様帯の呼称
（鈴木1976より）

D　土器組成

土器組成を口縁部破片数（以下、口縁数と略す）と32分割で計測した口縁部残存率（以下、残存率と略す）で示した（第２～５表）。器面の摩耗等で、区分が明確でないものは「時期・系統不明」とした。また、残存率が高くても、時期比定が難しいものも少なくない。特に東北系土器は中期と後期の区分が難しい。東北系土器については、全体の中から明らかに中期と判断できるものを除き、そのほかを後期した。計測個体数は口縁数269、残存率は615である。

（1）全体の土器組成

第２・３表で傾向をみる。時期・系統不明は口縁数で８（3.0%）、残存率で11（1.8%）と低い比率であるため、これを除く数値（口縁数261、残存率604）で傾向を抽出する。全体の時期別では、中期が口縁数37（14.2%）・残存率108（17.9%）と20%弱、後期が口縁数224（85.8%）、残存率496（82.1%）と多く、おおむね中期と後期の比率は１：４程である。

時期・系統別の様相では、中期の口縁数37、残存率108中、１群が90%以上を占める（口縁数34で91.9%、残存率101で93.5%）。後期では口縁数224、残存率496中、３群が90%以上を占める（口縁数212で94.6%、残存率470で94.8%）。このことから、本遺跡の主体的土器は中期が１群（山草荷式）、後期が３群（東北系）となる。器種別では甕が最も多い。中期で85%程(口縁数32/37で86.5%、残存率92/108で85.2%)、後期では90%前後（口縁数208/224で92.9%、残存率438/496で88.3%）である。

第２表　時期・系統・器種別の口縁部残存率

時期	系統	甕	壺	蓋	合計
中期	山草荷（１群）	85	16	0	101
	北陸系（２群）	7	0	0	7
中期合計		92	16	0	108
後期	東北系（３群）	421	38	11	470
	北陸系（４群）	5	9	0	14
	八幡山式（５類）	5	0	0	5
	統縄文（６類）	7	0	0	7
後期合計		438	47	11	496
時期・系統不明		9	2	0	11
遺跡総計		539	63	11	615

第３表　時期・系統・器種別の口縁部破片数

時期	系統	器種			合計
		甕	壺	蓋	
中期	山草荷（１群）	29	5	0	34
	北陸系（２群）	3	0	0	3
中期合計		32	5	0	37
後期	東北系（４類）	200	11	1	212
	北陸系（５類）	3	4		7
	八幡山式（６類）	4			4
	統縄文（７類）	1			1
後期合計		208	15	1	224
時期・系統不明		7	1		8
遺跡総計		247	21	1	269

第４表　トレンチ・時期別出土状況（口縁部残存率）

地点	トレンチNo	中期			後期								時期・系統不明		合計
		山草荷式		北陸系	東北系			統縄文	八幡山	北陸系					
		甕	壺	甕	甕	壺	蓋	甕	甕	甕	壺		甕	壺	
A	3	2													2
A	13				1										1
C	41	3													3
B	18	35			46	7					3		2	2	95
B	19				4										4
B	20		2		31	9					1				43
B	22				3	2			1						6
B	24	4													4
B	25				17	4									21
B	26												2		2
B	27		2		8										10
B	29	2			15					4			2		23
B	30				45			7							52
B	31				29										29
B	32	3		2	7				1	1					14
B	33				1										1
B	36				35										35
B	43	4													4
B	46	4			16										20
B	47	5	3	3	18	1			2				1		33
B	50				5										5
B	53				3						2				5
B	61	16	3		102	3	11		1		3		2		141
B	62				2										2
B	64			2	6										8
B	67	1			2										3
B	68	3			10	6									19
B	69	3	6		15	6									30
総計		85	16	7	421	38	11	7	5	5	9		9	2	615

第５表　トレンチ・時期別出土状況（口縁部破片数）

地点	トレンチNo	中期			後期								時期・系統不明		合計
		山草荷式		北陸系	東北系			統縄文	八幡山	北陸系					
		甕	壺	甕	甕	壺	蓋	甕	甕	甕	壺		甕	壺	
A	3	1													1
A	13				1										1
C	41	1													1
B	18	8			20	2					1		2	1	34
B	19				2										2
B	20		1		17	2					1				21
B	22				2	1			1						4
B	24	1													1
B	25				8	2									10
B	26												1		1
B	27		1		4										5
B	29	1			7					2			1		11
B	30				16			1							17
B	31				14										14
B	32	2		1	5				1	1					10
B	33				1										1
B	36				11										11
B	43	1													1
B	46	1			6										7
B	47	2	1	1	12	1			1				1		19
B	50				2										2
B	53				1						1				2
B	61	6	1		49	1	1		1		1		2		62
B	62				2										2
B	64			1	5										6
B	67	1			2										3
B	68	2			5	1									8
B	69	2	1		8	1									12
総計		29	5	3	200	11	1	1	4	3	4		7	1	269

（２）トレンチ別の出土傾向

第４・５表で、時期・系統不明を含む口縁数269・残存率615で傾向をみる。これまでの記述とおり、Ｂ地点が圧倒的に多く（口縁数266で98.9%、残存率612で99.5%）、Ａ・Ｃ地点は少ない。トレンチ別では南側斜面の61Tが最も多い。このほかに斜面では30T・36T・47Tが多く、口縁数に比して残存率の数値が大きい個体が出土している。平坦面では18T・20Tなど調査区の東側で多い傾向にある。

中期の出土数が多いのは18T・61Tである。18Tでは口縁数34・残存率95のうち中、30%前後（口縁数８で23.5%、残存率35で36.8%）、61Tでは口縁数62・残存率141のうち、10%強（口縁数７で11.3%、残存率19で13.5%）である。

Ｅ　各　　説

（１）Ａ地点（１～11）

3T（１～４）：SK１から２点、Ｐ６から１点、埋甕から１点が出土したにとどまる。SK１は覆土中からの出土である。共に後期東北系（３群）甕で、胴部片の２にはヘラ描きの連弧文が残る。Ｐ６出土の底部片３は外面の文様を欠くが、底部輪台法で製作されていないことから東北系と考える。埋甕の４は小型で、口縁部を欠くが胴部上位以下が残存する。Ⅱ・Ⅲ文様帯の区画は１条の沈線のみで、Ⅱ文様帯には流水文系の文様が施され、磨消される。Ⅲ文様帯は条が縦走するＲＬ縄文が施されている。

9T（５）：５は３群の甕胴部片である。Ⅱ・Ⅲ文様帯の区画は１条の沈線のみで、Ⅱ文様帯には櫛描きによる鋸歯文が、Ⅲ文様帯は条が縦走するＲＬ縄文が施されている。

13T（６・７）：６は３群の甕、７は北陸系（４群）と考える壺である。６は口縁部が肥厚せず、内湾して立ち上がる２類である。口縁部は長く、縄文施文された水平な端面を有する。７は口縁部から胴部の破片

で、胴部内面にはハケが施されている。

50T（8）：3群の甕で、口縁部形態は3類である。丸い口縁端部には間隔の開いた刻みが施されている。6と同様に区画文はなく、条が縦走するＲＬ縄文が施されている。

52T（9）：中期山草荷式（1類）甕の頸部片である。残存率が低いため明確ではないが、文様は鋸歯文と思われる。鋭利な工具で施文されており、器面深くにまで達している。

53T（10・11）：同一小グリットから後期北陸系（4群）と考える壺（10）と、3群の甕（11）が出土した。10は長頸壺の口縁部片で、上端で大きく屈曲して幅広で垂直な端面にいたる。外部端面には1列の円形刺突が、口縁部上位には2条の円形刺突が残る。同様の施文は口縁上端部内面にも認められ、円形刺突に加え、ハケ工具による刺突文が施されている。系統は北陸以西の可能性がある。11は比較的大型の破片で、口縁部・胴部・胴部の境界が内面では比較的明瞭である。口頸部形態はⅡ1類で、Ⅱ文様帯は無文、Ⅰ・Ⅲ文様帯にはＲＬ縄文が施されている。

（2）Ｂ地点（12～271）

18T（12～34）：SK2（12）、SK1（13・14）、P1（15）、Ⅱ層（16～34）から出土している。12は1群の甕である。口縁部は端面に縄文が施文されるにとどまる。頸部には重菱形文を上下3条の沈線が区画するＡ類である。内面の施文も認められ（a類）、口縁部には上下で対向する弧線が巡る。SK1出土の13は器形が東北系で、全面にハケ調整された折衷タイプ（5群）である。口縁部はく字に外傾し、口縁部外面及び内面には横ハケが、胴部外面には縦ハケが施されている。14は北陸系（4群）の高杯ないしは器台脚部片である。棒状脚で、脚部の上下には3条の沈線が巡る。P1出土の15は3群の甕口縁部片と思われる。器面は内外面共に磨耗が進み、文様・調整は判別できない。

Ⅱ層では1群の甕（16～19）、壺（20）、3群の甕（21～27・29）・壺（34）、4群の壺（31・33）、5群の甕（28）、時期不明の底部（30・32）がある。1群の甕はすべて口縁部片である。口頸部界は沈線で区画され、Ⅰ文様帯にＬＲ縄文が施されている。口縁端面の縄文施文は17にのみ認められる。内面の文様は沈線区画されたもの（16・19）と区画を欠くもの（17・18）に分かれる。文様は18がＲＬ縄文、19は上向きの弧線文である。ハケ調整されたものも多い（17・19）。壺（20）は胴部片で、2本同時施文の渦巻き文が施されている。

3群の甕はすべて口縁部片で、2類（21・23～25）、3類（22・29）、4類（26・27）がある。文様は粗製のE類は1点のみである（29）。Ⅰ文様帯は下向きの弧線（21）、複数の平行沈線（23・24）、2条1単位の上向きの連弧文（25）に分かれる。端面の装飾は乏しく、縄文施文（23）と沈線（25）に分かれる。口縁部は緩やかな波状を呈するものもある（24）。区画文が残るものは少なく、24では下方向からの刺突が認められる。Ⅰ文様帯が狭いこともあり、26は1条の上向きの弧線文、27は縄文押圧に限られる。時期不明の甕底部片（30）は外面にハケが、底部外面には木葉痕が残る。地文はＲＬ縄文に限られる。

壺には北陸系の長頸壺（31・33）と東北系（34）のほか、壺又は鉢の底部片（32）がある。このうち33は頸部との境界にあたる胴部上位に3条の沈線が巡る。剥落が激しいため明確にできないが、沈線下の胴部には縄文が施文されている可能性がある。34の壺は胴部上位の破片で、ＲＬ縄文施文後に下向きの連弧文が巡る。外面には赤彩が施されている。

33T（35・36）：3群の甕（35）、2群の甕（36）がある。35は内湾して立ち上がる口縁部片で、Ⅰ文様帯には上向きの連弧文が施されている。36は胴部片で、外面には縦ハケが残る。

19T（37～39）：1群の甕胴部片（37）、3群の甕口縁部片（38・39）がある。37は胴部上位破片で、上下3

条の沈線で区画されて文様帯に鋸歯文が施されている。38は口縁部が肥厚して短い4類である。Ⅰ文様帯はＲＬ縄文が施文されるのみである。39の口縁部形態は2類で、頸部との境界には1条の沈線が巡り、Ⅰ文様帯内には上向きの弧線が施されるのみである。

20T（40～63）：Ｐ1（40・41）、縦堀2（42～47）、Ⅱ層（48～63）から出土している。Ｐ1の40・41は3群の広口壺で、同一個体の可能性がある。Ⅰ・Ⅲ文様帯にＲＬ縄文が施文される。縦堀は3群に限られ、甕(42～44・46）と広口壺（45）がある。42は口径約30cmで、頸部が直立し、長い口縁部が内湾して立ち上がり、肥厚しないⅡ2類である。幅広い口縁部は上位に上向きの連弧文が、下位には鋸歯文が巡り、条が縦走するＲＬ縄文が施されている。頸部との境界には交互刺突文がめぐり、直下には重菱形文が巡る（Ｂ類)。口縁部片の43はＲＬ縄文、44は無文である。底部片の46は下位までＲＬ縄文が施されている。45の広口壺は口縁部が若干肥厚するが、幅は狭い。Ⅱ文様帯は無文で、Ⅰ・Ⅲ文様帯に縄文施文のみされる点も40と共通する。47は口頸部がⅢ5類で、口縁部には縦長の刻みを伴う瘤が貼り付けられ、瘤の間を2条の上向きの弧線が巡る。区画文を欠くが、頸部には崩れた重菱形文が巡る（Ｂ類)。

Ⅱ層出土には3群の甕（48～60・62）と壺（61)、4群の壺（63）がある。3群の甕口縁部片は、肥厚しないものが多く、肥厚するのは短い4類の1点（53）のみである。前者は内湾して長い2類（51・52・55)、外傾・外反して長い3類（48～50・54）に分かれる。Ⅰ文様帯の地文はＲＬ縄文に限られ、上向きの連弧文が加わるものが1点のみ認められる（50)。区画文を欠くものが多いが、沈線のみ（50）のほか、円形刺突が施されたものがある（52・53)。胴部文様を観察できるものでは、波状文（58)、鋸歯文？（59)、連弧文？（60）がある。区画文は59で交互刺突、58の円形刺突も区画文の可能性がある。東北系の壺は無文である。北陸系の壺は長頸壺で、上端で大きく外反して、端部上端が大きくつまみ上げられている。

66T（64・65）：いずれも3群の甕である。地文は条が縦走するＲＬ縄文である。文様は、64は区画沈線下に対向する連弧文が、65は上向きの連弧文が施されている。

65T（66）：3群の甕胴部片である。条が縦走するＲＬ縄文施文後に、下向きの弧線が施されている。

21T（67～69）：縦堀1（67・68）とⅡ層（69）から出土している。いずれも胴部細片のため、時期・系統明確にし難いが、3群の甕と考える。67は沈線で区画されているが、上位の文様は不明である。下位は鋸歯文と考える。68は細片のため更に明確でないが、鋸歯文と思われる沈線が残る。69は対向する楕円形文内に平行沈線が加わるものである可能性が高い。

68T（70～73）：3群の甕（70・72）と壺（73)、5群の甕（71）がある。3群の甕口縁部は、肥厚が認められない。口縁部文様帯にはＲＬ縄文のほか、上向きの弧線が加わる（70・72)。区画文は72にのみ認められ、沈線に下方向から刺突が加わる。壺は口径7.4cmの小型品で、口縁部・胴部には条が縦走するＲＬ縄文が施されたのみである。5群の甕（71）は口縁上端部がわずかに肥厚する。

22T（74～79）：P12（74)、P24（75)、P77（76)、Ⅱ層（77～79）から出土している。P12出土の74は胴部片で、条が縦走するＲＬ縄文のみ残る。P24の75も胴部付近の小破片で、重菱形文が残る。Ⅱ層出土は3群(77・79）と5群（78）がある。77の口縁部は短く、肥厚する4類である。文様は縄文のみで、口縁部は条が縦走するＲＬ縄文、口縁部下には縄文押圧が加わる。78はハケのみが残存するもので、内面は横ハケ、外面は縦ハケである。胴部片の79には頸部との境界付近に縄文押圧が加わる。

62T（80～84）：1群の壺（80）と、3群の甕（81～84）がある。80は2本1組による渦巻き文が施されている。81～83は、口縁部の肥厚が顕著ではない。81の口縁突起部には縦方向の刻みが残る。82は縄文施文のみであるが、83は沈線区画された口縁部上位には弧線状の沈線が、下位には側縁の一方から施された円

形刺突文が残る。底部片の84を含め、地文は条が縦走するＲＬ縄文である。

63T（85）：３群の甕胴部片である。胴部上位は沈線で区画され、その下位には横ハケが残る。調整から折衷式の５群とすべきものかもしれないが、沈線が残ることから本群とした。

64T（86～89）：２群の壺（86）、３群の甕（87・88）・壺（89）がある。86は口縁上端が大きく屈曲して外傾しており、端部には鋸歯状の刺突が施されている。口縁部内面は横ハケ、外面には縦ハケが施されている。頸部付近の破片87は円形刺突が残るものの、口縁部片の88はＲＬ縄文のみが、壺胴部の89は胴部上位に横走するＲＬ縄文が残るのみである。

36T（90～101）：Ⅱ層（90・91）と濠１（92～101）から出土している。２群の壺（90）と、３群の甕（91～101）がある。90は胴部上位の破片で、２条の沈線下には短沈線がハの字状に施されている。

３群のうち、91は頸部・胴部界に交互刺突文が施されている。口縁部を欠くが、胴部には２条の沈線による下向きの連弧文が、上位には同じく２条の沈線による流水文が施されている。口縁部が残存するものでは、２類（92・99）、３類（93・96）、４類（94・100）、５類（101）に分かれる。口縁部の文様は無文（92・101）、縄文施文のみ（93・94）、縄文＋沈線（99）、中位の沈線を挟んで対向する連弧文が施されたもの（96）に分かれる。これらのうち101は残存率が高く、口径27.0cm、器高35.5cm、底径10.0cmである。頸部はⅢ類、文様からＥ類に属する。胴部片（95・97・98）は、無文（95）、Ｕ字状文（97）、沈線区画された上位が楕円形文、下位が下向きの連弧文（98）に分かれる。

25T（102～118）：濠２（102～104）、Ⅱ層（105～118）から出土している。３群の甕（102・103・106～110・112～114）・壺（115・116・118）を主体に、２群の甕底部（104）、１群の甕（105）、５群の甕（111）、６群の甕（117）がある。２群の104は厚い底面を有し、外面には縦ハケが施されている。１群である105の頸部には沈線区画内に上下で対向する鋸歯文が施されている。

３群の甕口縁部には、２類（106・114）、３類（108～110）、４類（107・112）がある。文様は縄文施文のみ（107～110・112～114）が多く、同一個体で縄文とハケが確認できるものもある（109）。Ⅰ文様帯に沈線が伴うのは１点のみ（106）である。地文は胴部片を含めてＲＬ縄文が多いが、ＬＲ縄文（109）も認められる。口縁端面への縄文施文も多い（106・107・114）。壺のうち口縁部片の115は、口縁部がわずかに肥厚する。内外面で施文は認められない。このほか、続縄文式土器の可能性がある６群の117は胴部片で、残存部には鋸歯状の沈線が施され、縄文が磨消されている。

61T（119～172）：縦堀２（119～131）、濠２（132～135）、Ⅱ層（136～160）、Ⅲ層（161～172）から出土している。幅広い時期の遺物を含むが、縦堀２・濠２・Ⅱ層は３群が圧倒的に多く、Ⅲ層では１群（161～162・165）・２群（163）が目立つ。

２群の163は、２本１組の沈線区画内に鋸歯文が施された壺の頸部片である。１群では口縁部が縄文施文された点で共通するが、頸部文様は鋸歯文（161）と重菱形文？（162・165）がある。内面の施文は口縁部上端に集中し、鋸歯文（161）と沈線のみ（162）に分かれる。いずれも内外面にハケ調整が残る。

３群の甕では、交互刺突文が認められるものが５点あり、口縁部は２類（124）、３類（139）、４類（141）、５類（119）、口縁部不明（158）に分かれる。交互刺突文の施文部位は、頸胴部界（119・158）、口頸部界（124・139・141）がある。このうち残存率が高い119はⅠ・Ⅱ・Ⅲの文様構成を取り、Ⅰ文様帯はわずかに突出し、縦刻みの施された突起間を２条１組で施された上向きの連弧文が、下位には下向きで小刻みな連弧文が施されている。Ⅱ文様帯にはやや崩れた重菱形文が、胴部には下向きの小刻みな連弧文が巡る。頸部文様からＢ類、頸部形態はⅢ類に属する。このほかのものは、Ⅰ文様帯は沈線のみ（124・139）が多い。交互刺

突文が確認できないものの口縁部形態は、肥厚せず、短く、内湾する１類（126・137・147・148・167）、肥厚せず、長く、内湾する２類（120・121・123・140・143・144・149～152）、肥厚せず、長く、外傾・外反する３類（125・134・138・153・154・166）、肥厚して、短い４類（122・145・146）、肥厚して長い５類（142）がそろう。口縁部下端の刺突はいくつかの個体で認められ、細長い刺突（121）、円形刺突（122・140）がある。Ｉ文様帯は縄文施文のみのものが多いが（134など）、上向きの弧線文（142）、上向き弧線・連弧文＋鋸歯文（120・144）、沈線のみ（138・143・145・148）、沈線＋縦位沈線（136・140）、沈線＋弧線・連弧文（147）、上下で対向する連弧文（167）など多様である。このうち残存率が高い167は口縁部と胴部界、胴部中位に異なる種類の刺突が施され（頸胴部界は台形刺突列）、Ｉ文様帯と同様に上下で対向する連弧文が施されている。口頸部形態Ｉ類、文様はＡ類に属する。このほかは口縁上端部及び・端面の装飾は多く、縄文施文（120・121・142・145・146・148・149）のほか、刺突がある（139）。胴部文様は流水文？（129）、下向きの連弧文＋円形刺突（130）、２本１組とした縦位沈線（169）、地文はＲＬ縄文が多いが（120・121・123など）、装飾効果を持つと考えるハケ（147）もある。内面にハケ調整が残存するものは、145・147がある。

壺は３群（128・155・159）と４群（171）がある。前者はすべて胴部片である。条が縦走するＲＬ縄文に、鋸歯文（155）、対向する連弧文（159）、連弧文（128）が観察できる。このうち159は外面に赤彩が施され、胎土も精錬されている。４群の171は直口短頸で、端部は先細りとなる。口縁部には粗いナデが施されている。蓋は１点のみ確認できる（172）。頂部を欠くが、残存率は高く、口径10.6㎝である。口縁部にはＬＲ縄文が施され、端部内外面には炭化物が厚く付着する。

31T（173～184）：濠３（173・174）と、Ⅱ層（175～185）から出土している。３群に限定され、甕（174～184）を主体に、壺（185）と高杯の可能性があるもの（173）がある。甕は、交互刺突文が施されたもの（176）と、交互刺突文を確認できないもの（175・177～182・184）に分かれる。前者の176は、わずかに張り出した縦刻みのある頂部を起点に、上向きの連弧文が巡る。交互刺突文を確認できないものは、口縁部形態２類（180・184）、３類（175・179・181）、４類（182）、５類（178）がある。縄文施文されたのみのものが多く、縦刻みを持つ波頂部を起点に上向きの弧線が施されたものが１点確認されるに過ぎない（178）。波頂部が認められるもの（181・184）、端面に縄文施文されたものが目立つ（175・180・184）。

壺は胴部上位に１条の沈線が施されており、外面には赤彩が残る。高杯の可能性がある173は、縦刻みの貼瘤を起点に横位沈線による文様が施文されているが、その構成は明瞭でない。

32T（186～196）：２群の甕（186）・壺（193）、１群の甕（187～189）、３群の甕（190・192・195）、４群の甕（194・196）、５群の甕（191）がある。２群の甕口縁部片（186）と壺胴部片（193）は、共に細かなハケ調整が施される。186の口縁端部には刺突が巡る。１群の甕口縁部片の187は、残存率が低いため外面文様は明確でないが、重菱形文の可能性がある。頸部片の188には複数段にわたり鋸歯文が施されている。３群の甕は、いずれも口縁部下端がわずかに肥厚するもので、短い４類（195）と、長い５類（190）に分かれる。口縁部の文様はＲＬ縄文（190）、ＬＲ縄文（195）で、190の口縁部下端には円形刺突が巡る。底部片（194）は器形が後期北陸系で、縄文施文された折衷土器である。後期北陸系土器と同様に、底部輪台技法で製作されており、底部外面中央がドーナツ形に凹む。胴部下位内外面にはハケとＬＲ縄文が施されている。196は有段口縁無文甕である。有段部は短い。５群の甕である191の口縁部形態は２類で、内外面には粗いハケが残る。

47T（197～219）：Ⅱ層（197～212）と、Ⅲ層（213～219）から出土している。Ⅱ・Ⅲ層共に中期の土器を多く含む。１群の甕（197・199、213～216）・壺（198・201～203）、２群の甕（200）、後期は３群の甕（204～210・

217～219)、時期・系統不明の底部片（211・212）がある。このうち207は形態から、鉢の可能性を残す。1群の甕は、口縁部及び内面にハケを残すものが多い（213・215・216)。頸部文様は重菱形文（197・215）である。また、内面への施文も多く、口縁部上端に連弧文が施されたものがある（197・213)。壺のうち口縁部片は、平行沈線により施文され、198の内外面には4条の平行沈線が残る。胴部片は2本一組による渦巻文が施されたもの（202）と、平行沈線の上下に波状文が残るもの（203）に分かれる。2群の甕口縁部（200）は内外面とも端部には刺突文が残る。

3群の甕は、口縁部下端がわずかに肥厚して、短い4類（205）と、肥厚せず、長く、内湾する2類（206・208）と、肥厚せず、長く、外反する3類（204・217～219）がある。口縁部文様帯には連弧文と思われる沈線が残るもの（206・208）は少なく、縄文施文のみ（204・205・217・218)、無文（219）など装飾性に乏しいものが多い。胴部片は平行沈線系の文様が確認できるが、崩れた流水文？（209)、上向き連弧文が残るものがある（210)。

系統不明な底部片の底径は211が4.0cm、212が3.4cmと小型なこと、スス・コゲが付着していないことから、供献具の底部片と考える。

29T（220～230）：濠4（220～223）とⅡ層（224～230）から出土している。中期は2群の甕（220)、1群の甕（224)、後期は甕に限られ、3群（221・225～228）・4群（229・230）・5群（222）に分かれる。2群の220は底部から外反して立ち上がる。胴部外面には縦ハケが残る。1群の224は口縁部と胴部の境界に2条の平行沈線が施され、内外面ともにハケが残る。3群の甕口縁部は、4類(225)と、2類(228)、3類(226・227）に分かれる。装飾性に乏しく、縄文施文されたのみのものが多い。228は残存率が高く、口径19.0cm、胴部最大径19.0cmである。胴部との境界付近は無文であるが、基本的にⅠ・Ⅱ文様帯の構成となる。胴部片の223は2条の平行沈線で区画され胴部には上向きの連弧文が、上位には2条の沈線で、入組文が施されている。

4群の甕は、いずれも口縁部がく字甕である。口縁部と胴部の境界が不明瞭で、大きく外反して上方に摘み上げられた端部を持つもの（229）と、口縁部と胴部の境界が明瞭で、肥厚する口縁部が外傾して幅広い端面を有するもの（230）に分かれる。5群（222）は口縁部形態3類で、口縁部内外面が横ハケ、胴部外面が縦ハケである。

30T（231～243）：濠4（231～235)、濠5（236～241)、Ⅱ層（242・243）から出土している。このうち濠5は残存率が高い土器（236～238）が重なり合って出土している（図版19・38)。時期はいずれも後期で、続縄文式（6群）土器の可能性があるもの（236）や5群（231・239）を除き3群である。3群のうち残存する口縁部は、2類（238)、3類（237・243)、4類（242)、5類（240）に分かれる。口縁部文様は縄文施文のみのもの（233・234・237・238・242・243）が多く、上向きの弧線文が施されたものは1点のみ（240）である。このうち、237・238は残存率が高い。238は口径約22.0cm、胴部最大径約19.2cm、237は口径約30.0cm、胴部最大径約24.8cmである。頸部が作出された238は無文、く字口縁で頸部が不鮮明な237は、口縁部と胴部の境界付近が無文である。238は条が縦走するＲＬ縄文が、237はＲＬ縄文が施されたのみである。241の胴部は沈線下に上向きの弧線文が、243は上下が平行沈線で区画され、楕円形文が施されている。5群は口縁部形態が4類（231）と3類（239）に分かれる。いずれも口縁部内外面には横ハケが残る。

6群の可能性がある236は摩耗が著しい。観察可能は部分では口縁部端面に連続刺突が施され、上端部には微隆起線文と横走する帯縄文（ＲＬ縄文）が残る。胴部上位も横走する帯縄文と上向きの弧線内に円形の刺突が施されている。

27T（244～251）：1群の壺（244）、3群の甕（245～250）・壺（251）がある。1群の壺口縁部片は、短い口縁部が外傾して立ち上がり、口縁部外面には4条の平行沈線が巡る。3群の甕口縁部はいずれも口縁部が肥厚しない。口縁部が短いもの（245）と長いもの（246）に分かれ、後者は内湾して立ち上がる2類である。いずれも口縁部は縄文施文されたのみである。胴部片（248・250）と底部片（249）は縄文施文されているが、250はU字状の文様が加わる。3群の壺は直立する無文の頸部と、LR縄文が施文された口縁部とからなる。

69T（252～262）：Ⅰ層（252～254）と、Ⅱ・Ⅲ層（255～262）から出土している。1群の壺（255～257）、3群の甕（252～254、258～260）・壺（261）、4群の高杯（262）がある。255は口径約18.0cmである。内湾して立ち上がる口縁部の外面には、上下沈線で区画された文様帯内に対向する連弧文が施されている。内面も同様に上端は沈線が施され、直下に連弧文が施される。頸部片の256は胴部から屈曲して立ち上がる。頸胴部界には沈線が施され、上位の文様は明瞭でないが、下位には上向きの連弧文が施される。胴部片の257は2本1単位の渦巻文が残る。

3群の甕は、口縁部が肥厚せず、内湾して長い2類(260)、外反する3類(259)、肥厚して長い4類(258)に分かれる。口縁部文様は、258は条が縦走するRL縄文に上部に1条の沈線が加わるが、その他は無文である。胴部片の261は、外面に赤彩が残ることから壺とした。外面には条が縦走するRL縄文が施されている。後期北陸系の高杯は脚部片である。棒状脚を呈し、口縁部との接合は充填法である。内外面の磨耗が進み、調整は明瞭でない。

46T（263～270）：1群の甕（263）、3群の甕（264～268）・壺（269）、4群の甕底部（270）がある。1群の甕頸部片（263）は、胴部との境界付近が2条の沈線で区画され、上位に鋸歯状の文様が施文される。3群の甕は、交互刺突文が施されたもの（265）と、交互刺突文が確認できないもの（264・266・267）に分かれる。265は口縁部形態2類で、胴部との境界の上下沈線内に交互刺突文が、口縁部には条が縦走するRL縄文が施されている。口縁部文様は簡素で、条が縦走するRL縄文が施される以外、2条の沈線が巡るものが確認されるにすぎない（266）。頸部文様が確認できる264は、上下を1条の沈線で区画され、連続する長楕円内に横位沈線が1条施されている。頸部形態は数少ないⅡ類である。底部片の270は、底部輪台法で製作されていることから後期北陸系とした。底径6.0cmである。

43T（271）：1群の甕である。口縁部は外反して立ち上がり、頸部との境界は不明瞭である。口縁部は無文、頸部には2本1単位とする鋸歯文が上下2段に巡る。口縁部内面上端には2本1単位とする上向きの連弧文が巡る。胴部はLR縄文で、底部との境界には横位のハケが、底面には平行葉脈が残る。

（3）C地点（272・273）

41T（272）：1群の甕である。口縁部は無文で、頸部には横位沈線により文様が施されており、重菱形と思われるが、残存率が低いことから文様構成は明確でない。

42T（273）：底部片が1点あるが、時期・系統は明確でない。底部が厚く、底部輪台法で製作されていないことから、後期北陸系ではないと考える。

（4）平成20年度調査A地点（425）

74T（425）：1群の甕が1点出土している。頸部付近の破片で、口縁部には横位沈線を主体に1条の縦位沈線が残る。

3　土　製　品（図面図版28－274～279、写真図版64）

被熱又は、被熱したと思われる塊状の粘土を焼成粘土塊とした。6点出土しており、全点を図化した。不定形で、表面に調整の痕跡が明瞭でないものに限られる。田中耕作氏［田中1991］・八木勝枝氏［八木2002］の分類ではC類に相当するものと考える。

出土地点は比較的限定され、25Tで3点（274～276）、22T（277）、36T（278）、20T（279）と、B地点でも南半部に集中する傾向にある。6点中4点が遺構から出土しており、25T濠2（275・276）、36T濠1（278）、20T縦堀2（279）で検出した。

長さ・幅共に5㎝未満、重量も7.5～20.0g程度と小型のものが多い。石英などの混和材と思われる鉱物が確認できるもの（274・278）と、含まないもの（275～277・279）がある。また、器面は凹凸が激しいものが多いが、278は裏面が若干滑らかであり、279の裏面の一部には繊維状の圧痕が認められる。

4　石器・石製品（図面図版29～32・34－280～352・426、写真図版64～66）

本遺跡から出土した石器・石製品は518点で、その内訳は剥片・剥片石器が488点、礫石器が28点、玉類2点である。伴出する土器から弥生時代中期後葉～後期後葉に伴うものと推定する。出土している土器の量から、多くは後期に伴う可能性が高い。

弥生時代の単独遺跡が少ないことから、本遺跡の石器群は弥生時代中期後葉～後期の石器様相を知るものとして貴重である。このような遺跡の特性を少しでも活かせるよう、整理作業を行った。

A　資料の提示方法

各器種における個々の資料の提示は、その器種の典型例を抽出し、実測図・写真・観察表・記述を基本に、それぞれ器種ごとに提示した。さらに、器種ごとの分析には表・グラフ・挿図を作成し、事実報告を中心に記述した。

（1）実測図の表示方法

個々の石器の諸特徴を図化したもので、各器種の出土数・掲載数・図化率は第6表のとおりである。出土点数は完形品・略完形・破損品・破片を問わず1個を1点とした。実測図は展開図法により作成し、展開面数を器種ごとに統一した。ただし、個々の石器で重要な面を加えたり、省いたりもしている。

縮尺率　器種毎に統一した。各器種の縮尺率は第6表の通りである。図面ごとにスケールを示した。

正（表）面と裏面　剥片石器と剥片のうち、主要剥離面（腹面）が認められる場合は、それを裏面にした。

第6表　石器の器種別出土数と図化・縮尺率

器種名	出土点数	掲載点数	図化率（%）	縮尺
石鏃	29	16	55.1	2/3
石錐	5	4	80.0	1/2
両極剥離痕のある石器	3	1	33.0	1/2
不定形石器	172	22	12.8	1/2
その他	1	1	100.0	1/2
石核	3	1	33.3	1/2
剥片類	275	0	0.0	－
剥片・剥片石器合計	488	45	9.3	
磨石類	15	12	80.0	1/3
砥石	5	4	80.0	1/3
石錘	1	1	100.0	1/3
環状石斧	1	1	100.0	1/3
小型特殊（敲打痕）	1	1	100.0	1/3
小型特殊（磨痕・擦痕）	3	3	100.0	1/3
小型特殊（抉入り）	1	1	100.0	1/3
小型特殊（剥離痕）	1	1	100.0	1/3
礫石器類合計	28	24	85.7	
管玉	2	2	100.0	2/3
総　計	518	71		
自然礫	－	2	－	1/3

上下の基準　器種毎にそれぞれ異なる。南魚沼市（旧塩沢町）五丁歩遺跡の報告書［高橋雄1992］等を参考に定めた。

実際の表現　線描や点描のほか記号・文字・スクリーントーンを使用した。スクリーントーンの表現は、第７図のようになる。

（２）観察表の記載

石器の諸特徴などを記入し、報告№順に掲載した。実測図を示していない石器の観察は報告書に掲載していないが、データは県教育委員会に保管してある。観察表の主な項目は下記のとおりである。

報告№　実測図番号・観察表報告№．・写真図版の遺物番号は一致する。

出土地点　出土したトレンチとグリットを記入した。

遺構・層位　基本的に遺構に伴う遺物は遺構名・層位順に、遺構外出土の遺物は層位を記入した。微細図を作成したものとドット処理したものは、取り上げ番号を括弧付けで記入した。

分類　器種ごとの分類記号を記入した。器種分類は、朝日村元屋敷遺跡［滝沢・高橋雄ほか2002］、南魚沼市（旧塩沢町）五丁歩遺跡［高橋雄1992］、新潟市（旧新津市）八幡山遺跡［立木2001ａ］を参考に行った。分類基準は器種ごとに異なり、「石器類の分類と分析」で示す。

計測値　長さ・厚さ・幅・重さを計測した。主な器種の計測基準は、第６・７図のとおりである。

遺存（残存）状態　定形石器や礫石器のように、完形品が一定の形を示すものについて、石鏃・石錐のように破損部位・遺存部位を記入した。遺存状態は五丁歩遺跡［高橋雄1992］を参考にし、以下のように区分した。完形品は完全な形で計測できるもの。略完形はわずかに欠損しているが、完形品の形が変わらず、計測値もほとんど変わらないもの。破損品は大きく欠損し、完形品の形を想定できるが、計測値は完形品と大きく異なるものとした。

石材　使用された石材を記載した。頁岩が圧倒的に多い。縄文時代以来、県北部の遺跡において使用石材の主体となる頁岩については、その特徴から細分案が提示されている［阿部1997ｂ・酒井2002ほか］。ここでは、いわゆる「半透明の頁岩」［阿部1997ａ・秦2001など］を頁岩Ｂ類、珪質化が進んでいないものを頁岩Ｃ類、珪質化が進んだもののうち「半透明の頁岩」以外を頁岩Ａ類として区分した。なお、頁岩以外の石材については、その一部をフォッサマグマミュージアムの竹之内耕氏から鑑定いただいた。

備考　観察項目以外の特記事項を記入した。

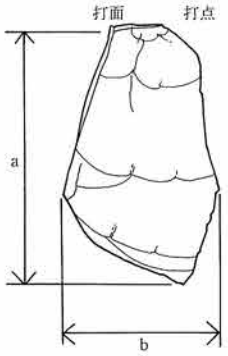
Ｂ　石器の出土位置

遺跡全体の石器出土状況を示したのが第７表である。剥片・剥片石器は488点出土しているが、地点別ではＡ地点で８点（1.0%）、Ｂ地点で479点（98.8%）、Ｃ地点で１点（0.2%）であり、ほとんどがＢ地点からの出土である。同様に礫石器もＢ地点出土が圧倒的に多い。ただし、出土数量の少ない石錘がＣ地点、環状石斧がＡ地点で各１点出土している。

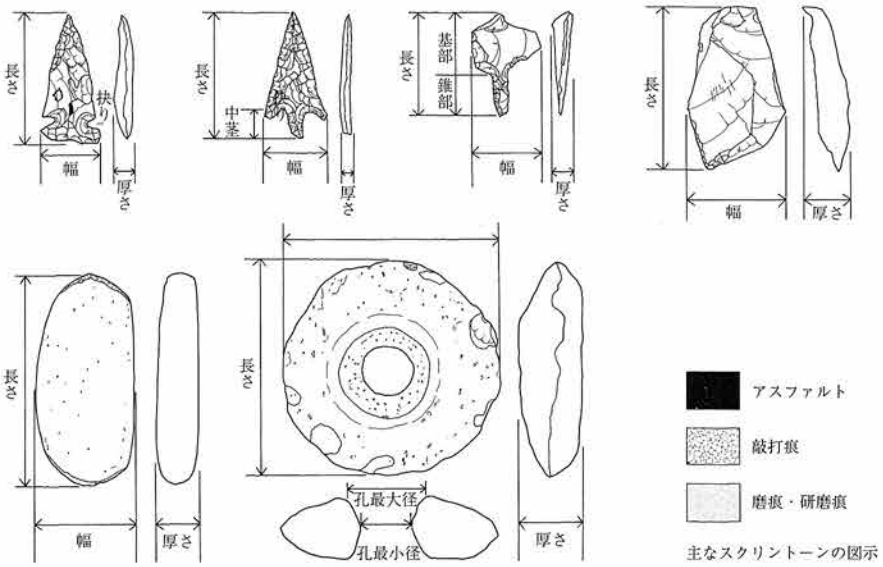
Ｃ　石器の分類と分析

（１）石鏃（280～295）

扁平で先端を尖らせたものを石鏃とした。総数29点出土した。



第6図　剥片類の計測基準と名称



第7図　主な器種の部位名称と計測基準、主なスクリントーンの図示

第7表　種別出土地点

地点	トレンチNo	石鏃								石錐		両極剥離	不定形石器									その他	石核	剥片類	磨石類					砥石	石錘	環状石斧	小型特殊				管玉	特異自然	合計
		A	A1	A2	B1	B2	B3	B4	他	A	B		A	B	C	E	F	G	I	K	不可				B	C	E	F	G				敲打	磨擦	抉り	剥離			
A	1					1																		2															3
A	3																							1															1
A	5																															1							1
A	11																							1															1
A	52													1																									1
A	74																													1									1
A	沢												1											2												1			4
B	18								1			1		3		1	3	1						30		1	2		2	2									47
B	19				1								1	2										9															13
B	20				4	3		1	1	3			3	5	2		5			1			1	19						1							1		50
B	21											1												3															4
B	22																1	1		1				8				1						1				1	14
B	24																												1										1
B	25										1			1			2							7															11
B	26												1																										1
B	27																		1																				1
B	28																	1						1															2
B	29								2					1					1					11			1												16
B	30												1				2							5															8
B	31													1		1				1				4			1										1	1	10
B	32						1						1	2	2									6					1				1	1					15
B	33											1			1		1					1		4			1												9
B	34				1																			1															2
B	36												2	2			2							9										1					16
B	46												1	1										10															12
B	47			1									1	1			1			3				13															20
B	54													2		1	1			1				4						1									10
B	61	1	1	1				1	2	1			3	10	2	3	12	1	1	10				47															96
B	62							1					3	4	2		2		1	3				16					1										33
B	64					2								1			2			2	1		1	15															24
B	65				1								1	2			1							4															9
B	66																4							5															9
B	67					1											4			4				4															13
B	68								1				2	2	1	1	1	2		1	1		1	21	1				2										37
B	69													1	1		5							4															11
B	一括												1				1	1						8															11
C	40																														1								1
C	48																																		1				1
C	55																							1															1
合計		1	1	2	7	7	1	3	7	4	1	3	22	42	11	7	50	7	4	27	2	1	3	275	1	1	5	1	7	5	1	1	1	3	1	1	2	2	520

分類　八幡山遺跡の分類［立木2001ａ］を参考にした。側縁部の剥離の仕方により大きく２分類し、さらに有茎鏃の基部形態で細分した。

Ａ類　基部に両側から剥離により抉りを成すもの（280～282）。いわゆるアメリカ式石鏃で、「三角形の両辺の底辺にちかいところを、両側から深く欠きとって、あたかも凸字形の柄をつけたような形につくる」

［水野・小林1959］ものである。総数４点出土した。280は基部下が欠損して、中茎をもつようにも観察できる。異形石器の可能性もある。

Ｂ類　有茎鏃。基部に中茎をもつもの（283～292）。

１類　凹基有茎鏃（283）　基部に抉りをもち、凹状になるもの。

２類　平基有茎鏃（284～288）　基部が平らになるもの。側縁部の下端が括れる284も本類に含めた。

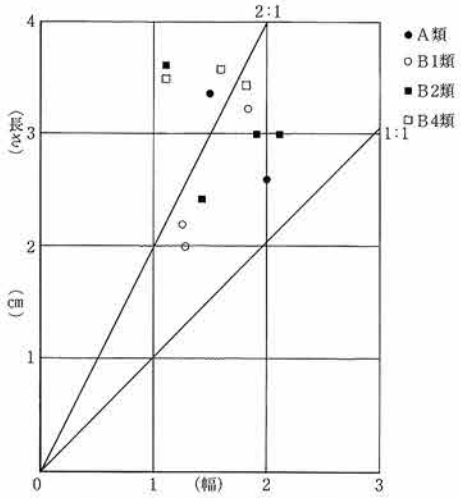
３類　凸基有茎鏃（289）　基部が突出するもの。

４類　凸基有茎片袖（290～292）　基部の片方のみが突出するもの。

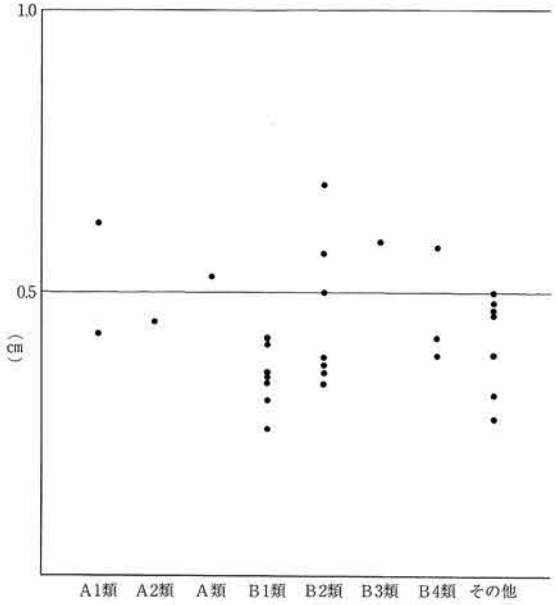
その他（293～295）　破損品のため、Ａ・Ｂ類のいずれか判断できないものを、その他とした。293・294は中茎のない無茎鏃の可能性もある。

分類別出土数と出土分布状況　出土分布状況は総数29点を対象にする。遺構内から６点、遺構外から23点出土している。遺構内出土の内訳はＡ地点の１TSK１からＢ２類が１点、Ｂ地点の20T縦堀２からＢ２類が２点、Ｂ４類が１点、その他が１点出土した。分類別出土数はＡ類が４点、Ｂ１類は７点、Ｂ２類は７点、Ｂ３類は１点、Ｂ４類は３点、その他は７点である。トレンチ別ではＢ地点の20Tから９点、61Tから６点と多い。

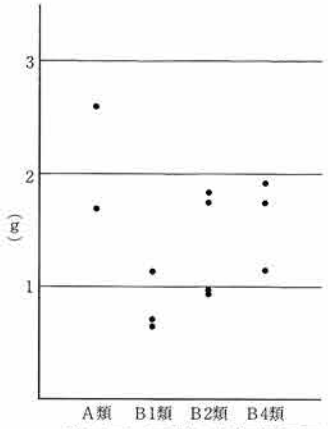
長さと幅　第８図参照。完形・略完形の計12点を対象とした。長さ1.9～3.7㎝、幅１.１～2.2㎝に分布し



第８図　石鏃の分類別長幅図



第９図　石鏃の分類別厚さ



第10図　石鏃の分類別重量

第８表　石鏃の分類別石材

	頁岩A	頁岩B	頁岩C	泥岩(中生代)	流紋岩	合計
Ａ１類	1	1				2
Ａ２類	1					1
Ａ類	1					1
Ｂ１類	5	2				7
Ｂ２類	6	1				7
Ｂ３類				1		1
Ｂ４類		1	1		1	3
その他	5	1	1			7
合計	19	6	2	1	1	29

第９表　石鏃の分類別破損状況

分類	完形	破損	合計
Ａ類	2	2	4
Ｂ１類	3	4	7
Ｂ２類	4	3	7
Ｂ３類		1	1
Ｂ４類	3		3
その他		7	7
合計	12	17	29

ており、A類は281が長さ3.4cm、幅1.5cmで細長いが、282は長さ2.6cm、幅2.0cmの幅広である。

B類は長さ1.7～3.7cm、幅1.8～1.6cmに分布する。細別ではB1類が長さ2.0～2.5cm、幅1.0～2.5cm、B2類が長さ約3.0cm、幅1.5～2.5cm、B4類は長さ約3.5cm、幅1～1.5cmに分布している。B1類は小型、B2類は幅広、B4類は幅に比して長い傾向にある。

厚さ　第9図参照。破損品も完形時の厚さと推定できるため、29点全点を対象とする。0.2～0.7cmに分布しており、0.3～0.6cmに集中する。B1類より、A・B2・B4類がやや厚い傾向にある。

重さ　第10図参照。完形・略完形の12点を対象とする。0.6～2.6gに分布する。分類別では、小型品の多いB1類が軽い傾向がある。

石材　第8表参照。頁岩A類が最も多く19点（65.5%）、頁岩B類は6点（31.6%）、頁岩C類が2点（10.5%）、泥岩（中生代）と流紋岩が各1点（5.3%）で、他器種と同様に頁岩A類が最も多いが、頁岩B類の比率が高い点で異なる。細別器種毎ではB4類は、頁岩A類を1点も含まないのが特徴である。

遺存状態　第9表参照。完形・略完形品が12点、破損品が17点である。破損品の内訳は、基部及び中茎が欠損したもの11点、尖頭部が欠損したもの3点、尖頭部と中茎の欠損したもの3点である。

付着物　281の1点でのみ黒色付着物を確認した。正面の基部付近に付着しており、石鏃と矢柄の装着に係わるものと思われる。分析を行っていないため確定できないが、アスファルトの可能性が高いと考える。

（2）石錐（296～299）

意識的に尖頭部を形成している石器の中で石鏃を除いたもの、および尖頭状の端部が磨耗している石器を石錐とした［酒井2002］。総数5点出土した。

分類　基部をもつものともたないものに分類した。

A類　基部をもたないもの。棒状ないし柳葉形になるもの（296～298）。

B類　基部をもつもの（299）。1点のみの出土で、二次加工は基部下端までにとどまる。

出土分布状況　A類は20Tで2点、61Tで1点、B類は25Tに1点出土している。

長さと幅　A類の幅は1cm程でまとまるが、長さは2.8～6.4cmに及び、縦長のもの（296）、幅広なもの（298）に分かれる。B類の299は、基部が明瞭なことからA類に比して幅広であるが、錐部の幅はA類とほぼ同様である。長さ3.7cm、幅2.5cmで、錐部は先端を欠損している。

厚さ・重さ　厚さはA・B類共に0.5～0.6cmに収まる。重さはA類の298が0.3gと軽いものの、それ以外は3～4g程度である。

石材　298が泥岩（中生代）である以外は、頁岩A類である。

遺存状態　296・298の2点が完形品であるが、298・299は錐部の先端を欠く。

（3）両極石器（300）

両極剥離痕のある石器で両極石器・楔形石器・ピエス・エスキーユなどと呼称されるものである。総数3点出土した。いずれも2極1対の刃部に両極剥離痕をもつ。長さ1.9～2.4cm、幅1.8～2.5cmで四角形に近い形状を呈する。厚さは0.7～1.0cm、重量は3～5gに分布し、石材はすべて頁岩Bである。

（4）不定形石器（301～322）

「剥片を素材とし、二次加工や使用痕が認められ、定形石器でない石器」を不定形石器とした［高橋雄1992］。総数172点で、全石器中で1／3を占める。

分類　五丁歩遺跡の分類［高橋雄1992］に従い、以下のようにした。なお、剥離の大きさはおおよその目安として、3mm以上を中～大型、3mm未満を小型とした。

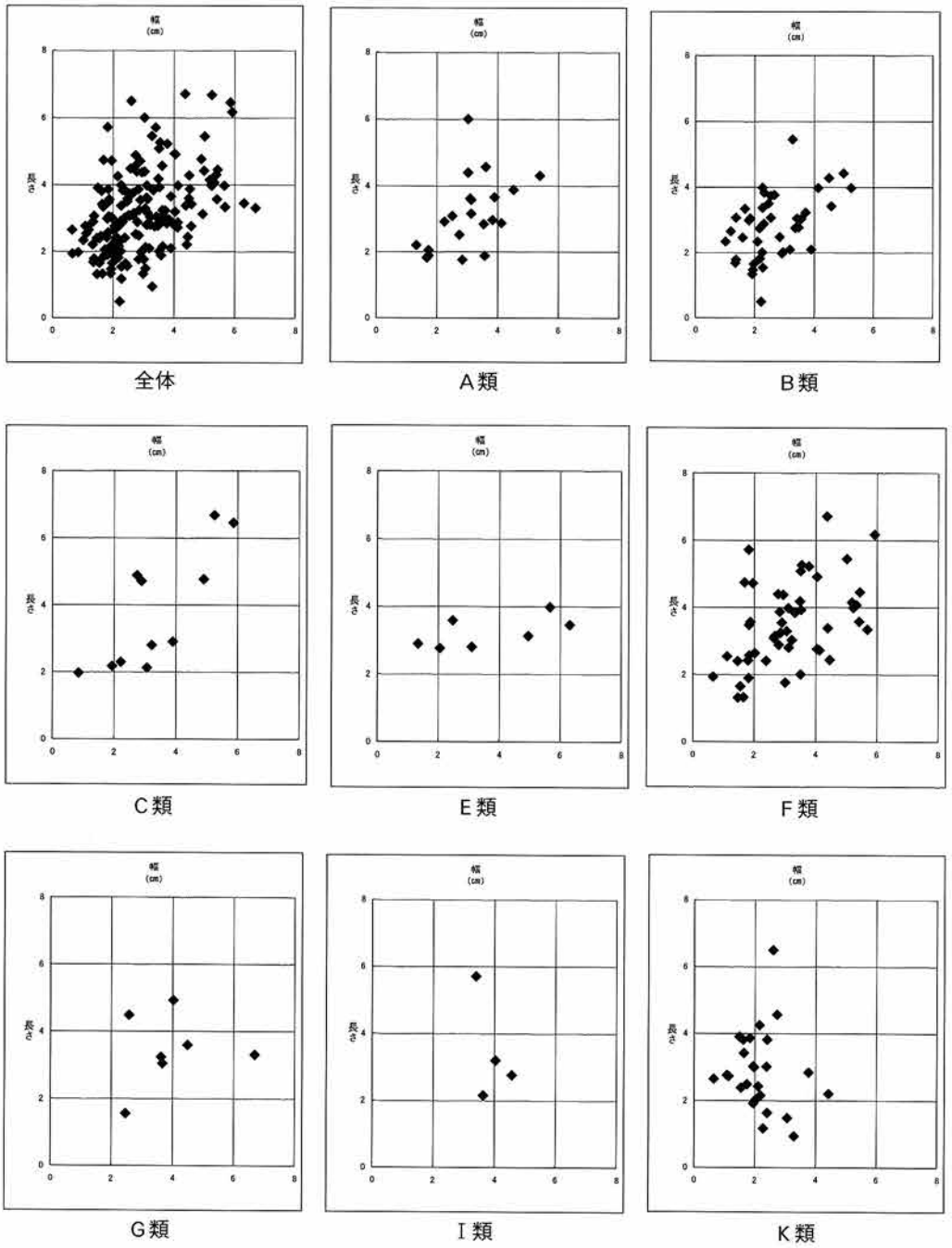
A類　刃部の二次加工は中～大型で急角度・浅角度の剥離が連続的に施されたもの（301・303）。スクレイパー・削器と呼称されるものに相当する。

B類　刃部の二次加工は小型で急角度・浅角度の剥離が連続的に施されたもの（302・304～306）。スクレイパー・削器と呼称されるものに相当する。

C類　刃部の二次加工に鋸歯状剥離が施されたもの（307）。鋸歯縁石器・鋸歯状石器と呼称されるもの。

D類　鋭利な先端部とそれに続く側縁に二次加工が施されたもの。本遺跡では確認出来なかった。

E類　縁部の一辺にノッチ状の抉りをもつもの（308・309）。刃部を内彎させ、ノッチ・抉入石器と呼称されるものである。



第11図　不定形石器の分類別長幅図

F類　縁部の一辺に小～中型の剥離が不連続に施されたもの（310～315・317）。他の石器に比べ素材確保時の形状を変えていない。刃部ライン・素材・二次加工が多様である。

G類　刃部二次加工は、中～大型の剥離が不連続に浅角度で施されたもの（316・318）。刃部ラインは直線状や外彎状を呈し、大型で厚手の素材を使用するものが多い。

H類　背面に極めて広い自然面を残す素材を用い、中型・小型で浅角度の不連続剥離が施されたもの。本遺跡では確認出来なかった。

I類　素材の端部に小型の剥離が連続的に施されたもの（319）。

J類　刃部の二次加工はないが、使用痕と推定される痕跡が認められるもの。本遺跡では確認出来なかった。

K類　両面から連続剥離または連続剥離状の加工が施されたもの。刃部平面形は波状、側面から見る（側面観）とジグザグ状を呈する（320～323）。両面加工（調整）石器と呼称されるものに相当する。石鏃の未製品もしくは失敗品の可能性があるものも含まれる（323）。

分類不可　二次加工があると推定されるが、人工的なものなのか判断しかねるもの。

分類別出土数と出土分布状況　総数172点出土した。分類別ではB類が42点、F類が50点と多い。地点別ではA地点で1点出した以外は、B地点からの出土である。トレンチ別では61Tが42点と最も多く、20Tが16点、62Tが15点と続く。遺構内から20点、遺構外から151点出土しており、遺構別では土坑から1点、ピットから6点、環濠から7点、縦掘2から6点出土した。

長さと幅　第11図参照。完形品と破損品の区別が困難なため、全点を対象とした。長さ幅共に0.3～7.0cm程度に分布するが、1.0～5.0cm程度に集中する。分類別では顕著な傾向を見出しにくいが、C類は大型のものが多いこと、E類は幅広なものが多いこと、F類は分布にバラツキが認められる。

厚さ　第10表参照。計測点数は長さと幅に同じ。0.3～2.4cmに分布するが、0.4～1.1cmに集中する。分類別では、B類・K類が0.8cm未満に集中すること、F類が1.3cm以上のものが多い点が特徴である。

第10表　不定形石器分類別厚さ

(cm)	A類	B類	C類	E類	F類	G類	I類	K類	不可	総計
0.4以下	4	11	3	1	3		1	7		30
0.41～0.5	3	8	1		5	1	1	4		23
0.51～0.6	1	4			9		1	2	1	18
0.61～0.7	3	4	1	1	3	1		3		16
0.71～0.8	2	6	2		7			7		24
0.81～0.9	3	1	2	2	5	2		1		16
0.9～1.0		3	1		4	1	1			10
1.01～1.10	2	3		1	3			1		10
1.11～1.20	2		1	1	2			1	1	8
1.21～1.3	1					1				2
1.31～1.4	1	1			3					5
1.41～1.5					1			1		2
1.61～1.7		1			1					2
1.71～1.8						1				1
1.91～2.0					2					2
2.01～2.10					2					2
2.31～2.40				1						1
総計	22	42	11	7	50	7	4	27	2	172

第11表　不定形石器分類別重量

(g)	A類	B類	C類	E類	F類	G類	I類	K類	不可	総計
2.0以下	5	14	3	2	9			10	1	44
2.01～4.0	2	9	1		7	1	1	8		29
4.01～6.0	3	7	1		10			2	1	24
6.01～8.0	3	4	1	1	3	2	2	5		21
8.01～10.0	4	3	2	1	4			1		15
10.01～12.0					2	2		1		5
12.01～14.0		1		1	4					6
14.01～16.0		2			3	1				6
16.01～18.0	3	1			2		1			7
18.01～20		1	1							2
20.01～22.0				1	1					2
24.01～26.0	1			1		1				3
26.01～28.0	1		2		3					6
34.01～36.0					1					1
36.01～38.0					1					1
総計	22	42	11	7	50	7	4	27	2	172

第12表　不定形石器分類別石材

	頁岩A	頁岩B	頁岩C	泥岩(中生代)	流紋岩	泥岩	黒曜石	合計
A類	20		1		1			22
B類	35	4	2		1			42
C類	8		1		2			11
E類	5	1	1					7
F類	35	5	3		1	6		50
G類	5	1				1		7
I類	4							4
K類	16	6	1	1		2	1	27
不可		2						2
合計	128	19	9	1	5	9	1	172

重さ　第11表参照。計測点数は長さと幅に同じ。重量は0.5～37ｇに分布し、2.0～10.0ｇ程度のものが多い。長さと幅、厚さと同様にＢ・Ｋ類は軽い傾向にあるが、Ｆ類は12.0ｇ以上のものが多い。

石材　第12表参照。他器種と同様に頁岩Ａ類が最も多く、128点（74.2%）を占める。その他では頁岩Ｂ類が19点（11.1%）、頁岩Ｃ類・泥岩が各９点（5.3%）、流紋岩が５点（2.9%）、泥岩（中生代）・黒曜石は各１点（0.6%）検出されたにすぎない。

細別毎でも頁岩Ａ類が圧倒的に多い点は変わりないが、Ｋ類では59.3%と若干、低い比率を示す。また、泥岩がＦ類で12.0%、頁岩Ｂ類がＫ類で22.2%、分類不可では100%を占める点が特徴となる。

（５）その他（324）

平板な素材の側縁に調整が施され、円盤状を呈するものが１点出土した。適切な名称は見当たらないため、その他の剥片石器とした。片側縁に急角度の剥離が施されている。長さは3.5㎝、幅3.4㎝で、長さ幅がほぼ等しく、円形に近い。厚さ1.5㎝、重さは25.2ｇで、石材は頁岩Ｂ類である。

（６）石核（325）

剥片剥離作業を行うための素材、剥片剥離作業中の残核、剥片剥離の残核である。総数３点出土した。325の上面は同一作業面に別々の打面から剥離が行われている。表裏面は上から剥離し、一部に下に押し付けられ、剥離したと考えられるか所がある。石材はいずれも頁岩Ａ類である。

（７）剥片類

石核から剥離された目的剥片及びその副産物として生じた剥片（屑片）、目的剥片や礫から石器を製作する際に生じた剥片（チップや屑片）である［高橋雄1992］。

出土数と分布状況　総数275点出土しており、全石器中の50%以上を占める。遺構内から34点、遺構外からは240点出土した。遺構別内訳は土坑から８点、ピットから５点、環濠から15点、縦掘から６点出土している。

石材　第13表参照。頁岩Ａ類が161点（58.5%）と最も多い。頁岩Ａ類が主体の点は剥片石器と同様であるが、頁岩Ｂ類が24.2%を占めている点、メノウや鉄石英（赤）など剥片石器の石材では確認できないものが数点含まれているのが特徴である。

（８）磨石類（326～336）

礫の表面に磨痕・凹痕・敲打痕の残るものを磨石類とした。総数15点出土した。

分類　五丁歩遺跡［高橋雄1992］に準拠し、使用痕の組み合わせにより細分した。出土点数が少ないためか、五丁歩分類のＢ・Ｃ類・Ｅ～Ｇ類に限られる。

Ａ類　磨痕のみ認められるもの。

Ｂ類　磨痕・凹痕が認められるもので、１点のみ出土した。326は磨痕が端部に認められることからＢ２類に相当する。

Ｃ類　磨痕・敲打痕が認められるもので、１点のみ出土した。328は磨痕が正裏両面に、敲打痕が端部と側面に認められることから、C1c類に相当する。

Ｄ類　磨痕・凹痕・敲打痕が認められるもの。

Ｅ類　凹痕のみ認められるもの。５点出土した（327・329～331）。

Ｆ類　凹痕・敲打痕が認められるもの。１点のみ出土した332は敲打痕が端部に認められることから、Ｆａ

第13表　剥片類の石材

頁岩Ａ	頁岩Ｂ	頁岩Ｃ	流紋岩	泥岩	メノウ	鉄石英	合計
161	66	16	7	19	4	2	275

類に相当する。

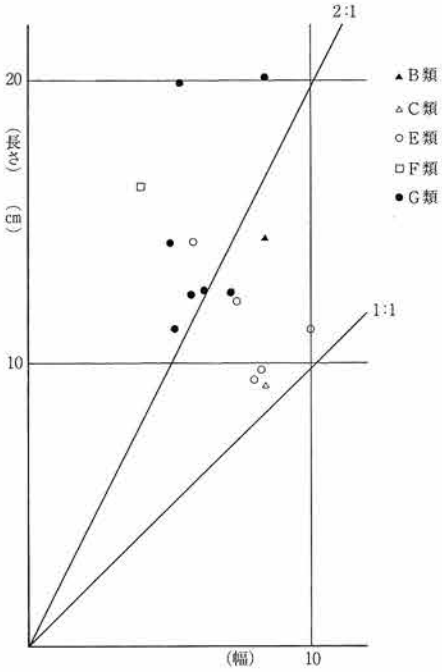
G類　敲打痕のみ認められるもの。５点出土している（333～336）。敲打痕が端部に位置するGa類（333～335）と、敲打痕が端部と側縁に位置するＧc類（336・337）がある

分類別出土数と出土分布状況　出土分布状況は総数15点を対象にする。分類別ではＧ類が７点と最も多く、Ｅ類が５点で次ぐ。Ｂ・Ｃ・Ｆ類は各１点出土したにとどまる。使用痕跡が単一のＧ・Ｅ類が12点と全体の80％を占め、使用痕跡が複合的に組み合わさるものが少ない傾向にある。

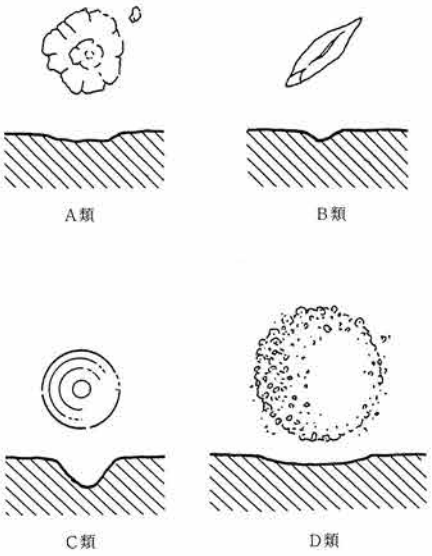
地点別ではＢ地点からの出土に限られ、18Tで５点（33.3％）、68Tで３点（20.0％）とややまとまる。遺構に伴うものは18TSK２出土の330のみで、遺構外出土が圧倒的に多い。

長さと幅・厚さ　第12図参照。破損しているものもあるが、全15点を対象とした。長さ9.2～20.1cm、幅4.0～10.0cmに分布する。出土数が少ないＢ・Ｃ・Ｆ類は顕著な傾向は見出しがたいが、Ｅ類とＧ類では長さと幅の比率で大きな違いがみられる。Ｅ類は１点（331）を除き、長幅比が２：１～１：１に分布するが、Ｇ類は１点（337）を除き４：１～２：１に集中しており、Ｅ類に比して縦長の傾向にある。これは端部で敲打を行うため、細長い形態の礫が選択されたものと考える。

厚さもほぼ同様な傾向が認められる。正裏面に凹痕が認められるＥ類は５点中４点が厚さ５cm以上であるのに対し、Ｇ類は2.5～4.5cmに分布が集中し、５cmを超えるものは１点にとどまる。



第12図　磨石類分類別長幅図



第13図　磨石類凹痕分類模式図
（長田2002より）

重さ　第14表参照。全点を対象とした。211～1,000ｇに分布する。分類別ではＥ類 が500ｇ前後に集中するものの、Ｇ類 は200ｇ程度と軽量なものから1,000ｇを 超えるものまで幅広い分布を示す。

第14表　磨石類の分類別重量

	200～300ｇ	301～500ｇ	501～700ｇ	701～900ｇ	900ｇ～
B2類					1
C1c類	1				
E類		3	2		
Fa類	1				
Ga類	1	2	1		1
Gc類	2				
合計	5	5	3		2

第15表　磨石類の分類別石材

	ハンレイ岩	フォルンフェルス	輝緑岩	花崗岩	砂岩	圧砕岩	砂岩（中生代）	ヒン岩
B2類	1							
C1c類			1					
E類		1	1	2	1			
Fa類			1					
Ga類	1		3			1		1
Gc類							1	
合計	2	1	6	2	1	1	1	1

石材　第15表参照。輝緑岩が６点（40.0%）と最も多く、ハンレイ岩・花崗岩が２点（各13.3%）で続くが、それ以外は各１点の出土である。分類別でも顕著な傾向は見出し難く、まとまりに欠ける。

Ｅ類の細別　長田友也氏の細分［長田2002］に準拠して凹痕を概観する（第13図）。凹痕Ａ類～Ｃ類が確認できる。一つの個体に複数類の凹痕が認められるものは１点（332）で、その他は１種類の凹痕に限られる。凹痕Ａ類のみが最も多く、３点（326・329・331など）、凹痕Ｂ類のみ（330）・凹痕Ｃ類のみが（327）が各１点確認できる。一つの個体に複数類の凹痕が認められる332はＡ類とＢ類が複合する。

（９）砥石（338～341）

大型の扁平礫を素材とし、研磨痕・磨耗痕が認められるものを砥石とした。５点出土した。小型の341は法量から磨石類との区分に課題を残すが、石材が砂岩であること、幅広い側縁にも磨面が認められることから砥石とした。

分類　使用痕を基に、以下のように分類した。

Ａ類　面状・帯状に砥面が広がるもの（338・339・341）。

Ｂ類　溝状に砥面が広がるもの（340）。

分類別出土数と出土分布状況　第２表参照。分類別ではＡ類が３点、Ｂ類が１点である。地点別ではＢ地点からの出土に限られるが、18Tで２点、20T・54Tで各１点出土した。出土点数は少ないものの、Ｂ地点最東の18・54Tに４点中３点が出土しており、磨石類と類似した分布傾向を示している。

長さと幅・厚さ　長さと幅は破損が著しいものを除く３点を対象とする。長さ17cm以上のもの（338・340）と、長さ13.0cm弱のもの（341）がある。前者は更に、幅が10cmに満たず、縦長の338と、幅13.4cmと幅広の340に分れる。厚さは全４点を対象とした。5.0～5.4cmに４点中３点がまとまる。角柱状に近い338は厚さ7.0cmと他に比して厚手である。

重さ　長さと幅と同様に３点を対象とした。大型品は1,149ｇ（340）、1,965ｇ（338）に対し、小型の341は755ｇであった。

石材　全５点を対象とした。砂岩が５点中３点と多い。おおむね他遺跡の石材と同様の傾向を示す。

（10）石錘（342）

扁平な小円礫の両端に、縄掛け部と思われる抉りが設けられたものを石錘とした。Ｃ地点40Tから１点出土した。長さ10.5cm、幅7.5cm、厚さ2.4cm、重さ265ｇで、石材はヒン岩である。縄掛け部は剥離により作出されている。表面は磨耗しており、縄掛け部と思われる抉り部分の剥離もやや鋭利さを欠く。

（11）環状石斧（343）

中心の貫通孔を持ち、円盤状を呈する礫素材のうち、周縁に刃部が付く磨製石斧を環状石斧とした。１点出土した。Ａ地点５Tからの出土である。径約11.4～11.6cm、厚さ3.4cmで、重さ517ｇ、石材はヒン岩である。

正面の貫通孔周辺にのみ隆帯をもつものである。刃部の作り出しは明瞭とは言い難いが、断面から両刃と判断した。日下部善己氏の分類［日下部1982］では、B1Ⅱa類に近い。研磨が十分ではないためか、表面の凹凸が目立つ。磨耗していることから研磨の方向は判別できなかった。

（12）小型特殊品（338～341）

ここまで報告した礫石器とは異なり、著しく小型のものを使用痕跡に係わらず、小型特殊品として一括した。使用痕跡を重視した区分では、磨石類に分類すべきものも含まれる。

分類　使用と思われる痕跡等から以下に区分した。総数５点出土しており、全て図化した。

A類　上下両端に敲打痕が残るもの（344）。

B類　擦痕・研磨痕が認められるもの（345～347）。

B１類　下端部に擦痕・研磨痕が認められるもの（345・346）。346は磨製石斧の可能性がある。

B２面　擦痕・研磨痕が認められるもの（347）。

C類　素材の一端に抉りが認められるもの（348）。

D類　剥離痕が認められるもの（426）。

分類別出土数と出土分布状況　A・C・D類は各１点、B類はB１類が２点、B２類が１点出土した。B地点からの出土が多いが、A地点からはD類が１点（426）、C地点からもC類が１点（348）出土している。B地点では32Tで２点（344・345）とまとまるが、それ以外は22T（346）、36T（347）からの出土である。包含層からの出土が多いが、346のみピットから出土した。

長さと幅・厚さ・重さ　全５点を対象とする。長さは5.1～9.4cm、幅は347の除き4.0cmに満たない。厚さは0.8～1.4cmと他器種に比して小型である。重さも、13.6～52.5ｇと軽量である。

石材　A類の344は黒色の安山岩、B１類（345・346）は泥岩、B２類（350）・D類（426）は粘板岩、C類（348）は輝緑岩である。C類の348を除き、その他の礫石器では使用されていない石材である。

備考　それぞれの個体に残る痕跡等について、若干の観察結果を記す。344は上下両端に敲打痕が残る。正裏面の中央付近に装着時の痕跡が認められる可能性を想定したが、肉眼では判断しえなかった。345・346の磨痕・擦痕は下端の両面に及ぶ。346の磨痕・擦痕に比して345のものは粗く、明瞭な凹凸として観察できる。347の磨痕・擦痕も345に近く、比較的明瞭に筋状の痕跡が観察できる。

（13）自然礫（349・350）

加工・使用痕跡は確認できなかったが、形態が特異なものを２点図化した。自然礫の報告例は少ないが、同じく県北部の元屋敷遺跡（縄文時代後・晩期）では特徴的な自然礫が報告されている［潮田2002］。時代は異なるが、元屋敷遺跡例と同様に何らかの意図をもつて持ち込まれたものと考える。349は平面形がT字形を呈し、円球状突起と扁平な裾部とからなる。男根に類似した形状を呈する。長さ11.4cm、重さ189ｇで、石材は泥岩である。350は平面形が長靴形を呈する扁平な礫である。長さ6.5cm、幅2.6cm、厚さ0.8cm、重さ14ｇで、石材は粘板岩である。いずれもB地点からの出土である。

（14）管玉（351・352）

２点出土した。いずれもB地点からの出土で、比較的隣接した20T（351）と31T（351）で検出している。351は縦方向に半割しているが、長さ2.2cm、幅0.9cmで、厚さは約1.8cmである。352は横方向に破損しており、現存長1.5cm、幅0.8cm、厚さ0.7cmである。弥生時代中期のものに比して太い。石材はいずれも緑色凝灰岩である。穿孔方向は判断しがたいが、片側穿孔の可能性がある。

5　ガラス製品（図面図版32－353～424、写真図版56・66）

ガラス小玉の完形品68点、破損（半損品）４点が出土した。全点を図化した。破損品は接合しないことから、72個体の可能性がある。いずれもA地点１TSK１から検出されている。色調はスカイブルーを基調とし、緑色味を帯びたものが数点ある。なお、ガラス成分・製作技法については、独立行政法人奈良国立文化財研究所の肥塚・田村両氏から分析していただいた（第Ⅵ章１参照）。ここでは形態や大きさの特徴を記す。

直径と厚さ　完形品68点を対象とする。0.5㎜単位で計測した。形状は正円を呈するものは少なく、楕円形のものが多い。ここでは長径を直径とした。68点中、3.5～6.0㎜に分布しており、主体は長径4.0㎜で32点（47.1%）、4.5㎜が15点（22.1%）、5.0㎜が13点（19.1%）、5.5㎜・6.0㎜が各３点（各4.4%）、3.5㎜が２点（2.9%）と最も少ない。

厚さは1.5㎜～4.0㎜に分布するが、3.0㎜が主体であり35点（51.4%）、2.0㎜が16点（23.5%）で次ぐ。直径との関係では大きなものが厚い傾向にあるが、直径5.5㎜と大きなものでも、厚さ2.0～2.5㎜と薄いもの（357・358）や、逆に直径4.0mと小さいものでも厚さ4.0㎜と厚いもの（387～389）がある。最も数量が多いのは直径4.0㎜、厚さ3.0㎜のもので18点と全体の26.4%を占める。

孔径　完形品68点を対象とする。孔最大径を孔径とし、0.5㎜単位まで計測した。1.0～2.0㎜に分布しており、2.0㎜が最も多く33点（48.5%）、1.0㎜が20点（29.4%）で次ぎ、1.5㎜が15点（22.1%）であった。大きさとの関連において、特に顕著な傾向は認められなかった。

重さ　完形品68点を対象とする。gを単位として小数点以下第２位まで計測した。0.04～0.15gまで分布しており、0.08gが最も多く20点（29.4%）で、0.06～0.10gに58点（85.3%）が集中する。おおむね大きさと重さは比例する。

形態の特徴　断面形から小口面が平坦でないものが多い。また外側縁が丸みを帯びるのに対し、孔側は直角に近いものが多い傾向にある。孔径は上下でおおむね等しいが、358のように異なるものが若干認められる。

第16表　ガラス小玉の長さと厚さ

厚さ(㎜) / 直径(㎜)	1.5	2.0	2.5	3.0	3.5	4.0	合計
3.5			1	1			2
4.0	1	4	3	18	3	3	32
4.5		8		6	1		15
5.0		3	1	7	1	1	13
5.5		1	1		1		3
6.0				2		1	3
合計	1	16	6	34	6	5	68

第17表　ガラス小玉の長さと孔径

孔径(㎜) / 直径(㎜)	1.0	1.5	2.0	合計
3.5	1		1	2
4.0	9	9	14	32
4.5	4	3	8	15
5.0	5	1	7	13
5.5		1	2	3
6.0	1	1	1	3
合計	20	15	33	68

第18表　ガラス小玉の長さと重量

重さ(g) / 直径(㎜)	0.04	0.06	0.07	0.08	0.09	0.10	0.11	0.12	0.13	0.14	0.15	合計
3.5		2										2
4.0	1	3	9	9	5	5						32
4.5		3	3	8	1							15
5.0		1	1	3	3	1	2	2				13
5.5			1				1		1			3
6.0							1			1	1	3
合計	1	9	14	20	9	6	4	2	1	1	1	68

第Ⅵ章　化学分析

1　山元遺跡出土のガラス小玉について

肥塚　隆保・田村　朋美
（奈良文化財研究所　保存修復科学研究室）

A　はじめに

古代におけるガラス小玉の材質および製作技法に関する情報は、ガラス小玉の考古学的研究を進めるうえで非常に重要である。山元遺跡出土のガラス小玉は、弥生時代後期後半の資料と推定されており、当時代の新潟県におけるガラス小玉の出土例は少なく、西日本との交流を示す重要な資料として注目されている。本調査では、山元遺跡出土ガラス小玉69点について材質および製作技法を明らかにすることを目的として調査をおこなった。以下その調査結果について報告する。

B　調査の方法

（1）顕微鏡観察

山元遺跡出土のガラス小玉について、製作技法や表面の風化の状態を調査するため、落射光および透過光による実体顕微鏡下で観察をおこなった。本調査では、とくにガラス小玉に含まれる気泡の配置や形状、ガラス玉表面および孔壁面の状態および形状など、製作技法を示す痕跡に着目して観察をおこなった。

（2）ＣＲ法

山元遺跡出土ガラス小玉の孔の形状や気泡の状態などの内部構造を調査するとともに、鉛ケイ酸塩ガラスとアルカリケイ酸塩ガラスを識別するため、ＣＲ（Computed　Radiography）法による調査をおこなった。鉛ケイ酸塩ガラスはＸ線吸収の度合いがアルカリケイ酸塩ガラスに比べてきわめて大きいため、透過画像の濃淡から両者を識別することができる。なお、ＣＲ法は、従来のフィルムにかわりイメージングプレート（I.P.）を検出系に利用する方法である。使用した装置はマイクロフォーカスＸ線拡大撮像システム（富士フィルム社製μFX-1000）、イメージングアナライザー（富士フィルム社製BAS-5000）、I.P.はSR2025である。撮影条件は電圧45kV、電流45μA、露出時間45秒、実効焦点８μmである。

（3）ＡＲ法

山元遺跡出土ガラス小玉について、アルカリケイ酸塩ガラスであるカリガラスとソーダ石灰ガラスを識別するため、ＡＲ（Auto　Radiography）法による調査をおこなった。ここで適用したＡＲ法とは、従来のフィルムに比べて非常に感度の良いイメージングプレート（I.P.）を用いて、遺物自身から放射される微弱な放射線を検出する方法である。カリガラスは一般に酸化カリウムを十数％含有しており、ソーダ石灰ガラスに比べて非常に強い放射線（^{40}Kに由来）を放出しているため、ＡＲ法によって得られた画像の濃淡、つまり放射線量から両者を識別する方法である。測定の方法は、直接I.P.上にガラス小玉を置いて、外部

からの放射線を遮蔽するため鉛ボックス内に設置する。さらに鉛からの放射線を遮断するため、I.P.の周辺を銅版で囲った。この状態で１週間暴露した後、読み取り装置でデータ処理し、画像化した。比較試料としてBCR-123A（カリウム鉛ガラス）、JG-1a（標準岩石資料花崗岩）、JB-1b（標準岩石資料玄武岩）を用いた。なお、I.P.はSR2025を使用した。

（４）蛍光Ｘ線分析

山元遺跡から出土したガラス小玉の化学組成を調査するため、エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置を用いて測定をおこなった。今回は、予備調査としてテクノス社製の蛍光Ｘ線分析装置をもちいて69点中61点を測定したのち、本調査として、全資料中10点（№１～No№10）を堀場製作所製顕微鏡蛍光Ｘ線分析装置をもちいて測定した。なお、本調査では、資料表面の風化層を取り除いて測定をおこなった。測定方法は、資料と検出器の間を真空状態とし、空気による二次Ｘ線の吸収をできるだけ少なくする方法によった。Ｘ線管球はロジウム（Rh）、管電圧は30kV、電流は1.0mA、Ｘ線照射径100μm、計数時間は600秒である。測定の結果は、検出された元素（酸化物）の総和が100％となるように規格化し、酸化物重量百分率で表示した。非破壊測定法では、風化や形状等が影響して、資料内部の正確な化学組成を知ることはできないが、大まかなガラスの材質を判断することは可能である。

Ｃ　調査結果

（１）顕微鏡観察結果

ガラス小玉の表面には著しい風化は認められないが、ガラス光沢はやや失われている。内部は健全な部分が残存している。ガラス内部には多数の気泡が認められ、孔に平行に引き伸ばされている様子が認められた。また、ガラス内部には孔と平行に直線状に配列した気泡が観察された（第14図）。

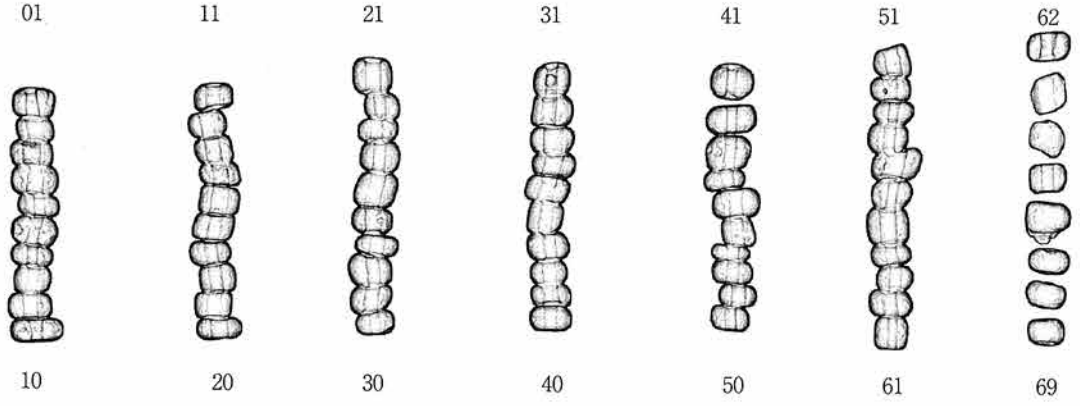
第14図　顕微鏡写真

（２）ＣＲ法による調査結果

ガラス小玉の内部には顕微鏡観察と同様に、大小の気泡が認められた（第15図）。孔は直線状である。また、鉛ガラスにみられるようなＸ線の吸収の大きい資料は認められず、いずれもＸ線の吸収は小さい。

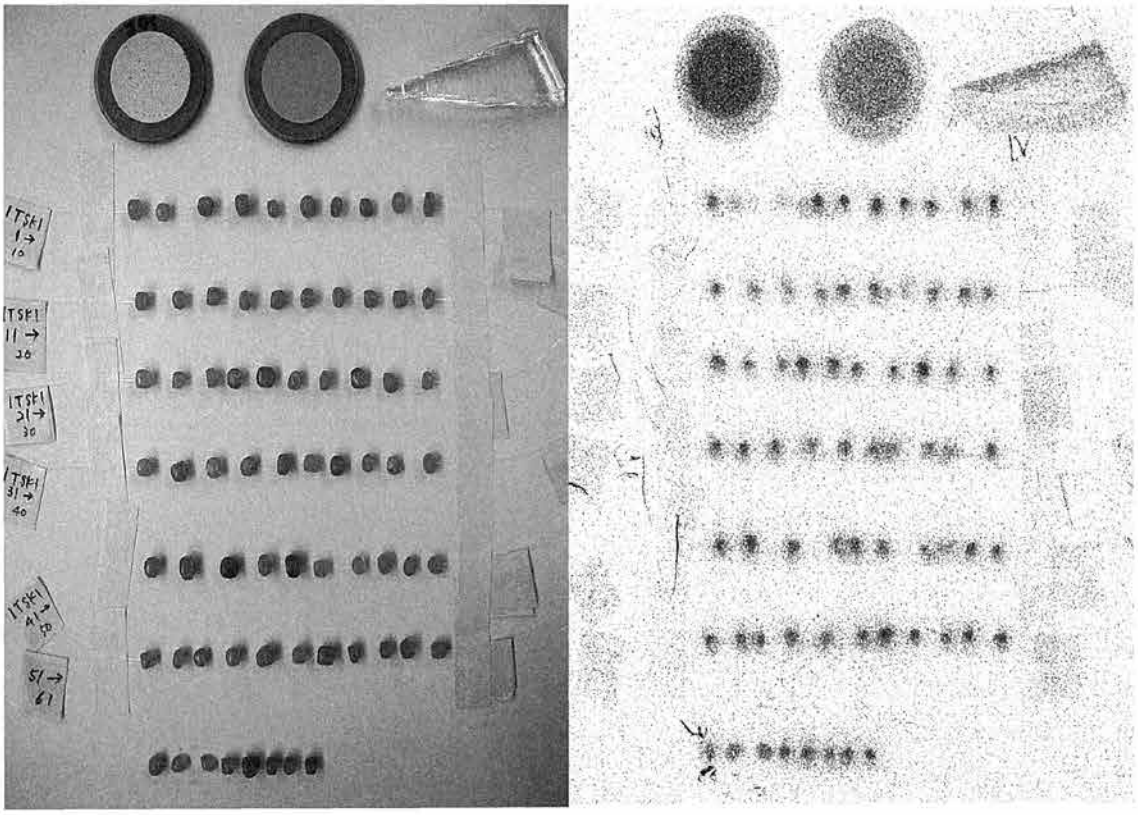
（３）ＡＲ法による調査結果

山元遺跡出土のガラス小玉を設置した部分は、№２、№３の資料を除き、JG-1aと同等の色調を示して



第15図　ガラス小玉のCR画像からの画像強調処理

いる（第16図）。このことは、これらの資料から放出される放射線量が多いことを示しており、カリガラスであると推定された。№２、№３については放射線量が少なく、ソーダ石灰ガラスの可能性が考えられたが、測定中に何らかの影響で設置場所がずれた痕跡が認められることから、材質の推定に疑問が残った。



第16図　ガラス小玉のＡＲ画像

（４）蛍光Ｘ線分析結果

予備調査の結果、山元遺跡出土のガラス小玉からは、Al_2O_3、SiO_2、K_2O、CaO、TiO_2、Fe_2O_3、CuO、PbOなどが検出され、主成分はいずれもSiO_2、K_2Oであった。Na_2O、MgOなどについては検出・定量限界以下であった。従来の研究でもアルカリケイ酸塩ガラスについては、Na_2O、MgO、K_2Oなどのアルカリ金属、アルカリ土類成分が風化により溶脱することが報告されている。本調査の結果は第19表に示した。測定の結果、ＡＲ法で材質の推定に疑問の残った資料も含めて、すべてカリガラスであることが明らかとなった。組成に大きな差異は認められないため、ほぼ同じ材質で製造されたものと考えられる。

ガラス小玉の色調に着目すると、山元遺跡出土のガラス小玉の色調は淡青色である。古代のガラスの多くは金属イオンによって着色がなされたといわれている。今回測定した資料は、CuOを0.9%－1.6%含有しており、銅イオンが主な着色因子であると考えられる。

第19表　蛍光X線分析結果

No	重量濃度（w%）							
	Al_2O_3	SiO_2	K_2O	CaO	TiO_2	Fe_2O_3	CuO	PbO
1	5.3	80.0	12.5	0.34	0.13	0.54	1.0	0.26
2	4.7	78.0	15.0	0.43	0.12	0.53	1.0	0.21
3	4.6	79.2	12.5	0.45	0.14	0.56	1.6	0.41
4	5.0	75.5	14.9	1.03	0.13	0.51	1.3	0.34
5	4.4	72.4	14.0	0.59	0.10	0.45	1.1	0.28
6	5.0	77.2	13.6	0.42	0.11	0.49	1.4	0.32
7	4.9	76.0	13.2	0.47	0.12	0.53	1.5	0.30
8	4.7	77.5	13.5	0.40	0.11	0.47	1.4	0.42
9	5.3	78.8	13.6	0.32	0.11	0.54	0.9	0.26
10	4.1	76.9	16.1	0.41	0.10	0.56	1.3	0.23

D　まとめ

以上の調査結果をもとに、山元遺跡出土のガラス小玉の製作技法および材質についてまとめた。

山元遺跡出土のガラス小玉は、引き伸ばし法によって製作されたカリガラスであることがわかった。カリガラスは弥生時代の遺跡から多数出土しており、その化学組成は今回の結果ともほぼ一致している。カリガラスは弥生時代前期末から中期初め頃の北部九州に出現し、弥生後期になると多量に流通する。弥生後期には九州から関東平野にかけて一度に大量のカリガラス製小玉を出土する例が認められる。また、カリガラスは色調から淡青色を呈するものと青紺色を呈すものに大別され、弥生時代においては、青紺色のカリガラスは九州を中心として分布し、淡青色のカリガラスは畿内を中心とする地域に多くみられるという特徴がある。今回、これまでガラス小玉の出土例の少ない新潟県において、69点もの淡青色のカリガラス製小玉がまとまって出土したことは、当地域と畿内を中心とした地域との交流をしめす重要な手掛かりとなるものと考えられる。

2　山元遺跡の放射性炭素年代

吉田　邦夫（東京大学総合研究博物館）

A　年代測定資料

2006年６月２日に現地で測定用資料を採取した。主として環濠および縦堀の埋没時期を特定することを目的として、発掘時にマークされ残置されていた木炭の内から、適切なものを採取して測定資料とした。木炭13点と周辺土壌１点を採取した。

また、30T濠５において外面に炭化物が付着した弥生土器片、および同層でこれに近接した続縄文土器片を採取した。続縄文土器片は断面が黒色を呈していたので、土器焼成時に燃焼せず取り残された炭素を取り出し、年代測定を行う意図のもとに、採取した。

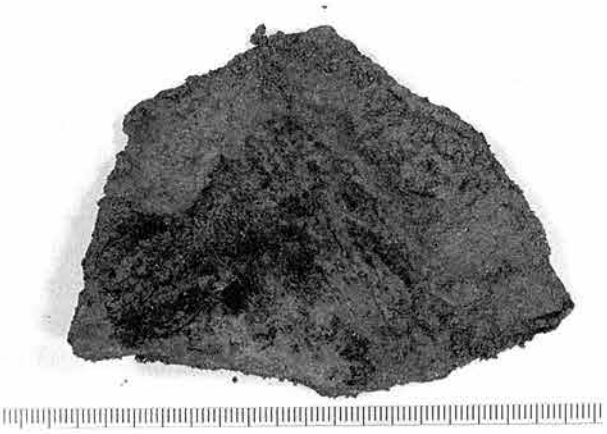
B　放射性炭素年代測定

採取した資料の内、木炭５点と土器付着炭化物１点、土器片１点の測定を行った（第20図）。

（1）測定試料の調製

木炭５点について通常の方法で年代測定用試料を調製した。まず、付着している土壌を取り除き、適量（30～40㎎）の木炭をメスで切り出した。次に、埋蔵中、および発掘後に付加した汚染物質を除くために、ＡＡＡ（酸－アルカリ－酸）処理を行った。資料に付着した炭酸塩、土壌有機物であるフルボ酸を除去するために、１Ｍ塩酸を加え80℃で13時間加熱した（通常は、数時間加熱）。ミリポア水で十分洗浄した後、アルカリ溶液により主として土壌に由来するフミン酸を除去した。今回の資料は、かなりしっかりした木炭だったが、念のため希薄溶液から徐々に濃度を上げて処理を行った。80℃に加温して、0.001M水酸化ナトリウム水溶液で10分、0.01M水溶液で30分、0.1M水溶液で１時間、最後に1.2M水溶液で１時間アルカリ処理を行った。ミリポア水で洗浄した後、最後に、再び１Ｍ塩酸を加え80℃で１時間加熱し、アルカリ処理中に吸収した二酸化炭素から生成した炭酸塩を除いた。試料は洗浄、乾燥した後、秤量した。化学処理後の回収率は、№04の13％を除いて38～58％であった

土器付着炭化物は土器片（約75×65㎜）の表面が一部剥離した近傍に付着していた（第17図）。炭化物が付着していたのは外面で、内面には全く付着していなかった。土器片は外面を上にしてほぼ水平の状態で出土した。見た目でも炭化物であることは確実と思われたが、念のため、一部を採取して元素分析計（Euro EA3000HT、Euro Vector社）を用いて炭素含有量を測定した結果、約32％であることがわかった。比較的、土壌に覆われていない部分、35×20㎜程度をメスではぎ取った。それでも表面の土壌を取り去ることが出来なかったので、土壌を含めて質量は158㎎であった。炭化物の場合



第17図　資料15（30T濠５の続縄文土器）（後北Ｃ１式）

は、状態によってアルカリ溶液に対する溶解性が大きいことがあるので、希薄溶液を用いて注意深く処理しないと、試料がすべて失われてしまう。今回は、１M塩酸で80℃、８時間処理した後、0.0005M水酸化ナトリウム水溶液で80℃、10分、0.001M水溶液で10分処理をして終了した。その後の処理は、木炭と同様に行った。

一方、続縄文土器片については、十分乾燥させた後、内部黒色部分が実際に炭素を含んでいるかどうか検討した。還元状態の鉄やマンガン化合物が存在したりすることによって、あたかも炭素が残っているかのような黒色を呈することがあるからである。元素分析計によって炭素含有量を測定したところ、30.4%、22.8%、3.6%の値が得られた。試料採取場所によって大きく値が異なったが、最後の値は、胎土に含まれたやや大きめの鉱物の影響によるものと思われる。両側表面の黄褐色胎土の部分、厚さ約１㎜を精密グラインダーで削り取り、黒色部分の適量（10×10㎜、厚さ４㎜程度）を切断し、メノウ乳鉢ですりつぶし、915㎎を採取した。ＡＡＡ処理は、付着炭化物と同様に行ったが、アルカリ処理は0.001M水酸化ナトリウム水溶液で80℃、１時間、0.005M水溶液で１時間とした。回収率は70.8%であったが、処理後の炭素含有量は3.2%で、大部分の炭素が溶出した。

ＡＡＡ処理をした試料は石英ガラス管に入れ、酸化銅（Ⅱ）１ｇを加え、真空にしてバーナーで封じきった。またこの時、酸化により同時に発生する硫黄酸化物を除去するための銀箔を入れておく。このガラス管を、電気炉に入れ、500℃で30分、850℃で２時間加熱し、資料中に含まれる炭素をすべて酸化し二酸化炭素にした。このようにして得られた二酸化炭素を精製し、鉄触媒の存在下で水素によって還元してグラファイト－鉄混合試料を生成し、ＡＭＳ測定を行う。資料の酸化、二酸化炭素の精製、還元、測定試料の充填などの操作は、年代測定室の定法に従って行った［吉田　2004］。なお、酸化還元に用いるガラス管は、すべて石英ガラス管に変更している。また、二酸化炭素の不純物を除去する過程で、液体窒素－エタノール混合物（エタノール；融点－114.5℃）を使用した精製の後に、液体窒素－ペンタン混合物（ペンタン；融点－129.7℃）を用いて、主として硫黄酸化物の完全除去を図っている。

（２）測定

測定は、東京大学大学院工学系研究科原子力国際専攻のタンデム加速器研究設備に設置されているＡＭＳ装置を用いて行った。加速電圧4.5000 MVで、高速逐次入射法（ジャンピング法）により、荷電変換後のC^{4+}を用いて$^{14}C/^{12}C$比および$^{14}C/^{13}C$比を測定した（^{14}Cの測定時間の合計は600秒）。この測定を５回行う。各資料についての５回の測定値のばらつきが統計誤差内（x^2検定：５%有意水準）にあるときは、^{14}Cの総計数値に基づく測定値の統計誤差と、$^{13}C/^{12}C$比変動の標準偏差を合算して求めた値を誤差としている。

標準試料は、米国NISTシュウ酸（SRM4990C；Oxalic Acid Ⅱ、HOxⅡ）とANUスクロース（IAEA C－6）を併用した。試料調製を含めたAMSシステムのバックグラウンドは、国際原子力機関（IAEA）発行の標準試料C_1（marble；大理石）から作成した測定試料を用いて、推定した。通常は、高純度試薬グラファイト粉末（99.9999%、－200mesh、Johnson　Matthey社製）を高純度鉄粉末と混合し、バッググラウンド試料として用い測定している。今回の測定では、その値は$^{14}C/^{12}C=4.5\times10^{-16}$で、約61,400BPに相当する。すべての測定試料の測定値から、このバックグラウンド値を差し引いて、年代値を算出した。

（３）測定年代

年代測定結果を第21表に示す。半減期はLibbyの値5568年により年代を決定した。BPは1950年を基準として何年前かを示している。年代値に付記した誤差は、標準偏差（1σ：シグマ）に相当する年代で示した。

資料３は、古木効果を考慮しても古すぎる値を示している。この資料は、36トレンチの濠１直上層の上

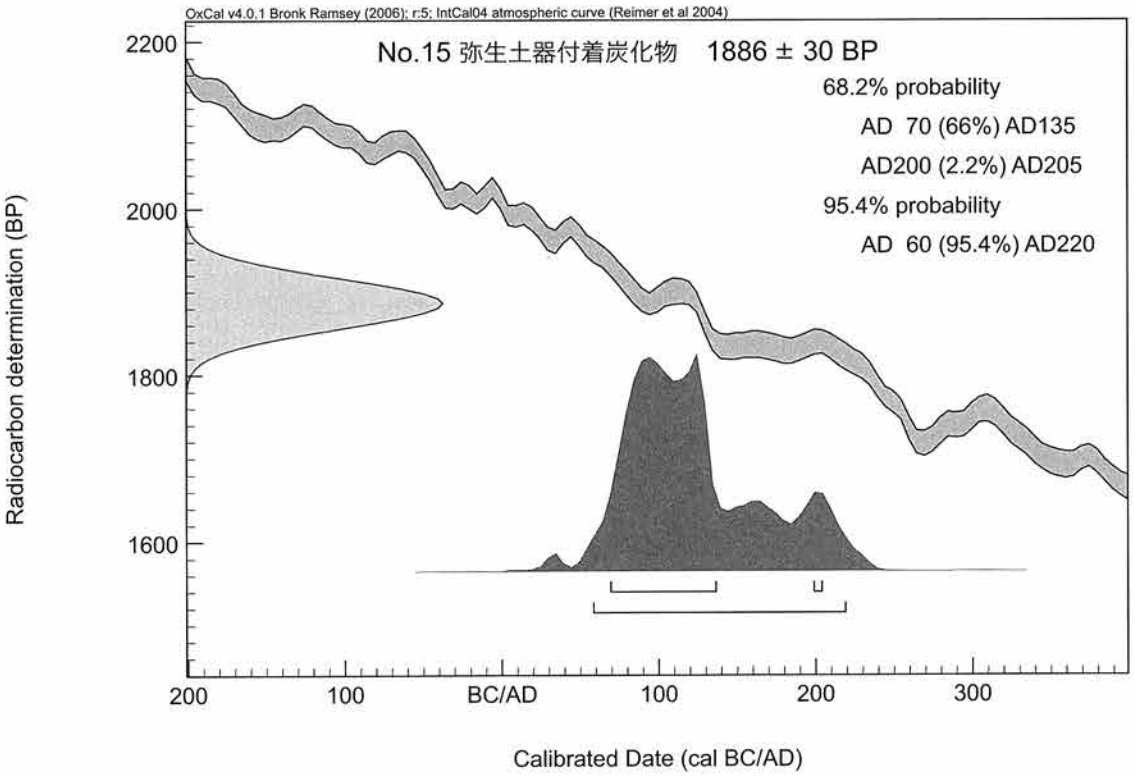
に位置するⅢａ層から採取したものである。トレンチを開けるときの層序関係は不明であるが、濠の掘り返しなどによって下層のものが露出した可能性もある。

また、資料16については、繊維土器に含まれる繊維に由来すると考えられる炭素を年代測定する場合に通常使用される水酸化ナトリウム水溶液の濃度（~0.05M）に比して、十分の一の濃度で炭素含有量が数分の一に減少してしまうことから、当初含まれていた炭素成分は可溶性のもので、雨水または地下水の浸透で上下の土壌から吸収された疑いが強いと考えられる。測定を行ったが、約3700BPの値が得られたので、本報告からは除外した。

（４）暦年較正年代

試料16を除いた６点について、較正プログラムOxCal4.0.1［Ramsey2006］を用いて暦年較正した。

弥生土器付着炭化物、資料15を例に較正方法を確認する（第18図）。左の縦軸に乗っている山が、測定によって得られたC－14年代値とその前後の各年代値についての確率を表している。年代測定値は１σの誤差を付けて報告をするように取り決められており、1886±30BPという形式で書き表すが、図のような確率分布を数式で書くときの約束事である。すなわち、中央値1886BPから±30BPの部分で山全体の面積の68％を占め（1σ＝信頼率68％）、また２σ、つまり２倍の誤差、±60BPまでの部分で95％を占める。数式だけを見ると誤差の範囲がすべて均等な意味を持っているように思ってしまうが、信頼率は中央ほど高いのである。左上から右下に走るギザギザの二つの線が、誤差（±1σ）の範囲を示した較正曲線である。＋1σと－1σの線で示す。Ｃ－14年代測定値で、中心値1886BPが確率分布の山の頂点にある。ここから右に水平に線を延ばして、較正曲線と交差した点から垂直に線を下ろして較正年代とするときに、最も確率の高い点になる。このようにして、左側の山の高さに相当する確率の大小を較正曲線と交差した点で垂直に下ろして横軸上に転写しながら、順次、確率を足しあわせていくと、幅が広がった灰色の山が得られる。も



第18図　№15弥生土器付着炭化物

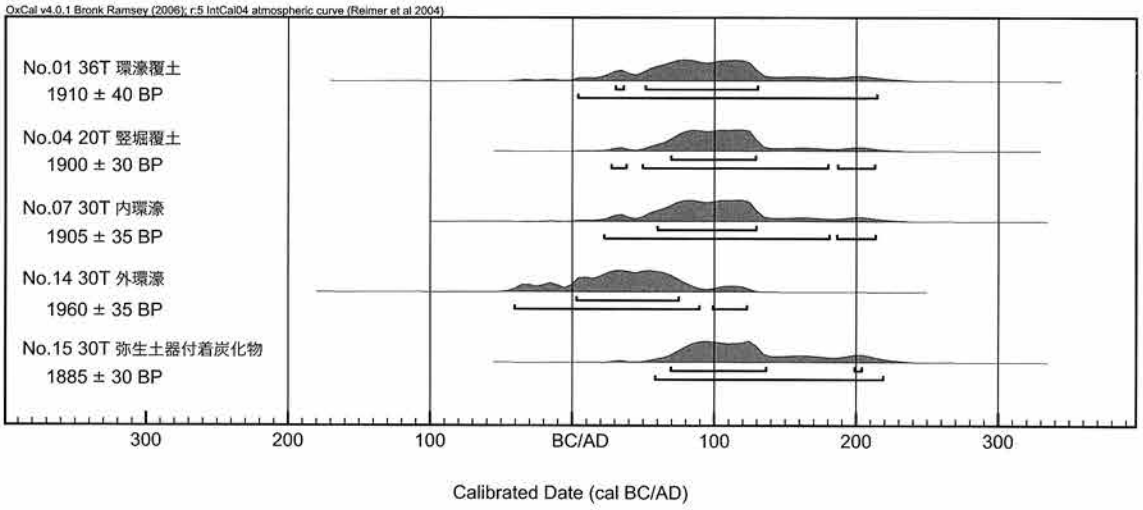
第20表　資料の化学処理

資料名	質量 ピックアップ (mg)	質量 ＡＡＡ処理後 (mg)	回収率 (%)	酸化使用量 (mg)	CO_2 生成量 (Cmg)	CO_2収率 炭素含有量 (%)	CO_2使用量 (mg)
炭化物資料 15 土器付着炭化物	158	92	58.4	5.2	2.0	38.39	1.1
炭化物資料 16 縄文土器片	915	648	70.8	106	3.3	3.16	1.0

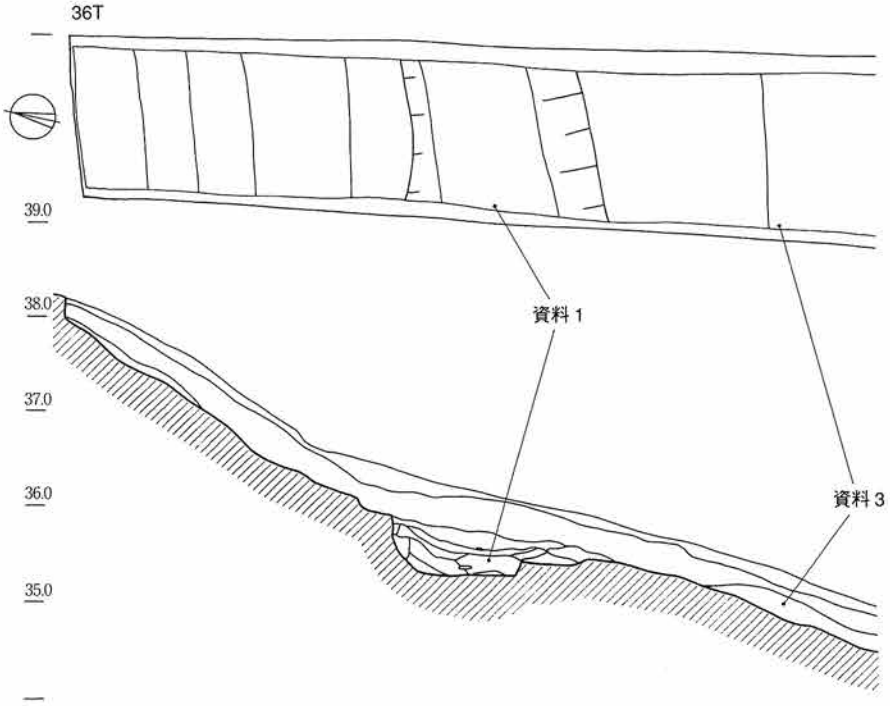
第21表　年代測定値と較正暦年代

資料番号	測定値 BP±1σ	$\delta_{13}C$ ‰	測定番号 TKa-	較正暦年代 ±1σ範囲（信頼率）	cal BC/AD ±2σ範囲（信頼率）
資料1　木炭	1910 ± 40	-19.9*	13922	AD 30 - AD 35 (2.6%)	AD 5 - AD 215(95.4%)
36T　濠1覆土				AD 50 - AD 140(65.6%)	-
資料3　木炭	3125 ± 40	-26.2*	13923	1450BC - 1380BC (59.0%)	1495BC - 1305BC (95.4%)
36T　Ⅲa層覆土				1335BC - 1320BC (9.2%)	-
資料4　木炭	1900 ± 30	-26.4*	13925	AD 70 - AD 130(68.2%)	AD 30 - AD 40 (1.9%)
20T竪堀2覆土					AD 50　AD 180(88.7%)
					AD 190　AD 215 (4.8%)
資料7　木炭	1905 ± 35	-24.3*	13926	AD 60 - AD 130(68.2%)	AD 25 - AD 180(90.3%)
30T濠4覆土					AD 185　AD 215 (5.1%)
資料14　木炭	1960 ± 35	-26.8*	13927	AD 5 - AD 75(68.2%)	40BC - AD 90(88.9%)
30T濠5覆土					AD 100　AD 125 (6.5%)
資料15　炭化物	1885 ± 30	-27.5*	13928	AD 70 - AD 135(43.2%)	AD 60 - AD220 (95.4%)
30T濠5				AD 200 - AD 205 (2.2%)	-
弥生土器付着炭化物					

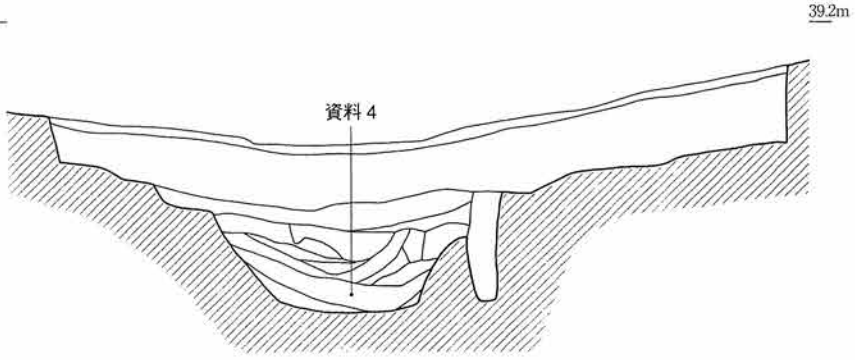
＊タンデム加速器による測定値



第19図　分析資料の年代

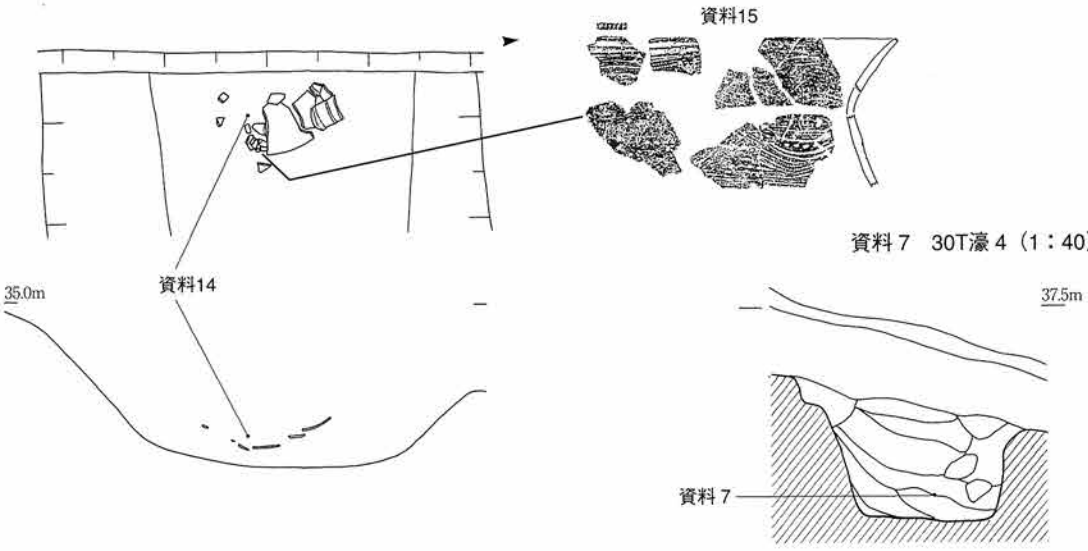


資料1・3　36T（1：80）



資料4　20T縦堀（1：40）

資料14・15　30T濠5（1：30）



資料7　30T濠4（1：40）

第20図　測定資料の採取地点

ちろん、較正曲線にも分布の広がりがあるので、それらの確率の大小も加味されることになる。横軸に横たわる灰色の山が、較正年代値の確率分布曲線である。全体の山の面積（確率１）に対して、山の高いところから順に集めて68％の面積を占める範囲が1σ、つまり信頼率68％の較正年代範囲となる（山の下、上段のカッコ）。95％の部分をとれば、2σの較正年代範囲となる（下段のカッコ）。それぞれの数値年代範囲は右上に表記してある。なお、ここでは、暦年較正に使用する測定値は丸める前の値とし、較正した年代は誤差が50BP未満の場合、５の位までに丸めるように設定してある[1]。cal AD（calibrated AD）は、このように暦年較正曲線を用いて得られた較正暦年代である。

較正暦年代をみると66％の信頼率で、cal AD70～135となり、95％信頼率で考えるとcal AD60～220と新しい年代へと範囲が拡がる。この１点の測定値だけだと、AD150前後の山とAD200前後の山を捨てるのは難しいが、いくつかの資料の年代値を組み合わせると、おおよその状況が見えてくる。第19図に、資料３を除いた５資料の較正暦年代を示している。資料１、４、７と併せて考えると、AD150～200にかかる可能性は低い。４資料が同時代であるとすれば、cal AD50～130の範囲を考えるのが妥当である。

30トレンチで土器片が出土した近傍の同層から採取した資料14は、これに比べ数十年古い傾向を示している。濠５の埋没時期が古かったという可能性もあるが、土器付着炭化物の年代から見て考えにくい。古木効果の疑いもあるが、濠５で採取した木炭はこの資料のみであるので、残念ながらこれ以上の検討は出来ない。

これらの結果から、濠５の埋没時期の問題は残るが、本遺跡の環濠および竪堀の埋没時期は、ほぼ同じと考えられ、cal AD100を中心としたcal AD50～130の時期である蓋然性が高い。

引用・参考文献

Ramsey, C. B.　2006　OxCal ver. 4. 0. 1

吉田邦夫　　2004　「火炎土器に付着した炭化物の放射性炭素年代」『火炎土器の研究』　同成社

[1] 放射性炭素年代値（Conventional Radiocarbon Age；BP）を報告するとき、誤差が50年以上100年未満の場合、測定値、誤差ともに四捨五入して10の位で丸めることになっている。また、誤差が50年未満の場合は、５を単位として丸めるように推奨されている。

第Ⅶ章　ま　と　め

1　出土遺物について

A　石器について

本遺跡から出土した石器（剥片類を含む）・石製品は518点に及ぶ。ここでは阿賀北地域を中心に、石器組成について若干の比較を行う。

弥生時代の石器は全国的な集成が進み［国立歴史博物館1997など］、後期には石鏃が残存するものの、剥片石器が減少することから鉄器化が進んだとの解釈が提示されている［松木1995・禰宜田1998など］。本県では、石川日出志氏［石川1997ｂ］・立木宏明氏［立木2001ｂ］などが弥生時代の石器の様相を示している。このうち石川氏は、弥生Ⅴ～Ⅵ期の北陸系土器を出土する遺跡で石器が見られないとし、「鉄器化が完了したものと判断できる」とした［石川1997］。一方、同文において石川氏は、弥生Ⅴ期で天王山系統の土器が出土する新潟市六地山遺跡では石鏃・石錐などが伴うことから、鉄器化の普及度が北陸系土器分布圏と異なることを指摘しているようにみえる。土器の系統毎で石器組成についても、違いがある可能性もあろう。東北系土器が主体の本遺跡との比較のため、県内の弥生時代中・後期の遺跡で石器組成の判断が付きやすい遺跡を第21図、第22・23表に示した。第23表の後期の時期区分は、滝沢2005（Ｐ.61第24表参照）による。石川氏が指摘するように「石器の認定や報告の方法が一定でない」こと等が大きな問題となる[1]。ここでは立木宏明氏の方法［立木2001ｂ］を基本に、原報告を元に種別を表示し、時期や土器系統別に比較を行う。これに加え、高地性集落と低地集落の石器組成を比較して、武装の強化具合・生業的側面［禰宜田2002ほか］を概観する。

ａ）阿賀川流域及び阿賀北の様相

山元遺跡では石製品を含めて518点出土しているが、剥片類を除く種別では不定形石器が最も多く、石鏃がこれに次ぐ。礫石器では磨石類が最も多い。これは、古津八幡山遺跡［渡邊・立木ほか2001・2004］とほぼ共通した様相である。剥片石器で石鏃が卓越する点は各遺跡で共通しているが、中期で低湿地に位置する道端Ⅴ遺跡［前川・沢田ほか2006］や、中期主体で砂丘上に位置する長松遺跡［田辺1991］、中～後期で低湿地に位置する中曽根遺跡［青木・鈴木ほか2005］で磨石類が少ない点は重要と考える。不定形石器・磨石類の多さは、集落の存続期間や立地・定住の度合い等にかかわる可能性がある。

ｂ）北陸系中期主体の遺跡との比較

柏崎平野では下谷地遺跡［高橋ほか1979］・小丸山遺跡［品田ほか1985］・箕輪遺跡Ⅰ［小野塚ほか2002］がある。このうち下谷地遺跡・箕輪Ⅰ遺跡は管玉生産が行われており、両極石器・砥石などが高い比率を示している。これら玉作り関連資料を除くと、石鏃・磨石の多さが目を引く。

---

[1] 第22・23表に掲載した遺跡は、弥生時代の遺跡であること、縄文土器が出土していても弥生時代の土器に比して極端に少ないことから、仮に縄文時代の石器が混入していても石器組成に大きな変更を要しない可能性が高いと判断したものである。比較資料は山元遺跡と同様に、弥生時代後期を主体とする遺跡に加え、時期的な変遷を検討するために、道端Ⅴ遺跡［前川・沢田ほか2006］など中期例も示した。ただし、遺跡毎で調査の状況は異なっており、例えば滝ノ前遺跡は工事中に見つかった緊急の発掘調査［関1972］、砂山遺跡は発掘当時の記録が残っていない。また、六地山遺跡や吹上遺跡は報告分のみをカウントしており、実際の出土数は明確でない等の制約もある。

c）後期の北陸系土器主体の遺跡との比較

頸城の裏山遺跡［小池ほか2000］、下馬場遺跡［尾崎2006］がある。剥片石器が非常に少ない。山元遺跡・古津八幡山遺跡との差異は明瞭で、特に石鏃の出土量は大きく異なる。一方で、下馬場遺跡では磨石類の多さが際立つ。中期の北陸系土器分布圏との差異も明瞭で、後期に入り剥片石器の激減が伺える。

d）機能別に見た石器組成

試みに国立歴史博物館1997・禰宜田2002の区分による機能別内訳で概観する。ただし、機能別に見た場合、不定形石器の扱いが問題になる。国立

第21図　弥生時代中後期の石器組成検討遺跡

第22表　遺跡別石器・石製品出土数

No	遺跡名	剥片石器								礫石器														石製品											備考
		尖頭器	石鏃 成品	石鏃 失敗	石錐	石匙	両極石器	不定形石器	石核	その他	磨製石斧	打製石斧	磨石類	砥石	軽石製研磨具	擦切用砥石	石皿	台石	玉錐	石鋸	石錘	礫器	小型特殊	石包丁	管玉	玉成品・工程品	勾玉未成品	勾玉	有孔円板	紡錘車	パステル	環状石斧	環石	擦切石製品	軽石製石製品	その他	
1	山元		29		5		3	172	1	1			15	5							1		5		2							1					
2	滝ノ前		10	4	1	1	8	30	1																												
3	砂山		42	19	10	1	62	26					2	1							1				1						1						
4	長松		29	4	2		1	24	5				3													1			1	1							
5	中曽根		5		2		2	1			1																										
6	道端Ⅴ		30		3	1	2	3	2		1		9	7										3	1								1	1			
7	古津八幡山	1	64	13	7		22	180	25		4		70	34							1	6		1	1	1	2				2				8		時代不明除く
8	高稲場		5																																		磨製石鏃1
9	藤ケ森		8																								1										
10	六地山		50		7			6													2											1					報告分
11	大沢		6								1			1											1		1										
12	山谷下層		11	1	3		1	16	3				3																			1				1	
13	松ノ脇		2	2	1			11				1										2				1											
14	小丸山		11		3			1			2		2	1																							
15	西谷						6	1			3		8	1		2	8	11								18											
16	下谷地		215		53	1	155	20			14		27	12		65	8	5	10	6																	
17	箕輪		114		15		89	93	25		2		58	20				11																		19	
18	裏山	2	3	1			1	3	1		2		3	71	165										4	12	1	4				1					
19	吹上		109		1			7			20		7	43		19				1	1			15						4						23	磨製石鏃14
20	下馬場	1	2	1			2	7	1		5	1	150	88	5			4			2				7	4991	1									3	
21	平田		47		16		58	72			14		90	80		699		8	6					6	2	1937	2	3		5						830	磨製石鏃1

第23表　機能別出土点数と比率

No	遺跡名	地域	集落区分	時期	集落区分	狩猟具・武器	漁撈具	除草・収穫具	土掘具	調理具（磨石類）	伐採・加工具	加工具	合計
1	山元	阿賀北	ⅠA	中期後葉～2期	ⅠA	29(12.3%)	1(0.4%)			15(6.4%)		190(80.8%)	235
2	滝ノ前	阿賀北	Ⅱ	2～3期	Ⅱ	14(25.9%)						40(74.1%)	54
3	砂山	阿賀北	Ⅲ	中期後葉～2期	砂丘上	61(37.2%)	1(0.6%)			2(1.2%)		100(61.0%)	164
4	長松	阿賀北	Ⅲ	中期後葉～1期	砂丘上	33(52.3%)				3(4.8%)		27(42.9%)	63
5	中曽根	阿賀北	Ⅲ	中期後葉～1期	沖積微高地	7(53.8%)					1(7.7%)	5(38.4%)	13
6	道端Ⅴ	阿賀北	Ⅲ	中期後葉	沖積微高地	30(50.8%)		3(5.1%)		9(15.3%)	1(1.7%)	16(27.1%)	59
7	古津八幡山	信濃川右岸	ⅠA	1～4期	高地	78(19.4%)		1(0.2%)		70(17.4%)	4(1.0%)	250(62.0%)	403
8	高稲場	信濃川右岸	ⅠA	中期後葉～2期	高地	5(100.0%)							5
9	藤ケ森	信濃川右岸	Ⅱ	中期後葉～4期	高地	8(100.0%)							8
11	大沢	信濃川左岸	Ⅱ	1～2期	高地	6(75.0%)					1(12.5%)	1(12.5%)	6
12	山谷下層	信濃川左岸	Ⅱ	1～2期	高地	12(34.2%)				3(8.6%)		20(57.1%)	35
13	松ノ脇	信濃川左岸	Ⅲ	中期後葉～1期	高地	4(21.1%)			1(5.3%)			14(73.7%)	19
14	小丸山	柏崎平野	Ⅲ	中期中～後葉	高地	11(55.0%)				2(10.0%)	2(10.0%)	5(25.0%)	20
15	西谷	柏崎平野	ⅠB	2～5期	高地					16(40.0%)	3(7.5%)	21(52.5%)	40
16	下谷地	柏崎平野	Ⅲ	中期中～後葉	高地	215(36.3%)				35(5.9%)	14(2.4%)	327(55.3%)	591
17	箕輪Ⅰ	柏崎平野	Ⅲ	中期中～後葉	高地	114(28.3%)				58(14.4%)	2(0.5%)	228(56.7%)	402
18	裏山	頸城	ⅠA	2期	高地	6(2.4%)				3(1.2%)	2(0.8%)	240(95.6%)	251
19	吹上	頸城	Ⅲ	中期中～後葉	平地	109(48.9%)	1(0.4%)	15(6.7%)		7(3.1%)	20(9.0%)	71(31.8%)	223
20	下馬場	頸城	Ⅱ	2～3期	高地	4(1.5%)	2(0.7%)		1(0.4%)	150(56.0%)	5(1.9%)	106(39.5%)	268
21	平田	佐渡	Ⅲ	中期中～後葉	平地	47(4.3%)		6(0.6%)		90(8.3%)	14(1.3%)	933(85.6%)	1090

歴史博物館1997・禰宜田2002の区分によれば「加工具」となるが、不定形石器にスクレイパーなどの完成品に加え、製作途中の失敗品等を含む可能性がある。また、本稿では磨石・敲石・凹石を一括して磨石類としている。これは「磨面」「敲打痕」「凹痕」のうち複数の使用痕が一つの個体に含まれているためである。「調理具」に区分されているが、異なる種類の凹痕があることから、同一の機能か否かは問題が残る。以上、大きな制約があるものの、試みとして区分別の石器組成を見てみたい。本遺跡は、狩猟具・武器12.3%、調理具6.4%、加工具が80.8%となり、圧倒的に加工具が多い。比率は若干異なるものの、加工具が卓越する点は古津八幡山遺跡とほぼ同じである（狩猟具・武器19.4%、調理具17.4%、加工具62.0%）。このような傾向は、禰宜田氏のⅡ３類（武装強化しなかった集落で、収穫具欠落・調理具卓越）となり、石器組成から戦乱や緊張状態を想定できない。

狩猟具・武器が卓越するのは、沖積微高地の道端Ⅴ遺跡・中曽根遺跡や砂丘上の長松遺跡で、50%以上の比率を有する。また、砂丘上の砂山遺跡も37.2%と高い比率を誇り、高地性環濠集落の本遺跡や古津八幡山遺跡より狩猟具・武器とされたものの比率が高い傾向にある。この要因としては、遺跡の主要時期が中期であること（道端遺跡・長松遺跡）や、不定形石器・磨石類の少なさに起因するためと思われ、緊張状態を反映した結果、低地の遺跡で狩猟具・武器が多いとは考えがたい。

B　ガラス小玉について

本遺跡では墓域と考えるＡ地点１TのSK１からガラス小玉72点（完形品68点、半損品４点）が出土した。SK１は完掘していないことから、これ以外に副葬品が存在する可能性があると共に、ガラス小玉の数量も更に多くなる可能性がある。検出したガラス小玉は１つの墓の副葬品としては特筆すべき数量であるため、弥生時代における県内の出土例を中心として出土分布状況を概観する。

県内でガラス小玉の出土したのは10遺跡である。このほかに上越市（旧柿崎町）木崎山遺跡［高橋ほか1992］で丸玉が検出されているが、古墳時代の可能性が高い。現状において当該期のガラス製品は小玉が圧倒的に多い。ガラス小玉は上越市裏山遺跡［小池ほか2000］の６点を筆頭に、長岡市原山遺跡［小林1992］で複数点、新潟市（旧新津市）古津八幡山遺跡［渡邊・立木ほか2001・2004］で２点、それ以外は上越市吹上遺跡［笹沢ほか2006］・長岡市横山遺跡［広井・小林1992］・新潟市（旧巻町）大沢遺跡［甘粕ほか1982］・村上市堂の前遺跡［埋文事業団ほか2008］で各１点が報告されているにすぎない。遺構内出土は裏山遺跡１号竪穴建物（２点）・４号竪穴建物（３点）、大沢遺跡４号竪穴（１点）に限られ、その他は包含層・表土からの出土である。山元遺跡例と同じように、弥生時代の墓からの出土例は現状ではない。特異な例として長岡市（旧寺泊町）諏訪田遺跡で管玉に似た棒状品が確認されているが、孔がない［寺村1991］。帰属時期は明確でないが、弥生時代中期の可能性がある[1)]。

ガラス小玉の帰属時期については、遺構出土資料が少ないことから明確にし難いが、各遺跡の盛行年代から推定すると、吹上遺跡が弥生時代中期に遡る可能性が残るが、それ以外は弥生時代後期の可能性が高いと考える。県内では後期に入り、出土例が増加する可能性が高い。後期に入り、ガラス玉の分布が拡大する点や、量的に増加することが指摘されており［富樫2003ほか］、県内例はこの状況と合致する。ガラス小玉出土遺跡は、大沢遺跡・堂の前遺跡を除いて環濠集落であり、このうち裏山遺跡や古津八幡山遺跡

---

1) 諏訪田遺跡ではこのほかに「淡いコバルト色で一部が風化しているガラス製の小玉（厚さ6.8㎜、径8.2×8.0㎜、孔径上部1.8㎜、下部1.6㎜、重さ0.7ｇ）が採集されている」という［寺村1991］

は本遺跡と同様に高地性環濠集落である点も重要と考える。

次に、北陸の出土状況について雑感することにしたい。富山県では久々氏らの集成がある［久々ほか2003］。弥生時代の例としては集成されたもののうち、ガラス小玉は８遺跡で出土しており、このうち３遺跡は墳墓である。福野町安居墳墓群７号墳では31点以上、南太閤山Ⅰ遺跡３号方形周溝墓では６点などがある。なお、このうち安居墳墓群７号墳は抜根の際に出土し、主体部は未完掘のため、実際の数量は更に多くなるという。

第22図　県内における弥生時代のガラス小玉出土遺跡

このような大量副葬は、旧国では能登にあたる石川県高松町中沼Ｃ遺跡２号方形周溝墓においても認められる［折戸1987］。２号方形周溝墓は南北9.8m、東西10.3mの規模を有し、2.75×1.3mの主体部からガラス小玉112点もの出土が報告されている。ガラス小玉が多量に副葬された墓は、北陸内でもそれほど規模の大きな墓ではないことが重要となろうか。

山元遺跡出土品については第Ⅵ章での記述とおり、素材はカリガラスであり、引き伸ばし法で製作されている。上記の県内例は全点で確認してはいないものの、青灰色の色調を呈するものが多く、肉眼での見解であるがカリガラスの可能性が高いと考えている。東日本全体でこのような傾向が看守できるとの指摘もあり［肥塚1997・富樫2003など］、一連のルートにのって搬入された可能性が高い。搬入先については、限定できないものの、日本海側では丹後で多量副葬が著名である。ガラス製品の卓越から「丹後王国」との評価もあり［富樫2003］、中沼Ｃ遺跡２号方形周溝墓にみる能登での大量副葬、丹後と北陸北東部の土器様相の類似［田嶋2007など］、能登での天王山系土器の出土等から、丹後を中心とした日本海側のルートでもたらされた可能性が高いと考える。

Ｃ　土器の年代について

（１）東北系

本遺跡で主体的な土器群であり、在地の土器と考える。出土点数は多いものの、残存率が高い土器はそれほど多くないことに加え、廃棄の同時性が確認できるものは限られている。ここでは、これまでの研究成果に照らし合わせ、本遺跡出土の東北系土器について検討を試みる。

東北の後期前半に位置付けられるものに、福島県白河市天王山遺跡出土土器を標識とする天王山式土器がある。1950年代に発掘調査が行われ、伊藤信雄氏［伊藤1950］・坪井清足氏［坪井1953］・中村五郎氏［中村1976］・石川日出志氏［1990・2000・2003・2004］らにより、編年的位置付けの大枠が定められた。交互刺突文を一つのメルクマールとするこの土器の編年的位置については、後期説と中期説があり、新潟県内を含めた北陸の研究者は中期説［田中1989、田中・丸山1999など］、東北の研究者及び石川日出志氏は後期説を鮮明に打ち出している［中村1976、石川1990・2000ａなど］。前者の根拠は、県内を中心に北陸の諸遺跡で、中期の小松式や山草荷式・宇津ノ台式と天王山式が出土することであったが、古津八幡山遺跡の状況等からも主体は後期と考える。ここでは、近年、報告例が増加した日本海側の変遷を確認したのち、福島県の状況を加味して山元遺跡出土土器の年代を考えたい。

天王山式とほぼ同時期とされる村上市砂山遺跡や、後続する滝ノ前遺跡が本遺跡を中心に半径５㎞内に分布しており、野田豊文氏により具体的な変遷が提示されている［野田2003・2005など］。野田氏は本遺跡周辺に位置する砂山遺跡・滝ノ前遺跡の土器群を整理し、越後・日本海側の様相として中期後葉～後期後葉までを、①砂山１・２群－②砂山３群－③砂山４群－④滝ノ前２・３群（砂山５群）の序列を示した［野田2003］。東北の型式との併行関係においては、①が宇津ノ台式、②が（仮称）和井内東式・能登段階、③が天王山式、④が屋敷・明戸段階とした。

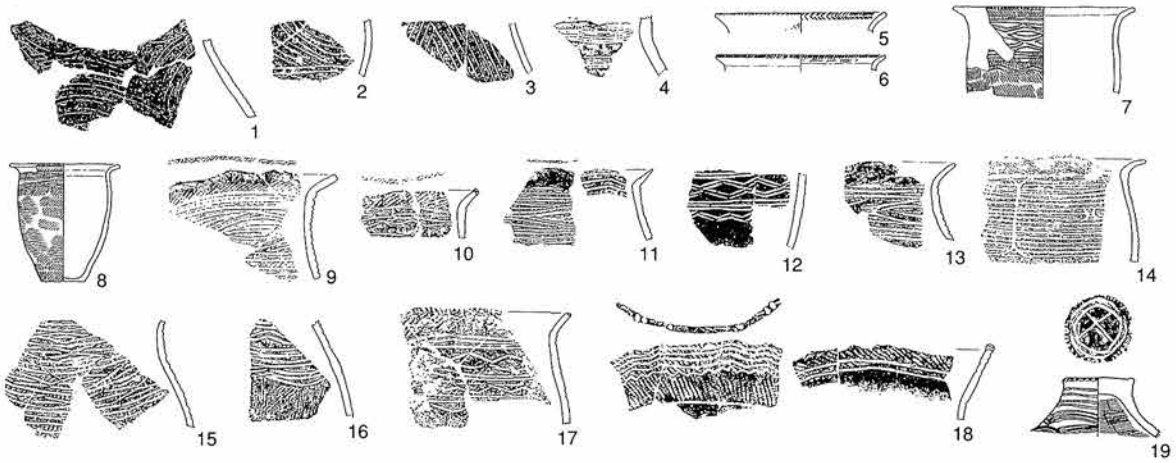
石川氏は福島県の資料に限定し、天王山式を和泉段階（１ａ期）－能登段階（１ｂ期）－天王山段階（２期）とし、後続する土器群に屋敷段階をあてる［石川2004］。使用した資料は若干異なるものの、併行関係については日本海側の野田氏②が福島１ａ・ｂ期に、③が福島２期、④が屋敷段階であるなど、野田氏の見解とおおむね一致している。両氏により示された変遷感を第23図に示した。石川氏が示した日本海側の特徴を第23図で確認すると、ａ．頸部文様帯が発達し、重菱形文が多用される（21～23、25、32、33）、ｂ．口縁部の内湾・伸びが石川氏の１期から認められる（20・25など）、ｃ．口縁部内面に幅狭い文様帯（21・27など）、ｄ．口縁部上端の幅狭い帯に短沈線（27、28～30）、ｅ．ＲＬ縄文の多用・条が縦走するような斜め回転施文（32・33など）、の５つが挙げられている。また、野田氏の砂山３・４群を日本海側の天王山併行期として「砂山式」と提唱している。

以下、野田・石川両氏によって示された変遷感を甕の文様で示すと、砂山式（砂山３・４群）は石川氏が示した上記の特徴ａ～ｅに加え、台形刺突列によるものを含む交互刺突、続く滝ノ前２群では交互刺突文は存在するものの、台形刺突によるものは認められない。また、滝ノ前３群では交互刺突文は明確ではなく、区画文は沈線ないし刺突列に変わっている。一方、口頸部は頸部が直立して口縁部が若干肥厚したものと、口縁部がくの字のもの主体（砂山式）から、口縁部が肥厚せずに頸部の作出が不明瞭なもの（滝ノ前２・３群）や、口縁部が薄手で先端が先細りになるもの、口縁部が長いものが主体（砂山５群）となる。胴部最大径は上位から中位・下位に変化する。これらの特徴を確認のうえ、本遺跡資料を概観する。

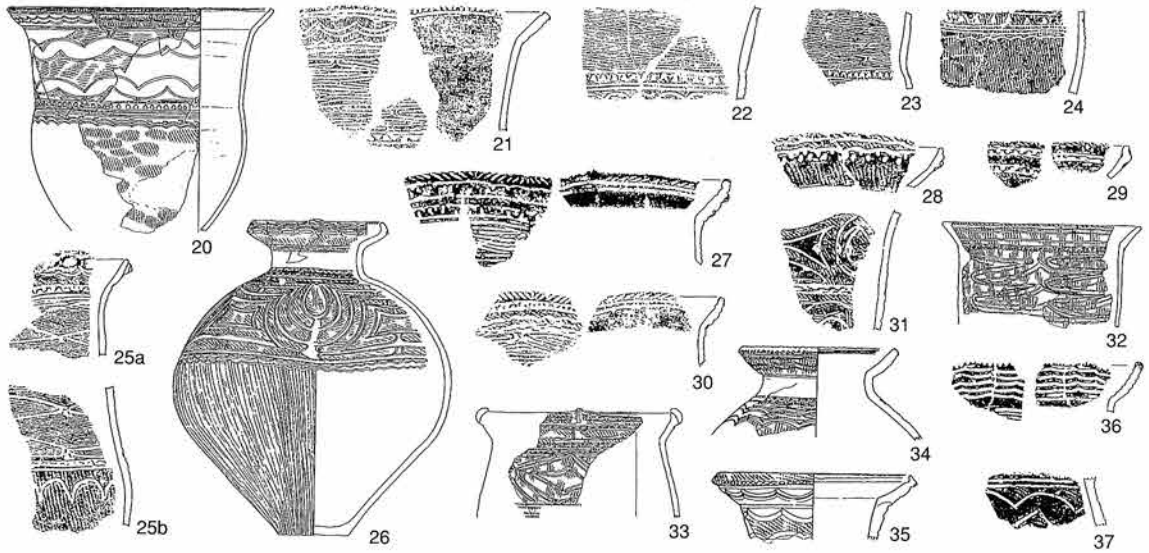
縦堀２：比較的残存率が高い42・47・119の甕をみる。いずれも１層で検出したものである。甕のⅡａ文様帯には縄文地に重菱形文が施される。交互刺突文は口頸部界に施された42、頸胴部界に施された119、口縁部・頸部には施されず、残存部において確認できない47がある。交互刺突文が施された42・119は比較的長い口縁部上位には上向きの連弧文が、下位には単位の細かな下向きの連弧文が巡る。47は保留部分を残すものの、42・119は野田氏の砂山３・４群、石川氏の砂山式と共通点は認められるものの、後出的要素が強い。共通点として頸部に重菱形文が挙げられるが、縄文地に施されている点、太い沈線であること、構図がやや崩れていること等は、砂山式よりも後出的要素と考える。野田氏の砂山４群にあたる第23図33においても、縄文地にやや崩れた重菱形文が施されているが、本遺跡出土の42・47・119は口縁部が長い点から後出的と考えたい。また、交互刺突文は典型例で、砂山式の特徴である台形刺突列ではないこと、口縁部が拡張していること、口縁部内面の文様を欠く点、口縁上端に沈線区画されたものがないなども根拠となる。

一方で、滝ノ前２・３群（砂山５群）との比較においては、古い要素が多いと考える。滝ノ前２・３（砂山５群）は、出土量が少ないことから特徴が明確でないが、重菱形文が確認されていない点や、口縁部先端が先細りとならない点から、滝ノ前２群との相関については保留部分を残すが、滝ノ前３群・砂山５群よりも古相を呈する。砂山式からの系統を追える要素が多いことから、砂山式（砂山３・４群）－本遺跡縦堀２－滝ノ前２・３群という変遷を想定したい。

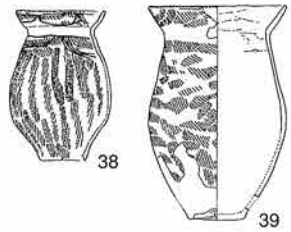
砂山１・２群（中期後葉）



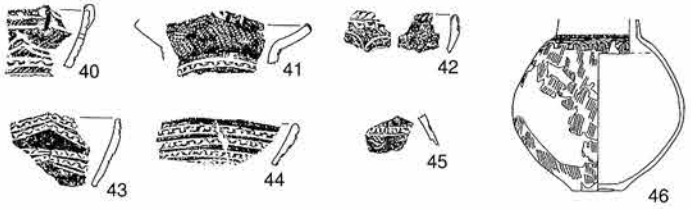
砂山３・４群（後期前葉）



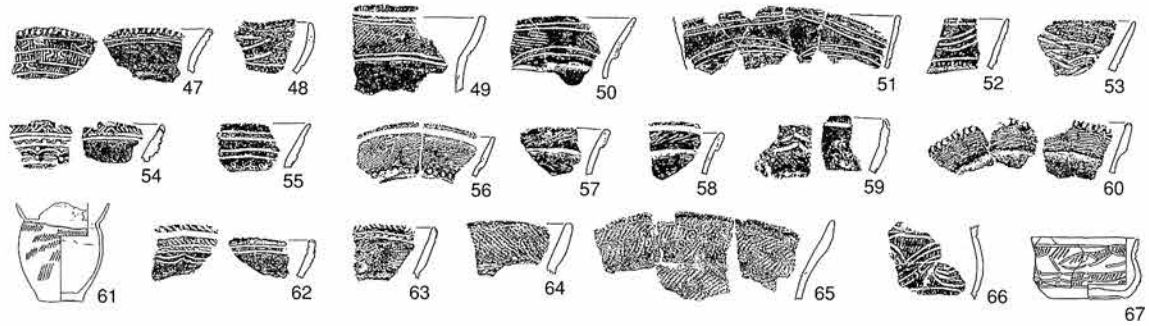
砂山５群（後期後葉）



滝ノ前２群（後期後葉）

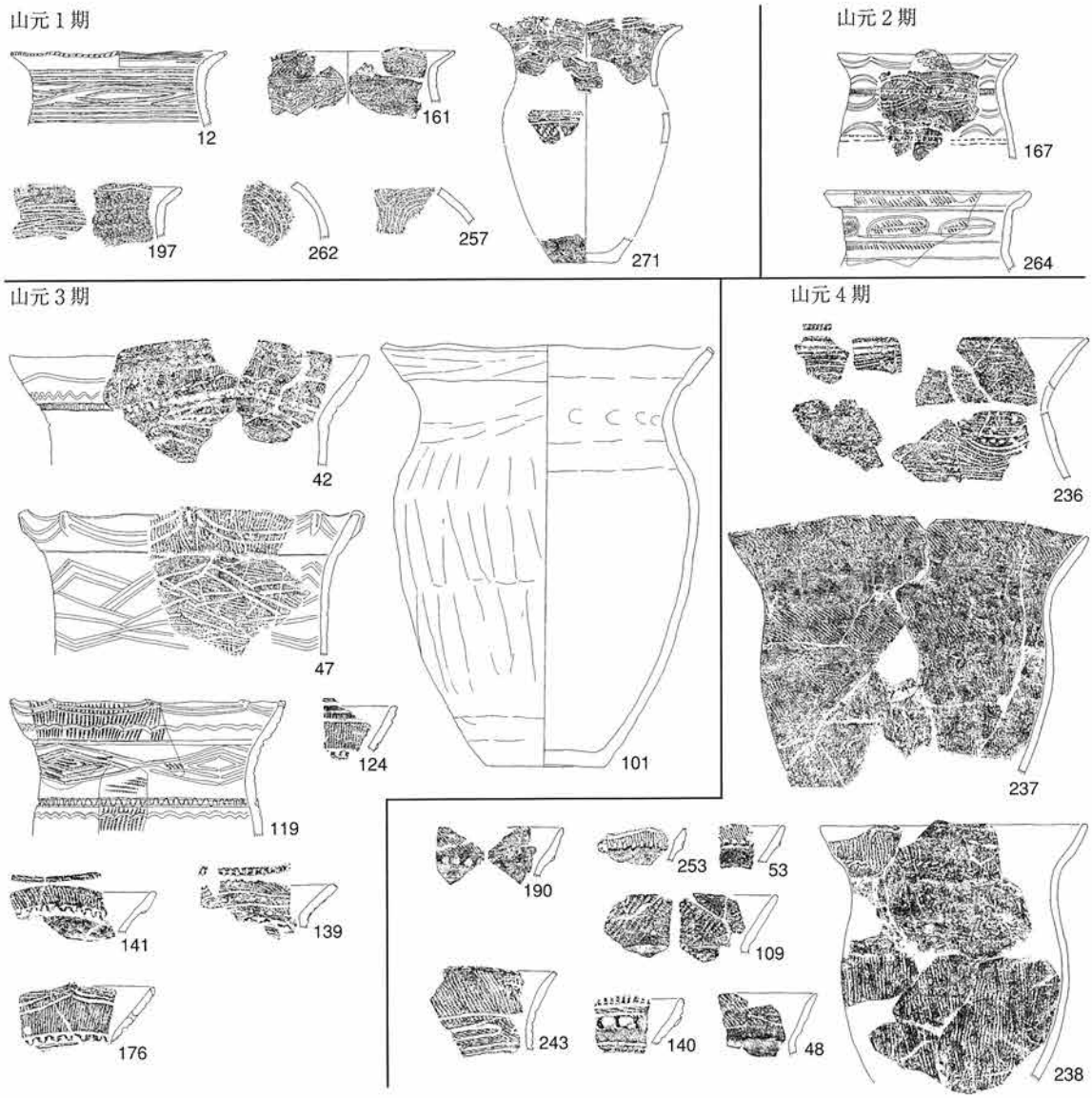


滝ノ前３群（後期後葉）



第23図　砂山・滝ノ前遺跡の土器（５～８・20・26・32・33・38・39・46・61はＳ＝１：10、その他は１：６）

36T濠１（101）と30T濠５（236～238）：残存率は高いものの文様が乏しい。236が続縄文と考える以外は、東北系である。36Tの101は全形が把握できる資料で、口頸部は頸部の直立が明瞭でなく、口縁部が肥厚して長いⅢ５類である。ヘラナデが施されたのみで、文様を欠くＥ類であることから、時期比定は難しい。保留部分を残すが全体の器形から検討する。口頸部の形態は縦堀２の119に類似する。胴部最大径が上位に位置することや肥厚する口縁からも、同じく粗製土器である砂山５群の第23図38・39よりも古いと考える。滝ノ前２群とは比較できないが、滝ノ前３群の第23図49よりも口縁部形態が古い様相を呈する。このことから、縦堀２と同時期か若干後出する要素はあるが、砂山５群・滝ノ前３群よりも古いと考える。一方、30Tの237・238は同じく粗製のＥ類であり、時期比定は形態から行う。口頸部形態はⅢ２類（238）と、更に頸部の直立化が退化しているが、Ⅲ３類（237）に分かれる。238は前述の101に比して口縁部の肥厚は認められない。胴部最大径も中位にあることから、後出する要素が多い。砂山５群の38・39との比較では、口縁端部は先細りせず、胴部最大径がよりも上位にあることから、古相を呈する。口頸部が滝ノ前３群の49と類似することから、滝ノ前３群より古くなることはあっても新しくなることはないと考える。237



第24図　山元遺跡出土土器の時期区分（Ｓ＝１：６）

は比較する資料がないが、胴部最大径の位置から砂山５群よりも先行するものと考える。

特徴が少ないため明確にできないが、砂山３・４群→縦堀２→36Tの101（滝ノ前２群？）→30T（237・238）→砂山５群（滝ノ前３群）と考える。

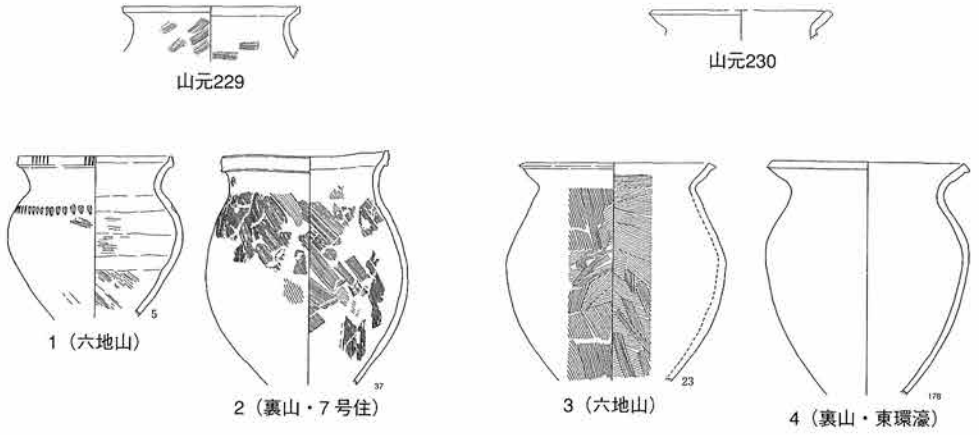
その他：遺構出土資料のうち、比較的残存率が高いものを検討してきたが、おおむね砂山式と滝ノ前２・３群の間に位置付けられるものが多い。以下では包含層出土資料も含め、砂山式、滝ノ前２・３群に併行するものを抽出し、縦堀２出土の42・47・119（以下、縦堀２）との比較を行う。

砂山式に比定できるものには167がある。口縁部と胴部界には台形刺突列が巡る。口縁部と胴部には比較的短く、上下には半単位ずらした対向する連弧文が巡る。細かな前後関係には問題を残すものの、砂山式に併行するものと考えたい。なお、167はⅢ層出土であり、Ⅲ層堆積後に築造された縦堀２との関係についても矛盾はない。264は頸部文様等で保留部分を残すが、縦堀２出土土器よりも先行する要素が認められる。頸部が直立し、短い口縁部は肥厚している。器形は砂山式では明確でないが、石川氏の天王山１b期の福島県能登遺跡［大越ほか1990］に類例を求めたい。

一方、滝ノ前２・３群とほぼ同じ特徴を持つものは多い。滝ノ前２群の特徴（口縁部が肥厚せず、交互刺突文を持つもの）を持つものは本稿の文様ｂ類に近い。口縁部形態は２類（124・176）、３類（139）、４類（141）がある。口縁部形態等から、縦堀２と同時期としても、より古くはならない。滝ノ前３群（口縁部が肥厚せず、区画文は退化した交互刺突文か沈線ないし刺突列）の特徴を持つものの口縁部形態は、２類（140）、３類（243）、４類（53・253）、５類（190）があるが、口縁部下端が肥厚するものの先端が先細りとなる傾向がある（53・190・253）。また、砂山５群の特徴である口縁部の薄手化ないしは先細りしたもの（48・109）を含め、文様の簡略化（140・243・253・190・53）などがあることから、これらを縦堀２出土の42・47・119より後出的な要素と考える。

（２）後期北陸系（４群）土器について

北陸系土器の出土数は限定され、図化したのは高杯１点、高杯及び器台１点、壺３点、甕３点である。以下では以前に示した区分［滝沢2005ｂ］を基本に時期比定を行う。高杯は棒状脚を呈することから１～２期の所産で、それ以上の時期の限定は困難である。甕の口縁部形態は有段とくの字である。弥生時代後期～古墳時代前期のく字甕については、かつて検討を試みたことがある［滝沢2005ａ］。229は胴部と口縁部の境が不明瞭であり、口縁部は屈曲して外傾して、端部がつまみ上げられている。滝沢2005ａの分類では口縁部Ｉｄ類の範疇に属するものと考える。口縁部Ｉｄ類のうち、口縁部と胴部の境界が不明瞭なもの



第25図　山元遺跡出土の後期北陸系土器と類似資料（Ｓ＝１：６）

は新潟市六地山遺跡［新潟市1994］や、上越市裏山遺跡７号住［小池ほか2000］など１～２期に限定される。このことから229は、１～２期の所産と考える。更なる限定はできないであろうか。229は口縁端部のつまみ上げがシャープである点や、いわゆる付加状口縁ではないことから裏山遺跡７号住出土例よりも六地山遺跡出土の１に近い。また、口縁部と胴部の境界付近の特徴は異なるものの、口縁端部のつまみ上げは、六地山遺跡の１にも近い。このことから229は１期の可能性が高い。

230は口縁部が比較的短く、肥厚して外傾する幅広い端面を有するものである。滝沢2005ａのⅡｇ類に相当する。県内での出土例は多くないものの、230のように外傾度が高く、幅広な端面を有するものは１～２期を中心に認められる。１～２期の類例としては、前述の六地山遺跡［新潟市1994］、裏山遺跡［小池ほか2000］に類例がある。前者は口縁部と頸部の境界が明瞭で、胴部最大径が中位にあるものの、後者は、口縁部と胴部の境界が不明瞭であり、胴部最大径が上位に位置する。口縁部片の230は胴部の形態が不明なものの、口縁部と胴部の境界が明瞭なことから六地山遺跡例に近い。以上の検討結果から229・230は１～２期の所産であり、１期に遡る可能性もある。

（３）山元遺跡出土土器の編年的位置

以上の検討結果から、本遺跡出土土器は１・２群を山元１期、３群のうち古相を呈するものを山元２期、新しい様相を呈するものを山元３期、より後出的な要素を持つものを山元４期とする（第24図）。野田・石川両氏との比較では山元１期が中期後葉で野田氏の砂山１・２群、山元２期が後期前葉で、野田氏の砂山３・４群、石川氏の砂山式、山元３期が後期後葉で滝ノ前２群ないしはそれに先行するもの、山元４期が後期後葉でも新しい段階で野田氏の滝ノ前２・３群・砂山５群と考えたい。

山元１・２期（中期後葉～後期前葉）は日本海側の特徴が広範囲に認められる段階、山元３期（後期中葉～後葉）は、頸部の重菱形文、ＲＬ縄文の多用・条が縦走するような斜め回転施文など、砂山式の要素を残しながらも、頸部文様帯の無文化、口縁部内面に幅狭い文様帯や口縁部上端の幅狭い帯に短沈線を欠くものや、口縁端面に縄文施文されたものが増加するなど、序々に変質する段階である。山元４期（後期後葉～末葉）は、砂山式の諸要素が更に消失する段階と考える。北陸系土器群との併行関係は、滝ノ前遺跡や古津八幡山遺跡を介して提示すべきであるが、前者は破片資料が多いこと、後者とは様相差が大きいため難しい。十分な手続きを省いているが、併行関係案を第24表に示した。渡邊朋和氏が示した古津八幡山遺跡の編年との対比では、山元２期が古津八幡山遺跡の１期古を含みながらも、それ以前、山元３期が古津八幡山遺跡の１期新～２期古、山元４期が同２期古～新頃を想定しているが、北陸系土器群との対比を含め、大きな課題としたい。

第24表　本遺跡の時期区分と併行関係

<table>
<tr><th colspan="2">山元遺跡
時期</th><th>野田2003</th><th colspan="2">石川2004</th><th>渡邊
2001</th><th>滝沢
2005ｂ</th><th>田嶋
2007</th><th>北陸南西
部型式</th><th>畿内</th></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td><td>日本海側</td><td>福島</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>１期</td><td>18TSK2</td><td>砂山１・２群</td><td>山草荷式</td><td>川原町口式</td><td rowspan="3"></td><td></td><td></td><td>戸水Ｂ</td><td>Ⅳ様式</td></tr>
<tr><td rowspan="2">２期</td><td rowspan="2"></td><td rowspan="2">砂山３群</td><td rowspan="2">砂山１式</td><td>天王山1ａ期（和泉）</td><td rowspan="2">１期</td><td rowspan="2">Ｖ－１
Ｖ－２
Ｖ－３</td><td rowspan="2">猫橋式</td><td rowspan="7">Ⅴ様式</td></tr>
<tr><td>天王山1ｂ期（能登）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">３期</td><td rowspan="2">縦堀２
36T濠１</td><td rowspan="2">砂山４群</td><td rowspan="2">砂山２式</td><td rowspan="2">天王山2期（天王山）</td><td>１期古</td></tr>
<tr><td>１期新</td></tr>
<tr><td rowspan="2">４期</td><td rowspan="2">30T濠５</td><td rowspan="4">滝ノ前２・３群</td><td rowspan="4">滝ノ前２・３群</td><td rowspan="4">屋敷段階</td><td>２期古</td><td rowspan="2">２期古・
中・新</td><td rowspan="2">２－１群
２－２群</td><td rowspan="2">法仏式</td><td rowspan="4">Ⅵ様式</td></tr>
<tr><td>２期新</td></tr>
<tr><td rowspan="2"></td><td rowspan="2"></td><td>３期</td><td rowspan="2">３期</td><td>３－１群</td><td rowspan="3">月影式</td></tr>
<tr><td>３－２群</td><td rowspan="2">庄内Ⅰ</td></tr>
<tr><td></td><td>４期</td><td>４期</td><td>４群</td></tr>
</table>

2　遺跡の動向について

A　山元遺跡で確認された遺構について

今回の調査で確認した遺構は、斜面では環濠、平坦地部分では縦堀、土坑、掘立柱建物、ピット、土坑墓、埋甕がある。以下では、個々の遺構について山元遺跡の特徴を検討したい。

（1）環濠について

環濠を構成する濠１～５の特徴、掘削された斜面の傾斜角、土塁の有無、最掘削の可能性、覆土状況については第Ⅳ章３で触れた。ここでは途切れる濠と、規模について検討を行う。

今回の調査では４か所で途切れ、１か所で重複することを確認した。重複する濠４と濠５は30Tで検出した。重複部分の距離は追及できておらず、今後の課題である。この地点は、Ａ地点（墓域）とＢ地点（居住域）間の谷が最も浅く往来がしやすい地点であり、大きな意味を持つものと思われる。ただし、ほかの濠間と同様に、意義について推定の手懸りとなる遺構は確認されていない。

環濠が途切れる部分は各地で確認されており、「出入り口」とされている［佐原2002］。ただし、環濠の途切れが多い点でやや様相が異なる。重複する環濠、途切れる部分が多い環濠は、新潟市古津八幡山遺跡［渡邊・立木ほか2001・2004］があり、本遺跡と酷似する。山元遺跡・古津八幡山遺跡以外にも類例があるか否かは、現状では明確にできていない。ここでは（仮称）古津八幡山タイプの環濠とし、山元遺跡はほぼ同じようなデザインで環濠が掘削されている点を強調したい。

環濠の規模は県内の他遺跡と比しても、幅・深さ共に小さい。越後平野側の濠１は幅２ｍ前後であるが、深さは１ｍに満たない。ただし、平野側から平坦部にかけて傾斜が急角度に変換する地点に掘削されていることから、深さ以上に平坦部への進入が困難と考える。一方で、南北斜面共に越後平野から視界に入りづらい東側は幅・深さ共に更に小さくなり、平坦部への進入は越後平野側よりも容易である。環濠は規模から越後平野（西）側を意識した構造となっている。

（2）縦堀について

東西に長い丘陵平坦面を南北方向で分断する溝を縦堀とした。２条確認しており、西側を縦堀１、東側を縦堀２とした。機能については、①平坦地を分断する区画、②谷部までの道等の機能を推定しているが、いずれも決め手に欠ける。縦堀２は、南側斜面で環濠を構成する濠３と重複関係が確認され（61T）、濠３の埋没後に掘削されている。このことから、濠３は縦堀２と併存しないことが明らかである。縦堀の類例については、確認していない。平坦面を直交するという点では、妙高市斐太遺跡群上ノ平地区の環濠に類例が求められる［駒井・吉田1962］。上ノ平地区の環濠は南北に長い丘陵を「コ」字形に巡る（第30図）。上ノ平地区の環濠は発掘調査が行われておらず、遺構が半埋没になっていることからの推定である。比較資料としては制約が多いが、平坦部を直交するものとして注意を有する。

（3）墓について

Ａ地点の３つのトレンチで墓坑７基を検出した。墓坑周辺に溝等の施設が伴う状況は確認していないため、現状では土坑墓と考える。土坑墓の規模は、長軸100cm前後、150cm前後、200cm程の３つに区分できる。調査区外に伸びる１TSK１が最も大きいと考える。今回の調査区では、最も越後平野側の墓が大きく、更に豊富な副葬品を有している点が注目される。墓域が形成しえる平坦地は今回の調査区外（事業予

定地外）にも伸びることから、更に規模の大きな墓の存在が予想される。土坑墓内の付属施設として1TSK1ではピット状の落ち込みが確認された。平面プランのみの確認であるが径約20cmである。坑内の壁際ではなく、ほぼ中央であることから全国各地で確認されている「墓坑内柱穴」［石野2001など］にあたるか否かは明確でないが、一つの可能性として提示する。

本遺跡では明確な墓域が確認された点が注目される。県内の弥生時代後期の遺跡において、居住域と墓域が谷を隔てて明確に分離された例は確認されていない。居住域と墓域の関連については、10m内外と規模の大きなもののみ、居住域と区分された例が斐太遺跡群矢代山B地区［佐藤2006］である。また居住域が不明なものの、墓が単独ないしは群在する例として上越市吹上遺跡［笹沢ほか2006］、長岡市（旧寺泊町）屋鋪塚遺跡［八重樫2004］などがある。同一平坦地内に居住域と隣接する新潟市（旧新津市）古津八幡山遺跡［渡邊・立木ほか2001・2004］とは明確に区分したい。

東北系土器文化圏では居住域と墓域の位置関係は明確でないが、中期後半では福島県平窪諸荷遺跡［高島1998］遺跡で、土坑墓群が展開していることから、本遺跡と類似する可能性がある。ただし、後期後葉の福島県では方形周溝墓が受容されており、会津では湯川村桜町遺跡［安田ほか2005］、浜通りでは前述の平窪諸荷遺跡などである。今回の調査において本遺跡では方形周溝墓は確認されていない。また、山形県で未確認のことから、東北系土器文化圏においても日本海側は方形周溝墓を受容していない可能性もあろうか。今後の課題と考える。

（4）建物について

本遺跡ではB地点西側の22Tで掘立柱建物が1棟確認されたにとどまる（SB1）。1×1間で、長軸3.6m、短軸3.0～3.4mである。後期の東北系土器分布圏で、掘立柱建物の存在は明確でない。県内の北陸北東部系土器分布圏では上越市吹上遺跡［笹沢ほか2006・2007］で確認されているが（10・12号掘立柱建物）、同遺跡の4号平地式建物を掘立柱建物としても3棟にすぎない。形態は1×1間で片側のみ棟持柱を持つもの（4号平地式建物）、1×1間？（12号掘立柱建物）、2×2間（10号掘立柱建物）があり、柱穴間は4号平地式建物が3.0～3.5m、10号掘立柱建物は1.5m、12号掘立柱建物は2.0～4.0mである。本遺跡例はやや柱穴間が広いものの、吹上遺跡例と大きな差異はないと考える。

竪穴建物は検出していないが、第Ⅳ章の記述とおり18Tでその可能性があるものを2～3棟分確認した。いずれも壁柱穴の可能性がある円形の柱穴列である。後期東北系土器分布圏では、平面プランは円形が主体であるが、隅丸方形のものを存在する（福島県明戸遺跡、山形県向河原遺跡など）。本遺跡で竪穴建物が存在するのであれば、円形を主体に隅丸方形も想定すべきである。

（5）環濠・縦堀等の埋没時期について

個々の遺構の年代については保留部分を残すが、比較的土器の出土量が多い環濠を構成する濠1・5の埋没時期は、山元3～4期（滝田2005b・新潟シンポ編年1期新～2期新）、縦堀2は山元3期（滝田2005b・新潟シンポ編年1期新～2期古）と考える。重複関係では縦堀2が、濠3を切る。現状では濠3→縦堀2・濠1→濠5で埋没した可能性がある。縦堀2と濠5では放射性炭素年代でも大きな矛盾もない。環濠を構成する濠1～5や縦堀の掘削・埋没時期が異なる可能性があり、今後の大きな課題と考える。

B　県内における高地性集落・環濠集落

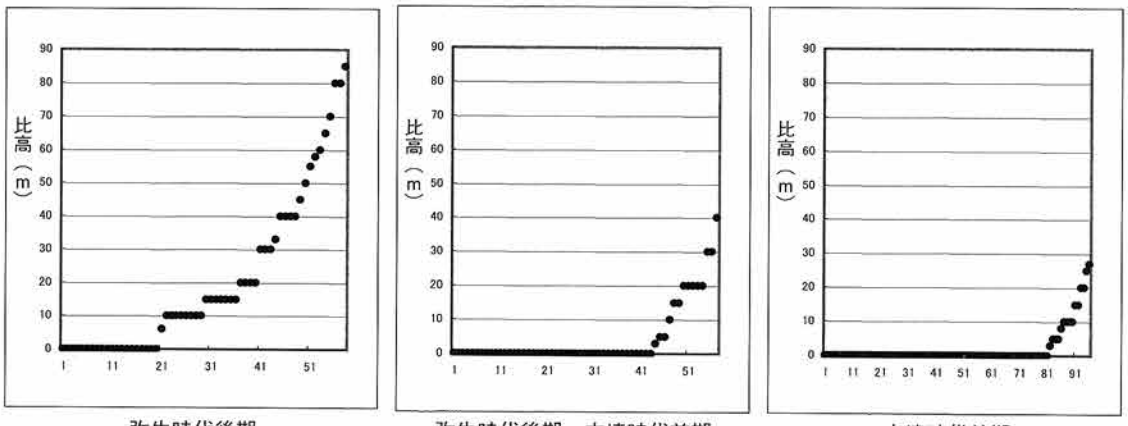
（1）高地性集落について

前述のとおり、現状において山元遺跡は日本海側で最北の高地性環濠集落である。新潟県は高地性環濠集落の日本海側最北の地域で、これまで確実な例として７遺跡がある（第27図・第25・26表）。以下では県内例を概観し、本遺跡の評価の助けとしたい。なお、ここでの時期区分は滝沢2005ｂ（第24表）とする。

一般的に高地性集落は「防御」を意図した弥生時代の時代性を示す集落形態［佐原1999など］と周知されてきたが、近年では見直し論も多い。「高地に立地した集落＝全てが防御集落」という解釈ではなく、遺構・遺物の検討から、生業に適した「高地に集落を構えた遺跡」もあるとの指摘があり［柴田2004ほか］、防御性の認定には多角的な視点が求められている。今回の調査で得られた情報のみで山元遺跡の「防御性の度合い」を検討することは難しいが、斜面に築かれた環濠から高地に立地した非環濠集落に比して、防御の認識は強かったことと予想する。防御性の認定については、なお検討が難しいが、ここでは県内の弥生時代遺跡の集落立地を基に、集落属性の大枠を捉えることを重視したい。

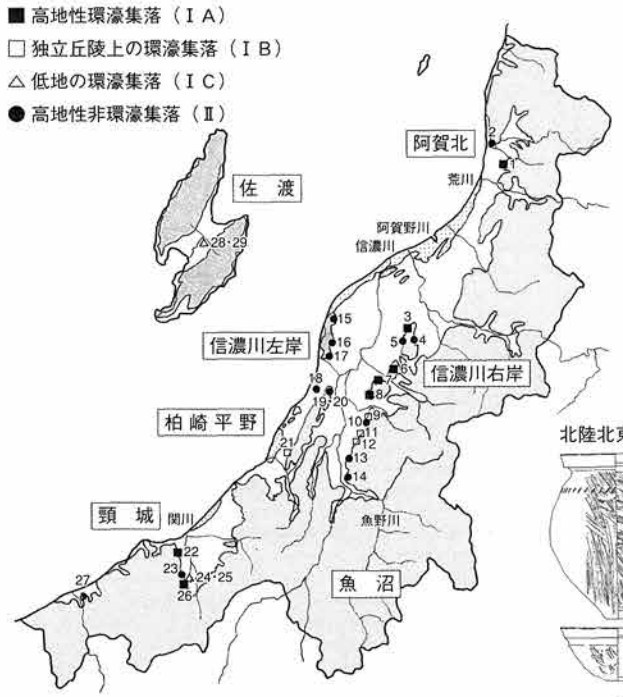
何をもって「高地」とするかには地域性が重視されるべきである。新潟県を中心とした周辺ではどのような枠組みで考えられてきたのか。周辺との比高25m以上［菅沼1993］、1993年の日本考古学協会新潟大会では、比高40mがおおむねの目安とされてきた［日本考古学協会新潟大会実行委員会1993］。試みに2005年新潟県考古学会主催のシンポジウム資料集で収集した弥生時代後期～古墳時代前期の遺跡［新潟県考古学会2005］について、現在の地形から判断した比高を折れ線グラフに示したのが第26図である。弥生時代後期～古墳時代前期まで継続する遺跡や古墳時代前期に入り成立する遺跡は、周辺との比高がほとんどない遺跡が圧倒的に多い。これに対して弥生時代後期の遺跡は丘陵上に位置するものの比率が高い傾向にある。古墳時代前期に成立する遺跡は比高30m以上のものは確認できないこと、弥生時代後期の遺跡においても30m付近で緩やかな分布の断絶が確認できることから、新潟県内では周辺との比高30m以上の集落を広義の高地性集落と考えたい。

この基準でみた場合、新潟県内には21遺跡が該当する。地域別では信濃川右岸が９例と最も多く、信濃川左岸が６例、頸城が４例、阿賀北が２例である。このうち発掘調査等で環濠が確実に検出されたのは７遺跡である。一方で、21遺跡のうち発掘調査で環濠がないとされたものは、糸魚川市後生山遺跡［大森1986］、

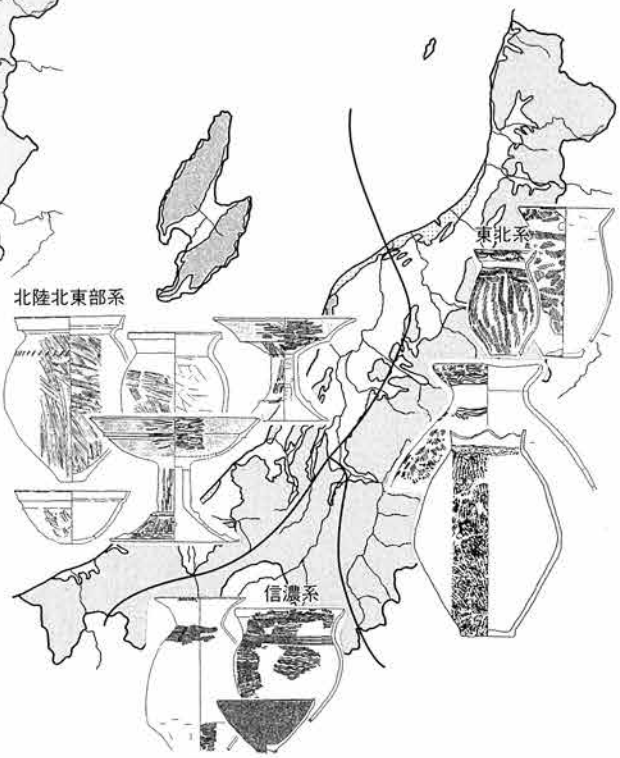


弥生時代後期　　弥生時代後期～古墳時代前期　　古墳時代前期

第26図　時期別の集落立地（周辺との比高）



第27図　県内の防御的集落



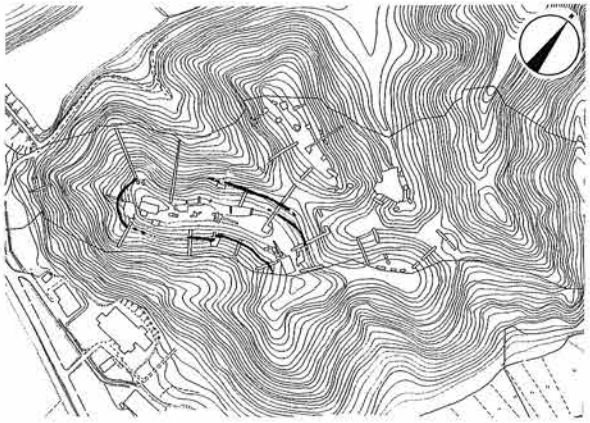
第28図　県内における弥生時代後期後半の主体的土器

第25表　県内の防御的集落（高地性集落・環濠集落）

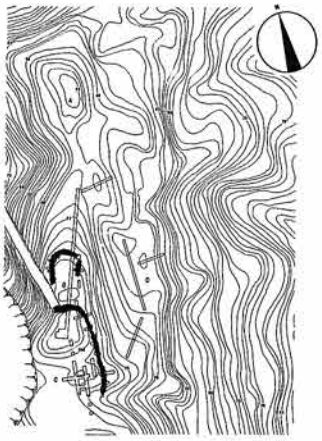
No	遺跡名	所在地	地域区分	時期	類型	周辺との比高	調査	墓	主体の土器群
1	山元	村上市(旧神林村)大字下助渕	阿賀北	中期後葉～後期後葉	ＩＡ	37m	確認	環濠外(土坑墓)	東北系
2	滝ノ前	村上市大字岩ヶ崎	阿賀北	後期後葉～古墳前期	Ⅱ？	約40m	本掘		東北系
3	古津八幡山	新潟市(旧新津市)古津	信濃川右岸	後期前葉～末葉	ＩＡ	約50m	確認	環濠外(方形周溝墓)	北陸系・東北系
4	大倉山	五泉市大字橋下	信濃川右岸	後期	Ⅱ？	約60m	踏査		北陸系
5	中店	南蒲原郡田上町大字田上	信濃川右岸	後期	Ⅱ？	約55m	本掘	集落内？	東北系
6	二ツ山山頂	三条市大字上保内	信濃川右岸	後期	ＩＡ？	約80m	踏査		北陸系
7	経塚山	三条市大字如法寺	信濃川右岸	後期後葉	ＩＡ	約60m	本掘		北陸系
8	大平城	見附市鳥切窪町	信濃川右岸	後期後葉	ＩＡ	約80m	本掘	環濠内(方形台状墓)	北陸系
9	高稲場	見附市田井町	信濃川右岸	後期後葉	ＩＢ	15～20m	確認		北陸系
10	岩沢	見附市名木野町	信濃川右岸	後期後葉	Ⅱ？	約40m	確認		北陸系
11	横山	長岡市桂町	信濃川右岸	後期後葉～古墳前期	ＩＢ	約10m	本掘	環濠外(方形周溝墓)	北陸系
12	原山	長岡市加津町	信濃川右岸	後期	ＩＢ？	約20m	踏査		北陸系
13	堅正寺	長岡市御山町	信濃川右岸	後期	Ⅱ？	約45m	踏査		東北系
14	阿部山	長岡市滝谷町	信濃川右岸	後期	Ⅱ？	約65m	踏査		東北系
15	大沢	新潟市(旧巻町)大字稲島諏訪	信濃川左岸	後期前葉～古墳前期	Ⅱ	約30m	本掘		北陸系
16	山谷古墳下層	新潟市(旧巻町)大字福井	信濃川左岸	後期前葉～後葉	Ⅱ	約30m	本掘		北陸系
17	稲場塚古墳下層	新潟市(旧弥彦村)	信濃川左岸	後期後葉	Ⅱ？	約40m	踏査		北陸系
18	大平	長岡市(旧和島村)大字北野	信濃川左岸	後期	Ⅱ？	約40m	踏査		北陸系
19	赤坂	長岡市(旧和島村)大字上桐	信濃川左岸	後期	Ⅱ？	約80m	踏査		北陸系
20	姥ヶ入南	長岡市(旧和島村)大字島崎	信濃川左岸	後期	Ⅱ	30～40m	本掘	円？方形周溝墓	北陸系
21	西谷	刈羽郡刈羽村大字大塚	柏崎平野	後期後葉～古墳前期	ＩＢ	8m	本掘		北陸系
22	裏山	上越市大字岩木	頸城	後期後葉	ＩＡ	約70m	本掘		北陸系
23	下馬場	上越市大字下馬場	頸城	後期後葉～古墳前期	Ⅱ	約40m	本掘		北陸系
24	吹上	上越市大字稲荷	頸城	中期中葉～後葉	ＩＣ	0m	本掘		北陸系・信濃系
25	釜蓋	上越市大字	頸城	後期末葉	ＩＣ	0m	確認		北陸系
26	斐太遺跡群	妙高市(旧新井市)大字宮内ほか	頸城	後期後葉～古墳前期	ＩＡ	約50m	本掘		北陸系
27	後生山	糸魚川市	頸城	後期前葉～後葉	Ⅱ	約40m	本掘		北陸系
28	平田	佐渡市(旧新穂村)	佐渡	中期中葉～後葉	ＩＣ	0m	本掘		北陸系
29	蔵王	佐渡市(旧新穂村)	佐渡	後期？	ＩＣ	0m	本掘		北陸系

第26表　地域毎・時期別の環濠集落・高地性集落

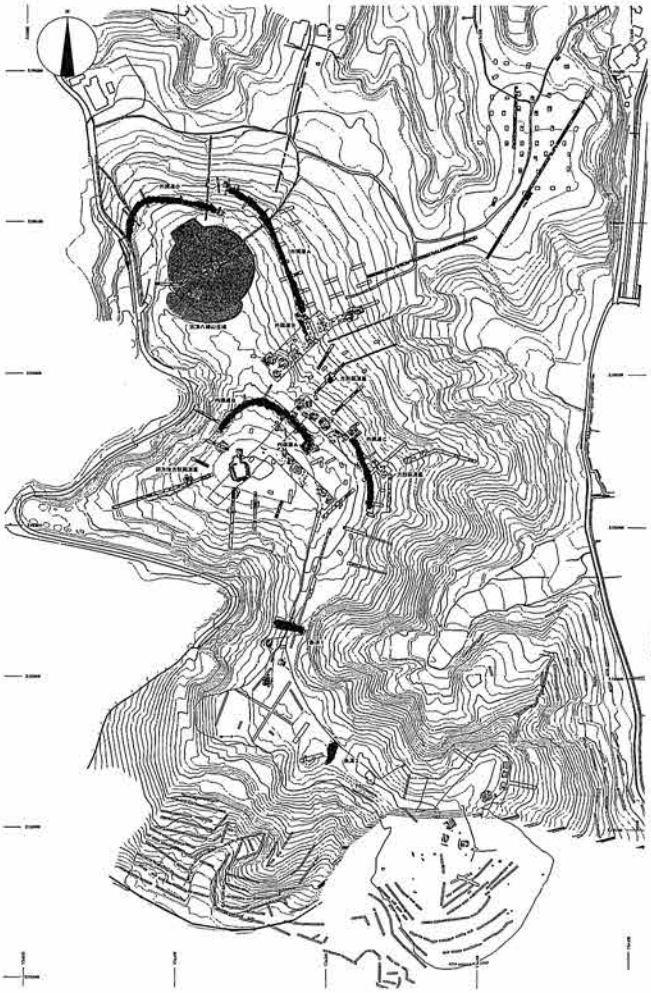
地域	中期					後期				
	環濠集落			高地性集落(環濠不明)	合計	環濠集落			高地性集落(環濠不明)	合計
	高地	低丘陵	平地			高地	低丘陵	平地		
阿賀北					0	1			1	2
信濃川右岸					0	4	3		5	12
信濃川左岸					0				6	6
柏崎平野					0		1			1
魚沼					0					0
頸城			1		1	2		1	2	5
佐渡			1		1			1		1
合計	0	0	2	0	2	7	4	1	14	27



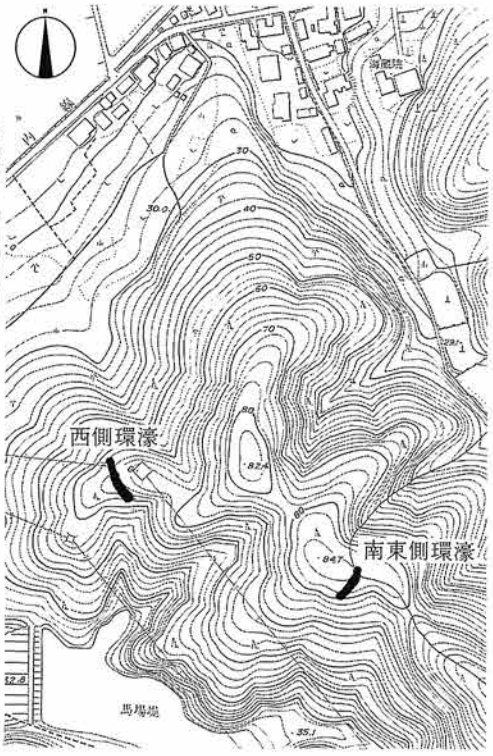
山元遺跡（高地性環濠集落）



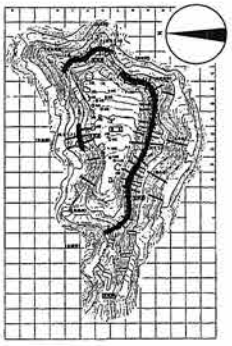
大平城遺跡（高地性環濠集落）



古津八幡山遺跡（高地性環濠集落）



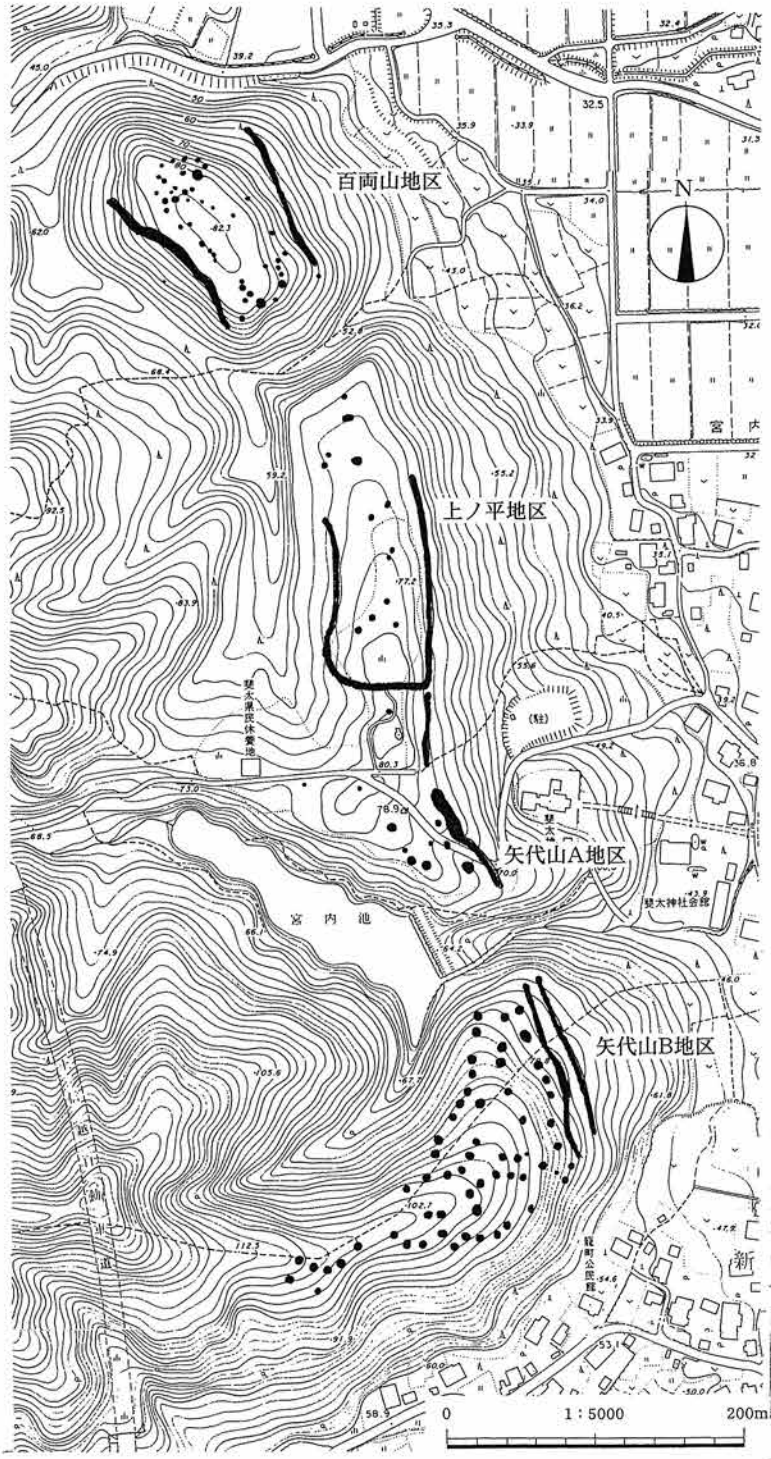
経塚山遺跡（高地性環濠集落）



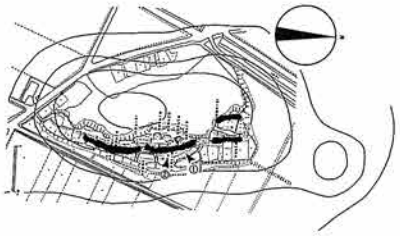
裏山遺跡（高地性環濠集落）

環濠

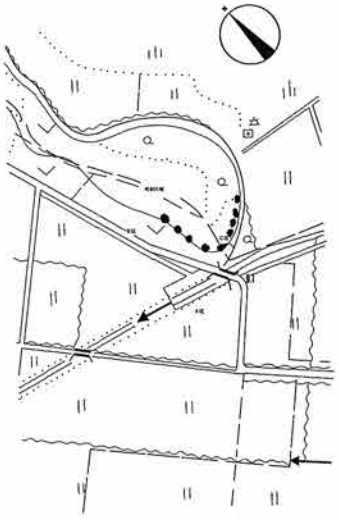
第29図　県内の環濠集落（1）（S＝1：5,000）



斐太遺跡群（高地性環濠集落）



横山遺跡（独立低丘陵上の環濠集落）



西谷遺跡（独立低丘陵上の環濠集落）

釜蓋遺跡（低地の環濠集落）

環濠

第30図　県内の環濠集落（2）（S＝1：5,000）

上越市下馬場遺跡［尾崎2006］などわずか数例であり、五泉市大倉山遺跡［川上1994］など環濠が存在する可能性を含むものを数多く含んでいる。高地性環濠集落の数量は更に増加する可能性がある。

（2）環濠集落について

集落の内部を濠で囲った集落の名称であるが、県内では山元遺跡を含めて14例確認されている。立地は、前述のとおり高地が7遺跡、比高8～20mほどの独立低丘陵が4遺跡、周辺との比高が確認できない低地が4遺跡である。環濠の掘削時期についての詳細は明確にできないが、廃絶時期から中期に掘削されていると考えるものは2遺跡（頸城・吹上遺跡、佐渡・平田遺跡）なのに対し、後期は12遺跡と数量が増加している。地域別では、信濃川右岸が7例と最も多く、頸城が3例、佐渡で2例、阿賀北・柏崎平野で各1例が確認されている。

（3）高地性集落・環濠集落の分布と盛行時期・廃絶時期

a）分布と土器の地域相

県内における弥生時代後期後半を中心とした土器様相を第28図に示した。地域毎では検出された資料に差異があるため、一部で保留部分を残すが、現状における傾向は指摘できる。従来は阿賀野川を挟んで北側で東北系、南側で北陸系と考えられてきたが、状況はより複雑である。東北系は阿賀野川以北を中心に、魚沼地域の魚野川流域まで分布しており［安立2005］、一部信濃川右岸の南方にも及ぶ。一方で北陸北東部系土器は、阿賀野川以南の海岸平野部を中心に分布する。信濃系（箱清水式）は魚沼地域の信濃川上流域から頸城の山間部にかけて主体となっている。今回の地域区分では、一地域で比較的単一の土器様式が確認できるのは、阿賀北・柏崎平野・佐渡に加え、信濃川左岸でその可能性が高いほかは、複数の土器様式が確認できる。信濃川右岸でも阿賀野川流域にあたる古津八幡山遺跡では、細別時期での変遷は予想されるが、東北系と北陸北東部系がほぼ同数認められるばかりか、器形が東北系で調整が北陸的とされる「八幡山式」が存在している［渡邊2001］。

高地性集落・環濠集落との分布との関連については、北陸北東部系土器と東北系土器の接点となる信濃川右岸で確認例が多く、単一の土器様相の地域では少ない傾向にある点を指摘したい。

b）盛行時期と廃絶時期

1）中期

低地の環濠集落が2例確認されている。頸城・吹上遺跡、佐渡・平田遺跡で、環濠の掘削時期や埋没時期は明確でないが、共に中期中葉～後葉を主体とした集落で、いわゆる小松式系統の北陸系土器分布圏内の遺跡である点、玉作り生産が活発に行われた遺跡で、後期まで存続しない等の共通点がある。

2）後期

高地性集落、環濠集落の数量が飛躍的に増加している。以下、発掘調査が行われ、廃絶時期等がある程度、把握できる遺跡の状況を概観する。

高地性環濠集落：最も早く集落が築造されたのは古津八幡山遺跡［渡邊ほか2001・2004］で、1期後半頃である。山元遺跡や二ツ山山頂遺跡も当該期と考えられ、北部で成立が早い点が注目される。第1次の成立時期と考えたい。2期に入ると大平城遺跡［関・戸根1974］・経塚山遺跡［金子1999］・裏山遺跡［小池ほか2000］・斐太遺跡群［佐藤2005・2006など］などが成立している。第2次成立時期であり、最大の画期と考える。現状ではこの時期以降、新たに高地性環濠集落の築造例はない。

1～2期に成立した高地性環濠集落のうち、比較的規模が小さな大平城遺跡・経塚山遺跡・裏山遺跡・山元遺跡は短期間に集落が廃絶されており、3期までは継続しない。2期は第2次成立時期でもあり、第

1次廃絶時期にもあたる。これに対し規模が大きな古津八幡山遺跡や、斐太遺跡群は3期にも継続する。斐太遺跡群は谷を隔てた4地区で環濠が造営されており、このうち矢代山B地区の外環濠は2期、内環濠は3期で埋没しており、段階的に環濠が廃絶されている。これ以外の地区については明確でないが、上ノ平地区24号住居は5期である。環濠埋没後も集落が維持された可能性もあるが、現状では明確でない。情報が少ないものの、中小規模の高地性環濠集落の廃絶時期とは一致しない点を強調したい。これは古津八幡山遺跡も同様であり、3期には継続している。環濠出土土器の中には4期のものもあることから、当該期を環濠の廃絶時期と考えたい。

独立低丘陵環濠集落：西谷遺跡［滝沢ほか1992］は、高地性環濠集落の盛行時期と同様に2期に成立する。横山遺跡は中期後半の資料も多いが、弥生後期の土器は4期頃（一部、3期か）を主体としており、高地性環濠集落の成立時期とは異なる可能性が高い。また、両遺跡の環濠埋没時期は、いずれも5期である点も高地性環濠集落とは異なる。

低地環濠集落：釜蓋遺跡［笹沢ほか2008］1例のみである。後期前葉の土器も散見するが、主体は4期以降である。2条検出された環濠の廃絶時期は、1号環濠が4期で、2号環濠は5期である。成立時期は独立低丘陵上の横山遺跡に近く、廃絶時期も、高地性環濠集落の主体的な時期とは異なる。

環濠集落の廃絶時期：限られた情報での検討であるが、環濠集落は立地毎で成立・廃絶時期で差異がある。高地性環濠集落の成立時期は1・2期が主体であるのに対し、独立低丘陵の環濠集落は2期と4期、低地の環濠集落は4期で、序々に低地化の傾向が見て取れる。一方、環濠の廃絶時期も中小規模の高地性環濠集落（2期）⇒大規模環濠集落（3～4期）・低地の環濠集落（4・5期）⇒低丘陵の環濠集落（5期）と、低丘陵の環濠集落において遅くまで環濠が廃絶されない点を指摘したい。

高地性非環濠集落：情報量が少ないため顕著な傾向は見いだし難いが、成立時期は2期が最も多い。比較的広範囲に発掘調査が行われた遺跡は存続期間が長く、下馬場遺跡［尾崎2006］・大沢遺跡［甘粕ほか1982など］・滝ノ前遺跡［関1972、石丸ほか2003など］は5期まで続く。小規模なものも、越後では2期（ないしは1期）に成立して、短期間で終了する遺跡が多く［滝沢1995・1999］、3期が大きな断絶時期である。これは中小規模の高地性環濠集落と一致した動きと評価する[1]。

（3）県内の動向からみた山元遺跡

土器編年に大きな課題を残すが、山元遺跡の環濠廃絶時期は、県内の小規模な高地性環濠集落と一致すると考える。成立時期は同じく県北部の古津八幡山遺跡とほぼ一致する可能性が高く、途切れる環濠のデザインを含め、一致する点が少なくない点を指摘したい。

第27表　新潟県における後期環濠集落の存続期間

遺跡名		立地	規模	中期	1	2	3	4	5
山元		高地	小規模	…	……	■			
古津八幡山		高地	大規模		■	■	■	……	
大平城		高地	小規模		…	■			
経塚山		高地	小規模			■			
裏山		高地	小規模			■			
斐太遺跡群	百両山	高地	大規模			……	……		
	上ノ平・矢代山A	高地				……	?	?	……
	矢代山B	高地				……	■		
横山		低丘陵	小規模			■	……	■	■
西谷		低丘陵	小規模			……	……	……	■
釜蓋		低地	大規模		……	……		■	■

…… 土器・若干の遺構有り。
■ 主体時期

[1] 一方、地域的な特徴として、佐渡では遺構が明確でないものの、越後で遺跡数が増加する2期の遺跡は極めて少なく、越後で集落の断絶時期にあたる3期から遺跡数が多くなる。

要　　約

1　山元遺跡は、村上市（旧岩船郡神林村）大字下助渕字山元に所在する。標高は約40.0mである。

2　日本海沿岸東北自動車道建設に先立つ試掘調査で新発見した遺跡である。試掘確認調査の段階で遺跡の重要性が確認できたことから、本発掘調査は実施せず、現状保存が確定した。調査面積は実質で1,705㎡である。

3　国土地理院５万分の１「村上」では、「山元」と記された越後平野の北端の丘陵上に位置する。この地点は旧岩船潟の縁辺にあたる。眺望の良い丘陵で、南西側では越後平野が一望でき、天候により約80㎞西側の弥彦山・角田山をみることができる。

4　調査の結果、弥生時代中期後葉～後期後葉の遺構・遺物を確認した。

5　遺構として環濠、縦堀２条、土坑墓７基、埋甕１基、掘立柱建物１棟、土坑15基、溝２条、柱穴約500基等を確認した。周辺との比高が約40mの高地に位置しており、環濠が確認されたことから、高地性環濠集落であることが明らかとなった。

6　遺跡は大きくＡ～Ｃ地点に分かれる。それぞれの地点で検出された遺構、出土遺物量で違いが認められる。

7　Ａ地点では土坑墓７基、埋甕１基を確認した。包含層からの出土遺物が少ないこと、柱穴と思われるピットが少ないことから墓域と考える。Ｂ地点では竪穴建物は確認できなかったが、柱穴と考えるピットが多数確認されており、このうち組み合わせから掘立柱建物の可能性があるものが１棟確認された。また、Ａ・Ｃ地点に比して包含層からの出土遺物が多いこと、環濠・縦堀も確認されたことから居住域と考える。Ｃ地点は遺構・遺物共に希薄であり、生活の痕跡を若干残す地点と考える。

8　遺物は弥生時代後期の東北系弥生土器が主体で、中期後葉の東北系・北陸系、後期の北陸系・続縄文土器が確認されている。出土土器から、１～４期に区分が可能性である。山元１期は中期後葉、２期が後期前葉（新潟シンポ編年１期）、３期が後期前葉～後葉（同１期の新しい段階から２期の古い段階）、４期が後期後葉（同２期）である。時期比定が難しい土器が多いが、判別できるものでは、山元３～４期が最も多い。

9　１つの土坑墓からガラス小玉の完形品が68点出土しており注目される。

10　これまで、東北系土器分布圏では環濠集落が確認されていなかった。山元遺跡の発見により、東北系土器分布圏においても環濠集落の存在が明らかとなった。

11　また、これまで高地性環濠集落の日本海側最北は新潟市（旧新津市）古津八幡山遺跡であったが、山元遺跡は古津八幡山遺跡の更に約60㎞北側に位置することから、現状では日本海側最北の高地性環濠集落となる。

12　環濠（濠１～５）、縦堀の廃絶時期については今後も検討が必要であるが、縦堀２は山元３期、濠１は山元３～４期、濠５は４期を中心とした時期を想定している。

引用参考文献（例言で示したものを除く）

甘粕　健・小野　昭ほか　1982『大沢遺跡Ⅱ』　新潟大学考古学研究室

甘粕　健・小野　昭・川村浩司ほか　1993『越後山谷古墳』　新潟県巻町教育委員会・新潟大学考古学研究室

甘粕　健・橋本博文ほか　1996『磐舟浦田山古墳群発掘調査報告書』　新潟県村上市教育委員会・新潟大学考古学研究室

相澤清利　2002「東北地方における弥生時代後期の土器様相－太平洋側を中心として－」『古代文化』54－10　古代学協会

相原淳一　2002「天王山成立期に関する層位学的再検討」『宮城考古学』4　宮城県考古学会

青木　学・鈴木俊成ほか　2006『新潟県埋蔵文化財調査報告書第168集　中曽根遺跡』　新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

安立　聡　2005「魚沼地域における古墳出現期の様相」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』　新潟県考古学会

阿部朝衛　1995「新潟県北部地域における石器材料の調査」『帝京史学』第10号　帝京大学文学部史学科

阿部朝衛　1997 a「新潟県北部地域における縄文時代の石材使用とその背景」『帝京史学』第12号　帝京大学文学部史学科

阿部朝衛　1997 b「３遺物（３）石器　新潟県北部地域における縄文時代後・晩期の研究－新発田市中野遺跡の共同資料調査－」『北越考古学』第８号　北越考古学研究会

阿部友晴・潮田憲之・酒井亜紀・佐野陽子・高橋　優　2001「奥三面遺跡群周辺地域における石材調査結果」『新潟考古学談話会』第23号　新潟考古学談話会

猪狩忠雄　2000「福島県における弥生後期の土器編年」『東日本弥生時代後期の土器編年』第２分冊　東日本埋蔵文化財研究会福島県実行委員会・福島県立博物館

石川智紀・継　実・松井　智・山本友紀　2008『新潟県埋蔵文化財調査報告書第179集　中部北遺跡・桜林遺跡Ⅱ』　新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

石野博信　2001『邪馬台国の考古学』　吉川弘文館

石丸和正・金子優子・酒井亜紀・滝沢規朗・野田豊文・野水晃子・八木勝枝　2003「新潟県岩船郡域における弥生時代中期～後期にかけての様相－村上市砂山遺跡・滝ノ前遺跡を中心に－」『三面川流域の考古学』第２号　奥三面を考える会

石川日出志　1990「天王山式土器編年研究の問題点」『北越考古学』第３号　北越考古学会

石川日出志　1997「新潟県の石器組成の変遷」『農耕開始期の石器組成４』国立歴史博物館

石川日出志　2000a「天王山式土器中期説への反論」『新潟県考古学会』第11号　新潟県考古学会

石川日出志　2000b「南御山２式土器の成立と小松式土器との接触」『北越考古学』第11号　北越考古学会

石川日出志　2001「弥生後期湯舟沢式の系譜と広がり」『北越考古学』第12号　北越考古学会

石川日出志　2003「関東・東北地方の土器」『考古資料大観』第１巻　小学館

石川日出志　2004「弥生後期天王山式土器成立期における地域間関係」『駿台史学』第120号　駿台史学会

石田守之・酒井亜紀・滝沢規朗　2006「村上市滝ノ前遺跡の石器と土製品について」『三面川流域の考古学』第５号　奥三面を考える会

石原正敏　1996　「アメリカ式石鏃再考」『考古学と遺跡の保護』　甘粕健先生退官記念論集

磯部保衛　1996「新潟県神林村八幡山遺跡採集のアメリカ式石鏃と管玉」『北越考古学』第７号　北越考古学研究会

伊藤信雄　1950「東北地方の弥生式文化」『文化』第２巻第４号

潮田憲之　2002「５石器・石製品　Ｃ分類と分析（36）自然礫」『元屋敷遺跡Ⅱ（上段）』　新潟県朝日村教育委員会

大木直枝・中村五郎　1970「山草荷２式土器について」『信濃』22－９　信濃史学会

大越道正ほか　1990『福島県文化財調査報告書第242集　能登遺跡・南原Ｂ遺跡・村西遺跡・大村古墳群』　福島県教育委員会・福島県文化センター・日本道路公団
大森　勉　1986『新潟県糸魚川市後生山遺跡発掘調査概報』　新潟県糸魚川市教育委員会
岡本淳一郎　2003「「周溝を持つ建物」についての基礎的研究」『富山大学考古学研究室論集蜃気楼－秋山進牛先生古希記念－』　有限会社六一書房
小片　保・上原甲子郎　1972「新潟県村上市砂山遺跡」『日本考古学年報』20　日本考古学協会
小川忠明　1998「新穂村蔵王古墳集落遺跡」『新潟県考古学会第10回大会　研究発表・調査報告要旨』　新潟県考古学会
尾崎高宏　2005『新潟県埋蔵文化財調査報告書第152集　下馬場遺跡・細田遺跡』　新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
長田友也　2002「第Ⅴ章遺構・遺物６石器　U磨石類」『アチヤ平遺跡Ⅱ（上段)』　新潟県朝日村教育委員会
小野塚徹夫・会田哲郎・岡本郁栄・高橋　保　2002『新潟県埋蔵文化財調査報告書第109集　箕輪遺跡Ⅰ』　新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
折戸靖幸　1987『高松町中沼Ｃ遺跡』　石川県高松町教育委員会
春日真実　2002『新潟県埋蔵文化財調査報告書第116集　奈良崎遺跡』　新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
加藤　学　2001『新潟県埋蔵文化財調査報告書第106集　松影Ａ遺跡』　新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
金子拓男　1996「大化元年「越国奏上」についての検討」『越と古代の北陸』　古代王権の交流３　名著出版
金子正典　1999『内野手遺跡・経塚山遺跡　市内遺跡発掘調査報告書』　新潟県三条市教育委員会
金子正典・滝沢規朗・丸山一昭　1999「弥生後期」『新潟県の考古学』　高志書院
川上貞雄　1994「第１編　考古資料」『五泉市史』資料編１　原始・古代・中世　新潟市五泉市教育委員会
木本元治ほか　1991『福島県文化財調査報告書第191集　屋敷遺跡』　福島県教育委員会・福島県文化センター・日本道路公団
久々忠義・古川知明・大野　究・小黒智久・越前慶祐　2003「富山県古墳副葬品集成」『大境』第23号　富山考古学会
日下部善己　1983「環状石斧」『縄文文化の研究』７　雄山閣
小池義人・野水　仁・加藤　学・石田守之　2000『新潟県埋蔵文化財調査報告書第96集　裏山遺跡』　新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
肥塚隆保　1997『日本で出土した古代ガラスの歴史的変遷に関する科学的研究』
国立歴史博物館　1997『農耕開始期の石器組成』
小林貴郎　2006「第Ⅱ章遺跡の位置と環境　２地理的環境と自然立地」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第163集　西部遺跡Ⅲ』　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
小林隆幸　1992「原山遺跡」『長岡市史』資料編１　新潟県長岡市
小林正史　2003「黒斑からみた加賀の弥生土器の覆い型野焼き方法」『北陸古代土器研究』第10号
小林行雄・杉原荘介　1968『弥生土器集成　資料編』第１分冊
駒井和愛・吉田章一郎　1962『斐太』　慶友社
駒形敏朗　1987『横山遺跡』　新潟県長岡市教育委員会
酒井亜紀　2002「５石器・石製品　Ｃ分類と分析（５）石錐」『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書ⅩⅣ　元屋敷遺跡Ⅱ（上段)』　新潟県朝日村教育委員会
笹沢正史ほか　2006『吹上遺跡発掘調査報告書』　新潟県上越市教育委員会
笹沢正史・中村直人・小島幸雄ほか　2007『吹上遺跡範囲確認調査報告書』　新潟県上越市教育委員会
笹沢正史・大平理恵・中村直人　2008『釜蓋遺跡範囲確認調査報告書』　新潟県上越市教育委員会
佐藤庄一　2000「山形県における弥生後期の土器編年」『東日本弥生時代後期の土器編年』第２分冊　東日本埋蔵文

化財研究会福島県実行委員会・福島県立博物館
佐藤　慎ほか　2002『斐太歴史の里確認調査概要報告書』　斐太歴史の里調査団・新潟県新井市教育委員会
佐藤　慎ほか　2003『斐太歴史の里確認調査概要報告書Ⅱ』　斐太歴史の里調査団・新潟県新井市教育委員会
佐藤　慎　2005『斐太歴史の里確認調査報告書』　新潟県新井市教育委員会・斐太歴史の里調査団
佐藤　慎　2006『斐太歴史の里確認調査報告書Ⅱ』　新潟県新井市教育委員会・斐太歴史の里調査団
佐藤信行　1989「天王山式土器の成立と展開－いわゆる交互刺突文の系譜を中心に－」『「天王山式期をめぐって」の検討会資料』第１分冊
佐原　真　1999「日本・世界の戦争の起源」『戦いの進化と国家の生成』　東洋書林
佐原　真　2002「弥生時代の戦争」『古代を考える　稲・金属・戦争－弥生－』　吉川弘文館
(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団・(株)シン技術コンサル・国土交通省北陸地方整備局羽越河川国道事務所　2008『堂の前遺跡　現地説明会資料』
(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団・加藤建設株式会社・国土交通省北陸地方整備局羽越河川国道事務所　2008『村上市　下新保高田遺跡　現地説明会資料』
椎名仙卓1953「第一章第二節三１　宮の上住居跡」『磐舟－磐舟柵跡推定地調査報告書－　新潟県文化財調査報告第９』　新潟県教育委員会
品田高志ほか　1985『刈羽大平・小丸山』　柏崎市教育委員会
柴田昌児　2004「高地性集落と山住みの集落」『考古資料大観』第10巻　小学館
柴田昌児　2006「中・西部瀬戸内の高地性集落と山住みの集落」『古代文化』58巻第Ⅱ号　財団法人古代学協会
菅沼　亘　1993「Ⅵ章考察　２B高地性集落としての山谷弥生時代遺跡」『越後山谷古墳』　新潟県巻町教育委員会・新潟大学考古学研究室
鈴木俊成・北村　亮・伊予部倫夫・鈴木勘助　1990『高田遺跡　神林村埋蔵文化財調査報告第２』　新潟県神林村教育委員会
鈴木正博　1976「十王台式理解のために（２）」『常総台地』第８号　常総台地研究会
鈴木正博　2002ａ「「伊勢林前式」研究の漂流と救済の考古学－「土器ＤＮＡ関係基盤」から観た「伊勢林前式」併行の所謂「天王山式系」土器群－」『茨城県考古学会誌』14　茨城県考古学会
鈴木正博　2002ｂ「「十王台式」と「明戸式」－茨城県遺蹟から見た「十王台１式」に並行する所謂「天王山式系」土器型式の実態－」『婆良岐考古』24　婆良岐考古同人会
須藤　隆　1970「秋田県大曲市宇津ノ台遺跡の弥生式土器について」『文化』33－３
須藤　隆　1987「山草荷式」『弥生文化の研究』第４巻　雄山閣
関　雅之　1971「新潟県における弥生文化－特にその様相の問題点－『新潟史学』４　新潟史学会
関　雅之　1972『滝ノ前遺跡　新潟県村上市滝ノ前遺跡緊急調査概報』　新潟県村上市教育委員会
関　雅之・戸根与八郎　1974「大平城跡・双ツ塚調査報告」『北陸自動車道埋蔵文化財調査報告書　埋蔵文化財緊急調査報告書第３』　新潟県教育委員会
高島好一　1998『平窪諸荷遺跡』　福島県いわき市教育委員会
高橋　保　1979「第６章　総括２．土器について」.『新潟県埋蔵文化財調査報告書第19集　下谷地遺跡』　新潟県教育委員会
高橋　保・斉藤基生ほか　1979『新潟県埋蔵文化財調査報告書第19集　下谷地遺跡』　新潟県教育委員会
高橋　保・戸根与八郎ほか　1992『新潟県埋蔵文化財調査報告書第28集　木崎山遺跡』　新潟県教育委員会
高橋　保・田海義正・坂上有紀　2000『新潟県埋蔵文化財調査報告書第98集　平田遺跡』　新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
高橋保雄　1992　「石器類」『関越自動車道関係報告書五丁歩・十二木遺跡』　新潟県教育委員会
滝沢規朗　1995「古墳出現前後の集落の動向」『研究紀要』　(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
滝沢規朗　1999「第３章弥生時代・古墳時代 第３節集落」『新潟県の考古学』　新潟県考古学会編　高志書院
滝沢規朗　2000「新潟県における弥生後期の土器編年」『東日本弥生時代後期の土器編年』第１分冊　東日本埋蔵文

化財研究会福島県実行委員会・福島県立博物館
滝沢規朗　2005 a「越後・佐渡における弥生時代後期～古墳時代前期の「く」字甕について」『三面川流域の考古学』第４号　奥三面を考える会
滝沢規朗　2005 b「土器の分類と変遷－いわゆる北陸系を中心に－」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』第１分冊　新潟県考古学会
滝沢規朗　2005 c「定型化した古墳出現以前（６期まで）の動向」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』第１分冊　新潟県考古学会
滝沢規朗　2007「弥生時代後期における北陸系・東北系・八幡山式の野焼き方法（予察）」『新潟考古学談話会』第32号　新潟考古学談話会
滝沢規朗　2008「旧紫雲寺潟縁辺の西川内南遺跡出土土器について－阿賀北における古墳時代前期の土器検討－」『三面川流域の考古学』第６号　奥三面を考える会
滝沢規朗・春日真実・吉井雅勇ほか　1992『西谷遺跡発掘調査報告書』　新潟県刈羽村教育委員会
滝沢規朗・高橋保雄ほか　2002「石器・石製品」『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書ⅩⅣ元屋敷遺跡Ⅱ（上段）』新潟県朝日村教育委員会
田嶋明人　2007「法仏式と月影式」『石川県埋蔵文化財情報』第18号　（財）石川県埋蔵文化財センター
田中耕作　1991「村尻遺跡出土の「ねかせ」状態の焼成粘土塊」『北越考古学』第４号　北越考古学研究会
田中　靖　1988『耳取遺跡等範囲確認調査報告書』　新潟県見附市教育委員会
田中　靖　1988「北陸における天王山式系土器」『新潟県考古学談話会』第２号　新潟考古学談話会
田中　靖　1989「北陸地方の天王山式土器」『「天王山式期をめぐって」の検討会資料』　弥生時代研究会
田中　靖・丸山一昭　1999「弥生時代中期後半」『新潟県の考古学』　高志書院
田辺早苗　1991『長松遺跡発掘調査報告書　神林村埋蔵文化財報告第３』　新潟県神林村教育委員会
田辺早苗・土生朗治　2001『衣田遺跡・道上遺跡　神林村埋蔵文化財報告第９』　新潟県神林村教育委員会・山武考古学研究所
田辺早苗・大賀　健・長谷川一郎　2001『城田遺跡　神林村埋蔵文化財報告第10』　新潟県神林村教育委員会・山武考古学研究所
田辺早苗・福山俊彰・千葉孝之・大賀　健　2001『城田遺跡・引地遺跡　神林村埋蔵文化財報告第12』　新潟県神林村教育委員会・山武考古学研究所
田辺早苗・大賀　健　2001『六百地遺跡　神林村埋蔵文化財報告第13』　新潟県神林村教育委員会・山武考古学研究所
田辺早苗・松田政基　2002『金曲遺跡　神林村埋蔵文化財報告第14』　新潟県神林村教育委員会・山武考古学研究所
田辺早苗　2003『千作り遺跡・平林城跡・千眼寺跡・持体遺跡　神林村埋蔵文化財報告第16』　新潟県神林村教育委員会
田辺早苗・松田政基・野平伸一　2003『高田遺跡　神林村埋蔵文化財報告第17』　新潟県神林村教育委員会・山武考古学研究所
立木宏明　2001 a「石器」『八幡山遺跡発掘調査報告書』　新潟県新津市教育委員会
立木宏明　2001 b「八幡山遺跡の石器について」『八幡山遺跡発掘調査報告書』　新潟県新津市教育委員会
辻　秀人ほか　1984『福島県立博物館調査報告第８集　明戸遺跡発掘調査概報』　福島県立博物館
坪井清足　1953「福島県天王山遺跡の弥生土器－東日本弥生文化の性格－」『史林』36－１　史学研究会
鶴巻康志・磯部保衛　1990「岩船郡神林村衣田遺跡の弥生土器と土師器」『北越考古学』第３号　北越考古学研究会
寺沢　薫　1999「環濠の系譜」『古代学研究』第146号　古代学協会
寺沢　薫　2000『王権誕生　日本歴史02』　講談社
寺村光晴　1991「第５章京田・諏訪田遺跡　第５節諏訪田遺跡（地区）　第６項その他の遺物」『寺泊町史』資料編１　原始・古代・中世　寺泊町
富樫雅彦　2003「弥生・古墳時代のガラス」『考古資料大観』第６巻　小学館

鳥居美栄ほか　1999『藤ヶ森遺跡』　新潟県長岡市教育委員会
新潟県考古学会　2005『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』
新潟県農地部農村総合整備課1989『土地分類基本調査　村上』
新潟市　1994「第３章弥生時代　六地山遺跡」『新潟市史』資料編１　原始古代中世
中村五郎　1960「福島県天ケ遺跡について」『考古学雑誌』第46巻第３号
中村五郎　1976「東北地方南部の弥生式土器編年」『東北考古学の諸問題』
日本考古学協会新潟大会実行委員会　1993『東日本における古墳出現過程の再検討』
禰宜田佳男　1998「石器から鉄器へ」『古代国家はこうして生まれた』　角川書店
禰宜田佳男　2002「遺物組成からみた高地性集落の諸類型」『古代文化』第54巻第４号　（財）古代学協会
野田豊文　2001「岩崩遺跡」『三面川流域の考古学』第１号　奥三面を考える会
野田豊文　2003「新潟県岩船郡域における弥生時代中期～後期にかけての様相　２　土器について　Ａ．東北系について」『三面川流域の考古学』第２号　奥三面を考える会
野田豊文　2005「三面川流域における弥生時代の終わり－天王山式から見た新潟県内弥生時代後期の様相－」『三面川流域の考古学』第４号　奥三面を考える会
野田豊文　2006「新潟県における「天王山式土器」について」『新潟考古学談話会』第31号　新潟考古学談話会
野田豊文・野水晃子　2005「阿賀北の様相」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』新潟県考古学会
長谷川二三夫・本間桂吉　1989「三条市二ツ山遺跡と表採遺物について」『新潟考古学談話会会報』第３号
秦　昭繁　2001「新潟県北部地域の石器石材環境（２）－関川村獅子舞岩の珪質頁岩分析と石材流通構造－」『北越考古学』第12号　北越考古学研究会
広井　造・小林隆幸　1992「横山遺跡」『長岡市史』資料編１　新潟県長岡市
藤田定一　1951ａ『昭和25年における天王山遺跡の調査報告（第１報）』
藤田定一　1951ｂ『天王山遺跡の出土品について』
前川雅夫・沢田　敦ほか　2006『新潟県埋蔵文化財調査報告書第162集　道端遺跡Ⅴ』　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
松木武彦　1995「弥生時代の戦争と日本列島社会の発展過程」『考古学研究』第42巻３号
増山　仁　1989「小松式の再検討－小松市八日市地方遺跡出土土器の再整理を通して－」『北陸の考古学Ⅱ』　石川考古学研究会
丸山一昭・田中　靖　1998『松ノ脇遺跡』　新潟県和島村教育委員会
水澤幸一ほか　1998『兵衛遺跡・四持遺跡』　新潟県中条町教育委員会
水野清一・小林行雄　　1950「アメリカ式石鏃」『図解考古学辞典』東京創元社
村上市史編纂委員会　2000『村上市史』別編　絵図・地図・年表　新潟県村上市
森岡秀人　1996「弥生時代抗争の東方波及」『考古学研究』第43巻３号　考古学研究会
八重樫由美子　2004『新潟県寺泊町屋鋪塚遺跡発掘調査報告書』　新潟県寺泊町教育委員会
八木勝枝　2002「４土製品　Ｃ焼成粘土塊」『元屋敷遺跡Ⅱ（上段）』本文編　新潟県朝日村教育委員会
安田　稔・宮田安志・福田秀生　2005『福島県文化財調査報告書第430集　荒屋敷遺跡（４次）桜町遺跡（１次）』福島県教育委員会・財団法人福島県文化振興事業団・国土交通省東北地方整備局郡山国道事務所
渡邊忠雄　2001「三条市二ツ山山頂遺跡の土器について」『越佐補遺些』第６号
渡邊朋和　2001「第Ⅶ章まとめ　１弥生土器」『八幡山遺跡発掘調査報告書』　新潟県新津市教育委員会
渡邊朋和・立木宏明・山田貴子・阿部泰之　2001『八幡山遺跡発掘調査報告書』　新潟県新津市教育委員会
渡邊朋和・立木宏明・高野裕子　2004『八幡山遺跡群発掘調査報告書－第11・12・13・14次調査－』　新潟県新津市教育委員会
渡邊朋和　2005「新潟市古津八幡山遺跡の調査について」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』第１分冊　新潟県考古学会

観察表

1．遺構観察表

【凡例】

1．T·Noはトレンチ番号である。

2．法　量　（　）内は現状で確認した数値で、復元値ではない。

地点	トレンチNo	主な図版	種別	法量(cm) 長径(長軸·幅)	短径(短軸)	深さ	確認面標高(m)	底面標高(m)	出土遺物	備考
A	1	4	SK1	(166)	86	20	39.52	39.32	284·353～424	土坑墓
A	1	4	SK2	90	66	24	39.58	39.34		土坑墓
A	1	4	SK3	147	114	24	39.42	39.18		土坑墓
A	1	4	SK4	100	52	26	39.48	39.22		
A	1	4	SK5	148	80	20	39.40	39.20		土坑墓
A	1	4	P1	20	18	47	39.42	38.93		
A	1	4	P2	48	40	39	39.45	39.05		
A	1	4	P3	36	28	84	39.40	38.56		
A	2	4	SK1	112	64	18	39.22	39.04		土坑墓
A	2	4	P1	32	26	19	38.95	38.76		
A	2	4	P2	18	15	26	38.91	38.65		
A	2	4	P3	14	12	25	38.93	38.68		
A	2	4	P4	30	30	6	38.96	38.90		
A	3	5	SK1	(76)	55	26	38.80	38.54	1·2	土坑墓
A	3	5	SK2	155	72	30	38.92	38.62		土坑墓
A	3	5	埋甕	15	15	23	39.15	38.92	4	
A	3	5	P1	14	12	38	38.53	38.16		
A	3	5	P2	22	14	38	38.61	38.23		
A	3	5	P3	18	14	10	38.63	38.52		
A	3	5	P4	18	14	9	38.63	38.54		
A	3	5	P5	16	14	20	38.59	38.39		
A	3	5	P6	54	50	20	38.52	38.32	3	
A	52	5	P1	30	23	15	38.38	38.23		
A	52	5	P2	35	30	20	38.33	38.13		
A	9	4	P1	18	18		38.92	未掘		
A	9	4	P2	14	12		39.08	未掘		
A	9	4	P3	15	13		39.16	未掘		
A	9	4	P4	12	－		39.13	未掘		
A	17	5	P1	38	－	35	37.70	37.35		
A	17	5	SK2	56	40	18	37.03	36.85		
A	17	5	P2	20	19	14	37.02	36.88		
A	17	5	P3	18	15	15	37.01	36.86		
A	17	5	P4	22	17	23	37.01	36.78		
C	37	5	P1	18	14	12				確認面標高は約33.4～33.6m
C	37	5	P2	12	10	12				
C	37	5	P3	10	8	20				
C	38	5	P1	12	12	20				
B	18	6	P1	20	10	19	38.19	38.00	15	
B	18	6	P3	35	25	24	38.28	38.04		
B	18	6	P5	26	16	35	38.27	37.92		
B	18	6	P7	29	27	21	38.29	38.08		
B	18	6	P8	31	25	29	38.27	37.98		
B	18	6	P10	24	24	13	38.28	38.15		
B	18	6	P14	15	14	6	38.22	38.16		
B	18	6	P15	26	23	12	38.20	38.08		
B	18	6	P18	36	34	18	38.19	38.01		
B	18	6	P19	24	22	27	38.24	37.97		
B	18	6	P21	20	19	20	38.20	38.00		
B	18	6	P23	21	18	39	38.24	37.85		
B	18	6	P24	20	12	19	38.25	38.06		
B	18	6	P25	14	12	21	38.24	38.03		
B	18	6	P26	20	19	31	38.26	37.95		
B	18	6	P27	35	30	47	38.23	37.76		
B	18	6	P28	23	20	35	38.22	37.87		
B	18	6	P29	18	18	35	38.23	37.88		
B	18	6	P30	20	17	34	38.22	37.88		
B	18	6	P31	28	24	19	38.15	37.96		
B	18	6	P32	30	28	19	38.13	37.94		
B	18	6	P33	27	21	6	38.12	38.06		
B	18	6	P34	27	25	24	38.19	37.95		
B	18	6	P35	14	14	17	38.20	38.03		
B	18	6	P37	15	14	52	38.19	37.67		
B	18	6	P38	18	10	26	38.23	37.97		
B	18	6	P39	22	20	53	38.24	37.71		
B	18	6	P40	16	16	25	38.23	37.98		
B	18	6	P41	22	18	18	38.24	38.06		
B	18	6	P42	22	22	29	38.25	37.96		
B	18	6	P45	24	22	30	38.21	37.91		
B	18	6	P46	20	17	59	38.23	37.64		
B	18	6	P47	27	23	45	38.24	37.79		
B	18	6	P48	21	16	27	38.16	37.89		
B	18	6	P50	25	22	15	38.19	38.04		
B	18	6	P51	16	14	19	38.19	38.00		
B	18	6	P52	19	15	14	38.20	38.06		
B	18	6	P54	18	17	28	38.19	37.91		
B	18	6	P55	12	10	14	38.19	38.05		
B	18	6	P56	26	24	22	38.18	37.96		
B	18	6	P59	34	25	27	38.16	37.89		
B	18	6	P60	26	26	27	38.15	37.88		
B	18	6	P61	49	26	15	38.12	37.97		
B	18	6	P62	20	15	25	38.15	37.90		
B	18	6	P63	15	14	16	38.18	38.02		
B	18	6	P64	18	14	12	38.17	38.05		
B	18	6	P66	24	18	37	38.17	37.80		
B	18	6	P67	26	－		38.14	未掘		
B	18	6	P68	14	12	33	38.12	37.39		
B	18	6	P69	13	12	37	38.17	37.80		
B	18	6	P70	14	12	23	38.17	37.94		
B	18	6	P71	16	14	12	38.16	38.04		
B	18	6	P72	18	16		38.12	未掘		
B	18	6	P73	12	10	17	38.15	37.98		
B	18	6	P74	25	20	24	38.13	37.89		
B	18	6	P75	17	15	10	38.13	38.03		
B	18	6	P76	23	22	22	38.13	37.91		
B	18	6	P77	16	16	36	38.13	37.77		
B	18	6	P80	29	22	29	38.08	37.79		
B	18	6	P81	29	－	23	38.06	37.83		
B	18	6	P82	26	17	16	38.08	37.92		
B	18	6	P83	25	20	16	38.08	37.92		
B	18	6	P84	14	14	8	38.10	38.02		
B	18	6	P85	17	16	39	38.11	37.72		
B	18	6	P86	12	12	11	38.11	38.00		
B	18	6	P87	19	18	34	38.12	37.78		
B	18	6	P89	20	19	11	38.17	38.06		
B	18	6	P90	38	22	22	38.19	37.97		
B	18	6	P91	16	14	21	38.17	37.96		
B	18	6	P93	24	17	12	38.19	38.06		
B	18	6	P94	16	14	23	38.19	37.96		
B	18	6	P96	16	15	21	38.12	37.91		
B	18	6	P97	21	19	36	38.09	37.73		
B	18	6	P98	50	－	41	38.07	37.66		
B	18	6	P99	35	31	29	38.12	37.83		
B	18	6	P100	22	13	－	38.16	未掘		
B	18	6	P101	21	20	27	38.20	37.93		
B	18	6	P102	26	19	26	38.21	37.95		
B	18	6	P103	20	19	37	38.22	37.85	310	
B	18	6	P104	14	14	11	38.20	38.09		
B	18	6	P105	18	13	18	38.22	38.04		
B	18	6	P106	18	－	9	38.40	38.31		
B	18	6	P107	18	－	26	38.40	38.14		
B	18	6	P108	27	21	25	38.35	38.10		
B	18	6	P110	30	26	9	38.33	38.24		
B	18	6	P111	23	18	18	38.26	38.08		
B	18	6	P112	14	11	12	38.25	38.13		
B	18	6	P113	20	18	29	38.23	37.94		
B	18	6	P114	20	17	30	38.24	37.94		
B	18	6	P115	38	29	34	38.23	37.89		
B	18	6	SK116	71	－		38.17			
B	18	6	P119	29	22	10	38.14	38.00		
B	18	6	P120	41	34	19	38.06	37.93		
B	18	6	P121	18	14		38.03			
B	18	6	P122	22	18	22	38.06	37.84		
B	18	6	P123	25	20	18	38.02	37.84		
B	18	6	P124	16	13	29	37.99	37.70		
B	18	6	P126	22	－	29	37.95	37.66		
B	18	6	P127	25	－	46	37.96	37.50		
B	18	6	P128	42	－	23	37.93	37.70		
B	18	6	P131	16	12	21	38.18	37.97		
B	18	6	P132	14	14	－		未掘		
B	18	6	P133	26	26	－		未掘		
B	18	6	P134	14	14	－		未掘		
B	18	6	P135	16	－	－		未掘		
B	18	6	P136	22	20	－		未掘		
B	18	6	P137	16	16	－		未掘		
B	18	6	P138	12	12	－		未掘		
B	18	6	P139	16	16	－		未掘		
B	18	6	P140	20	16	－		未掘		
B	18	6	P141	16	16	－		未掘		
B	18	6	P142	12	10	－		未掘		
B	18	6	P143	16	16	－		未掘		
B	18	6	P144	12	10	－		未掘		
B	18	6	P145	16	16	－		未掘		
B	18	6	SD146	80		－		未掘		

地点	トレンチNo	主な図版	種別	法量(cm) 長径(長軸・幅)	短径(短軸)	深さ	確認面標高(m)	底面標高(m)	出土遺物	備考
B	18	6	SK1	168		−	38.16	未掘	13・14	
B	18	6	SK2	96	36	17	38.23	38.06	12・316・330	
B	18	6	SK3	192	72	22	38.15	37.97		
B	33	6	P1	16	16		38.08	未掘		
B	33	6	P2	16	15		38.14	未掘		
B	33	6	P3		18		38.29	未掘		
B	33	6	P4	26	26		38.23	未掘		
B	33	6	P5	17	15		38.26	未掘		
B	33	6	P6	12	12		38.35	未掘		
B	33	6	P7	24	20	25	38.53	38.28		
B	33	6	P8	26	25	29	38.61	38.32		
B	33	6	P9	11	10		38.46	未掘		
B	33	6	P10		20		38.50	未掘		
B	33	6	P11	14	14		38.68	未掘		
B	33	6	P12	14	12		38.63	未掘		
B	33	6	P13	46	−		37.80	未掘		
B	33	6	P14	15	13		38.36	未掘		
B	33	6	P15		−		38.38	未掘		
B	19	7	SK1	99	60	12	39.41	39.29		
B	19	7	P1	24	20	36	39.27	38.91		
B	19	7	P2	16	16	22	39.29	39.07		
B	19	7	P3	30	27	31	39.29	38.98		
B	19	7	P4	32	28	30	39.32	39.02		
B	19	7	P5	24	24	27	39.32	39.05		
B	19	7	P6	30	24	32	39.31	38.99		
B	19	7	P7	48	24	9	39.34	39.25		
B	19	7	P8	26	26	36	39.34	38.98		
B	19	7	P9	19	18	19	39.35	39.16		
B	19	7	P10	22	18	17	39.32	39.15		
B	19	7	P11	20	20	21	39.31	39.10		
B	19	7	P12	16	16	24	39.33	39.09		
B	19	7	P13	20	18	19	39.31	39.12		
B	19	7	P14	22	22	15	39.38	39.23		
B	19	7	P15	20	20	47	39.34	38.86		
B	19	7	P16	20	16	18	39.41	39.23		
B	19	7	P17	22	20	7	39.35	39.28		
B	19	7	P18	19	17	8	39.38	39.30		
B	19	7	P19	20	17	34	39.42	39.08		
B	19	7	P20	19	18	41	39.45	39.04		
B	19	7	P21	22	20	20	39.48	39.28		
B	19	7	P22	18	17	24	39.53	39.29		
B	19	7	P23	20	17	15	39.35	39.20		
B	19	7	P24	16	16	11	39.32	39.21		
B	19	7	P25	14	14	10	39.33	39.23		
B	19	7	P26	14	12	5	39.33	39.28		
B	19	7	P27	15	15	7	39.35	39.28		
B	19	7	P28	19	18	5	39.34	39.29		
B	19	7	P29	16	13	17	39.40	39.23		
B	19	7	P30	20	18	19	39.38	38.29		
B	19	7	P31	12	8	5	39.35	39.30		
B	20	7	P1	16	16	24	39.24	39.00	40・41	
B	20	7	P2	16	16	18	39.46	39.28		
B	20	7	P3	12	12	10	39.45	39.35		
B	20	7	P4	20	20	22	39.42	39.20		
B	20	7	P5	16	−	10	39.38	39.28		
B	20	7	P6	32	22	20	39.36	39.16		
B	20	7	P7	18	16	18	39.31	39.13		
B	20	7	P8	24	22	24	39.26	39.02		
B	20	7	P9	46	24	22	39.26	39.04		
B	20	7	P10	15	13	14	39.25	39.11		
B	20	7	P11	16	16	20	39.24	39.04		
B	20	7	P12	16	−	22	39.22	39.00		
B	20	7	P13	18	18	18	39.20	39.02		
B	20	7	P14	−	20	20	39.17	38.97		
B	20	7	P15	−	28	12	39.10	38.98		
B	20	7	P16	22	−	18	39.10	38.92		
B	20	7	P17	−	28	14	39.08	38.94		
B	20	7	P18	40	−	8	39.08	39.00		
B	20	7	P19	−	25	18	39.04	38.88		
B	20	7	P20	40	−	22	39.04	38.82		
B	20	7	P21	−	34	20	39.02	38.82		
B	20	7	P22	16	−	58	38.72	38.14		
B	20	7	縦堀2	184		70	38.56	37.86	42～47・279・285・289・290・293・301・307・311	C14資料4
B	68	8	P1	40			38.51	未掘		
B	68	8	P2	38			38.53	未掘		
B	68	8	P3	26	24		38.53	未掘		
B	68	8	P4	20	20		38.47	未掘		
B	68	8	P5	16	−		38.43	未掘		
B	68	8	P6	16	16		38.28	未掘		
B	68	8	P7	20	20		38.15	未掘		
B	68	8	P8	20	16		38.08	未掘		
B	68	8	P9	−	20		38.79	未掘		

地点	トレンチNo	主な図版	種別	法量(cm) 長径(長軸・幅)	短径(短軸)	深さ	確認面標高(m)	底面標高(m)	出土遺物	備考
B	68	8	P10	16	16		38.76	未掘		
B	68	8	P11	28	24		38.77	未掘		
B	68	8	P12	24	20		38.80	未掘		
B	68	8	P13	20	20		38.83	未掘		
B	68	8	P14	12	12		38.85	未掘		
B	68	8	P15	12	12		38.85	未掘		
B	68	8	P16	−	22		38.83	未掘		
B	68	8	P17	18	16		38.87	未掘		
B	68	8	P18	−	24		38.87	未掘		
B	68	8	P19	24	22		38.86	未掘		
B	68	8	P20	42	22		38.83	未掘		
B	68	8	P21	14	14		38.80	未掘		
B	68	8	P22	12	12		38.76	未掘		
B	68	8	P23	16	−		39.04	未掘		
B	68	8	P24	14	10		38.98	未掘		
B	68	8	P25	22	12		38.99	未掘		
B	68	8	P26	−	24		38.98	未掘		
B	68	8	P27	14	14		39.02	未掘		
B	68	8	P28	16	12		38.99	未掘		
B	68	8	P29	18	16		38.98	未掘		
B	68	8	P30	22	20		38.95	未掘		
B	68	8	P31	16	16		38.91	未掘		
B	68	8	P32	−	16		38.87	未掘		
B	68	8	P33	14	12		38.85	未掘		
B	68	8	P34	10	10		38.82	未掘		
B	68	8	P35	20	18		38.81	未掘		
B	68	8	P36	20	18		38.80	未掘		
B	68	8	P37	14	12		38.74	未掘		
B	68	8	P38	12	8		38.70	未掘		
B	68	8	P39	14	12		38.68	未掘		
B	68	8	P40	−	28		38.60	未掘		
B	68	8	P41	20	18		38.43	未掘		
B	68	8	P42	12	10		38.23	未掘		
B	68	8	P43	−	16		38.24	未掘		
B	68	8	P44	−	20		38.17	未掘		
B	68	8	P45	36	28		38.18	未掘		
B	68	8	P46	16	14		38.77	未掘		
B	68	8	P47	16	16		38.73	未掘		
B	68	8	P48	14	12		38.69	未掘		
B	68	8	P49	18	−		38.71	未掘		
B	68	8	P50	12	12		38.70	未掘		
B	68	8	P51	24	18		38.70	未掘		
B	68	8	P52	18	16		38.70	未掘		
B	68	8	P53	24	20		38.67	未掘		
B	68	8	P54	14	14		38.68	未掘		
B	68	8	SK55	84	−		38.61	未掘		
B	68	8	P56	16	16		38.58	未掘		
B	68	8	P57	14	14		38.65	未掘		
B	68	8	P58	16	16		38.58	未掘		
B	68	8	P59	18	18		39.15	未掘		
B	68	8	P60	32	24	8	39.06	38.98		
B	68	8	P61	22	16	18	38.93	38.75		
B	68	8	P62	18	18	20	38.88	38.68		
B	68	8	P63	22	22	17	38.85	38.68		
B	68	8	P64	24	18	10	39.14	39.04		
B	68	8	P65	20	16		39.04	未掘		
B	68	8	P66	20	18		39.01	未掘		
B	68	8	P67	42	36		39.12	未掘		
B	68	8	P68	24	18		39.12	未掘		
B	68	8	SK69	88	−		39.10	未掘		
B	68	8	P70	32	24		39.02	未掘		
B	68	8	P71	28	20		38.95	未掘		
B	68	8	P72	20	20		39.00	未掘		
B	68	8	P73	12	12		39.04	未掘		
B	68	8	P74	12	−		39.07	未掘		
B	68	8	P75	28	−		39.03	未掘		
B	68	8	P76	24	24		39.00	未掘		
B	68	8	P77	22	18		38.94	未掘		
B	68	8	P78	14	−		38.85	未掘		
B	68	8	P79	52	52		39.18	未掘		
B	68	8	SK80	120	−		39.22	未掘		
B	68	8	P81	36	−		39.16	未掘		
B	68	8	P82	24	20		39.12	未掘		
B	68	8	P83	16	14		39.07	未掘		
B	68	8	P84	28	22		39.01	未掘		
B	68	8	SK85	54	52		38.94	未掘		
B	68	8	P86	20	20		39.08	未掘		
B	68	8	P87	16	16		39.11	未掘		
B	68	8	P88	20	15		39.12	未掘		
B	68	8	P89	20	16		39.13	未掘		
B	68	8	P90	20	20	10	38.83	38.73		
B	68	8	P91	22	20	20	38.85	38.65		
B	68	8	P92	38	−	46	38.87	38.41		
B	34	8	P1	32	28	12	39.07	38.95		
B	34	8	P2	20	20	14	39.09	38.95		

地点	トレンチNo	主な図版	種別	法量(cm) 長径(長軸・幅)	短径(短軸)	深さ	確認面標高(m)	底面標高(m)	出土遺物	備考
B	21	9	P1	20	20	40	39.40	39.00		
B	21	9	P2	16		38	39.50	39.12		
B	21	9	P3	18	18	28	39.60	39.32		
B	21	9	P4	24	20	30	39.50	39.20		
B	21	9	P5	34	24	30	39.50	39.20		
B	21	9	縦溝1	170		24	39.50	39.26	67·68	
B	22	9	P1	20	16	16	39.60	39.44		
B	22	9	P2	23	18	35	39.57	39.22		
B	22	9	P3	28	26	8	39.54	39.42		
B	22	9	P5	23	22	18	39.57	39.39		
B	22	9	P6	22	18	38	39.50	39.12		
B	22	9	P7	30	24	12	39.45	39.33		
B	22	9	P8	(62)		9	39.42	39.33		
B	22	9	P9	24	21	27	39.61	39.34		
B	22	9	P10	(26)	—	27	39.46	39.19		
B	22	9	P11	24	18	19	39.50	39.31		
B	22	9	P12	26	24	10	39.61	39.51	74	
B	22	9	P13	22	20	22	39.62	39.40		
B	22	9	P15	29	23	39	39.62	39.23		
B	22	9	P16	17	16	26	39.64	39.38		
B	22	9	P17	27	25	20	39.64	39.44		
B	22	9	P18	24	22	19	39.65	39.46		
B	22	9	P19	36	22	39	39.64	39.15		
B	22	9	P20	26	24	34	39.64	39.30		
B	22	9	P22	21	18	22	39.62	39.40		
B	22	9	P23	35	28	18	39.49	39.31		
B	22	9	P24	24	24	43	39.47	39.04	75	
B	22	9	P25	32	30	42	39.47	39.05		
B	22	9	P26	34	28	30	39.62	39.32		SB1の柱穴
B	22	9	P27	31	26	46	39.62	39.16		
B	22	9	P28	28	22	18	39.62	39.44		
B	22	9	P29	22	20	32	39.63	39.31		
B	22	9	P30	34	28	3	39.37	39.34		
B	22	9	P31	20	14	30	39.63	39.33		
B	22	9	P32	18	18	23	39.64	39.41		
B	22	9	P33	40	34	23	39.50	39.27		
B	22	9	P34	36	26	20	39.50	39.30		
B	22	9	P35	30	24	53	39.50	38.97		
B	22	9	P36	47	32	56	39.52	38.96		
B	22	9	P37	28	24	22	39.37	39.15		
B	22	9	P38	94	62	29	39.59	39.30		
B	22	9	P39	38	28	29	39.58	39.29		SB1の柱穴
B	22	9	P40	22	20	22	39.63	39.41		
B	22	9	P41	78	58	17	39.63	39.46		
B	22	9	P42	96	(58)	33	39.60	39.27		
B	22	9	P43	44	34	30	39.59	39.29	346	
B	22	9	P44	24	18	17	39.69	39.52		
B	22	9	P45	18	18	23	39.70	39.47		
B	22	9	P46	18	14	18	39.71	39.53		
B	22	9	P47	22	21	21	39.69	39.48		
B	22	9	P48	36	28	8	39.66	39.58	321	
B	22	9	P49	38	30	35	39.64	39.29		
B	22	9	P50	26	21	23	39.71	39.48		
B	22	9	P51	26	24	46	39.74	39.28		SB 1 の柱穴
B	22	9	P52	46	26	31	39.75	39.44		
B	22	9	SK53	124	94	33	39.72	39.39		
B	22	9	P54	26	21	36	39.67	39.31		SB 1 の柱穴
B	22	9	P55	16	16	33	39.57	39.22		
B	22	9	P56	23	20	11	39.58	39.47		
B	22	9	P57	20	15	18	39.59	39.41		
B	22	9	P58	22	20	11	39.58	39.47		
B	22	9	P59	20	16	11	39.58	39.47		
B	22	9	P60	34	30	32	39.61	39.29		
B	22	9	P61	24	22	26	39.63	39.37		
B	22	9	P62	38	27	17	39.58	39.41		
B	22	9	P63	47	43	20	39.54	39.34		
B	22	9	P64	50	30	15	39.56	39.41		
B	22	9	P65	31	27	8	39.56	39.48		
B	22	9	P66	20	14	2	39.56	39.54		
B	22	9	P67	22	18	16	39.56	39.40		
B	22	9	P68	32	26	15	39.55	39.40		
B	22	9	P70	17	14	15	39.57	39.42		
B	22	9	P71	28	27	9	39.60	39.51		
B	22	9	P72	20	20	18	39.61	39.43		
B	22	9	P73	22	22	13	39.59	39.46		
B	22	9	P74	(52)	—	43	39.66	39.23	318	
B	22	9	P75	20	17	12	39.52	39.40		
B	22	9	P76	22	22	47	39.51	39.04		
B	22	9	P77	20	18	11	39.55	39.44	76	
B	22	9	P78	20	16	8	39.52	39.44		
B	22	9	P79	22	22	33	39.60	39.27		
B	22	9	P80	18	16	28	39.55	39.27		
B	22	9	P81	29	24	29	39.61	39.32		
B	22	9	P82	28	26	15	39.59	39.44		
B	22	9	P83	29	26	28	39.58	39.30		

地点	トレンチNo	主な図版	種別	法量(cm) 長径(長軸・幅)	短径(短軸)	深さ	確認面標高(m)	底面標高(m)	出土遺物	備考
B	22	9	P84	34	27	20	39.61	39.41		
B	22	9	P90	18	17	15	39.61	39.46		
B	22	9	P91	16	16	31	39.61	39.30		
B	22	9	P92	42	29	19	39.57	39.38		
B	22	9	P93	18	16	13	39.58	39.45		
B	22	9	P94	19	16	13	39.62	39.49		
B	22	9	P95	20	20	3	39.61	39.58		
B	22	9	P96	26	24	60	39.53	38.93		
B	22	9	P97	22	20	9	39.60	39.51		
B	22	9	SB1	360	336・300					P26·39·51·54
B	62	10	P1	40	—	30	38.65	38.35	317	
B	62	10	P2	32	28	30	38.65	38.35		
B	62	10	P3	26	—	33	38.65	38.22		
B	62	10	P4	32	20	30	38.52	38.22		
B	62	10	P5	24	23	51	38.74	38.23		
B	62	10	P6	27	24	42	38.68	38.26		
B	62	10	P7	20	16	21	38.61	38.40		
B	62	10	P8	20	18	28	38.79	38.51		
B	62	10	P9	17	17	15	38.75	38.60		
B	62	10	P10	21	20	34	38.71	38.37		
B	62	10	P11	19	16	15	38.88	38.73		
B	62	10	P12	20	18	19	38.84	38.65		
B	62	10	P13	29	25	39	38.83	38.44		
B	62	10	P14	16	16	33	38.65	38.32		
B	62	10	P15	16	16	33	38.65	38.32		
B	62	10	P16		22	39	38.92	38.53		
B	62	10	P17	16	14	25	38.79	38.54		
B	62	10	P18	20	14	22	38.79	38.57		
B	62	10	P19	28	24	43	38.72	38.29		
B	62	10	P20	40	32	52	38.50	37.98		
B	62	10	P21	27	26	19	38.51	38.32		
B	62	10	P22	26	22	38	38.83	38.45		
B	62	10	P23	28	20	22	38.62	38.40		
B	62	10	P24	56		20	39.04	38.84		
B	62	10	P25	18	18	30	39.09	38.79		
B	62	10	P26	22	19	7	39.13	39.06		
B	62	10	P27	26	19	47	39.10	38.63		
B	62	10	P28	26	26	70	39.15	38.45		
B	62	10	P29	29	27	18	38.86	38.68		
B	62	10	P30	20	20	29	39.39	39.08		
B	62	10	P31	22	21	29	39.36	39.07		
B	62	10	P32	18	18	13	39.17	39.04		
B	62	10	P33	42	40	29	39.27	38.98	322	
B	62	10	P34	20	18	30	39.17	38.87		
B	62	10	P35	22	19	30	39.16	38.86		
B	62	10	SK36	78	66	22	39.10	38.89		
B	62	10	P37	30	30	82	39.07	38.25		
B	62	10	P38	35	30	78	39.05	38.27		
B	62	10	P39	26	20	26	39.38	39.12		
B	62	10	P40	32	20	31	39.23	38.92		
B	62	10	P41	21	20	29	39.16	38.96		
B	62	10	P42	28	22	27	39.16	38.89		
B	62	10	P43	48	40	81	39.12	38.31	313	
B	62	10	P44	30	24	34	39.14	38.80		
B	62	10	P45	43	40	98	39.19	38.21		
B	62	10	P46	34	29	78	39.13	38.43		
B	62	10	P47	52	34	16	39.23	39.07		
B	62	10	SK48	79	50	24	39.19	38.95		
B	62	10	P49	24	22	63	39.22	38.59		
B	62	10	P50	28		31	39.21	38.90		
B	62	10	P51	18	18	50	39.06	38.56		
B	62	10	P52	23	20	14	39.02	38.88		
B	62	10	P53	33	32	58	38.94	38.36		
B	62	10	P54	18	18	32	38.78	38.46		
B	62	10	P55	—	24	83	38.90	38.07		
B	62	10	P56	—	14	76	38.84	38.07		
B	62	10	SD57	42		8	39.27	39.19	309	
B	62	10	P58	32	32	25	38.99	38.74		
B	64	10	SK1	56	56	20	37.73	37.53	288·306	
B	64	10	P2	34	24	15	37.83	37.68		
B	64	10	P3	36	36	12	37.36	37.24		
B	67	10	P1	24	20	10	38.67	38.56		
B	67	10	P2	26	25	10	38.64	38.54		
B	67	10	P3	20	16	7	38.58	38.51		
B	67	10	P4	26	18	18	38.54	38.37		
B	67	10	P5	19	18	13	38.30	38.17		
B	67	10	P6	30	25	16	38.27	38.11		
B	67	10	P7	20	16	7	38.34	38.27		
B	66	10	P1	12	11	10	38.60	38.50		
B	66	10	P2	14	12	21	38.60	38.41		
B	66	10	P3	14	11	10	38.55	38.50		
B	66	10	P4	20	18	17	38.53	38.36		
B	66	10	P5	20	18	20	38.47	38.27		
B	66	10	P6	18	14	18	38.29	38.11		

地点	トレンチNo	主な図版	種別	法量(cm) 長径(長軸・幅)	短径(短軸)	深さ	確認面標高(m)	底面標高(m)	出土遺物	備考
B	66	10	P7	25	23	29	38.40	38.11		
B	66	10	P8	34	32	29	38.44	38.15		
B	66	10	P9	9	8	10	38.20	38.10		
B	66	10	P10	12	11	10	38.20	18.10		
B	66	10	P12	16	－		37.70	未掘		
B	66	10	P13	20	11		37.70	未掘		
B	66	10	P14	20	11		37.70	未掘		
B	35	11	濠1	146		64	37.54	36.70		
B	36	12・13	濠1	186		64	34.72	34.08	92～101・278・304	C14資料1
B	26	13	濠1	264		114	35.90	34.76		
B	25	14	濠2	160		92	36.28	35.36	102～104・275・276	
B	61	15	濠2	160		110	33.58	32.48	132～135	
B	61	15	濠3	?		26	35.02	34.76		
B	61	15	縦堀2	272		92	36.34	35.42	119～131・305	
B	31	16	濠3	166		52	35.58	35.06	173・174・308	
B	32	16	P1	24	20	28	37.19	36.91		
B	32	16	P2	16	14	15	37.17	37.02		
B	32	16	P3	18	16	27	37.09	36.82		
B	32	16	P4	16	16	38	37.10	36.72		
B	32	16	P5	16	14	20	36.78	36.58		
B	32	16	P6	14	14	9	36.70	36.61		
B	32	16	P7	16	16	7	36.82	36.75		
B	32	16	P8	20	18	11	36.48	36.37		
B	32	16	P9	16	16	12	36.08	35.96		

地点	トレンチNo	主な図版	種別	法量(cm) 長径(長軸・幅)	短径(短軸)	深さ	確認面標高(m)	底面標高(m)	出土遺物	備考
B	32	16	P10	28	16	－		未掘		
B	32	16	P11	16	14	－		未掘		
B	32	16	濠3	116	94	46	34.62	34.16		
B	47	17	P1	(40)	－	12	37.75	37.63		
B	47	17	P2	24	20	14	37.56	37.42		
B	47	17	P3	20	20	14	37.53	37.39		
B	29	17	P1	16	14	10	38.08	37.97		
B	29	17	P2	14	12	10	37.58	37.48		
B	29	17	P3	21	18	14	37.45	37.31		
B	29	17	P4	19	17	7	37.46	37.39		
B	29	17	P5	14	12	－	37.13	－		
B	29	17	P6	16	12	－	37.13	－		
B	29	17	P7	18	16	10	36.98	36.88		
B	29	17	P8	28	24	24	36.47	36.23		
B	29	17	P9	27	24	16	36.54	36.38		
B	29	17	濠4	184		96	35.54	34.58	220～223・302	
B	30	18	濠4	160		96	36.70	35.74	231～235	C14資料7
B	30	19	濠5	156		74	34.44	33.70	236～241・312・314・315	C14資料14・15
B	27	20	P1	－	－	9	37.93	37.84		
B	27	20	P2	25	20	11	36.99	36.88		
B	27	20	P3	28	19	25	36.59	36.34		
B	27	20	濠5	128		60	34.55	33.95		
B	69下	20	縦堀2	134		60	30.60	30.00		

2．遺物観察表

A．土　器

【凡例】

1 法　　量　（　）は推定値である。
2 調 整 等　部位名称は、「口」が口縁部、「胴」が胴部、「底」が底部、「外」が外面、「内」が内面を表す。また、各部位の位置は上・中・下とした。
3 口残・底残　口縁部残存率・底部残存率を x/32で表した。
4 胎　　土　胎土の分類は p.20・21の分類による。

報告No	器種	大別	時期	出土位置 地点	トレンチ等	遺構	層位	法量	文様 地文	文様帯	胎土	色調	焼成・残存	炭化物 外面	内面	調整	口残	底残	備考
1	甕	3群		A	3T	SK1	1		RL		I	茶褐色	△	○					
2	甕	3群		A	3T	SK1	1		?		I	茶褐色？	×						
3	甕	3群		A	3T	P6	1	底：6.8		Ⅲ：連弧文	I	明黄褐色	△		下			9	
4	甕	3群		A	3T	埋甕		胴：9.0 底：5.0	RL	Ⅱ：流水文	I		○	○	上～下			32	開放型野焼き？
5	甕	3群		A	9T				RL	Ⅱ：鋸歯文	I	明黄褐色	△	○					
6	甕	3群		A	13T		Ⅱ層		RL		Ⅵ	暗褐色	○	○			1		
7	壺	4群		A	13T		Ⅱ層				I	暗褐色	○	○	○	外：ナデ、内胴部：ハケ			
8	甕	3群		A	50T1		Ⅱ層		RL		I	暗褐色	○	○		横ナデ	3		
9	甕	1群	1期	A	52T6		Ⅱ層			Ⅱ：鋸歯文	Ⅱ	淡褐色	○	○		ナデ			
10	壺	4群		A	53T3		Ⅱ層	口：14.0		Ⅰ：刺突	Ⅲ	黄白色	○			横ナデ	2		
11	甕	3群		A	53T3		Ⅱ層	口：28.0	RL		I	暗褐色	○	○	○	横ナデ	3		
12	甕	1群	1期	B	18T	SK2		口：17.8		Ⅱ：重菱形	I	黄褐色	○	○	端部	横ナデ	15		
13	甕	5群		B	18T20	SK20		口：19.0 胴：17.4			I	暗褐色	○	○	○	外胴：縦ハケ、内：横ハケ	3		
14	高杯・器台	4群		B	18T20	SK20				横沈線	Ⅳ	暗褐色	○			外：ナデ、内：しぼり目			
15	甕	?		B	18T	P1					V	明黄褐色	×				2		
16	甕	1群	1期	B	18T		Ⅱ層				Ⅱ	明黄褐色	○			横ナデ	4		
17	甕	1群	1期	B	18T		Ⅱ層				Ⅱ	橙色	○			口内：ハケ	2		
18	甕	1群	1期	B	18T12・13		Ⅱ層		RL		I	暗褐色	○	○	端部		2		
19	甕	1群	1期	B	18T		Ⅱ層				I	黄白色	○			口外：ハケ	2		
20	壺	1群	1期	B	18T11		Ⅱ層			渦巻き文	V	赤橙色	△						1本引き
21	甕	3群		B	18T		Ⅱ層		RL	Ⅰ：弧線	Ⅵ	暗褐色	○	○			1		
22	甕	3群		B	18T		Ⅱ層				Ⅱ	暗褐色	○	○	端部		1		
23	甕	3群		B	18T		Ⅱ層		LR	Ⅰ：平行沈線	I	暗褐色	○	○			1		
24	甕	3群		B	18T2		Ⅱ層		RL	Ⅰ：平行沈線	I	暗褐色	○	○	○		2		
25	甕	3群		B	18T		Ⅱ層		RL	Ⅰ：連弧文	I	明黄褐色	○	端部			2		
26	甕	3群		B	18T2		Ⅱ層		RL	Ⅰ：平行沈線	V	明黄褐色	○	○			5		
27	甕	3群		B	18T		Ⅱ層			Ⅰ：押圧縄	I	暗褐色	△	○			7		
28	甕	5群		B	18T2		Ⅱ層				I	暗褐色	○	○	端部	口：横ハケ、外胴：縦ハケ	2		
29	甕	3群		B	18T		Ⅱ層	口：29.4	RL		I	明黄褐色	△	○		外胴以外：ナデ	8		
30	甕	2群？	1期	B	18T8		Ⅱ層	底：6.6			V	明黄褐色	○			外胴：縦ハケ		32	底面に木葉痕
31	壺	4群		B	18T		Ⅱ層				Ⅱ	黄白色	○			横ナデ	3		
32	壺？			B	18T2		Ⅱ層	底：5.0			I	暗褐色	○			外胴：縦ハケ		24	
33	壺	4群		B	18T8		Ⅱ層		RL？	横沈線	V	明黄褐色	△						胴外面は縄文施文か
34	壺	3群		B	18T23		Ⅱ層		RL	Ⅲ：連弧	Ⅳ	暗褐色	△						外面赤彩
35	甕	3群		B	33T9		Ⅱ層		RL	Ⅰ：連弧文	I	暗褐色	○				1		
36	甕	2群		B	33T1		Ⅱ層				V	橙色	△			外胴：縦ハケ			

報告No	器種	大別	時期	出土位置				法量	文様		胎土	色調	焼成・残存	炭化物		調整	口残	底残	備考
				地点	トレンチ等	遺構	層位		地文	文様帯				外面	内面				
37	甕	1群	1期	B	19T10～12		Ⅱ層			Ⅲ:鋸歯文	Ⅰ	暗褐色	○			外胴：縦ハケ			
38	甕	3群		B	19T10～12		Ⅱ層		RL		Ⅰ	黄褐色	○				2		
39	甕	3群		B	19T10～12		Ⅱ層		RL	Ⅰ:弧線文	Ⅰ	暗褐色	○	口下	○		2		
40	壺	3群		B	20T	P1			RL		Ⅰ	暗褐色	○				3		
41	壺	3群		B	20T	P1			RL		Ⅰ	暗褐色	○						
42	甕	3群	3期	B	20T	縦堀2	1層	口：30.0	RL	Ⅰ:連弧文 Ⅱ:重菱形文 区画:交互刺突	Ⅰ	暗褐色	△	○		内：横ナデ	7		
43	甕	3群		B	20T	縦堀2	1層		RL		Ⅱ	茶褐色	○				2		
44	甕	3群		B	20T	縦堀2	1層				Ⅵ	暗褐色	○	○	○				
45	壺	3群		B	20T	縦堀2	サブトレ	口：16.0	RL		Ⅴ	橙色	△				2		
46	甕	3群		B	20T	縦堀2	サブトレ	底：7.0	RL		Ⅰ	暗褐色	○	○	胴下	ナデ		16	底部内面の一部コゲ
47	甕	3群	3期	B	20T	縦堀2	1層	口：27.0	RL	Ⅰ:連弧文 Ⅱ:重菱形文	Ⅵ	暗褐色	○	○	胴中	内：横ナデ	4		
48	甕	3群	4期	B	20T		Ⅱ層		RL		Ⅰ	暗褐色	○	○			1		
49	甕	3群		B	20T		Ⅱ層		RL		Ⅰ	暗褐色	○				2		
50	甕	3群		B	20T		Ⅱ層		RL	Ⅰ:連弧文	Ⅵ	暗褐色	○	○	○		1		
51	甕	3群		B	20T1		Ⅱ層		RL		Ⅰ	黄褐色	○	○			2		
52	甕	3群		B	20T		Ⅱ層		RL	円形刺突	Ⅰ	暗褐色	○	○	○		1		
53	甕	3群	4期	B	20T6		Ⅱ層		RL	円形刺突	Ⅰ	暗褐色	○	○	○		1		
54	甕	3群		B	20T		Ⅱ層		RL		Ⅱ	暗褐色	○	口縁			1		
55	甕	3群		B	20T1		Ⅱ層		RL		Ⅰ	暗褐色	○	○	○		1		
56	甕	3群		B	20T3･5･6		Ⅱ層		RL		Ⅶ	淡褐色	△						内外面赤彩
57	甕	3群		B	20T5･6		Ⅱ層		RL		Ⅱ	黄褐色	○						
58	甕	3群		B	20T5･6		Ⅱ層			波状文	Ⅵ	暗褐色	○						
59	甕	3群		B	20T6		Ⅱ層			交互刺突	Ⅰ	橙色	△	胴上					
60	甕	3群		B	20T5･6		Ⅱ層				Ⅰ	暗褐色	○						
61	壺	3群		B	20T10		Ⅱ層				Ⅳ	黄褐色	○						
62	甕	3群		B	20T		Ⅱ層	底：8.0	RL		Ⅵ	暗褐色	○	○	胴下			4	底部外面にもスス有り
63	壺	4群		B	20T		Ⅱ層				Ⅰ	黄褐色	△				1		
64	甕	3群		B	66T		Ⅱ層		RL	Ⅲ:連弧文	Ⅳ	暗褐色	○	○	○				
65	甕	3群		B	66T		Ⅱ層		RL？	Ⅲ:連弧文	Ⅰ	暗褐色	△	○	○				
66	甕	3群		B	65T		Ⅱ層		RL	Ⅲ:連弧文	Ⅳ	暗褐色	△	○					
67	甕	3群		B	21T	縦堀1			RL	鋸歯文	Ⅶ	暗褐色	○	○					
68	甕	3群		B	21T	縦堀1			RL	鋸歯文	Ⅵ	暗褐色	△	○					
69	甕	3群		B	21T		Ⅱ層			楕円形文	Ⅵ	暗褐色	○	○	○				
70	甕	3群		B	68T19		Ⅱ層		RL	Ⅰ:弧線	Ⅰ	黄褐色	○	○			1		
71	甕	5群		B	68T3		Ⅱ層				Ⅵ	暗褐色	○	○		口内外：横ハケ	2		
72	甕	3群		B	68T5		Ⅱ層		RL	Ⅰ:弧線	Ⅰ	黄褐色	○	○					
73	壺	3群		B	68T5		Ⅱ層	口：7.4	RL		Ⅰ	暗褐色	○	○	○		6		
74	甕	3群		B	22T	P12			RL		Ⅵ	橙色	○	○					
75	甕	3群		B	22T	P24				重菱形文	Ⅱ	暗褐色	△						
76	甕	5群		B	22T	P77					Ⅴ	橙色	○	○		口内外：横ハケ	2		
77	甕	3群		B	22T24		Ⅱ層		RL		Ⅱ	暗褐色	○				1		
78	甕	5群		B	22T		Ⅱ層				Ⅰ	暗褐色	○	○		外：縦ハケ、 内：横ハケ	1		
79	甕	3群		B	22T		Ⅱ層		RL		Ⅵ	暗褐色	○	○	胴上				
80	壺	1群	1期	B	62T20		Ⅱ層			Ⅲ:渦巻文	Ⅴ	暗褐色	○			1本引き。 外胴：ハケ			
81	甕	3群		B	62T		Ⅱ層				Ⅵ	暗褐色	○	○	○		1		
82	甕	3群		B	62T1		Ⅱ層		RL		Ⅵ	暗褐色	○	○	○		1		
83	甕	3群		B	62T19		Ⅱ層			Ⅰ:連弧？	Ⅰ	暗褐色	○	○	○				
84	甕	3群		B	62T20		Ⅱ層	底：6.4	RL		Ⅰ	暗褐色	○	○				4	
85	甕	3群		B	63T2･3		Ⅱ層			平行沈線	Ⅴ	暗褐色	○			外胴：横ハケ			
86	壺	2群	1期	B	64T1		Ⅱ層			Ⅰ:刺突	Ⅳ	暗褐色	○			口外：縦ハケ、 口内：横ハケ	2		
87	甕	3群	1期	B	64T1		Ⅱ層			Ⅱ:刺突	Ⅱ	灰褐色	△						
88	甕	3群		B	64T1		Ⅱ層		RL		Ⅰ	暗褐色	○	○			2		
89	壺	3群		B	23T		Ⅱ層		RL		Ⅰ	黄褐色	○	胴上					
90	壺	2群	1期	B	36T		Ⅱ層			短沈線	Ⅰ	橙色	○						
91	甕	3群		B	36T		Ⅱ層			Ⅲ:連孤文 区画:交互刺突文	Ⅰ	暗褐色	△	○					
92	甕	3群		B	36T	濠1					Ⅵ	暗褐色	○			口内外：ヨコナデ	3		
93	甕	3群		B	36T	濠1			RL		Ⅰ	暗褐色	○	○			2		
94	甕	3群		B	36T	濠1	1層				Ⅱ	白褐色	△				2		
95	甕	3群		B	36T	濠1	1層				Ⅱ	明黄褐色	○			ヨコナデ			
96	甕	3群		B	36T	濠1	2層		RL	Ⅰ:連弧文	Ⅰ	暗褐色	○				2		
97	甕	3群		B	36T	濠1	2層		RL	Ⅲ:U字状文	Ⅰ	白褐色	○						
98	甕	3群		B	36T	濠1	2層		RL	Ⅱ:楕円形文、 Ⅲ:連孤文	Ⅰ	暗褐色	○	○	胴中				
99	甕	3群		B	36T	濠1	5層		RL	Ⅰ:横沈線	Ⅵ	暗褐色	△	○	？		2		
100	甕	3群		B	36T	濠1	5層	口：20.0	RL		Ⅱ	灰褐色	○	○			1		
101	甕	3群	3期	B	36T	濠1	5層	口：27.0 高：35.5 底：10.0 胴：25.8			Ⅰ	暗褐色	○				18	18	容量:11.10ℓ。野焼き方法(開放型か)
102	甕	3群		B	25T	濠2		胴：8.4	LR？		Ⅰ	暗褐色	△	？	？				
103	甕	3群		B	25T	濠2					Ⅰ	黄褐色	○			外：ヘラナデ			
104	壺	2群	1期	B	25T	濠2		底：9.6			Ⅴ	橙色	△			外：縦ハケ		6	
105	甕	1群	1期	B	25T4		Ⅱ層			鋸歯文	Ⅰ	暗褐色	○			口内：横ハケ			
106	甕	3群		B	25T		Ⅱ層		RL	Ⅰ:横沈線	Ⅵ	暗褐色	○	○	○		2		
107	甕	3群		B	25T		Ⅱ層		RL		Ⅰ	暗褐色	○				3		
108	甕	3群	4期	B	25T5		Ⅱ層		RL		Ⅰ	暗褐色	○	○	口中		2		

報告No	器種	大別	時期	出土位置				法量	文様		胎土	色調	焼成・残存	炭化物		調整	口残	底残	備考
				地点	トレンチ等	遺構	層位		地文	文様帯				外面	内面				
109	甕	3群		B	25T5		Ⅱ層		LR		Ⅳ	橙色	○			口内外：横ハケ	1		
110	甕	3群		B	25T8		Ⅱ層		RL		Ⅵ	暗褐色	○	○	○		2		
111	甕	5群		B	25T3		Ⅱ層				Ⅳ	橙色	○			口内外：横ハケ			
112	甕	3群		B	25T8		Ⅱ層		RL	Ⅰ：縄文	Ⅱ	暗褐色	○						
113	甕	3群		B	25T3		Ⅱ層				Ⅰ	暗褐色	○				2		
114	甕	3群		B	25T7		Ⅱ層		RL	Ⅰ：縄文	Ⅰ	暗褐色	○	○			3		
115	壺	3群		B	25T3		Ⅱ層				Ⅰ	暗褐色	○				2		
116	甕	3群		B	25T3		Ⅱ層		LR		Ⅰ	暗褐色	○						
117	甕	6群		B	25T1		Ⅱ層		RL	鋸歯状沈線	Ⅶ	暗褐色	○	○	胴上				
118	甕	3群		B	25T		Ⅱ層			Ⅱ：連孤文	Ⅰ	暗褐色	○	○					
119	甕	3群		B	61T2	縦堀2	上層	口：22.0	RL	Ⅰ：大小連弧 Ⅱ：重菱形文 Ⅲ：連孤文 区画：交互刺突文	Ⅵ	暗褐色	○	○	胴中		6		
120	甕	3群		B	61T1	縦堀2	上層		RL	Ⅰ：弧線、鋸歯文	Ⅰ	暗褐色	○	○			1		
121	甕	3群		B	61T1	縦堀2	上層		RL	区画：刺突	Ⅵ	暗褐色	○	○	○		1		
122	壺	3群		B	61T1	縦堀2	上層			区画：刺突	Ⅰ	暗褐色	○				2		
123	甕	3群		B	61T1	縦堀2	上層		RL		Ⅵ	暗褐色	○	○	○		2		
124	甕	3群	3期	B	61T1	縦堀2	上層		RL	Ⅰ：横位沈線 区画：交互刺突文	Ⅵ	暗褐色	○	○			1		
125	甕	3群		B	61T1	縦堀2	上層		RL？		Ⅰ	暗褐色	○	○			1		
126	甕	3群		B	61T3	縦堀2	上層		LR		Ⅰ	暗褐色	○	○	○		2		
127	甕	3群		B	61T1	縦堀2	上層	口：16.0 胴：18.0	RL？		Ⅰ	暗褐色	○	胴中			1		
128	壺	3群		B	61T1	縦堀2	上層	胴：19.0	RL	Ⅲ：連孤文	Ⅵ	暗褐色	○						
129	甕	3群		B	61T1	縦堀2	上層		RL	Ⅱ：流水文？、 Ⅲ：連孤文	Ⅰ	黄褐色	○	○					
130	甕	3群		B	61T1	縦堀2	上層		LR	Ⅲ：連呼文・刺突	Ⅵ	暗褐色	○	○					
131	甕	3群		B	61T1	縦堀2	5層		RL		Ⅴ	橙色	×	？	？				
132	甕？	3群		B	61T3	濠2					Ⅴ	暗褐色	○			外：縦＋横ハケ、 内：横ハケ			
133	甕	3群		B	61T3	濠2			RL		Ⅰ	暗褐色	○	○					
134	甕	3群		B	61T3	濠2			RL		Ⅵ	暗褐色	○	○			1		
135	甕	3群		B	61T3	濠2		底：6.0			Ⅳ	橙色	○			外胴：縦ハケ		24	
136	壺	1群		B	61T3		Ⅱ層	口：10.6	RL	Ⅰ：横沈線	Ⅱ	橙色	○				3		
137	甕	3群		B	61T10		Ⅱ層		RL		Ⅵ	暗褐色	○	○			2		
138	甕	3群		B	61T9		Ⅱ層		RL？	Ⅰ：横位沈線	Ⅰ	暗褐色	○				2		
139	甕	3群	3期	B	61T2		Ⅱ層		RL	Ⅰ：横位沈線 区画：交互刺突文	Ⅰ	暗褐色	○	○			4		
140	甕	3群	4期	B	61T10		Ⅱ層		RL	区画：刺突	Ⅳ	暗褐色	○	○			2		
141	甕	3群	3期	B	61T9		Ⅱ層		RL	区画：交互刺突文	Ⅷ	灰褐色	○				4		
142	甕	3群		B	61T1		Ⅱ層		RL	Ⅰ：弧線	Ⅵ	暗褐色	○	○	○		3		
143	甕	3群		B	61T2		Ⅱ層		RL	Ⅰ：横位沈線	Ⅰ	黄褐色	○	○			2		
144	甕	3群		B	61T2		Ⅱ層		RL	Ⅰ：連弧・鋸歯	Ⅵ	暗褐色	○				2		
145	甕	3群		B	61T2		Ⅱ層		RL	Ⅰ：横位沈線	Ⅵ	暗褐色	○	○	○	口内：横ハケ	4		
146	甕	3群		B	61T1		Ⅱ層		RL		Ⅱ	暗褐色	○				2		
147	甕	3群		B	61T2		Ⅱ層		ハケ	Ⅰ：連弧文	Ⅱ	黄褐色	○			口内外：横ハケ	2		
148	甕	3群		B	61T3		Ⅱ層		RL	Ⅰ：横位沈線	Ⅰ	暗褐色	○	○	○		2		
149	甕	3群		B	61T9		Ⅱ層		RL		Ⅳ	暗褐色	○	○			1		
150	甕	3群		B	61T3		Ⅱ層		RL		Ⅰ	暗褐色	△	○			3		
151	甕	3群		B	61T9		Ⅱ層		RL		Ⅰ	暗褐色	○	○	○		2		
152	甕	3群		B	61T10		Ⅱ層				Ⅰ	暗褐色	○	○			4		
153	甕	3群		B	61T6		Ⅱ層		RL		Ⅵ	暗褐色	○	○			1		
154	甕	3群		B	61T2		Ⅱ層				Ⅰ	暗褐色	○	○			2		
155	壺	3群		B	61T2		Ⅱ層	胴：16.0	RL	Ⅲ：鋸歯文	Ⅰ	暗褐色	○	○					
156	甕	3群		B	61T9		Ⅱ層		RL		Ⅵ	暗褐色	△	○	胴上				
157	壺？	3群		B	61T2		Ⅱ層				Ⅱ	暗褐色	○						
158	甕	3群		B	61T3		Ⅱ層		RL	区画：交互刺突文	Ⅵ	暗褐色	○						
159	壺	3群		B	61T2		Ⅱ層		RL	Ⅲ：連孤文	Ⅷ	灰褐色	○	胴中					外面赤彩
160	甕	3群		B	61T3		Ⅱ層	胴：30.0 底：10.0	RL		Ⅰ	暗褐色	○	胴中	胴下				
161	甕	1群	1期	B	61T5		Ⅲ層	口：17.0	RL	Ⅱ：鋸歯文	Ⅱ	暗褐色	○	○	口縁	胴内：横ハケ	2		
162	甕	1群	1期	B	61T5		Ⅲ層			Ⅱ：重菱形文？	Ⅱ	暗褐色	○	○	口縁		7		
163	壺	2群	1期	B	61T3		Ⅲ層			Ⅱ：鋸歯文	Ⅱ	暗褐色	○	○	頸上				
164	甕	3群	1期	B	61T11		Ⅲ層				Ⅱ	橙色	○				3		
165	甕	1群	1期	B	61T11		Ⅲ層		LR	Ⅱ：重菱形文？	Ⅱ	暗褐色	○	○		胴外：横ハケ			
166	甕	3群		B	61T3		Ⅲ層			Ⅰ：押圧縄	Ⅰ	暗褐色	○	○	○		2		
167	甕	3群	2期	B	61T9		Ⅲ層	口：15.0 胴：15.0		Ⅰ・Ⅱ：連孤文 区画：台形刺突	Ⅰ	暗褐色	○	○	胴部		2		
168	甕	3群		B	61T3		Ⅲ層	口：26.4 胴：24.0			Ⅵ	橙色	○		○？	内外面：横ナデ	5		
169	甕	3群		B	61T10		Ⅲ層		RL		Ⅵ	橙色	○						
170	甕	3群		B	61T6		Ⅲ層		RL		Ⅰ	暗褐色	○	○	胴上				
171	壺	4群		B	61T9		Ⅲ層	口：11.0			Ⅰ	暗褐色	○				3		
172	壺	3群		B	61T3・5		Ⅲ層	口：10.6	LR		Ⅰ	黄褐色	○	口端	口端	口縁部設置面の内外	11		
173	高杯	3群		B	31T		環濠			横位沈線	Ⅱ	黄褐色	○						
174	甕	3群		B	31T		環濠	底：7.0	RL		Ⅰ	暗褐色	○	胴下				26	
175	甕	3群		B	31T		Ⅱ層		RL		Ⅱ	橙色	○				2		
176	甕	3群	3期	B	31T		Ⅱ層		RL	Ⅰ：連弧文 区画：交互刺突文	Ⅰ	暗褐色	○	○	口縁		3		
177	甕	3群		B	31T		Ⅱ層		RL		Ⅵ	暗褐色	○	○	口端		2		
178	甕	3群		B	31T		Ⅱ層		RL	Ⅰ：弧線	Ⅰ	暗褐色	○	○	口端		3		
179	甕	3群		B	31T		Ⅱ層		RL		Ⅵ	暗褐色	△	？	○		1		
180	甕	3群		B	31T2		Ⅱ層		RL		Ⅰ	暗褐色	○	○	口端		5		
181	甕	3群		B	31T		Ⅱ層		RL		Ⅰ	暗褐色	○	○	口端		2		

報告No	器種	大別	時期	出土位置				法量	文様		胎土	色調	焼成・残存	炭化物		調整	口残	底残	備考
				地点	トレンチ等	遺構	層位		地文	文様帯				外面	内面				
182	甕	3群		B	31T5		Ⅱ層		RL		Ⅰ	暗褐色	○	○	○		1		
183	甕	3群		B	31T2		Ⅱ層		RL		Ⅰ	灰褐色	○	胴中					
184	甕	3群		B	31T2		Ⅱ層		RL		Ⅵ	暗褐色	○	○	口端		3		
185	壺	3群		B	31T4		Ⅱ層				Ⅱ	橙色	○						外面赤彩
186	甕	2群	1期	B	32T		Ⅱ層			口端:刺突	Ⅰ	暗褐色	○	○	○		2		
187	甕	1群	1期	B	32T1		Ⅱ層				Ⅰ	暗褐色	○				1		
188	甕	1群	1期	B	32T		Ⅱ層			Ⅱ:鋸歯文	Ⅰ	暗褐色	○						
189	甕	1群	1期	B	32T		Ⅱ層				Ⅰ	暗褐色	○	○			2		
190	甕	3群	4期	B	32T1		Ⅱ層		RL	区画:刺突	Ⅵ	暗褐色	○	○	○		1		
191	甕	5群		B	32T		Ⅱ層				Ⅵ	暗褐色	○	○	○	内・口外・横ハケ、胴外:縦ハケ、	1		
192	甕	3群		B	32T		Ⅱ層		RL		Ⅰ	暗褐色	○						
193	壺	2群	1期	B	32T		Ⅱ層				Ⅱ	灰褐色	○			外:縦ハケ、内:横ハケ			
194	甕	4群		B	32T		Ⅱ層	底:5.0	LR		Ⅶ	暗褐色	○			胴下:横ハケ		32	
195	甕	3群		B	32T3		Ⅱ層		LR		Ⅵ	暗褐色	○	○			1		
196	甕	4群		B	32T3		Ⅱ層				Ⅳ	暗黄褐色	○				2		
197	甕	1群	1期	B	47T2		Ⅱ層			Ⅱ:重菱形文	Ⅱ	暗褐色	○	○	口縁	口外:縦ハケ、内:横ハケ	3		
198	壺	1群	1期	B	47T4		Ⅱ層		LR	Ⅰ:平行沈線	Ⅴ	橙色	○				3		
199	甕	1群	1期	B	47T2		Ⅱ層				Ⅱ	灰褐色	○				3		
200	甕	2群	1期	B	47T4		Ⅱ層			口端:刺突文	Ⅳ	暗褐色	○	○	○		1		
201	壺	1群	1期	B	47T3		Ⅱ層		LR		Ⅱ	灰褐色	○						
202	壺	1群	1期	B	47T4		Ⅱ層			Ⅲ:渦巻文	Ⅴ	橙色	○			2本引き			
203	壺	1群	1期	B	47T4		Ⅱ層			Ⅰ:平行沈線	Ⅱ	暗褐色	○	胴上	胴上				
204	甕	3群		B	47T6		Ⅱ層		LR?		Ⅰ	暗褐色	×				1		
205	甕	3群		B	47T		Ⅱ層		RL		Ⅰ	暗褐色	○	○			3		
206	甕	3群		B	47T4		Ⅱ層			Ⅰ:連弧文	Ⅱ	灰褐色	○				1		
207	甕	3群		B	47T5		Ⅱ層				Ⅰ	黄褐色	○			口内端:横ハケ	1		
208	甕	3群		B	47T4		Ⅱ層			Ⅰ:連弧文	Ⅰ	暗褐色	△	○	○?		3		
209	甕	3群		B	47T4		Ⅱ層		RL	Ⅲ:流水文?	Ⅰ	暗褐色	○	○	○				
210	甕	3群		B	47T4		Ⅱ層			Ⅲ:連弧文	Ⅰ	暗褐色	○						
211		3群		B	47T3		Ⅱ層	底:4.0			Ⅴ	暗褐色	○					32	
212		3群		B	47T5		Ⅱ層	底:3.4			Ⅱ	暗褐色	○						
213	甕	1群	1期	B	47T		Ⅲ層				Ⅱ	橙色	○				2	32	
214	甕	1群	1期	B	47T		Ⅲ層				Ⅵ	暗褐色	○						
215	甕	1群	1期	B	47T5		Ⅲ層			Ⅱ:重菱形文	Ⅱ	灰褐色	○						
216	甕	1群	1期	B	47T		Ⅲ層				Ⅳ	灰褐色	○						
217	甕	3群		B	47T		Ⅲ層		RL		Ⅰ	暗褐色	○	○	○		2		
218	甕	3群		B	47T		Ⅲ層		RL		Ⅰ	暗褐色	○				1		
219	甕	3群		B	47T		Ⅲ層				Ⅰ	灰褐色	○				1		
220	甕	2群	1期	B	29T	濠4		底:6.0			Ⅰ	黄褐色	○			外:縦ハケ		8	
221	甕	3群		B	29T	濠4					Ⅵ	暗褐色	○				1		
222	甕	5群		B	29T	濠4					Ⅰ	暗褐色	○			口内外:横ハケ、胴外:縦ハケ	2		
223	甕	3群		B	29T	濠4			RL	Ⅱ:入組文 Ⅲ:連弧文	Ⅵ	暗褐色	○	○					
224	甕	1群		B	29T6		Ⅱ層				Ⅱ	黄褐色	○				2		
225	甕	3群		B	29T6		Ⅱ層		RL?	Ⅰ:横位沈線	Ⅰ	暗褐色	○				1		
226	甕	3群		B	29T6		Ⅱ層		RL		Ⅰ	暗褐色	○	○	○		2		
227	甕	3群		B	29T		Ⅱ層		RL?		Ⅰ	黄褐色	×				2		
228	甕	3群		B	29T1		Ⅱ層	口:19.0 胴:17.4			Ⅰ	暗褐色	○	○	胴中～下		6		容量:3.87ℓ。野焼き方法(開放型か)
229	甕	4群		B	29T2		Ⅱ層	口:14.0	RL		Ⅰ	黄褐色	○	口端			2		
230	甕	4群		B	29T2		Ⅱ層				Ⅰ	黄褐色	○	○		胴外:斜ハケ、胴中:横ハケ	2		
231	甕	5群		B	30T	濠4					Ⅵ	灰褐色	○	○		口内外:横ハケ	2		
232	甕	3群		B	30T	濠4			RL		Ⅰ	橙色	○	○					
233	甕	3群		B	30T	濠4			RL		Ⅵ	暗褐色	○	○			2		
234	甕	3群		B	30T	濠4			RL		Ⅰ	暗褐色	○	○	口端		2		
235	甕	3群		B	30T	濠4					Ⅵ	灰褐色	△	胴上?	胴上				
236	甕	6群	4期	B	30T	環5	5・6層			Ⅰ:刺突 Ⅱ:微隆起線文 Ⅲ:連弧文・刺突	Ⅵ	橙色	△	○?	口胴上		7		長石多。C14・資料15
237	甕	3群	4期	B	30T	環5	5・6層	口:30.0 胴:24.8	RL			暗褐色	○				15		容量:9.62ℓ。野焼き方法(開放型か)
238	甕	3群	4期	B	30T	環5	5・6層	口:22.0 胴:19.2	RL		Ⅳ	暗褐色	○	○	胴中・下		7		容量:5.24ℓ
239	甕	5群		B	30T	環5					Ⅵ	灰褐色	○		口端	口外上・口中:横ハケ	2		
240	甕	3群		B	30T	環5			RL	Ⅰ:弧線文	Ⅵ	暗褐色	○	○	○		1		
241	甕	3群		B	30T	環5				Ⅲ:連弧文	Ⅱ	灰褐色	○	○		外:縦ハケ			
242	甕	3群		B	30T		Ⅱ層		RL		Ⅵ	暗褐色	○	○	口端		2		
243	甕	3群	4期	B	30T		Ⅱ層		RL	Ⅱ:楕円形文	Ⅵ	暗褐色	○	○	口端		3		
244	壺	1群	1期	B	27T		Ⅱ層			Ⅰ:横位沈線	Ⅴ	橙色	△				2		
245	甕	3群		B	27T2		Ⅱ層		RL		Ⅱ	橙色	△	○			1		
246	甕	3群		B	27T		Ⅱ層		RL		Ⅰ	暗褐色	△	○	○?		3		
247	甕	3群		B	27T		Ⅱ層		RL		Ⅰ	黄褐色	○				2		
248	甕	3群		B	27T		Ⅱ層		LR		Ⅱ	灰褐色	○						
249	甕	3群		B	27T		Ⅱ層	底:14.0	RL		Ⅴ	灰褐色	△					3	
250	甕	3群		B	27T		Ⅱ層		RL	Ⅲ:U字状文	Ⅰ	暗褐色	○	○					
251	壺	3群		B	27T5		Ⅱ層		LR		Ⅳ	黄褐色	△						

報告No	器種	大別	時期	出土位置				法量	文様		胎土	色調	焼成・残存	炭化物		調整	口残	底残	備考
				地点	トレンチ等	遺構	層位		地文	文様帯				外面	内面				
252	甕	3群		B	69T3		Ⅰ層		RL	Ⅰ:横位沈線	Ⅰ	暗褐色	○	○			2		
253	甕	3群	4期	B	69T1		Ⅰ層		LR	区画:刺突	Ⅰ	灰褐色	○						
254	甕	3群		B	69T1		Ⅰ層		LR		Ⅰ	暗褐色	○	○					
255	壺	1群	1期	B	69T1		Ⅱ・Ⅲ層	口:18.0		Ⅰ:連弧文	Ⅴ	橙色	△				6		
256	壺	1群	1期	B	69T2		Ⅱ・Ⅲ層			Ⅱ:横位沈線	Ⅴ	暗褐色	○						
257	壺	1群	1期	B	69T3		Ⅱ・Ⅲ層			Ⅲ:渦巻文	Ⅴ	灰褐色	○			2本引き			
258	甕	3群		B	69T3		Ⅱ・Ⅲ層		RL	Ⅰ:横位沈線	Ⅰ	暗褐色	○	○	○		2		
259	甕	3群		B	69T1		Ⅱ・Ⅲ層				Ⅰ	灰褐色	○	○			3		
260	甕	3群		B	69T1		Ⅱ・Ⅲ層				Ⅱ	灰褐色	○				6		
261	壺	3群		B	69T1		Ⅱ・Ⅲ層		LR		Ⅰ	灰褐色	○		胴下	内面ハケ			外胴:赤彩
262	高杯	4群		B	69T1		Ⅱ・Ⅲ層				Ⅳ	黄褐色	○						
263	甕	1群	1期	B	46T2		Ⅱ層			Ⅱ:鋸歯文	Ⅰ	灰褐色	○						
264	甕	3群	2期	B	46T8		Ⅱ層	口:8.4	RL	Ⅱ:長楕円文+沈線	Ⅳ	暗褐色	○	○	口端		5		
265	甕	3群		B	46T2		Ⅱ層		RL	区画:交互刺突文	Ⅰ	暗褐色	○	○	○		1		
266	甕	3群		B	46T2		Ⅱ層		RL	Ⅰ:横位沈線	Ⅰ	暗褐色	○	○	○		4		
267	甕	3群		B	46T2		Ⅱ層				Ⅰ	黄褐色	○	口縁	口端		2		
268	甕	3群		B	46T8		Ⅱ層				Ⅰ	暗褐色	△	○	○?				
269	壺	3群		B	46T13		Ⅱ層		RL		Ⅰ	暗褐色	△	○	胴中				
270	甕	4群		B	46T8		Ⅱ層	底:6.0			Ⅱ	暗褐色	○			充填法		30	
271	甕	1群	1期	B	43T1		Ⅱ層	口:15.6 底:5.2	LR	Ⅱ:鋸歯文	Ⅱ	灰褐色	○	○	口端・胴中	胴低位は横ハケ	4	27	底部外面に平行葉脈
272	甕	1群	1期	C	41T		Ⅱ層	口:14.4			Ⅰ	橙色	△	○			3		
273	甕	3群		C	42T		Ⅱ層	底:8.0			Ⅳ	橙色	△					32	
425	甕	1群	1期	A	74T		Ⅱ層				Ⅰ	橙色	△						

B．土製品

報告No	出土地点	遺構・層位名	名　称	計測値(cm)			重量(g)	混和財の有無	特　徴	備　考
				長さ	幅	厚さ				
274	25T3	Ⅲ層	焼成粘土塊	2.7	4.3	2.2	20.0	有		
275	25T	濠2	焼成粘土塊	3.1	3.4	2.2	14.5	なし		
276	25T	濠2	焼成粘土塊	2.2	2.8	1.6	7.5	なし		
277	22T24	Ⅱ層	焼成粘土塊	2.6	2.2	1.9	8.5	なし		
278	36T	濠1　5層	焼成粘土塊	2.6	3.9	1.8	12.0	有	裏面滑らか	
279	20T6	縦堀2　1層	焼成粘土塊	2.5	3.3	2.2	12.5	なし	裏面に繊維？痕	

C．石器・石製品

報告No	出土地点	遺構・層位名	器　種	分類	計測値(cm)			重量(g)	石　材	遺存状態	備　考
					長さ	幅	厚さ				
280	61T1	Ⅲ層	石鏃	A	2.48	1.49	0.45	1.27	頁岩A	先端欠・中茎？	
281	62T13	Ⅱ層	石鏃	A	3.40	1.50	0.43	1.65	頁岩A	完形	黒色付着物
282	47T4	Ⅱ層	石鏃	A	2.58	2.00	0.62	2.58	頁岩B	完形	
283	20T6	Ⅱ層	石鏃	B 1	3.25	1.63	0.34	1.14	頁岩A	完形	
284	1T	SK1	石鏃	B 2	3.60	1.18	0.36	0.94	頁岩A	略完形	中茎欠
285	20T5	縦堀2　1層	石鏃	B 2	3.00	1.84	0.57	1.75	頁岩A	完形	
286	20T6	Ⅱ層	石鏃	B 2	2.78	1.36	0.38	1.57	頁岩A	破損品	先端・中茎欠
287	20T6	縦堀2　サブトレ	石鏃	B 2	2.71	1.37	0.34	1.01	頁岩A	破損品	先端・中茎欠
288	64T2	SK1　上層	石鏃	B 2	2.98	2.13	0.50	1.64	頁岩A	完形	
289	32T1		石鏃	B 3	1.83	1.42	0.59	1.19	泥岩（中生代）	破損品	先端欠
290	20T5	縦堀2　一括	石鏃	B 4	3.64	1.59	0.39	1.89	流紋岩	完形	
291	61T2	Ⅱ層	石鏃	B 4	3.41	1.55	0.58	1.75	頁岩C	完形	
292	62T13	Ⅱ層	石鏃	B 4	3.48	1.12	0.42	1.16	頁岩B	完形	
293	20T5	縦堀2　サブトレ	石鏃	その他	2.65	1.48	0.47	1.42	頁岩A	末端が欠	
294	29T6	濠4脇　Ⅱ層	石鏃	その他	2.04	2.03	0.39	1.30	頁岩A	先端のみ	C2の可能性あり
295	68T13	Ⅱ層	石鏃	その他	2.19	1.08	0.47	0.61	頁岩A	先端のみ	
296	20T7	Ⅱ層	石錐	A	6.41	0.95	0.58	4.21	頁岩A	完形	
297	20T6	Ⅱ層	石錐	A	3.97	1.03	0.61	2.79	頁岩A	末端が欠	
298	61T9	Ⅲ層	石錐	A	2.77	0.86	0.60	0.27	泥岩（中生代）	完形	
299	25T3	Ⅱ層	石錐	B	3.68	2.50	0.56	3.40	頁岩A	先端が欠	
300	21T1	Ⅱ層	両極石器		2.40	2.50	0.90	4.87	頁岩B		
301	20T6	縦堀2　1層	不定形石器	A	1.89	1.73	0.40	1.89	頁岩A		
302	29T	濠4	不定形石器	B	1.47	1.94	0.57	1.65	頁岩B		
303	46T8	Ⅱ層	不定形石器	A	4.30	5.40	1.37	24.52	頁岩A		
304	36T	濠1	不定形石器	B	3.76	2.67	1.01	7.62	頁岩A		
305	61T1	縦堀2　サブトレ	不定形石器	B	3.97	4.14	1.63	2.13	流紋岩		
306	64T2	SK1	不定形石器	B	3.73	2.54	1.01	9.09	流紋岩		
307	20T5･6	縦堀2　1層	不定形石器	C	2.17	1.94	0.43	1.48	頁岩A		
308	31T	濠3	不定形石器	E	3.45	6.31	1.15	24.57	頁岩A		
309	61T2	SD57	不定形石器	E	2.80	3.10	0.86	6.30	頁岩A		
310	18T	P103	不定形石器	F	4.18	3.49	1.36	12.02	泥岩		
311	20T3	縦堀2　1層	不定形石器	F	3.29	3.06	0.44	3.49	頁岩A		
312	30T	濠5(7)	不定形石器	F	4.71	1.95	0.75	3.59	頁岩A		
313	62T	P43	不定形石器	F	1.93	0.66	0.50	0.62	頁岩B		
314	30T	濠5(24)	不定形石器	F	3.47	1.83	0.54	2.20	頁岩A		
315	36T	濠1	不定形石器	F	5.44	5.02	1.39	17.12	泥岩		

報告No	出土地点	遺構・層位名	器種	分類	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	石材	遺存状態	備考
316	18T	SK2(9)	不定形石器	G	4.93	4.03	0.84	11.89	頁岩A		
317	62T	P1	不定形石器	F	3.56	1.87	0.74	4.43	頁岩C		
318	22T	P74	不定形石器	G	3.59	4.50	0.83	11.50	頁岩B		
319	27T1-2	Ⅰ層	不定形石器	I	5.70	3.40	0.96	17.85	頁岩A		
320	31T2	溝3上Ⅱ層	不定形石器	K	2.43	2.11	0.39	2.14	頁岩A		
321	22T	P48	不定形石器	K	3.81	1.62	1.09	6.46	頁岩B		
322	62T	P33	不定形石器	K	3.86	1.84	1.18	9.16	頁岩B		
323	67T	Ⅱ層	不定形石器	K	2.03	2.03	0.44	1.60	黒曜石		石鏃未成品か？
324	33T5	Ⅱ層	その他		3.46	3.39	1.54	25.21	頁岩B		
325	64T2	Ⅱ層	石核		7.1	7.4	5.6	245.66	頁岩A		
326	68T4	Ⅱ層	磨石類	B 2	14.3	8.2	5.3	1,089.0	ハンレイ岩		
327	33T9	Ⅱ層	磨石類	E	11.2	10	5.4	576.2	フォルンフェルス		
328	18T12·16	Ⅱ層	磨石類	C1c	9.1	8.2	2.4	294.7	輝緑岩		
329	18T21	Ⅱ層	磨石類	E	9.9	8.2	3.8	403.2	花崗岩		アプライト
330	18T	SK2	磨石類	E	14.3	5.9	5.8	584.7	輝緑岩		
331	31T	一括	磨石類	E	12.2	7.4	5.3	489.5	砂岩		
332	22T	Ⅱ層	磨石類	Fa	16.2	4	2.5	252.4	輝緑岩		
333	24T	Ⅱ・Ⅲ層	磨石類	Ga	20.1	8.4	3.8	1,047.7	ハンレイ岩		
334	68T16	Ⅱ層	磨石類	Ga	11.2	5.2	2.3	211.9	輝緑岩		
335	62T1	Ⅱ層	磨石類	Ga	14.2	5	4.5	441.6	圧砕岩		
336	18T17·18	Ⅱ層	磨石類	Gc	12.6	6.1	3.0	286.3	砂岩（中生代）		
337	18T21	Ⅱ層	磨石類	Gc	12.3	7.2	2.6	253.2	輝緑岩		
338	18T14·18	Ⅱ層	砥石	A	23.4	9.3	7.0	1,964.9	砂岩		
339	18T16	Ⅱ層	砥石	A	7.7	5.7	5.5	439.7	花崗岩		アプライト
340	54T2	Ⅱ層	砥石	B	17	13.4	5.0	1,149.0	砂岩		
341	20T12	Ⅱ層	砥石	A	12.7	9.1	5.4	754.9	砂岩		
342	40T	Ⅱ層	石錘		10.5	7.5	2.4	265.1	ヒン岩	完形	
343	5T	Ⅱ層	環状石斧		11.6	11.4	3.4	516.6	ヒン岩	完形	孔径2.6
344	32T3～5	Ⅱ層	小型特殊品	A	9.4	2.2	1.5	52.5	安山岩		
345	32T3	Ⅲ層	小型特殊品	B 1	8.2	2.1	0.8	21.3	泥岩		
346	22T	P43	小型特殊品	B 1	5.8	2.8	0.5	13.6	泥岩		
347	36T4	Ⅱ層	小型特殊品	B 2	6.1	7.7	0.8	51.1	粘板岩		
348	48T	Ⅱ層	小型特殊品	C	5.1	3.9	1.4	26.1	輝緑岩		
349	22T6	Ⅱ層	使用痕跡なし		11.4	7.4	4.9	188.5	泥岩		
350	31T		使用痕跡なし		6.5	2.6	0.8	14.0	粘板岩	長靴形	
351	20T	Ⅱ層	管玉		2.2	0.9	1.8	1.6	緑色凝灰岩	縦半分	孔最大径0.2
352	31T2	Ⅱ層	管玉		1.5	0.8	0.7	1.4	緑色凝灰岩	横方向欠損	孔最大径0.4
426	74T	Ⅱ層	小型特殊品	D類	8.0	2.7	1.1	27.4	粘板岩		

D. ガラス小玉

No	出土地点	計測値(mm) 直径	厚さ	孔径	重さ(g)	残存状況
353	1TSK1	6.0	4.0	2.0	0.11	完形
354	1TSK1	6.0	3.0	1.5	0.14	完形
355	1TSK1	6.0	3.0	1.0	0.15	完形
356	1TSK1	5.5	3.5	1.5	0.13	完形
357	1TSK1	5.5	2.0	2.0	0.07	完形
358	1TSK1	5.5	2.5	2.0	0.11	完形
359	1TSK1	5.0	4.0	2.0	0.11	完形
360	1TSK1	5.0	3.5	1.0	0.12	完形
361	1TSK1	5.0	3.0	2.0	0.12	完形
362	1TSK1	5.0	3.0	2.0	0.09	完形
363	1TSK1	5.0	3.0	2.0	0.11	完形
364	1TSK1	5.0	3.0	2.0	0.09	完形
365	1TSK1	5.0	3.0	1.5	0.09	完形
366	1TSK1	5.0	3.0	1.0	0.10	完形
367	1TSK1	5.0	3.0	1.0	0.08	完形
368	1TSK1	5.0	2.5	1.0	0.08	完形
369	1TSK1	5.0	2.0	2.0	0.08	完形
370	1TSK1	5.0	2.0	2.0	0.06	完形
371	1TSK1	5.0	2.0	1.0	0.07	完形
372	1TSK1	4.5	3.5	2.0	0.08	完形
373	1TSK1	4.5	3.0	2.0	0.06	完形
374	1TSK1	4.5	3.0	2.0	0.08	完形
375	1TSK1	4.5	3.0	2.0	0.07	完形
376	1TSK1	4.5	3.0	1.5	0.08	完形

No	出土地点	計測値(mm) 直径	厚さ	孔径	重さ(g)	残存状況
377	1TSK1	4.5	3.0	2.0	0.08	完形
378	1TSK1	4.5	3.0	1.0	0.08	完形
379	1TSK1	4.5	2.0	2.0	0.08	完形
380	1TSK1	4.5	2.0	2.0	0.06	完形
381	1TSK1	4.5	2.0	1.5	0.07	完形
382	1TSK1	4.5	2.0	1.5	0.08	完形
383	1TSK1	4.5	2.0	1.5	0.08	完形
384	1TSK1	4.5	2.0	1.0	0.06	完形
385	1TSK1	4.5	2.0	1.0	0.07	完形
386	1TSK1	4.5	2.0	1.0	0.09	完形
387	1TSK1	4.0	4.0	2.0	0.10	完形
388	1TSK1	4.0	4.0	1.5	0.11	完形
389	1TSK1	4.0	4.0	1.5	0.08	完形
390	1TSK1	4.0	3.5	1.0	0.07	完形
391	1TSK1	4.0	3.5	1.0	0.07	完形
392	1TSK1	4.0	3.5	2.0	0.09	完形
393	1TSK1	4.0	3.0	2.0	0.08	完形
394	1TSK1	4.0	3.0	2.0	0.07	完形
395	1TSK1	4.0	3.0	2.0	0.08	完形
396	1TSK1	4.0	3.0	2.0	0.08	完形
397	1TSK1	4.0	3.0	2.0	0.07	完形
398	1TSK1	4.0	3.0	2.0	0.07	完形
399	1TSK1	4.0	3.0	2.0	0.10	完形
400	1TSK1	4.0	3.0	2.0	0.10	完形

No	出土地点	計測値(mm) 直径	厚さ	孔径	重さ(g)	残存状況
401	1TSK1	4.0	3.0	2.0	0.08	完形
402	1TSK1	4.0	3.0	2.0	0.07	完形
403	1TSK1	4.0	3.0	1.5	0.09	完形
404	1TSK1	4.0	3.0	1.5	0.08	完形
405	1TSK1	4.0	3.0	1.5	0.09	完形
406	1TSK1	4.0	3.0	1.5	0.10	完形
407	1TSK1	4.0	3.0	1.5	0.09	完形
408	1TSK1	4.0	3.0	1.0	0.07	完形
409	1TSK1	4.0	3.0	1.0	0.06	完形
410	1TSK1	4.0	3.0	1.0	0.10	完形
411	1TSK1	4.0	2.5	2.0	0.06	完形
412	1TSK1	4.0	2.5	1.5	0.07	完形
413	1TSK1	4.0	2.5	1.5	0.06	完形
414	1TSK1	4.0	2.0	1.0	0.08	完形
415	1TSK1	4.0	2.0	1.0	0.07	完形
416	1TSK1	4.0	2.0	1.0	0.08	完形
417	1TSK1	4.0	2.0	1.0	0.09	完形
418	1TSK1	4.0	1.5	2.0	0.04	完形
419	1TSK1	3.5	3.0	2.0	0.06	完形
420	1TSK1	3.5	2.5	1.0	0.06	完形
421	1TSK1	4.5	3.0	2.0	0.08	半分
422	1TSK1	2.0	4.0	1.5	0.05	半分
423	1TSK1	2.0	4.0	1.5	0.03	半分
424	1TSK1	5.0	3.0	2.0	0.08	半分

図　　版

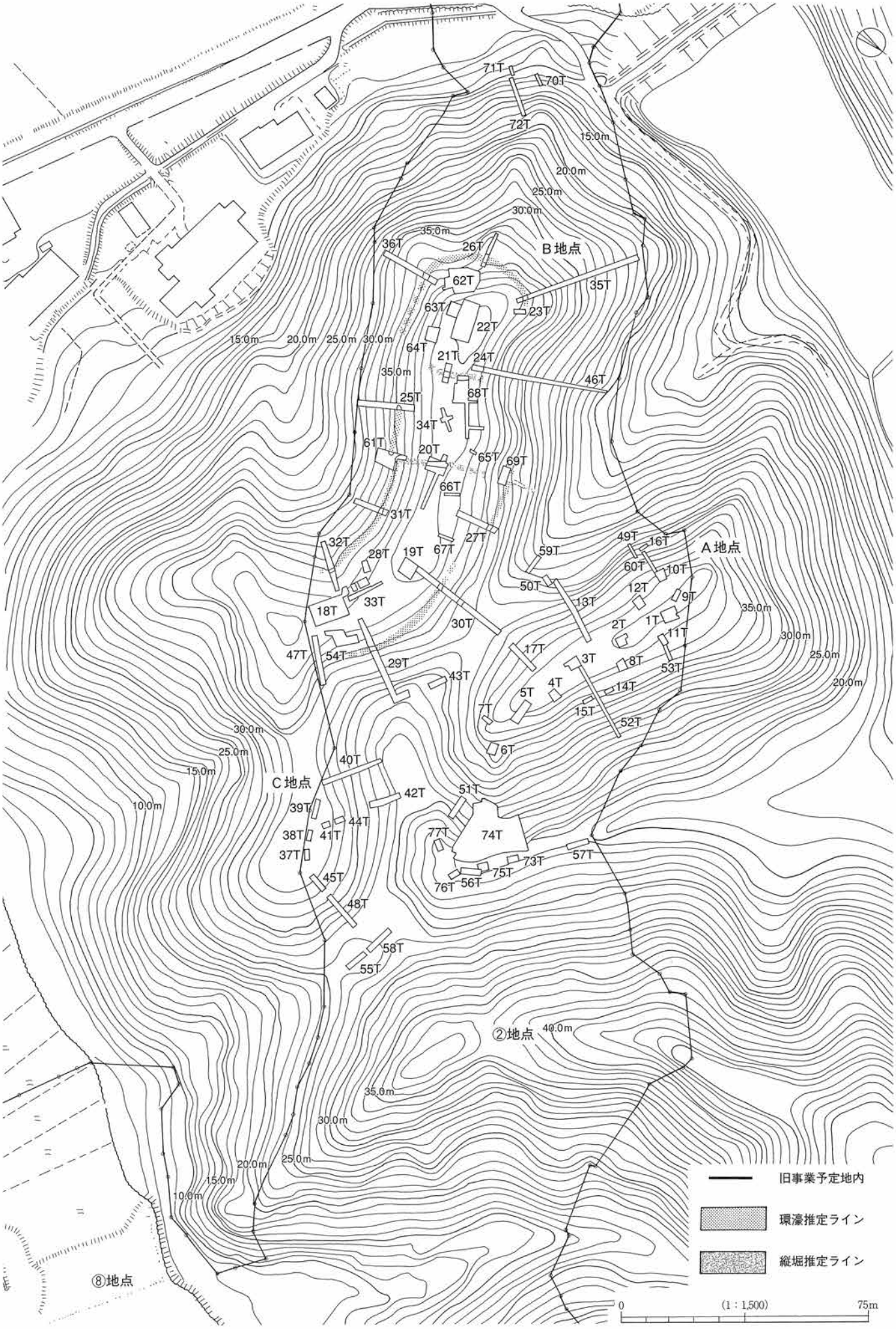
凡例

1　各図版には縮尺率及びスケールを付した。

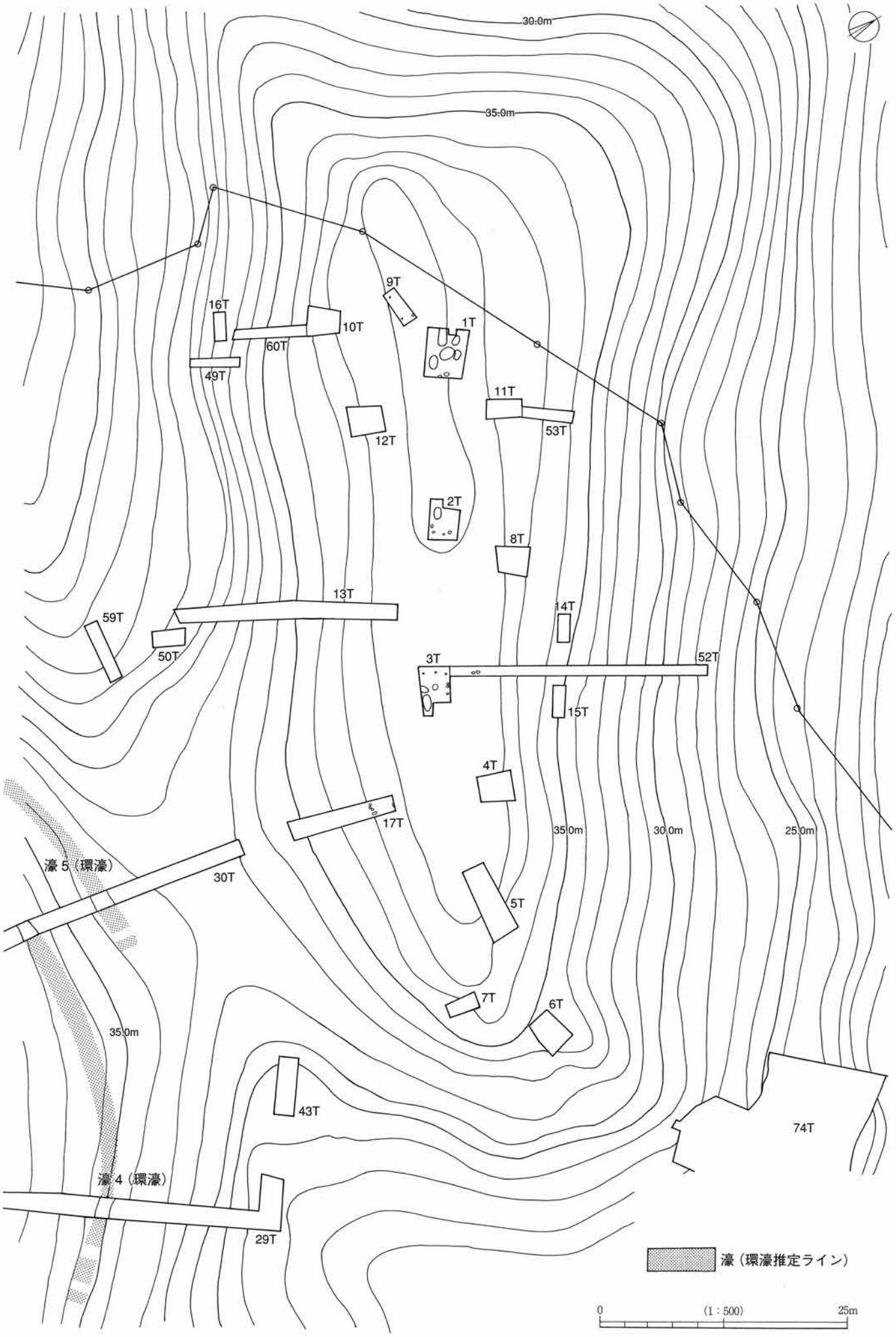
2　遺物番号脇の（　）は、土器がトレンチ内の小グリッド、土製品や石器・石製品は出土地点（トレンチ・遺構名・小グリッド・層位）である。

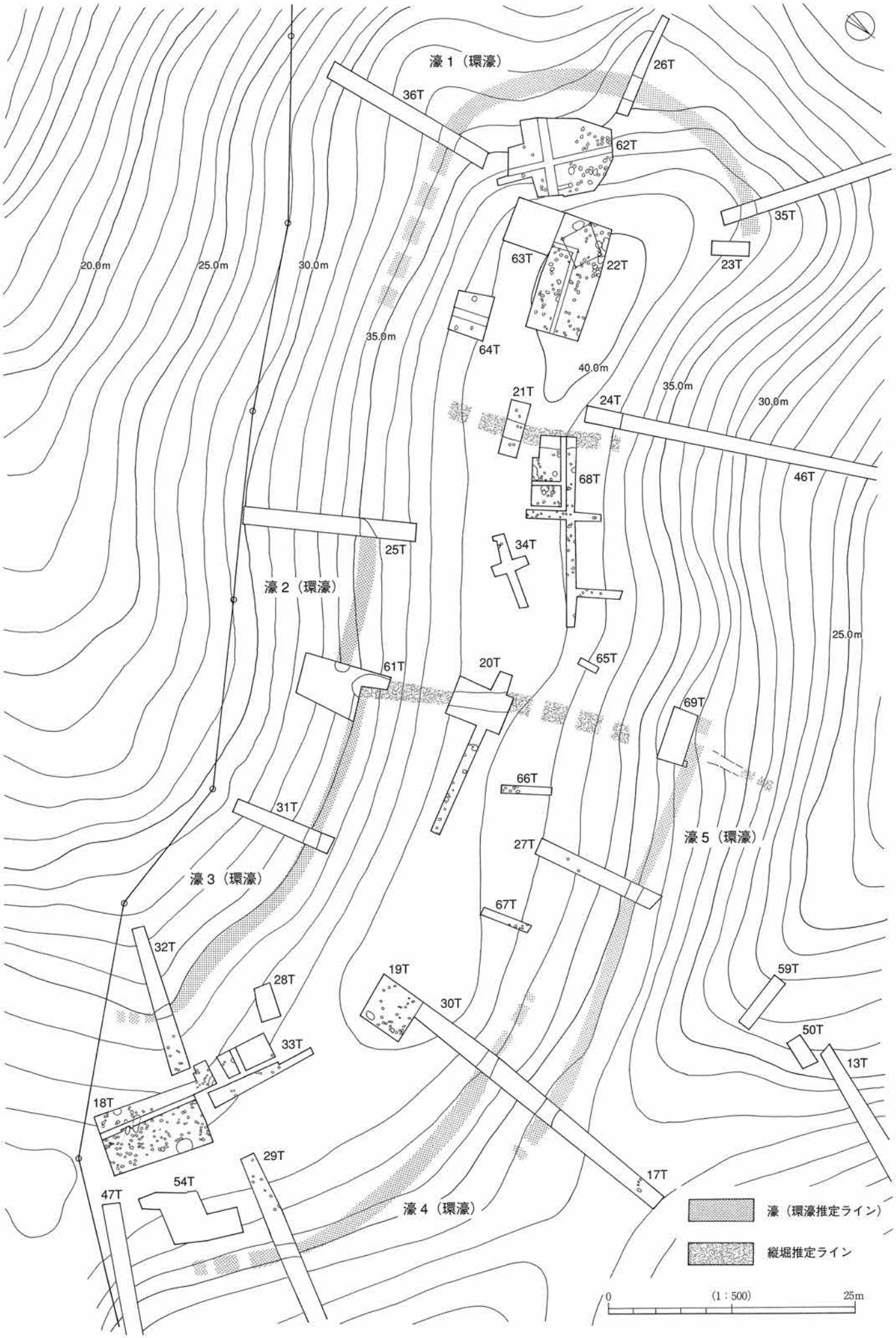
遺跡全体図

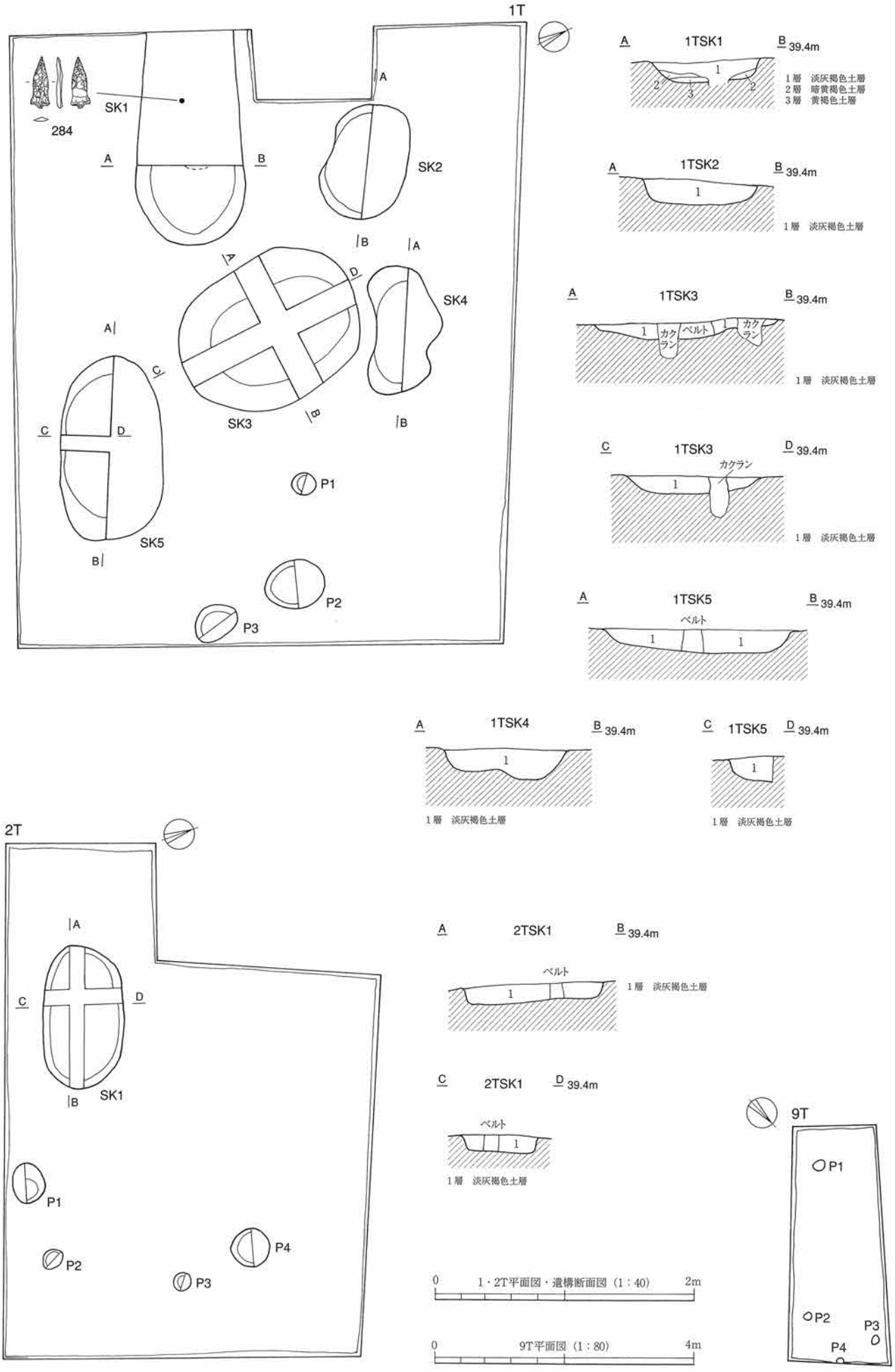
図 版 1

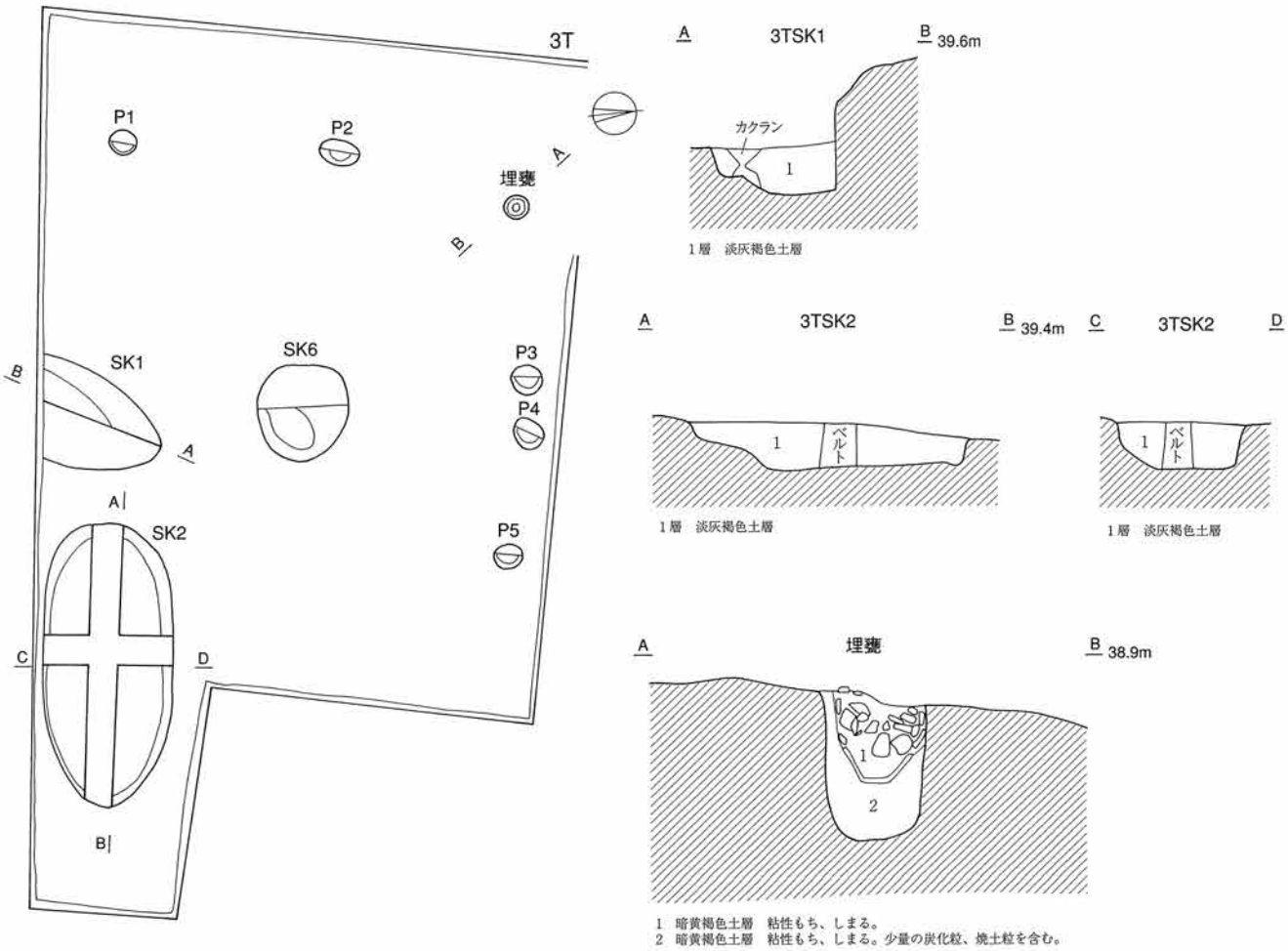


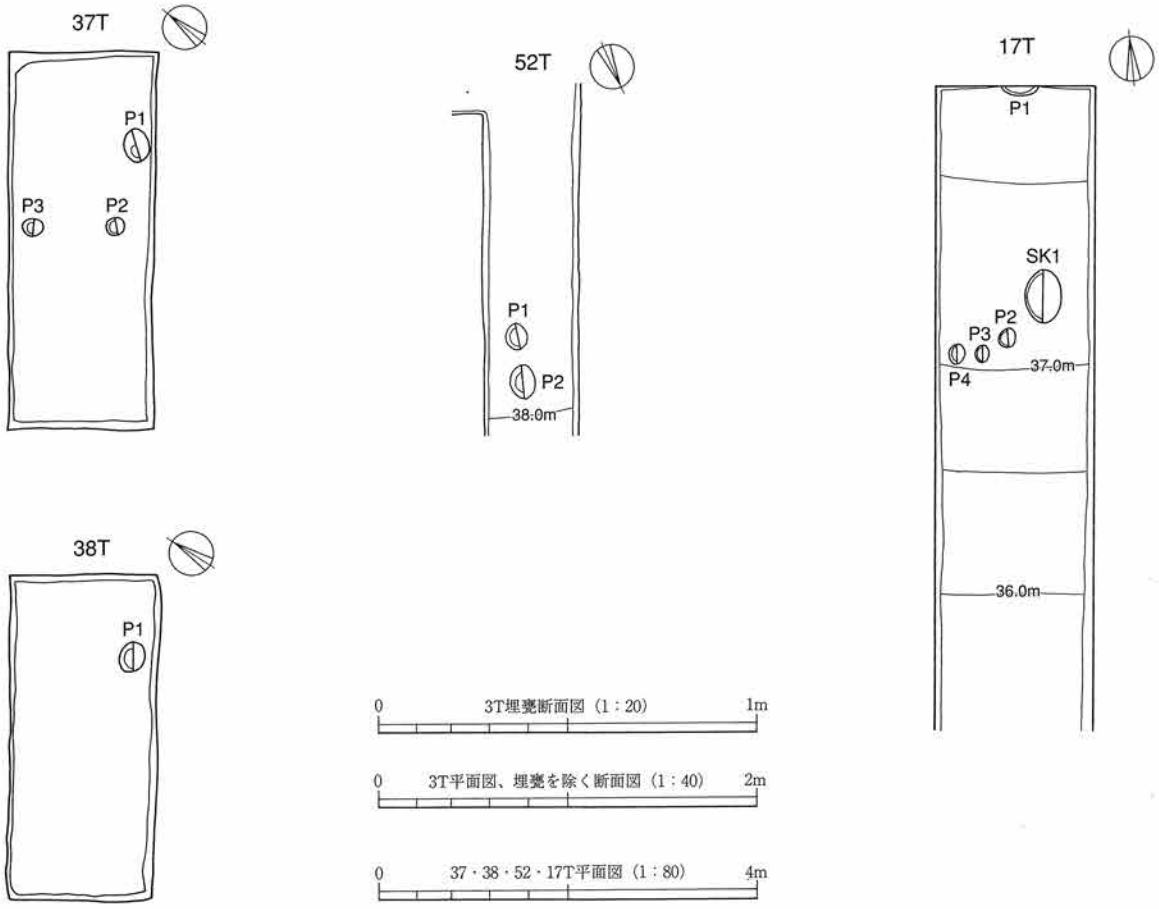
A地点全体図

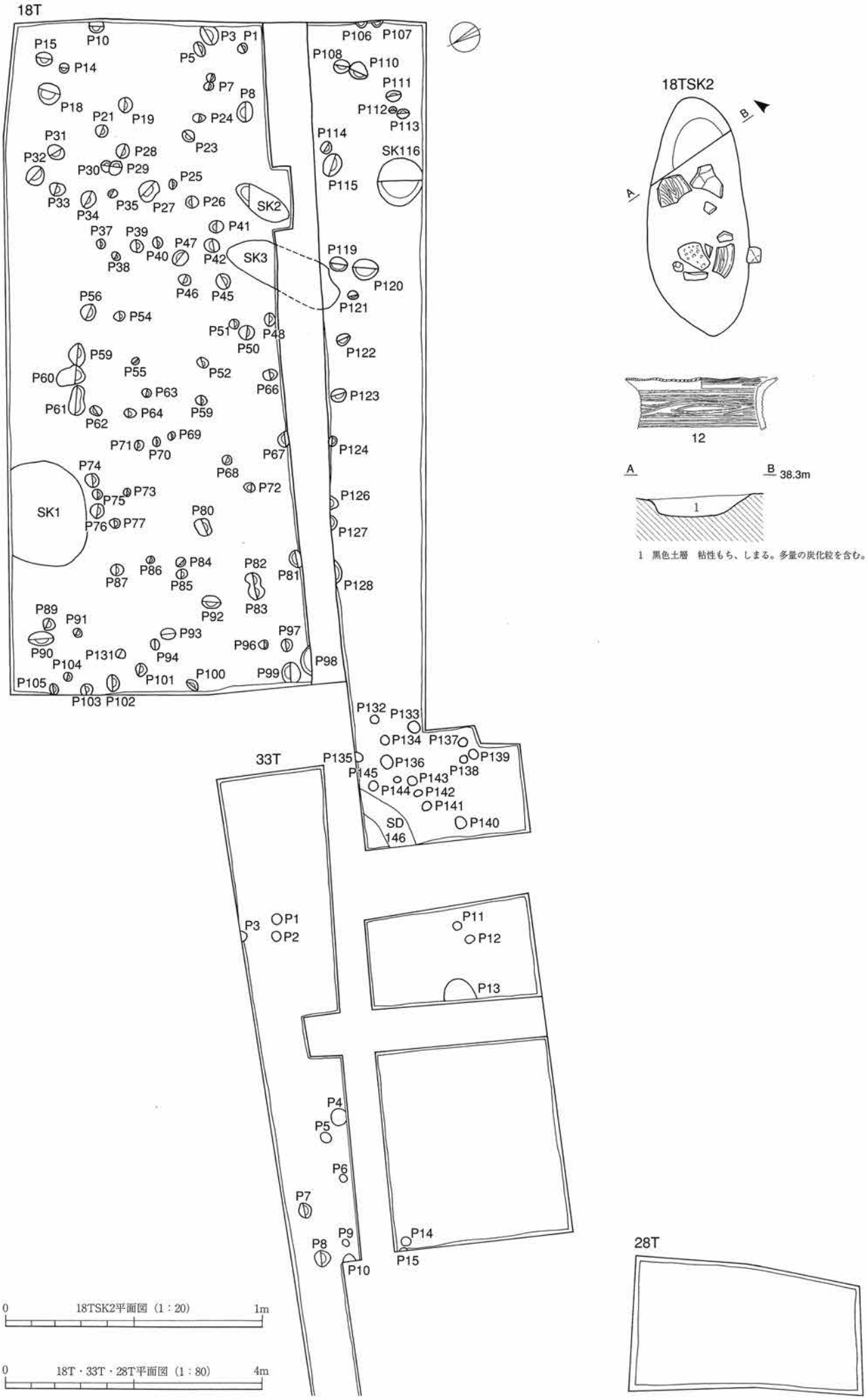

30.0m
35.0m
9T
16T
10T
1T
60T
49T
11T
53T
12T
2T
8T
13T
14T
59T
50T
3T
52T
15T
4T
17T
35.0m
30.0m
25.0m
濠 5（環濠）
30T
5T
7T
6T
35.0m
43T
74T
濠 4（環濠）
29T
濠（環濠推定ライン）
0
(1：500)
25m

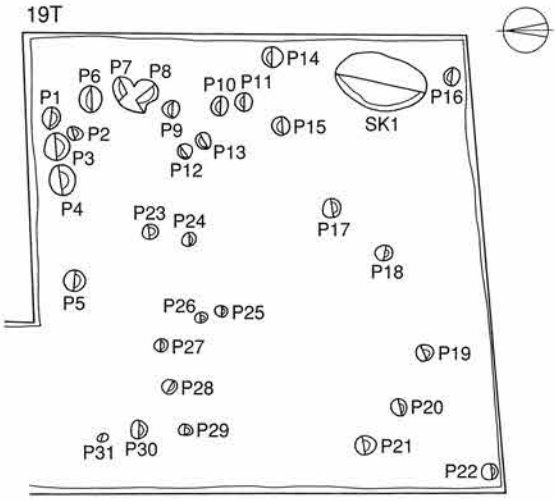

濠 1（環濠）
26T
36T
62T
35T
23T
63T
22T
20.0m
25.0m
30.0m
35.0m
64T
40.0m
21T
24T
35.0m
30.0m
46T
68T
25T
34T
濠 2（環濠）
25.0m
61T
20T
65T
69T
66T
31T
27T
濠 5（環濠）
濠 3（環濠）
67T
32T
19T
59T
28T
30T
50T
33T
13T
18T
29T
17T
54T
47T
濠 4（環濠）
濠（環濠推定ライン）
縦堀推定ライン
0
(1：500)
25m

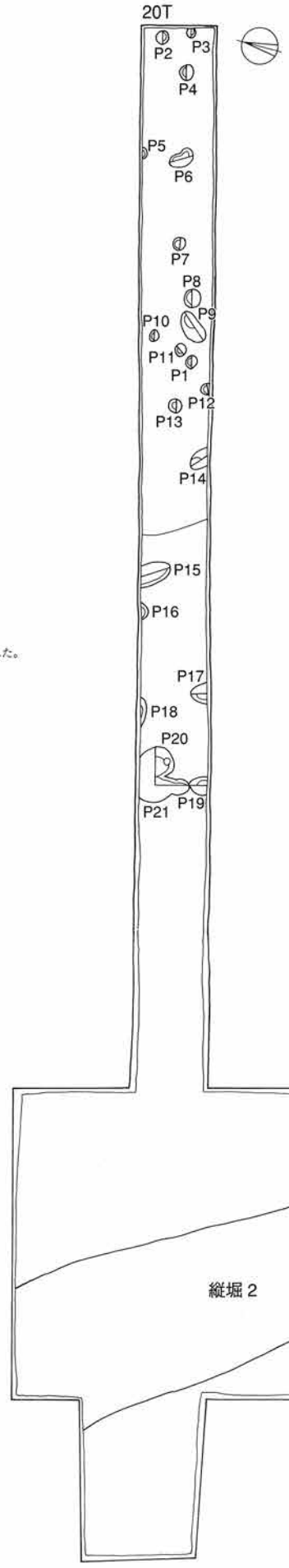

1T
SK1
284
SK2
SK3
SK4
SK5
P1
P2
P3
1TSK1
B 39.4m
1層　淡灰褐色土層
2層　暗黄褐色土層
3層　黄褐色土層
1TSK2
1層　淡灰褐色土層
1TSK3
カクラン
ベルト
1層　淡灰褐色土層
1TSK5
1TSK4
2T
SK1
P1
P2
P3
P4
2TSK1
9T
P1
P2
P3
P4
1・2T平面図・遺構断面図（1：40）
9T平面図（1：80）


3T
P1
P2
埋甕
SK1
SK6
P3
P4
P5
SK2
A
B
C
D
3TSK1
39.6m
カクラン
1
1層　淡灰褐色土層
3TSK2
39.4m
ベルト
1層　淡灰褐色土層
3TSK2
ベルト
1層　淡灰褐色土層
埋甕
38.9m
1
2
1　暗黄褐色土層　粘性もち、しまる。
2　暗黄褐色土層　粘性もち、しまる。少量の炭化粒、焼土粒を含む。

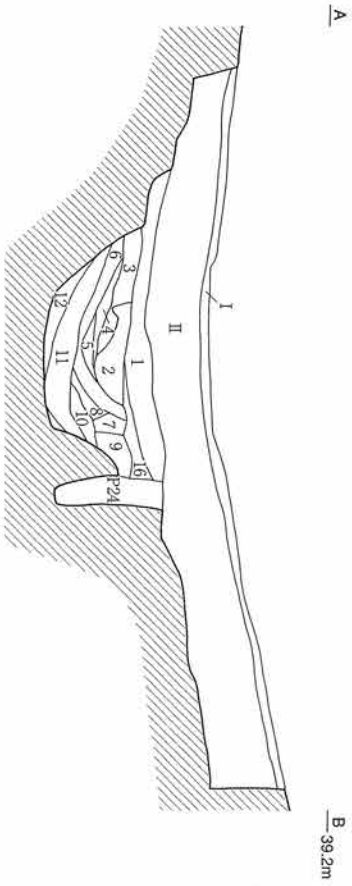

37T
P1
P3
P2
52T
P1
P2
38.0m
17T
P1
SK1
P2
P3
P4
37.0m
36.0m
38T
P1
0　3T埋甕断面図（1：20）　1m
0　3T平面図、埋甕を除く断面図（1：40）　2m
0　37・38・52・17T平面図（1：80）　4m


18T
P15
P10
P3
P1
P5
P14
P7
P8
P18
P21
P19
P24
P31
P23
P32
P28
P30
P29
P25
P33
P34
P35
P27
P26
SK2
P37
P39
P41
P47
P40
P42
SK3
P38
P46
P45
P56
P54
P51
P48
P50
P59
P55
P52
P60
P63
P66
P61
P64
P59
P62
P69
P71
P70
P67
P74
P68
P73
P72
P75
SK1
P76
P77
P80
P84
P86
P82
P81
P87
P85
P83
P92
P89
P91
P93
P97
P90
P131
P94
P96
P98
P104
P100
P99
P105
P101
P103
P102
P106
P107
P108
P110
P111
P112
P113
P114
SK116
P115
P119
P120
P121
P122
P123
P124
P126
P127
P128
P132
P133
P134
P137
P139
P135
P136
P138
P145
P143
P144
P142
P141
P140
SD
146
33T
P3
P1
P2
P11
P12
P13
P4
P5
P6
P7
P9
P14
P8
P10
P15
28T
18TSK2
A
B
12
A
B
38.3m
1
1 黒色土層　粘性もち、しまる。多量の炭化粒を含む。
0
18TSK2平面図（1：20）
1m
0
18T・33T・28T平面図（1：80）
4m



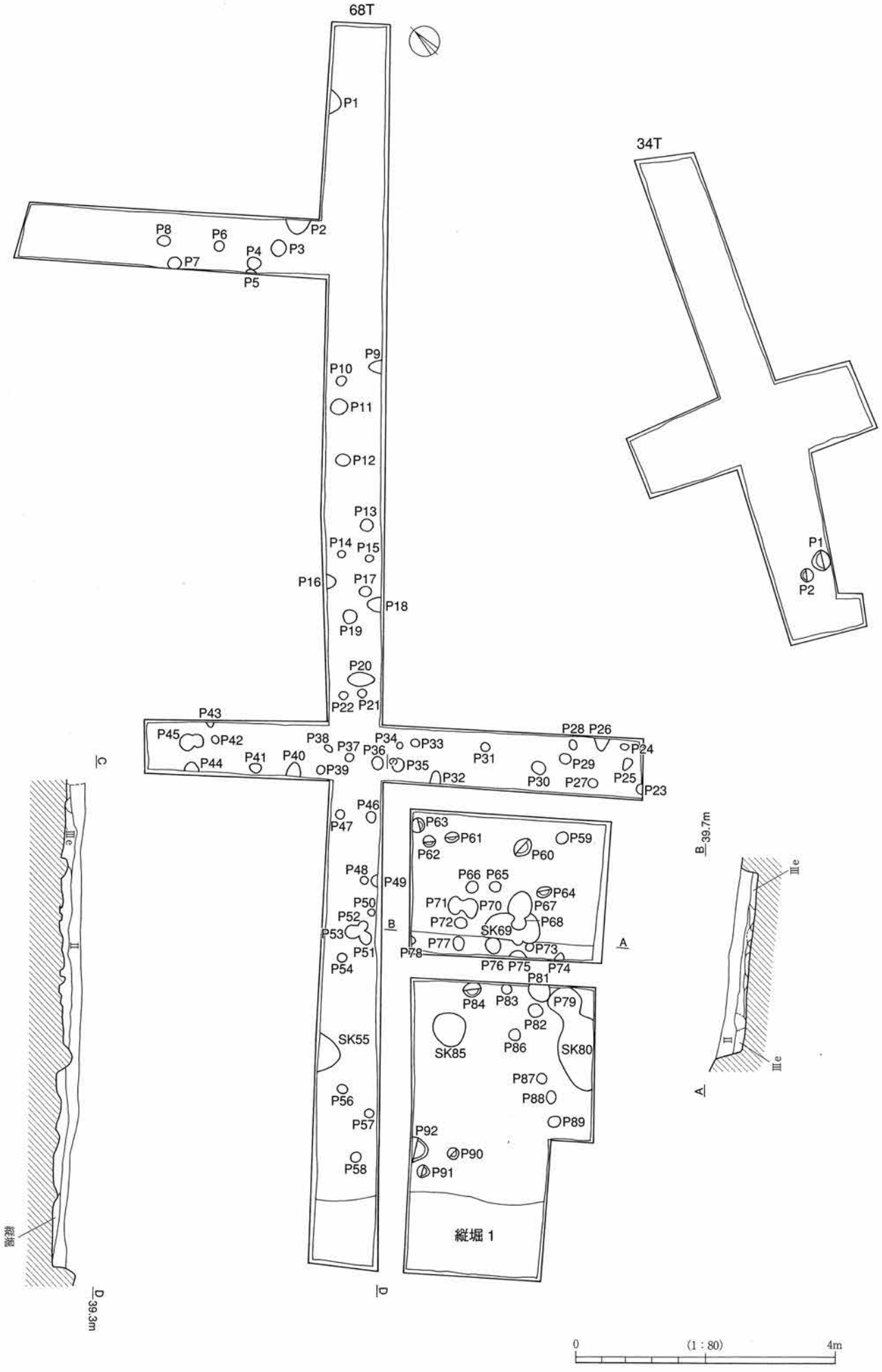


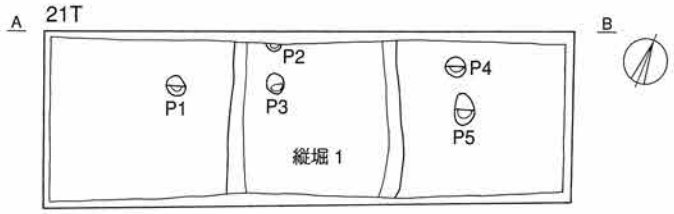
1　暗褐色土層　粘性もち、しまる。少量の炭化粒を含む。ロームブロックを含むものを1b層とした。
2　黒褐色土層　粘性もち、しまる。多量の炭化粒、少量のローム粒を含む。
3　暗黄褐色土層　粘性もち、しまる。微量の炭化粒を含む。
4　黒褐色土層　粘性もち、しまる。多量の炭化粒を含む。
5　暗黄褐色土層　粘性もち、しまる。微量の炭化粒を含む。
6　黒褐色土層　粘性もちしまる。多量の炭化粒を含む。
7　黒褐色土層　粘性もちしまる。多量の炭化粒を含む。
8　暗黄褐色土層　粘性もち、しまる。微量の炭化粒を含む。
9　褐色土層　粘性もち、しまる。多量の炭化粒を含む。
10　褐色土層　粘性もち、しまる。少量の炭化粒を含む。
11　暗黄褐色土層　粘性もち、しまる。微量の炭化粒を含む。
12　暗黄褐色土層（11層よりやや暗い）　粘性もち、しまる。少量の炭化粒を含む。

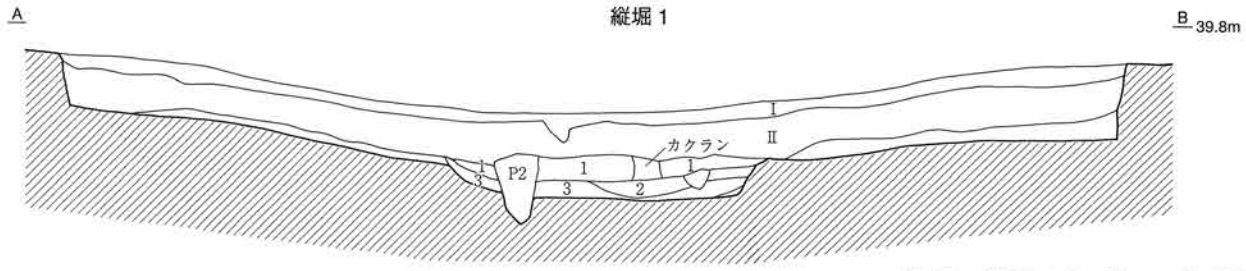


0　20T縦堀 2 断面図（1：40）　2m

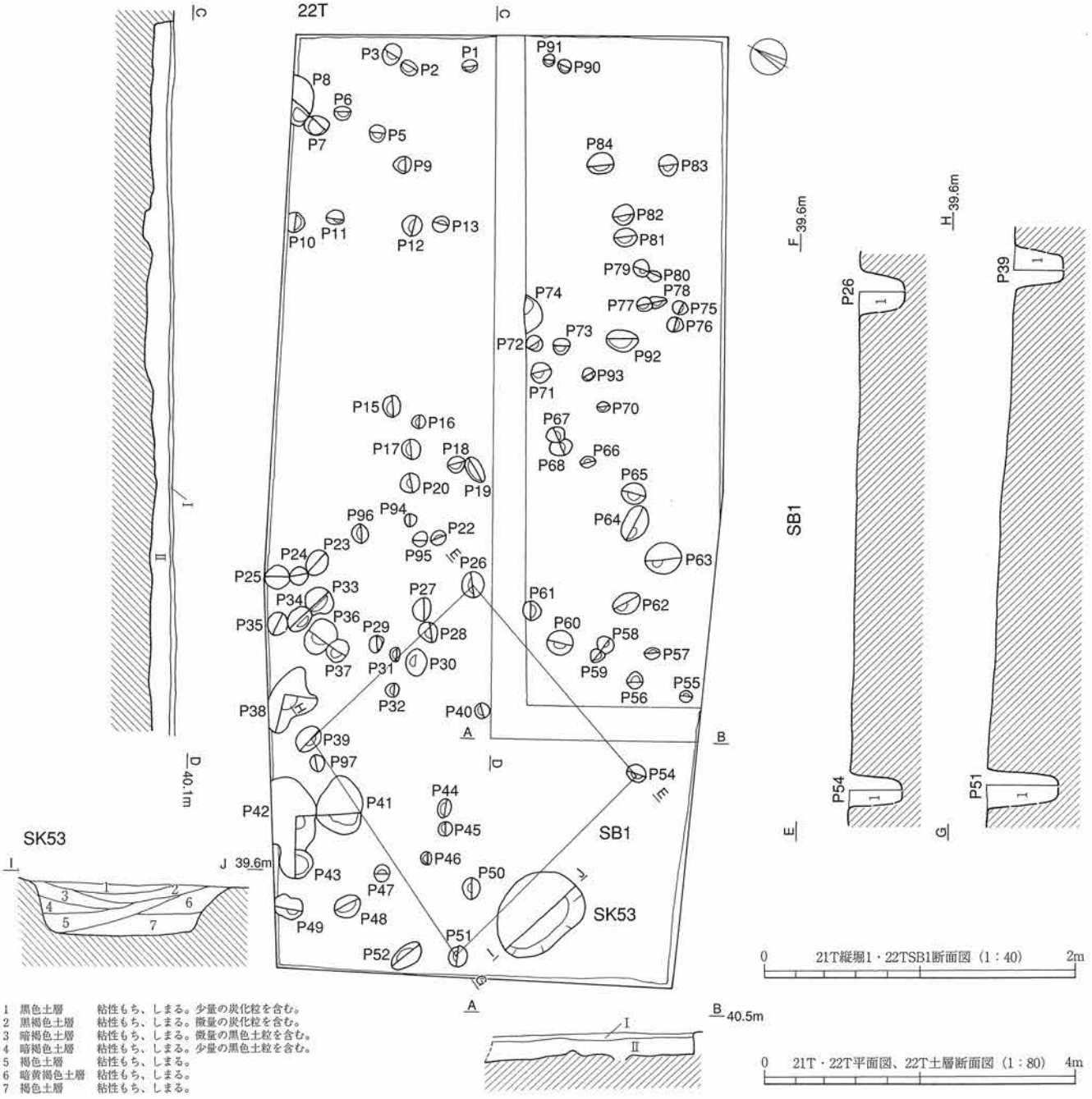
0　19T・20T（1：80）　4m


68T
34T
縦堀 1
段差
C
D
A
B
B 39.7m
D 39.3m
0
(1 : 80)
4m



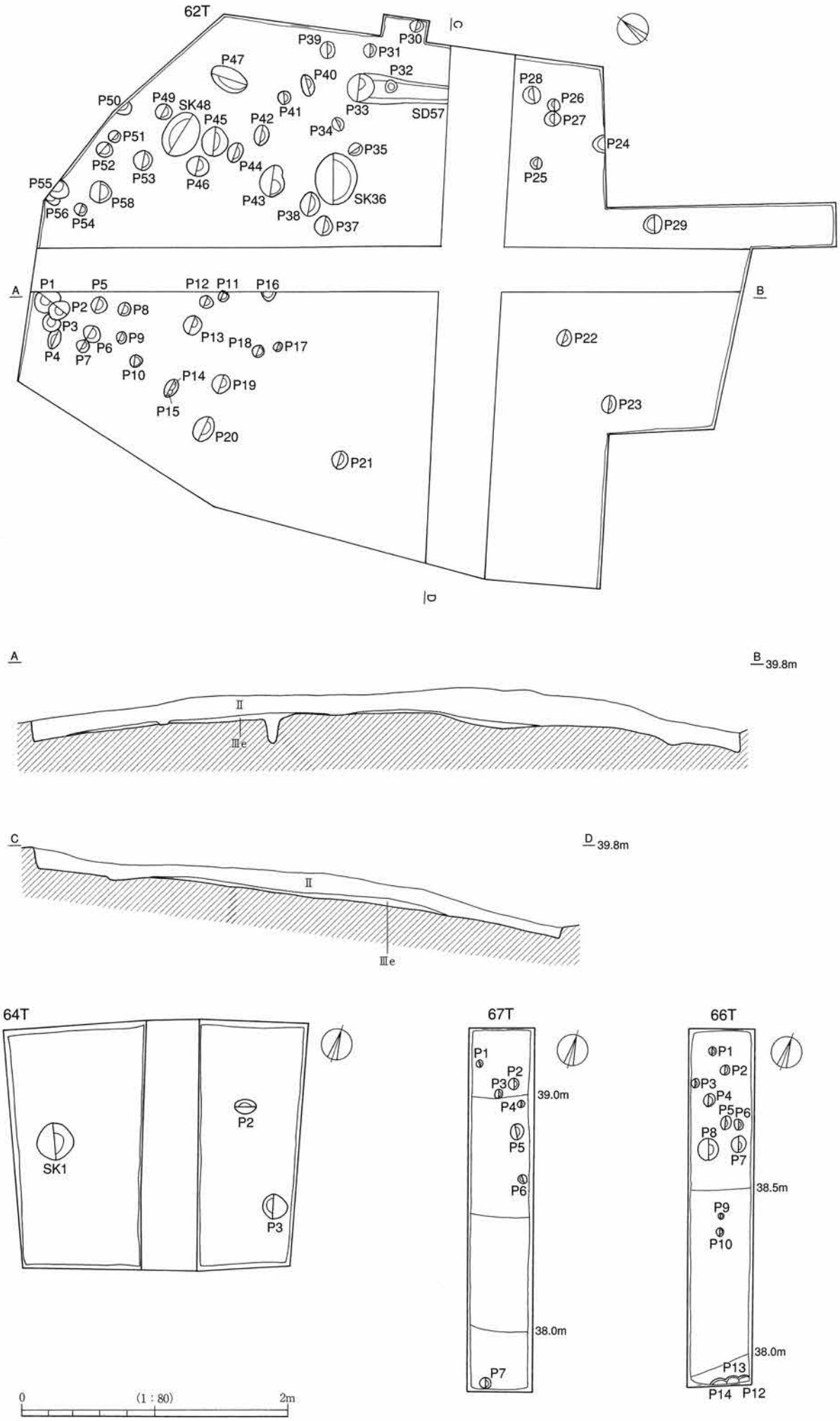


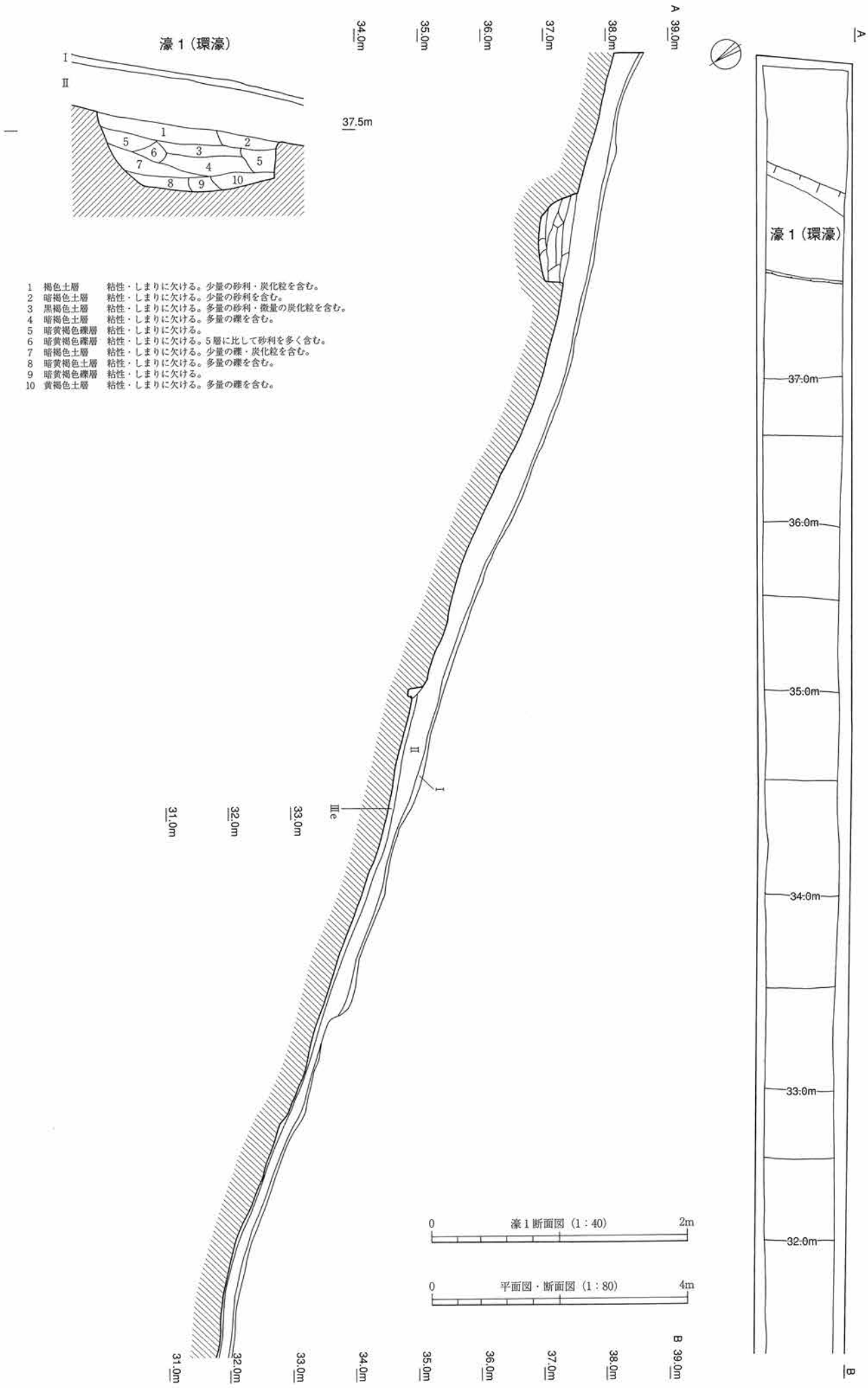
1　褐色土層　粘性もち、しまる。少量のローム粒・炭化粒を含む。
2　暗褐色土層　粘性もち、しまる。多量のロームブロックを含む。
3　淡褐色土層　粘性もち、しまる。ローム粒と黒褐色土の混合層。

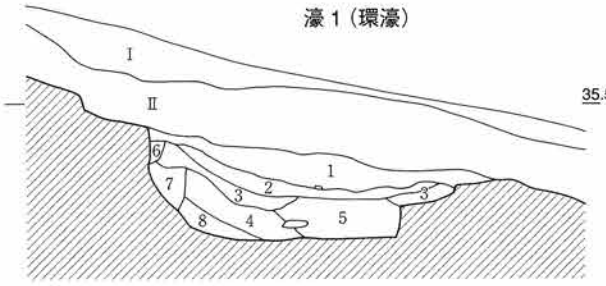


1　黒色土層　粘性もち、しまる。少量の炭化粒を含む。

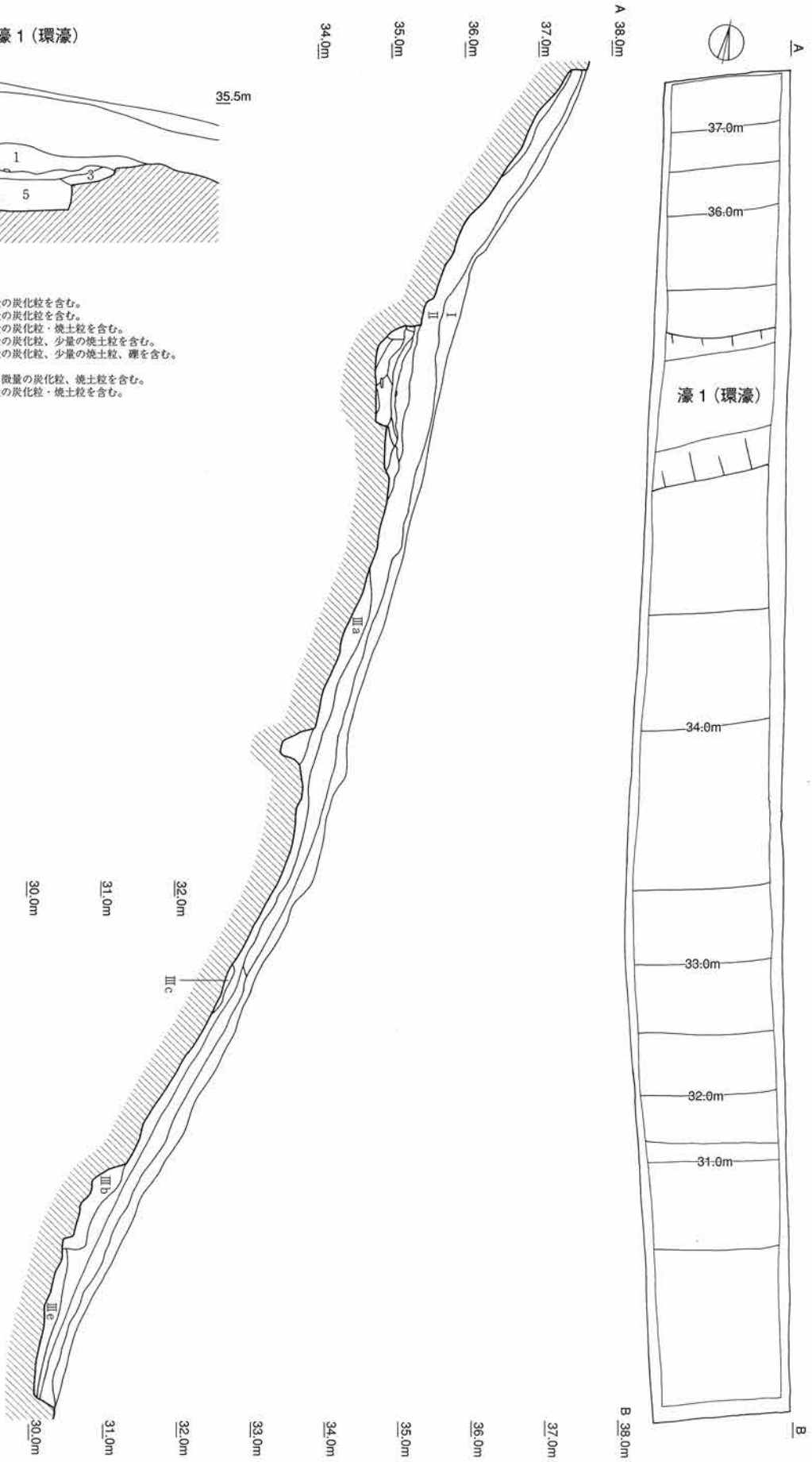
1　黒色土層　粘性もち、しまる。少量の炭化粒を含む。
2　黒褐色土層　粘性もち、しまる。微量の炭化粒を含む。
3　暗褐色土層　粘性もち、しまる。微量の黒色土粒を含む。
4　暗褐色土層　粘性もち、しまる。少量の黒色土粒を含む。
5　褐色土層　粘性もち、しまる。
6　暗黄褐色土層　粘性もち、しまる。
7　褐色土層　粘性もち、しまる。


62T
P30
P39
P31
P47
P40
P32
P28
P26
P27
P50
P49
SK48
P45
P42
P41
P33
SD57
P34
P51
P35
P24
P52
P53
P44
P46
P25
P55
P58
P43
SK36
P56
P54
P38
P37
P29
A
P1
P5
P12
P11
P16
B
P2
P8
P3
P13
P18
P17
P22
P4
P7
P6
P9
P10
P14
P19
P15
P23
P20
P21
A
B 39.8m
Ⅱ
Ⅲe
C
D 39.8m
Ⅱ
Ⅲe
64T
SK1
P2
P3
67T
P1
P2
P3
39.0m
P4
P5
P6
38.0m
P7
66T
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P8
P7
38.5m
P9
P10
38.0m
P13
P14
P12
0
(1 : 80)
2m


濠 1（環濠）
I
II
37.5m
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
1　褐色土層　粘性・しまりに欠ける。少量の砂利・炭化粒を含む。
2　暗褐色土層　粘性・しまりに欠ける。少量の砂利を含む。
3　黒褐色土層　粘性・しまりに欠ける。多量の砂利・微量の炭化粒を含む。
4　暗褐色土層　粘性・しまりに欠ける。多量の礫を含む。
5　暗黄褐色礫層　粘性・しまりに欠ける。
6　暗黄褐色礫層　粘性・しまりに欠ける。5層に比して砂利を多く含む。
7　暗褐色土層　粘性・しまりに欠ける。少量の礫・炭化粒を含む。
8　暗黄褐色土層　粘性・しまりに欠ける。多量の礫を含む。
9　暗黄褐色礫層　粘性・しまりに欠ける。
10　黄褐色土層　粘性・しまりに欠ける。多量の礫を含む。
A
B
34.0m
35.0m
36.0m
37.0m
38.0m
39.0m
31.0m
32.0m
33.0m
IIIe
II
I
濠 1 断面図（1：40）
0
2m
平面図・断面図（1：80）
0
4m
濠 1（環濠）
37.0m
36.0m
35.0m
34.0m
33.0m
32.0m



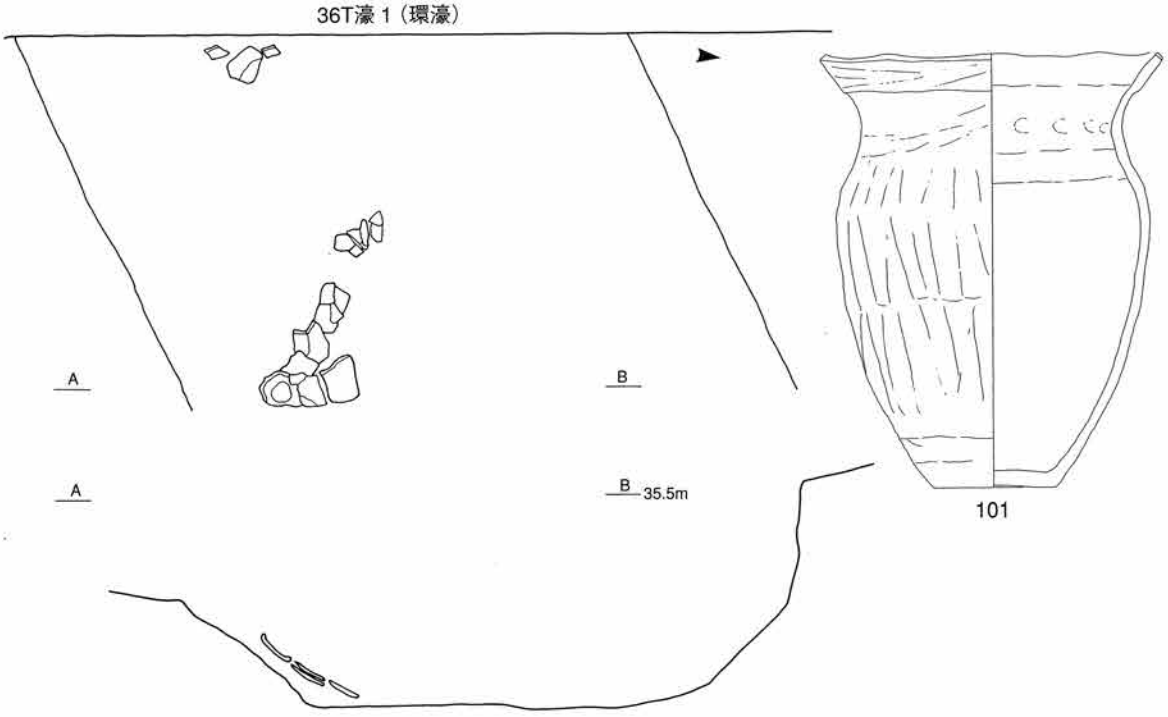
1 褐色土層　粘性に欠けるが、しまる。微量の炭化粒を含む。
2 暗褐色土層　粘性に欠けるが、しまる。少量の炭化粒を含む。
3 黒褐色土層　粘性に欠けるが、しまる。少量の炭化粒・焼土粒を含む。
4 暗褐色土層　粘性に欠けるが、しまる。多量の炭化粒、少量の焼土粒を含む。
5 黒色土層　粘性に欠けるが、しまる。多量の炭化粒、少量の焼土粒、礫を含む。
6 褐色土層　粘性に欠けるが、ややしまる。
7 暗褐色土層　粘性に欠けるが、ややしまる。微量の炭化粒、焼土粒を含む。
8 黒色土層　粘性に欠けるが、しまる。多量の炭化粒・焼土粒を含む。

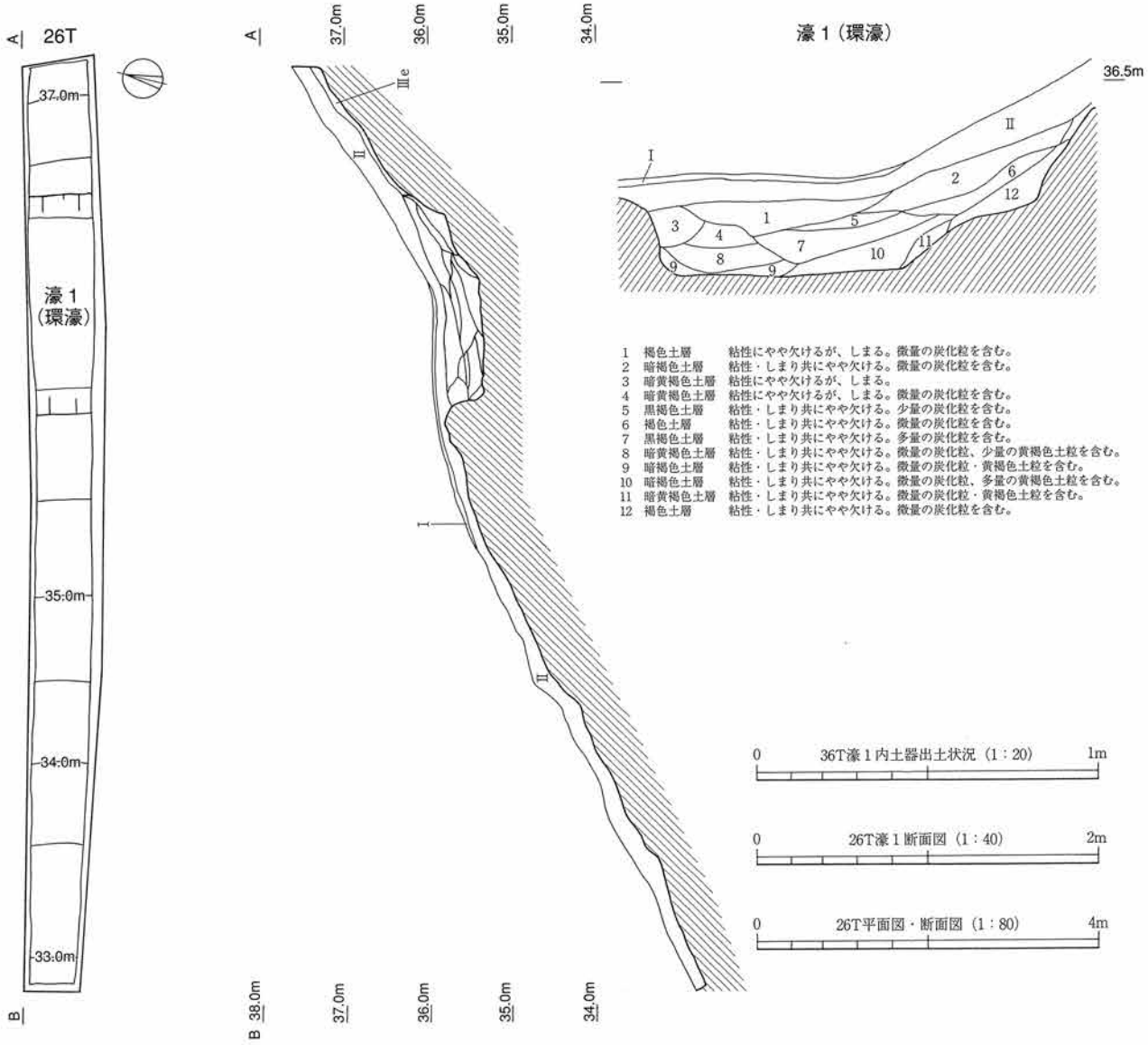


0　濠1断面図（1：40）　2m

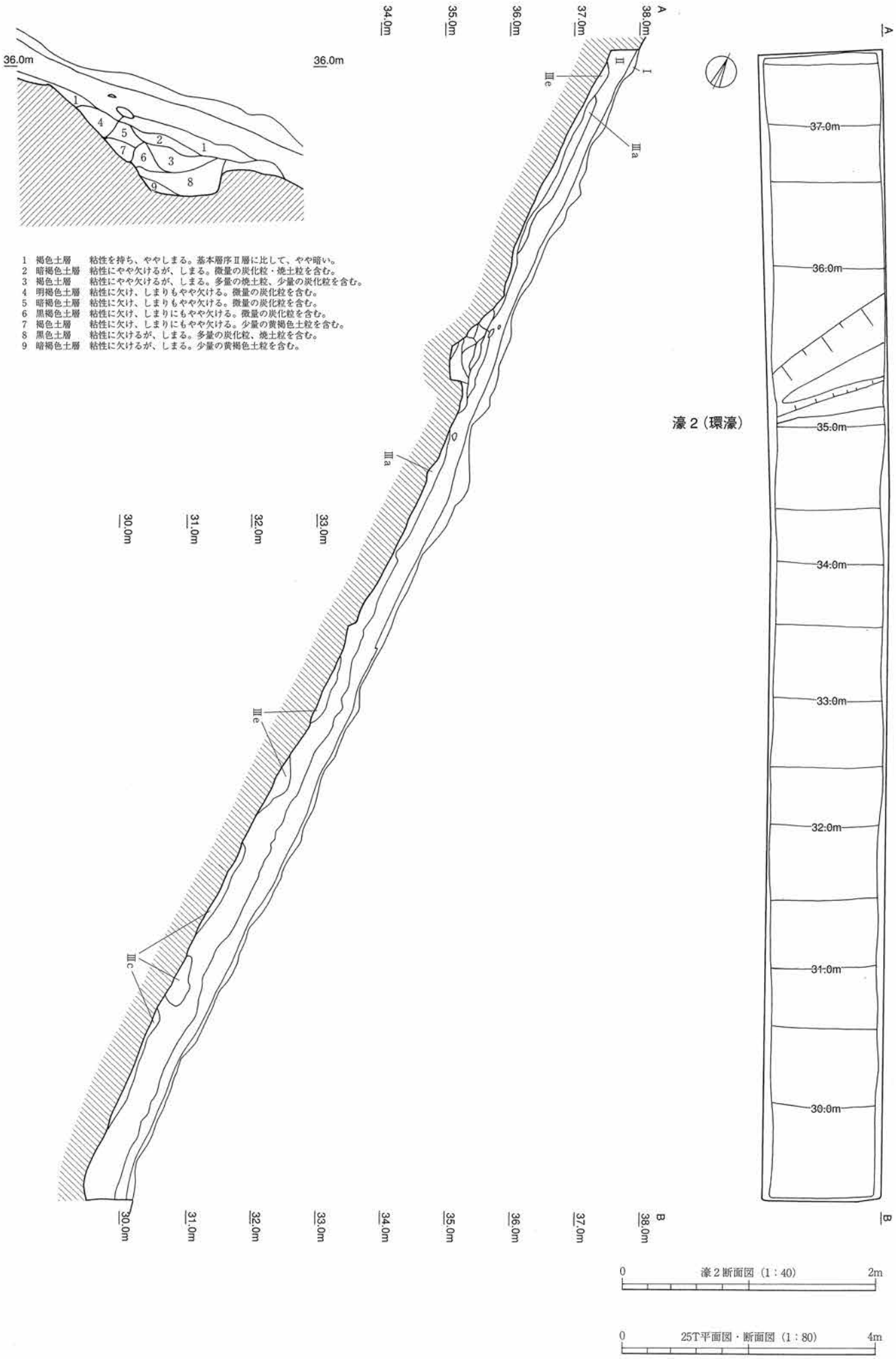
0　36T平面図・断面図（1：80）　4m

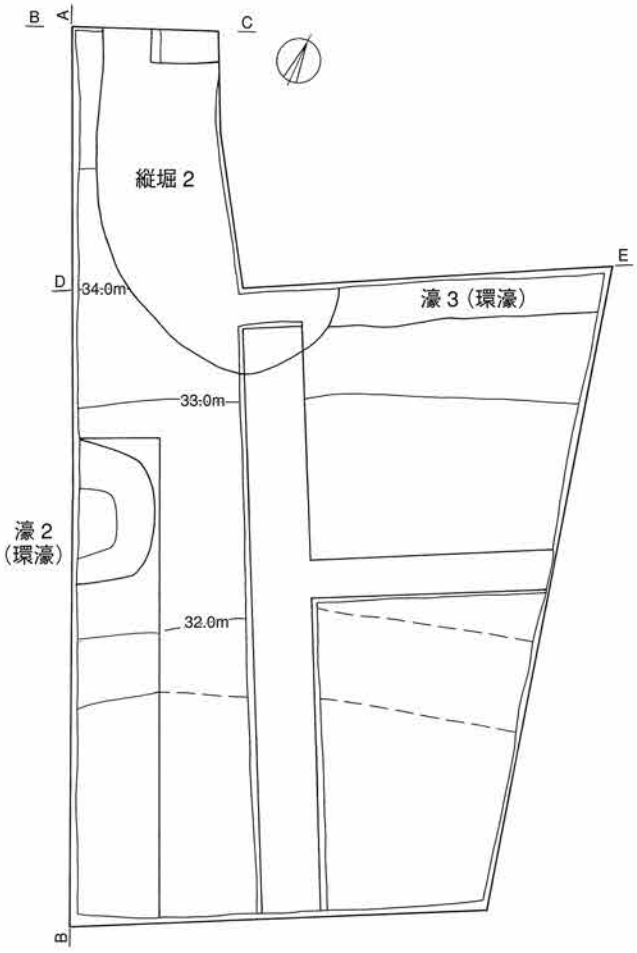
36T濠1（環濠）

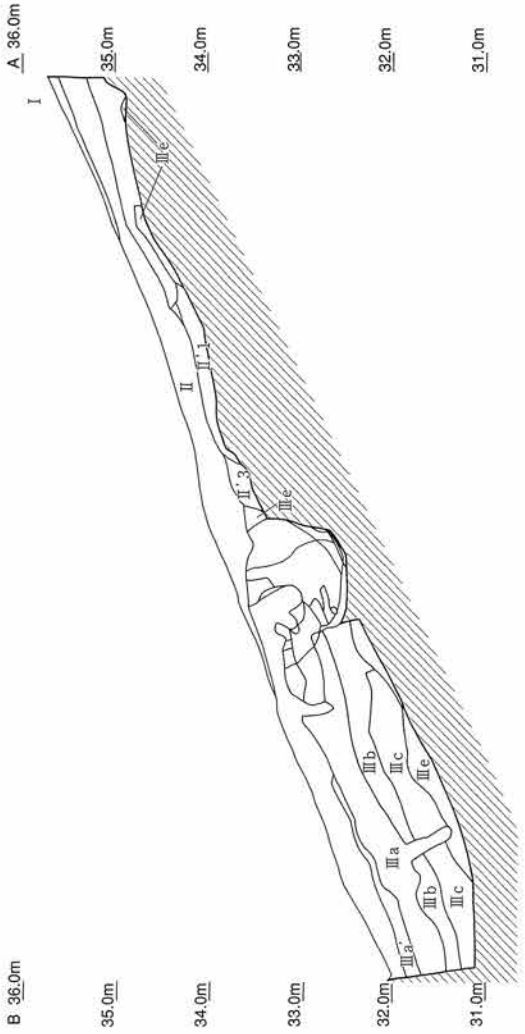




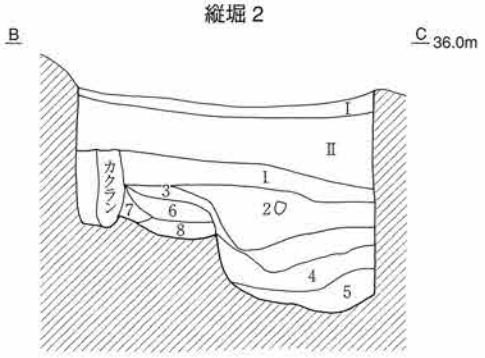
1	褐色土層	粘性にやや欠けるが、しまる。微量の炭化粒を含む。
2	暗褐色土層	粘性・しまり共にやや欠ける。微量の炭化粒を含む。
3	暗黄褐色土層	粘性にやや欠けるが、しまる。
4	暗黄褐色土層	粘性にやや欠けるが、しまる。微量の炭化粒を含む。
5	黒褐色土層	粘性・しまり共にやや欠ける。少量の炭化粒を含む。
6	褐色土層	粘性・しまり共にやや欠ける。微量の炭化粒を含む。
7	黒褐色土層	粘性・しまり共にやや欠ける。多量の炭化粒を含む。
8	暗黄褐色土層	粘性・しまり共にやや欠ける。微量の炭化粒、少量の黄褐色土粒を含む。
9	暗褐色土層	粘性・しまり共にやや欠ける。微量の炭化粒・黄褐色土粒を含む。
10	暗褐色土層	粘性・しまり共にやや欠ける。微量の炭化粒、多量の黄褐色土粒を含む。
11	暗黄褐色土層	粘性・しまり共にやや欠ける。微量の炭化粒・黄褐色土粒を含む。
12	褐色土層	粘性・しまり共にやや欠ける。微量の炭化粒を含む。

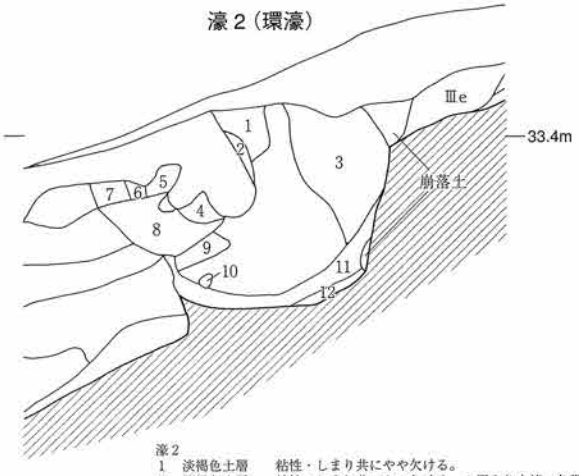

36.0m
36.0m
1 褐色土層　粘性を持ち、ややしまる。基本層序Ⅱ層に比して、やや暗い。
2 暗褐色土層　粘性にやや欠けるが、しまる。微量の炭化粒・焼土粒を含む。
3 褐色土層　粘性にやや欠けるが、しまる。多量の焼土粒、少量の炭化粒を含む。
4 明褐色土層　粘性に欠け、しまりもやや欠ける。微量の炭化粒を含む。
5 暗褐色土層　粘性に欠け、しまりもやや欠ける。微量の炭化粒を含む。
6 黒褐色土層　粘性に欠け、しまりにもやや欠ける。微量の炭化粒を含む。
7 褐色土層　粘性に欠け、しまりにもやや欠ける。少量の黄褐色土粒を含む。
8 黒色土層　粘性に欠けるが、しまる。多量の炭化粒、焼土粒を含む。
9 暗褐色土層　粘性に欠けるが、しまる。少量の黄褐色土粒を含む。
A
B
Ⅲe
Ⅲa
Ⅲc
濠 2（環濠）
37.0m
36.0m
35.0m
34.0m
33.0m
32.0m
31.0m
30.0m
0
濠 2 断面図（1：40）
2m
0
25T平面図・断面図（1：80）
4m





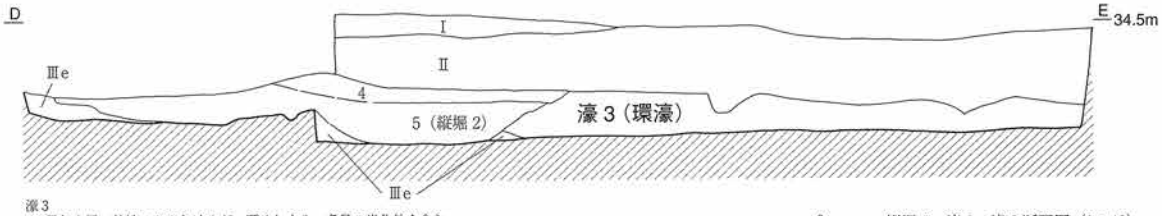
樹面
Ⅱ1　暗褐色土層　粘性・しまりにやや欠ける。多量の黄褐色～赤褐色土層とⅡ層との混合層。Ⅱ2層よりも黒味強い。
Ⅱ2　暗褐色土層　粘性・しまりにやや欠ける。多量の黄褐色～赤褐色土層とⅡ層との混合層。Ⅱ1層より、黄褐色土を多く含む。
Ⅱ3　淡褐色土層　粘性・しまり共にやや欠ける。少量の炭化粒を含む。





縦堀 2
1　暗褐色土層　粘性に欠けるが、しまる。微量の炭化粒を含む。
2　黒色土層　粘性にやや欠けるが、しまる。少量の炭化粒を含む。
3　暗褐色土層　粘性にやや欠けるが、しまる。やや粒子の大きな炭化粒を含む。
4　褐色土層　粘性にやや欠けるが、しまる。やや粒子の大きな炭化粒を含む。
5　暗赤褐色土層　粘性にやや欠けるが、しまる。Ⅳ層と思われる赤褐色粒子を含む。
6　暗赤褐色土層　粘性にやや欠けるが、しまる。Ⅳ層と思われる赤褐色粒子を含む。

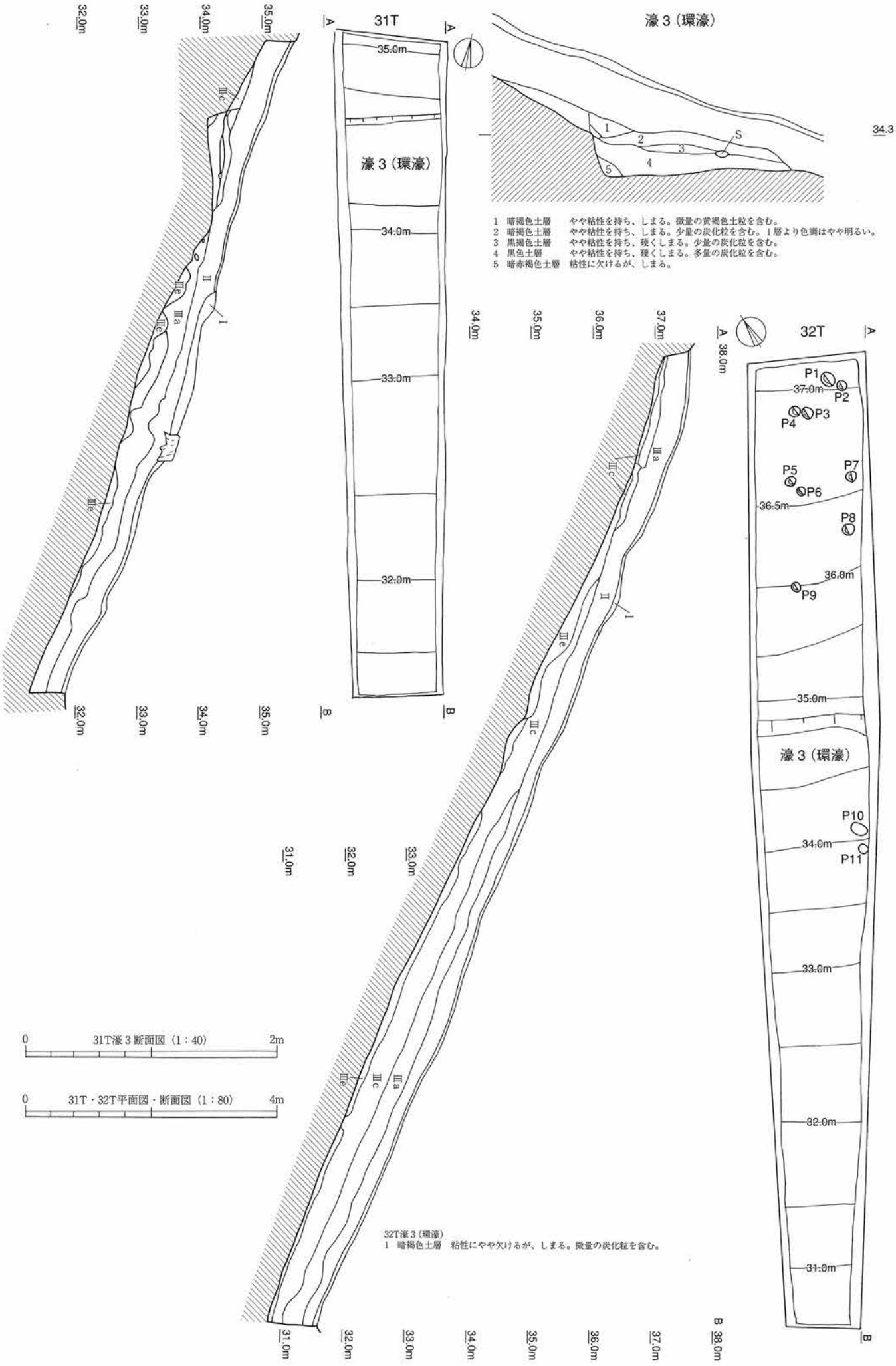
濠 2
1　淡褐色土層　粘性・しまり共にやや欠ける。
2　淡褐色土層　粘性・しまり共にやや欠ける。1層よりも淡い色調を呈する。
3　淡褐色土層　粘性・しまり共にやや欠ける。少量の炭化粒を含む。
4　淡褐色土層　粘性・しまり共にやや欠ける。
5　淡褐色土層　粘性・しまり共にやや欠ける。
6　暗褐色土層　粘性・しまり共にやや欠ける。
7　褐色土層　粘性・しまり共に欠ける。
8　黒褐色土層　粘性にやや欠けるが、しまる。多量の炭化粒を含む。
9　淡褐色土層　粘性・しまり共にやや欠ける。
10　黒褐色土層　粘性にやや欠けるが、しまる。多量の炭化粒を含む。
11　褐色土層　粘性にやや欠けるが、しまる。少量の炭化粒を含む。
12　暗黄褐色土層　粘性にやや欠けるが、しまる。多量の黄褐色土粒を含む。

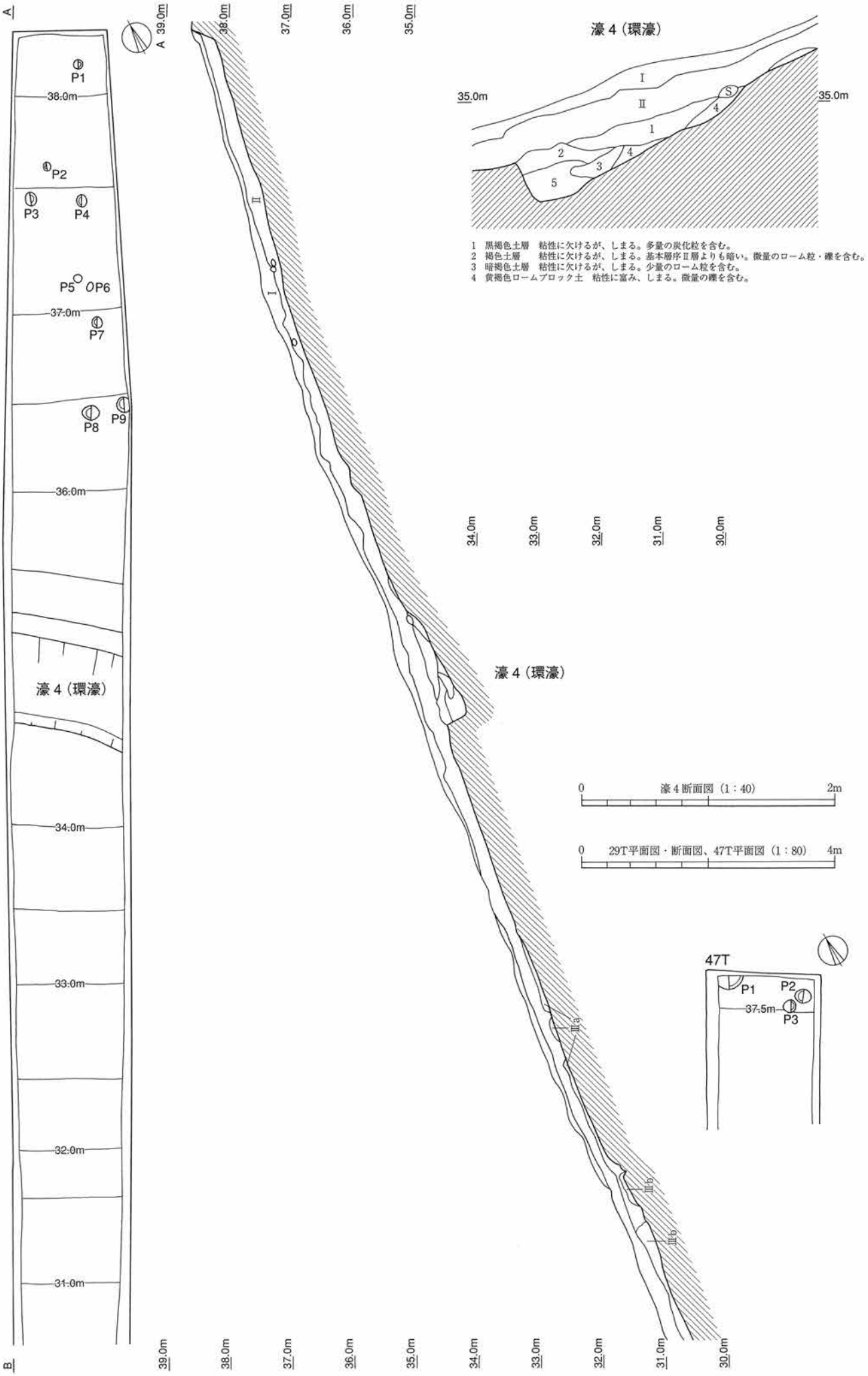


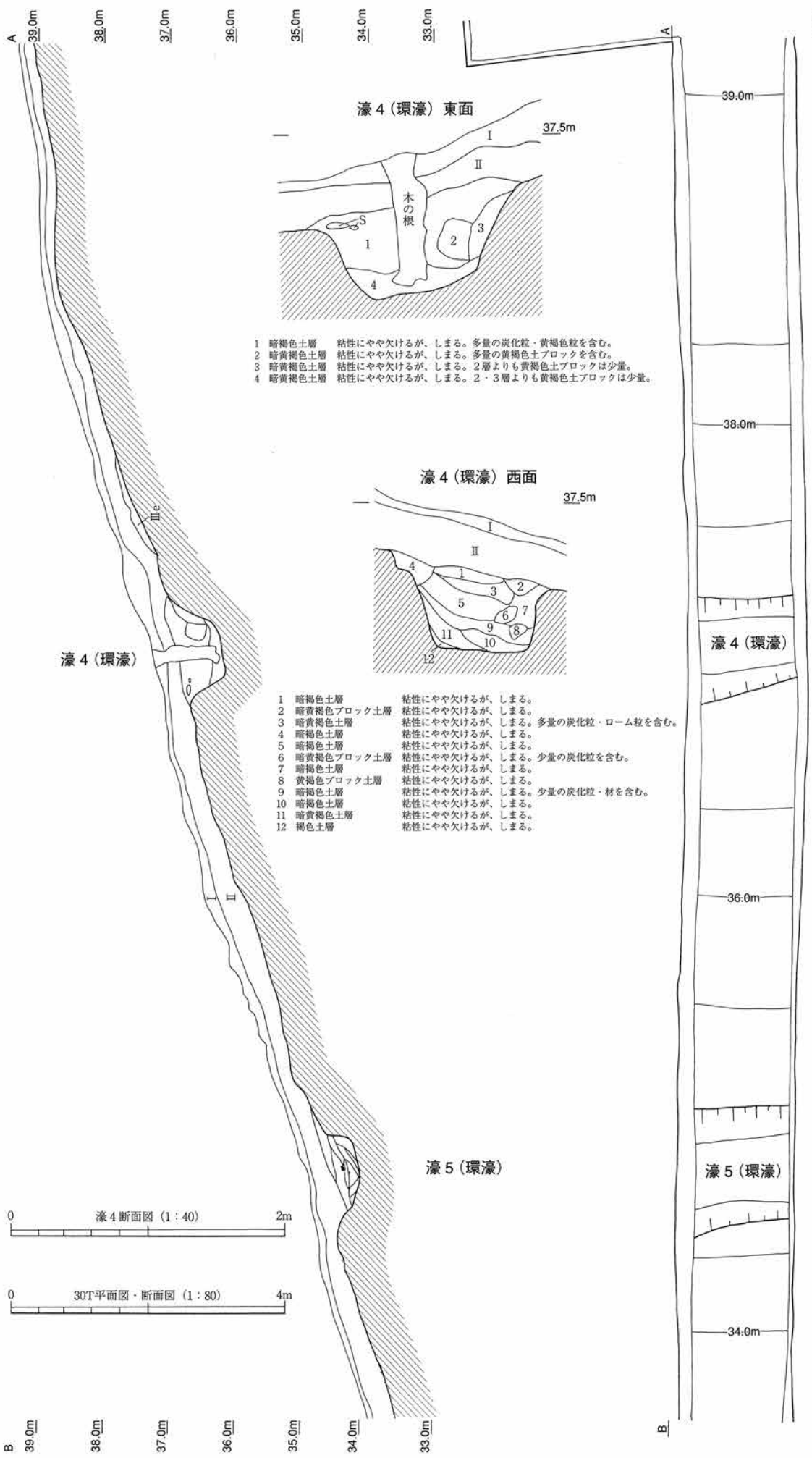
濠 3
1　黒色土層　粘性にやや欠けるが、硬くしまる。多量の炭化粒を含む。

0　縦堀 2・濠 2・濠 3 断面図（1：40）　2m

0　61T平面図・断面図（1：80）　4m


31T
濠3（環濠）
32T
濠3（環濠）
濠3（環濠）
34.3
1　暗褐色土層　やや粘性を持ち、しまる。微量の黄褐色土粒を含む。
2　暗褐色土層　やや粘性を持ち、しまる。少量の炭化粒を含む。1層より色調はやや明るい。
3　黒褐色土層　やや粘性を持ち、硬くしまる。少量の炭化粒を含む。
4　黒色土層　やや粘性を持ち、硬くしまる。多量の炭化粒を含む。
5　暗赤褐色土層　粘性に欠けるが、しまる。
32T濠3（環濠）
1　暗褐色土層　粘性にやや欠けるが、しまる。微量の炭化粒を含む。
0　31T濠3断面図（1：40）　2m
0　31T・32T平面図・断面図（1：80）　4m

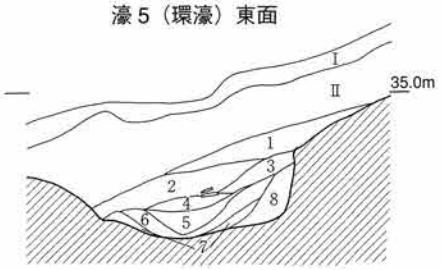

濠 4（環濠）
35.0m
35.0m
I
II
S
4
1
2
3
4
5
1 黒褐色土層　粘性に欠けるが、しまる。多量の炭化粒を含む。
2 褐色土層　粘性に欠けるが、しまる。基本層序Ⅱ層よりも暗い。微量のローム粒・礫を含む。
3 暗褐色土層　粘性に欠けるが、しまる。少量のローム粒を含む。
4 黄褐色ロームブロック土　粘性に富み、しまる。微量の礫を含む。
A
B
39.0m
38.0m
37.0m
36.0m
35.0m
34.0m
33.0m
32.0m
31.0m
30.0m
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
濠 4（環濠）
0
濠 4 断面図（1：40）
2m
0
29T平面図・断面図、47T平面図（1：80）
4m
47T
P1
P2
P3
37.5m
Ⅲa
Ⅲb
Ⅲb



1　暗褐色土層　粘性にやや欠けるが、しまる。多量の炭化粒・黄褐色粒を含む。
2　暗黄褐色土層　粘性にやや欠けるが、しまる。多量の黄褐色土ブロックを含む。
3　暗黄褐色土層　粘性にやや欠けるが、しまる。2層よりも黄褐色土ブロックは少量。
4　暗黄褐色土層　粘性にやや欠けるが、しまる。2・3層よりも黄褐色土ブロックは少量。

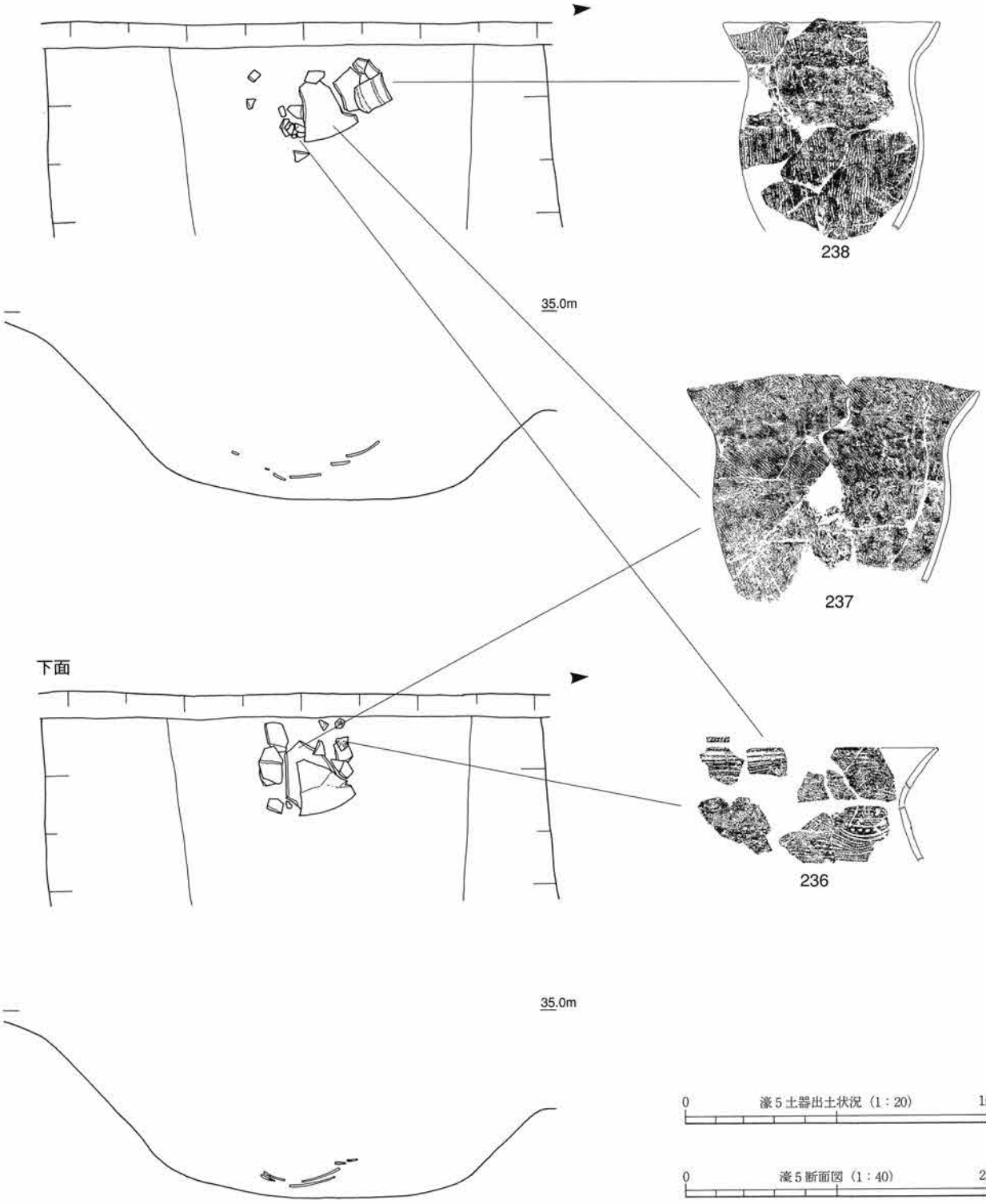
1　暗褐色土層　粘性にやや欠けるが、しまる。
2　暗黄褐色ブロック土層　粘性にやや欠けるが、しまる。
3　暗黄褐色土層　粘性にやや欠けるが、しまる。多量の炭化粒・ローム粒を含む。
4　暗褐色土層　粘性にやや欠けるが、しまる。
5　暗褐色土層　粘性にやや欠けるが、しまる。
6　暗黄褐色ブロック土層　粘性にやや欠けるが、しまる。少量の炭化粒を含む。
7　暗褐色土層　粘性にやや欠けるが、しまる。
8　黄褐色ブロック土層　粘性にやや欠けるが、しまる。
9　暗褐色土層　粘性にやや欠けるが、しまる。少量の炭化粒・材を含む。
10　暗褐色土層　粘性にやや欠けるが、しまる。
11　暗黄褐色土層　粘性にやや欠けるが、しまる。
12　褐色土層　粘性にやや欠けるが、しまる。

濠5（環濠）東面



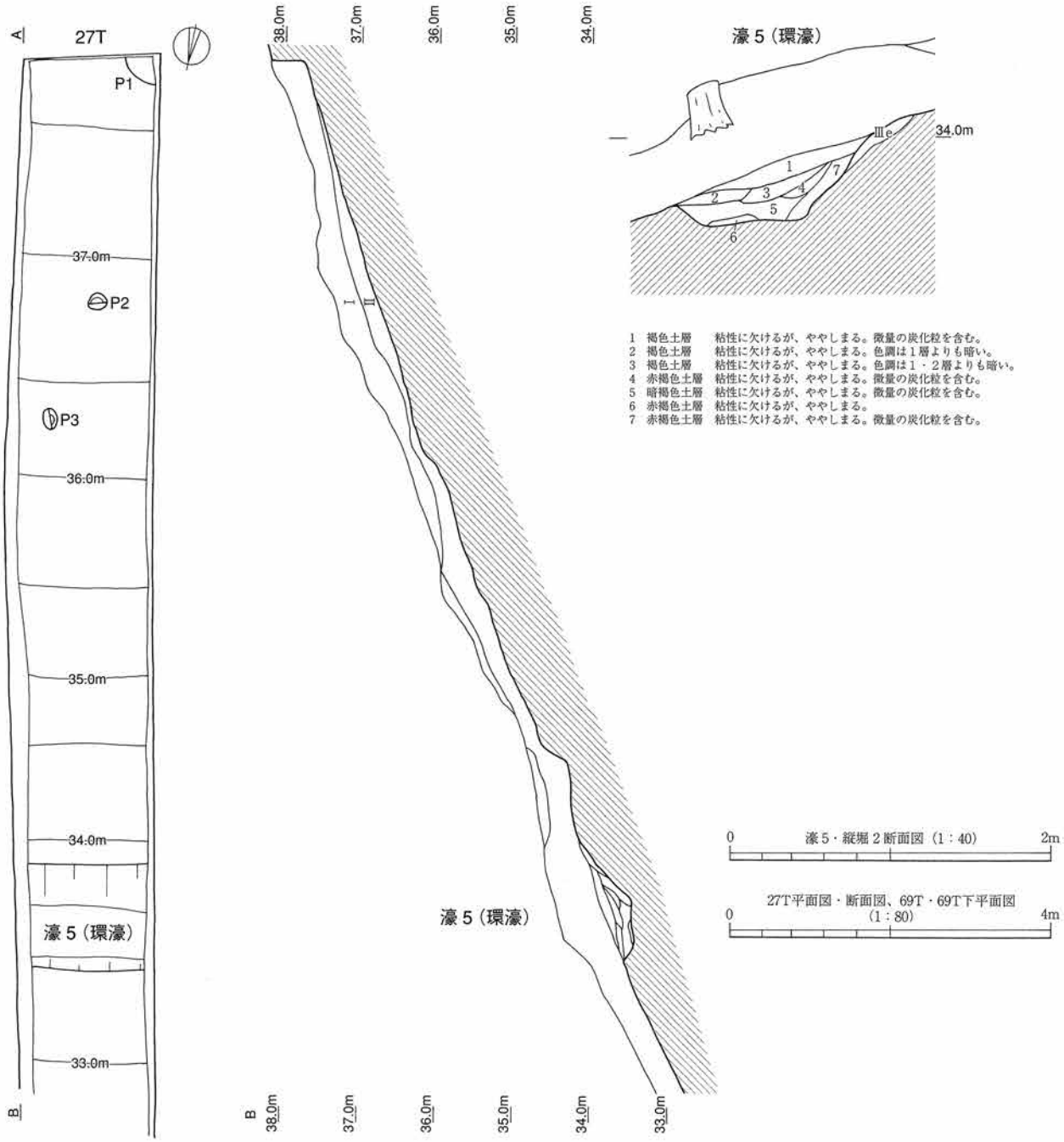
1　暗褐色土層　粘性にやや欠けるが、しまる。Ⅱb層に類似する。
2　暗褐色土層　粘性にやや欠けるが、しまる。多量の炭化粒を含む。
3　暗褐色土層　粘性にやや欠けるが、しまる。少量の炭化粒・黄褐色粒を含む。
4　暗褐色土層　粘性にやや欠けるが、しまる。多量の炭化粒・黄褐色粒を含む。
5　黒褐色土層　粘性にやや欠けるが、しまる。多量の炭化粒・黄褐色粒を含む。
6　暗褐色土層　粘性にやや欠けるが、しまる。少量の炭化粒を含む。
7　褐色土層　粘性にやや欠けるが、しまる。少量の炭化粒を含む。
8　暗黄褐色土層　粘性にやや欠けるが、しまる。多量の黄褐色粒を含む。

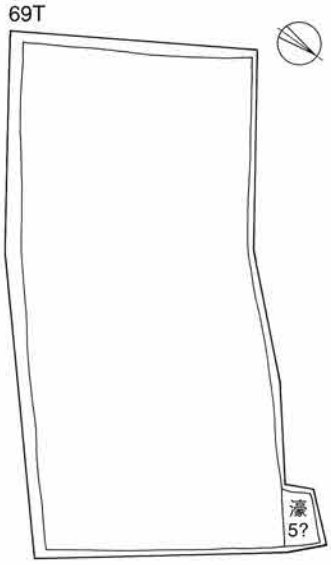
上面

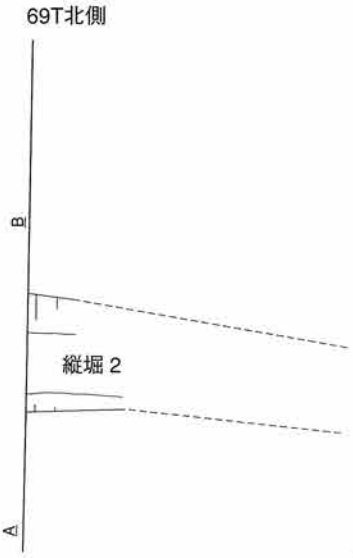


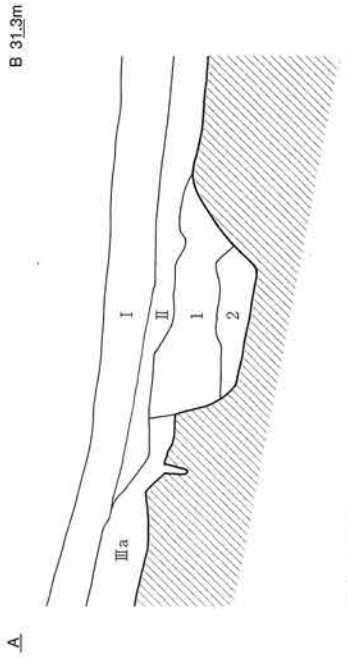
0　濠5土器出土状況（1：20）　1m

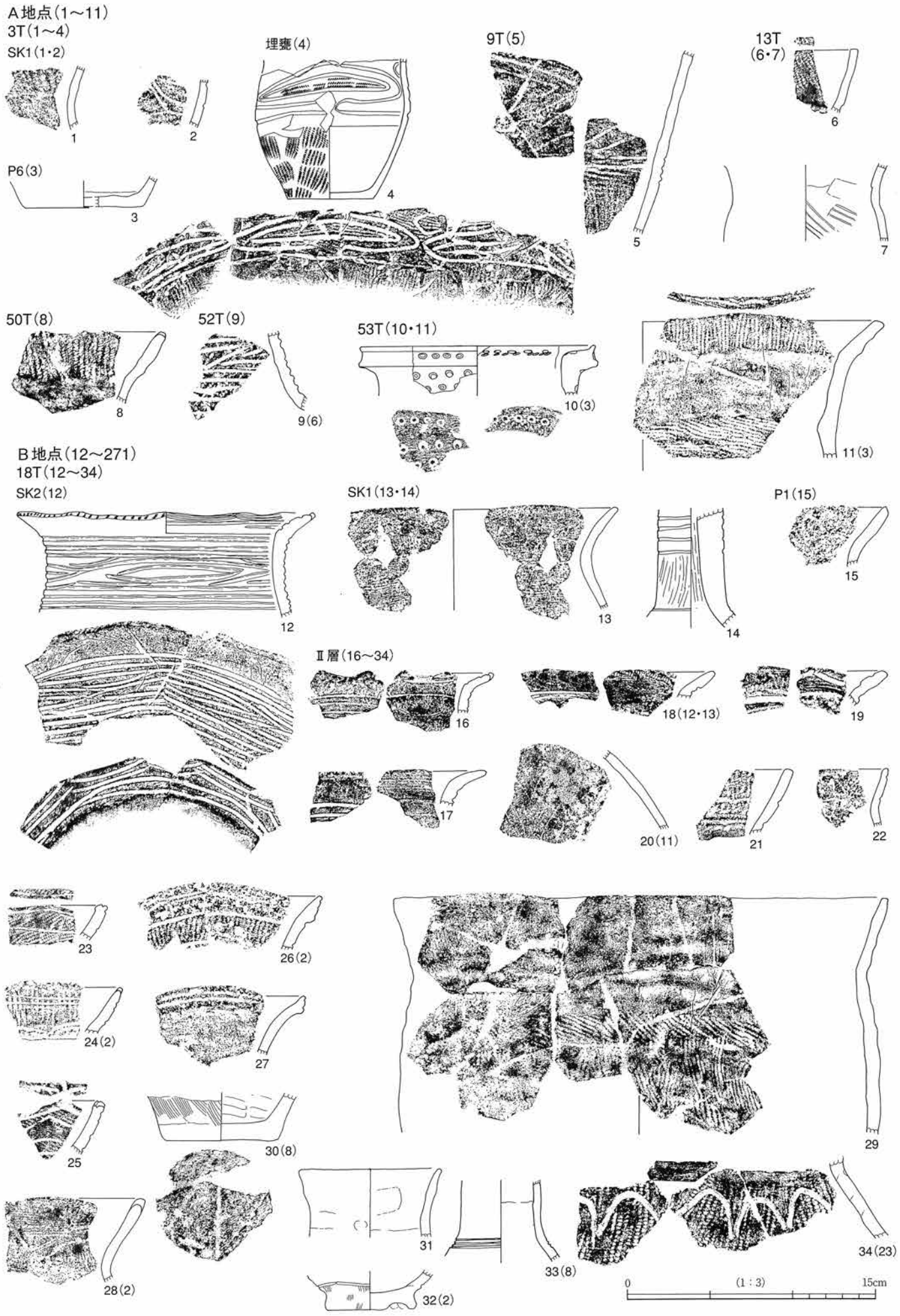
0　濠5断面図（1：40）　2m

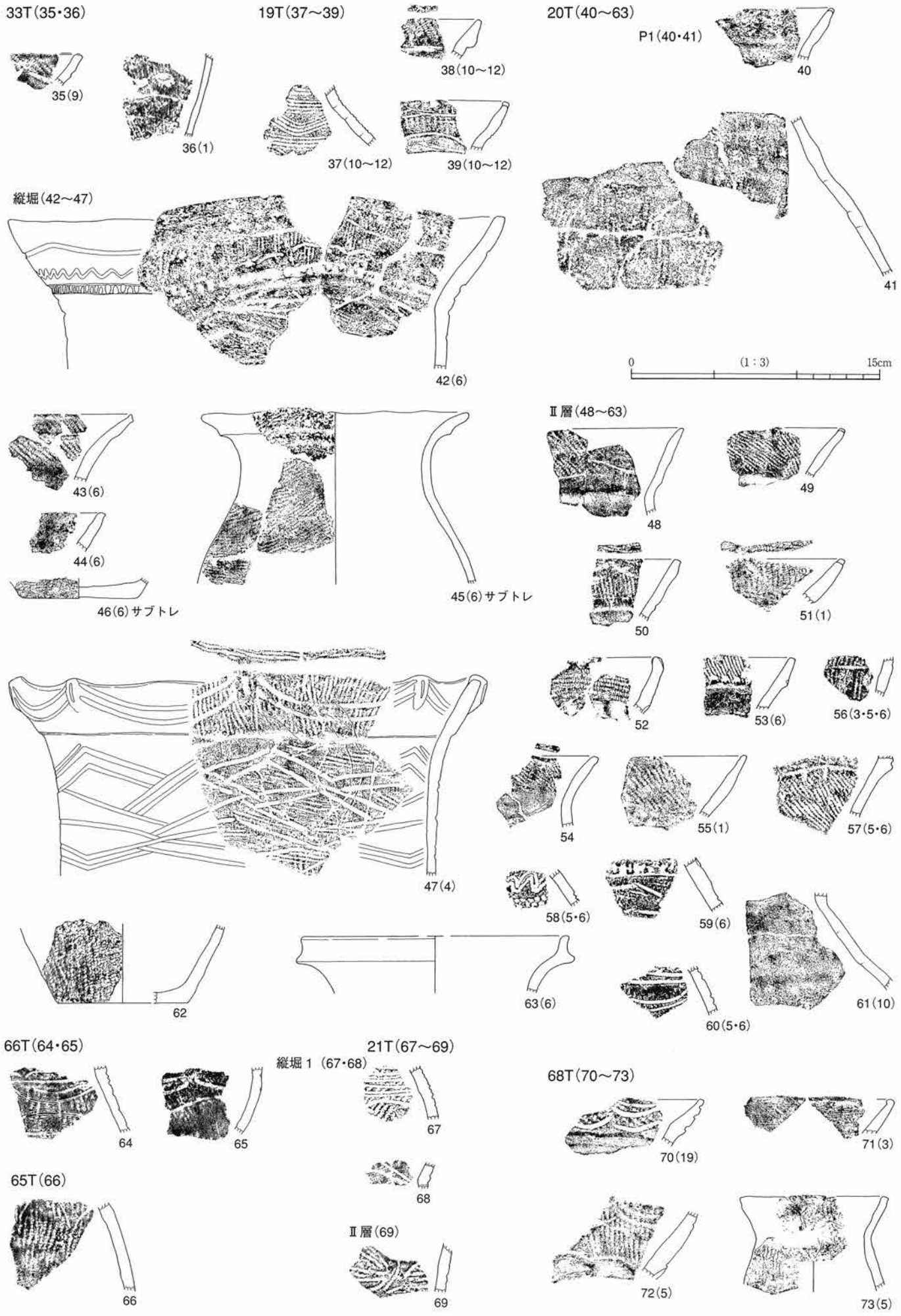

27T
A
B
P1
P2
P3
37.0m
36.0m
35.0m
34.0m
33.0m
濠 5（環濠）
38.0m
37.0m
36.0m
35.0m
34.0m
33.0m
濠 5（環濠）
I
II
濠 5（環濠）
Ⅲe
34.0m
1
2
3
4
5
6
7
1　褐色土層　粘性に欠けるが、ややしまる。微量の炭化粒を含む。
2　褐色土層　粘性に欠けるが、ややしまる。色調は1層よりも暗い。
3　褐色土層　粘性に欠けるが、ややしまる。色調は1・2層よりも暗い。
4　赤褐色土層　粘性に欠けるが、ややしまる。微量の炭化粒を含む。
5　暗褐色土層　粘性に欠けるが、ややしまる。微量の炭化粒を含む。
6　赤褐色土層　粘性に欠けるが、ややしまる。
7　赤褐色土層　粘性に欠けるが、ややしまる。微量の炭化粒を含む。
0　濠 5・縦堀 2 断面図（1：40）　2m
27T平面図・断面図、69T・69T下平面図
（1：80）
0　4m

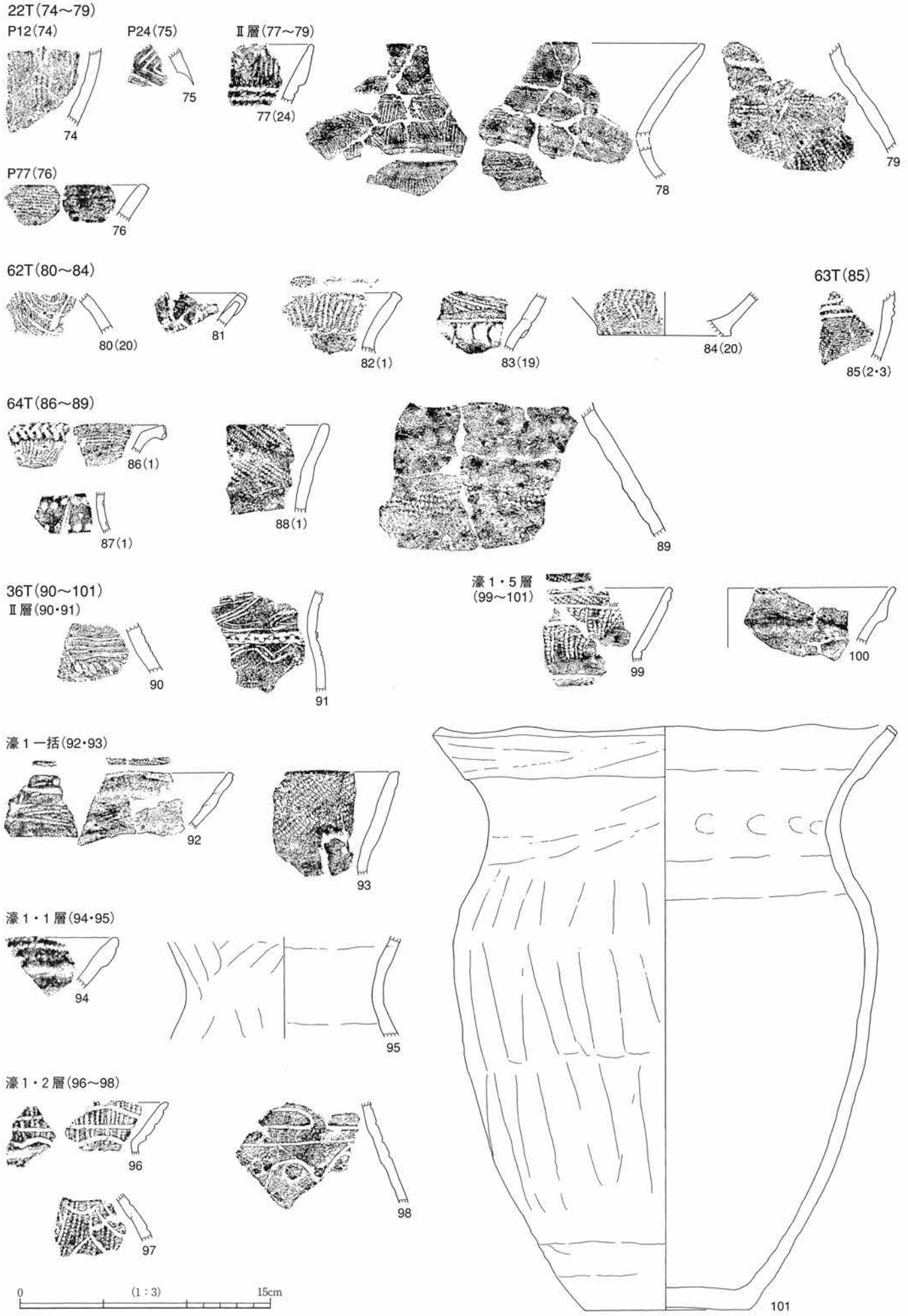

69T
濠
5?

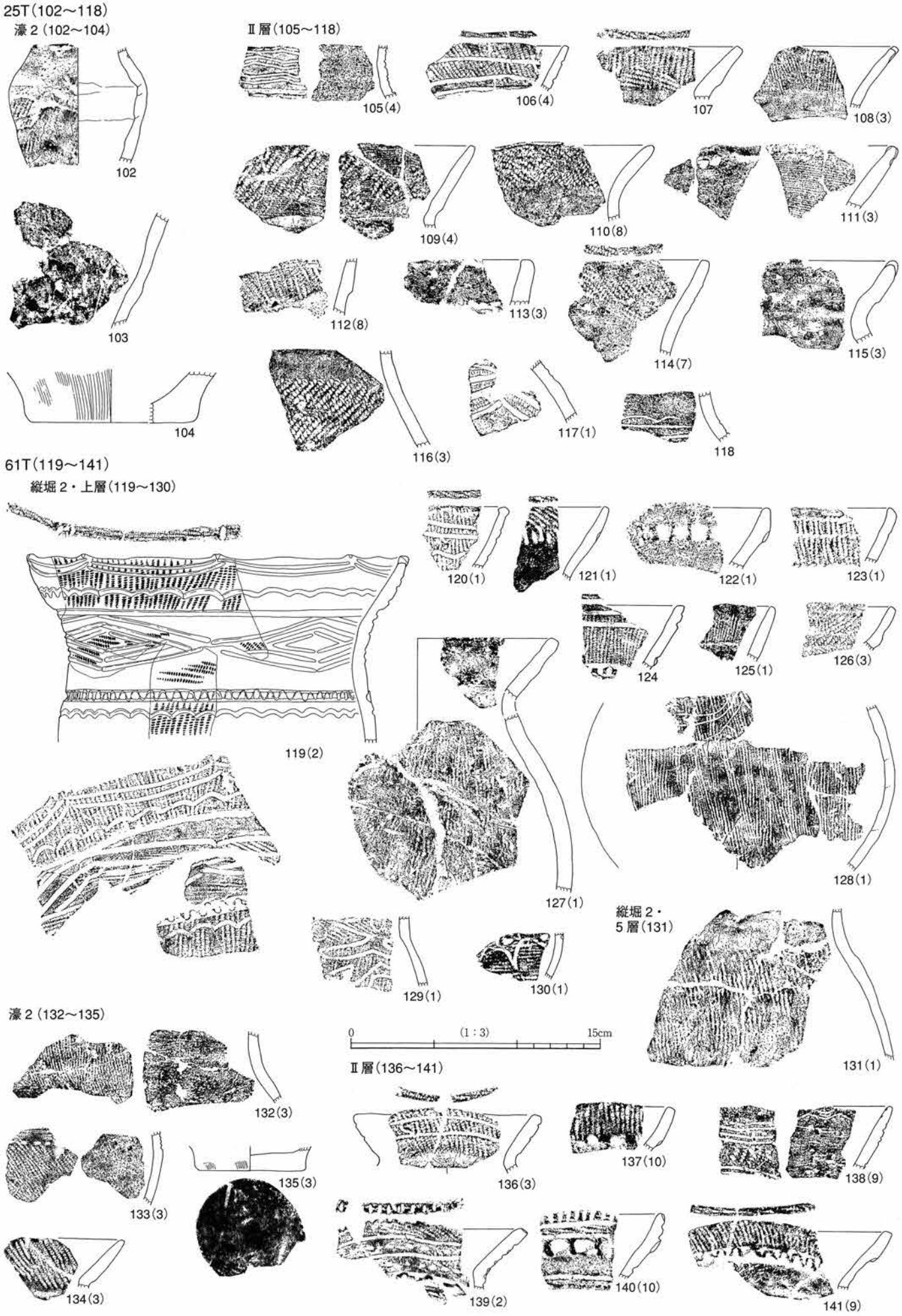

69T北側
B
A
縦堀 2


B 31.3m
A
I
II
1
2
Ⅲa
69T北側　縦堀 2
1　黒褐色土層　粘性にやや欠けるが、しまる。多量の炭化粒を含む。
2　褐色土層　粘性に欠けるが、しまる。


A地点(1～11)
3T(1～4)
SK1(1・2)
1
2
埋甕(4)
4
9T(5)
5
13T
(6・7)
6
7
P6(3)
3
50T(8)
8
52T(9)
9(6)
53T(10・11)
10(3)
11(3)
B地点(12～271)
18T(12～34)
SK2(12)
12
SK1(13・14)
13
14
P1(15)
15
Ⅱ層(16～34)
16
17
18(12・13)
19
20(11)
21
22
23
24(2)
25
26(2)
27
28(2)
29
30(8)
31
32(2)
33(8)
34(23)
0
(1：3)
15cm

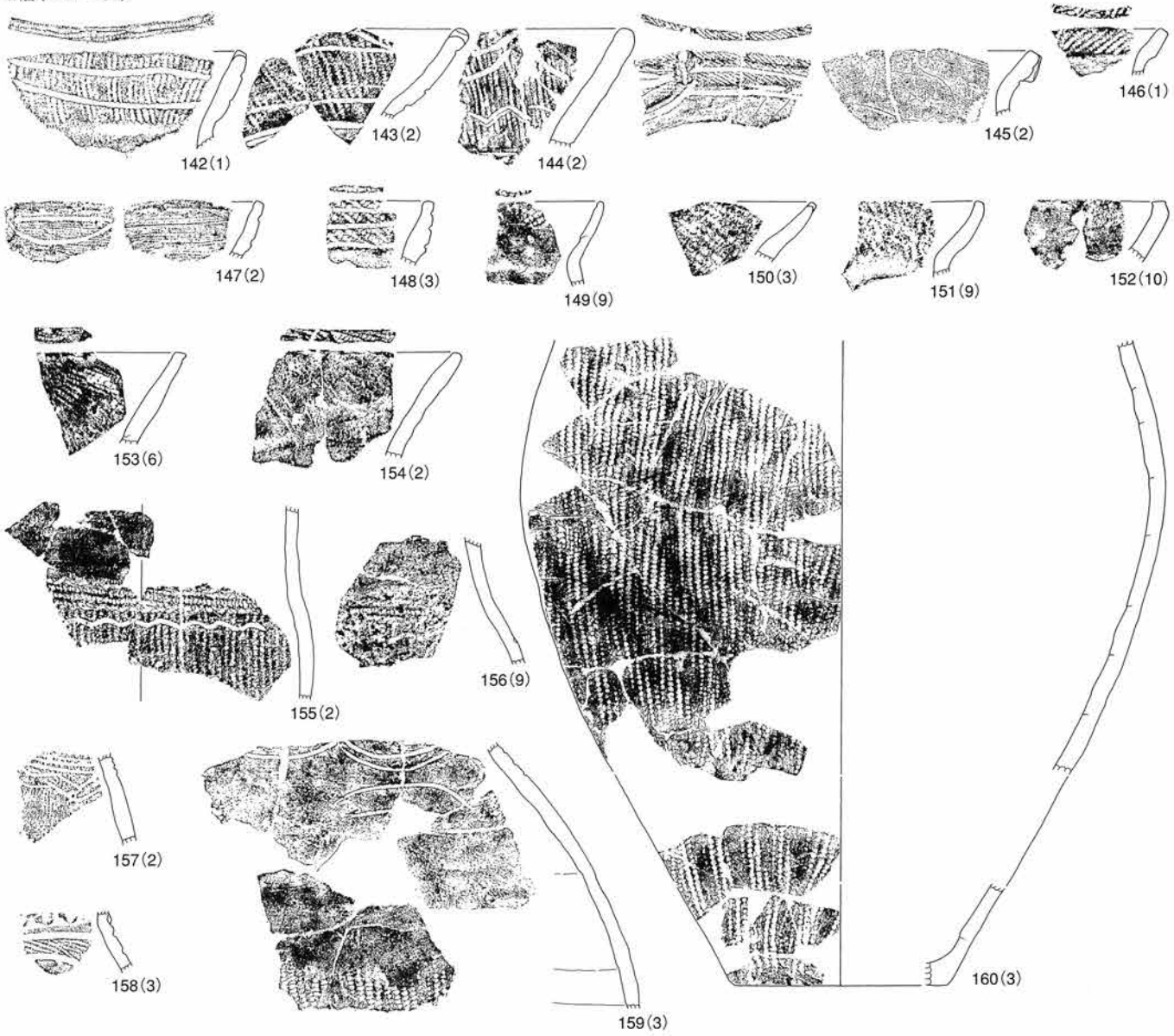

33T(35・36)
35(9)
36(1)
19T(37～39)
38(10～12)
37(10～12)
39(10～12)
20T(40～63)
P1(40・41)
40
41
縦堀(42～47)
42(6)
0
(1：3)
15cm
43(6)
44(6)
46(6)サブトレ
45(6)サブトレ
Ⅱ層(48～63)
48
49
50
51(1)
52
53(6)
56(3・5・6)
54
55(1)
57(5・6)
47(4)
58(5・6)
59(6)
62
63(6)
60(5・6)
61(10)
66T(64・65)
64
65
縦堀１(67・68)
21T(67～69)
67
68
68T(70～73)
70(19)
71(3)
65T(66)
66
Ⅱ層(69)
69
72(5)
73(5)


22T(74～79)
P12(74)
74
P24(75)
75
Ⅱ層(77～79)
77(24)
78
79
P77(76)
76
62T(80～84)
80(20)
81
82(1)
83(19)
84(20)
63T(85)
85(2・3)
64T(86～89)
86(1)
87(1)
88(1)
89
36T(90～101)
Ⅱ層(90・91)
90
91
濠1・5層
(99～101)
99
100
濠1一括(92・93)
92
93
濠1・1層(94・95)
94
95
濠1・2層(96～98)
96
97
98
101
0
(1：3)
15cm

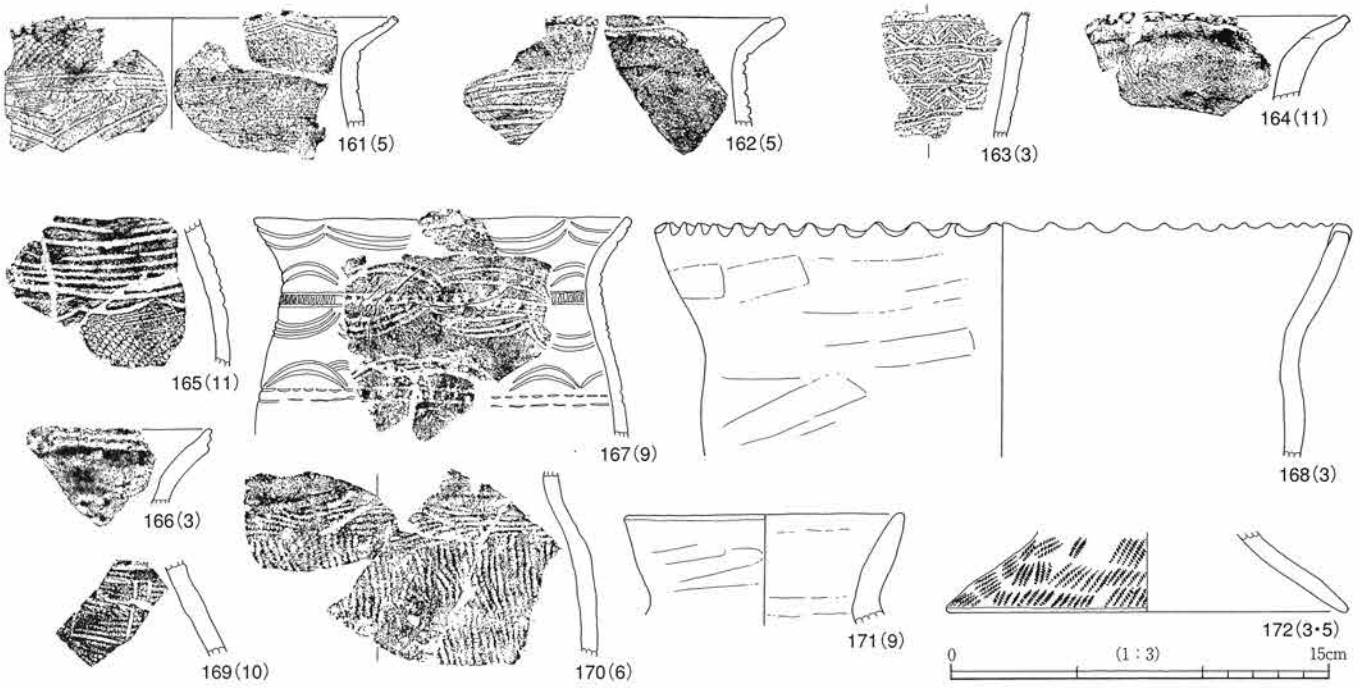

25T（102～118）
濠 2（102～104）
Ⅱ層（105～118）
102
103
104
105(4)
106(4)
107
108(3)
109(4)
110(8)
111(3)
112(8)
113(3)
114(7)
115(3)
116(3)
117(1)
118
61T（119～141）
縦堀 2・上層（119～130）
119(2)
120(1)
121(1)
122(1)
123(1)
124
125(1)
126(3)
127(1)
128(1)
129(1)
130(1)
縦堀 2・
5 層（131）
131(1)
濠 2（132～135）
132(3)
133(3)
134(3)
135(3)
0
(1：3)
15cm
Ⅱ層（136～141）
136(3)
137(10)
138(9)
139(2)
140(10)
141(9)

61T(142～172)

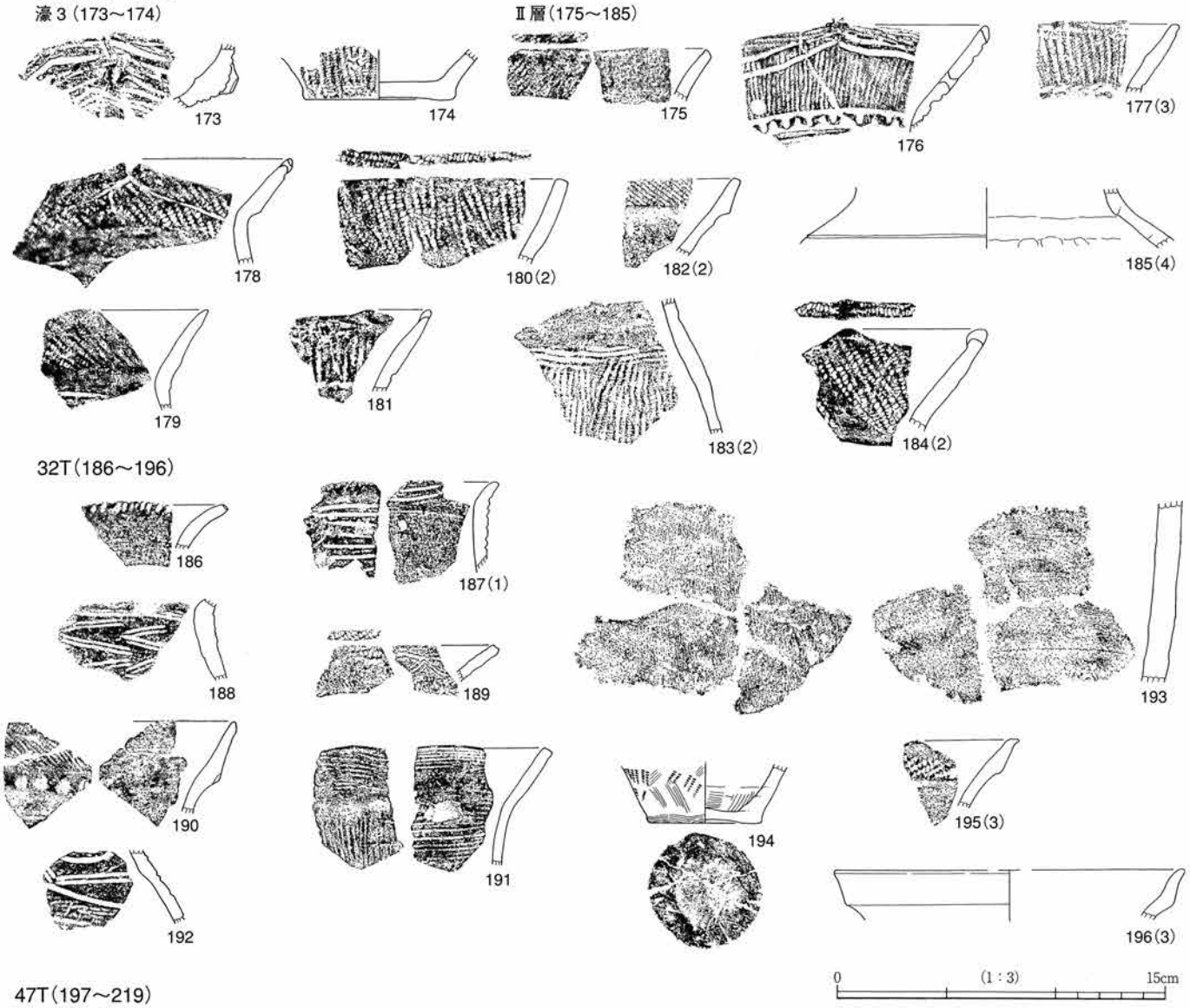
Ⅱ層(142～160)



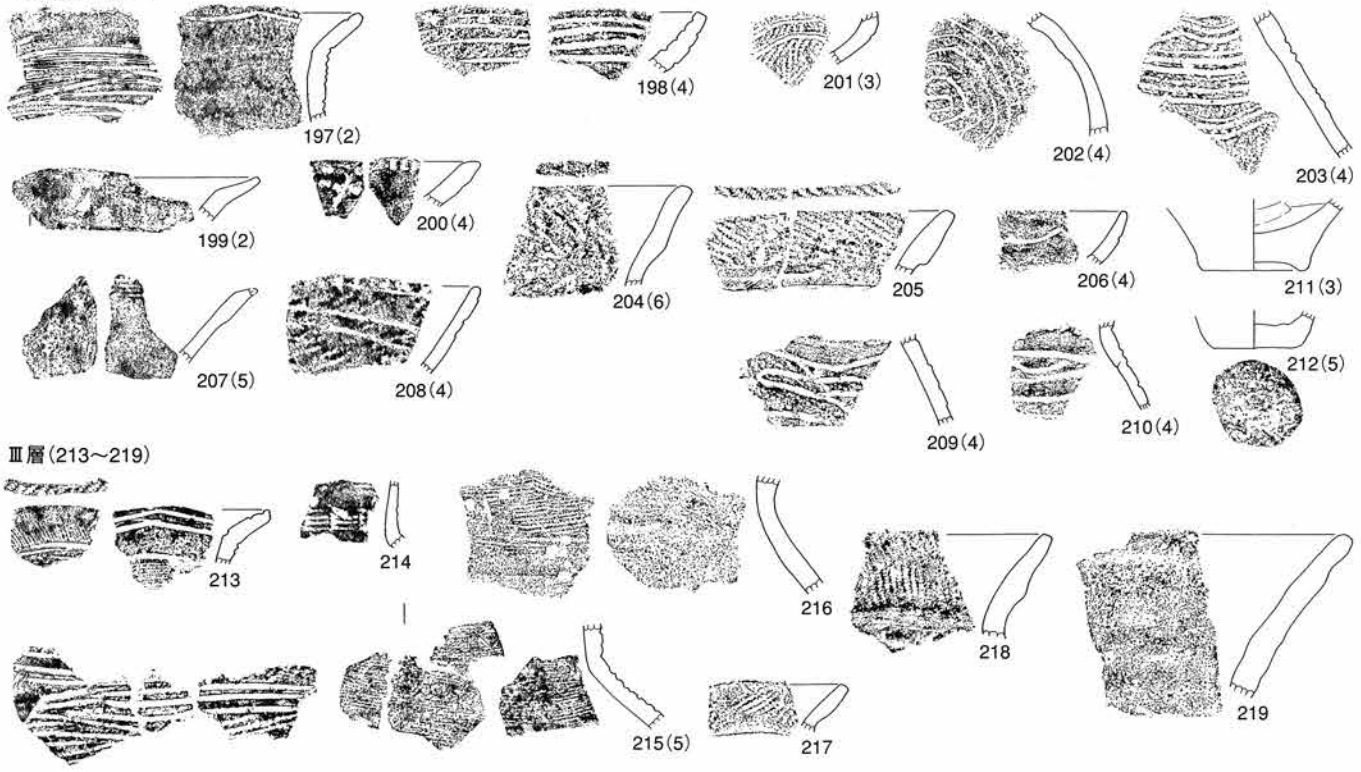
Ⅲ層(161～172)



31T（173～185）
濠 3（173～174）
Ⅱ層（175～185）



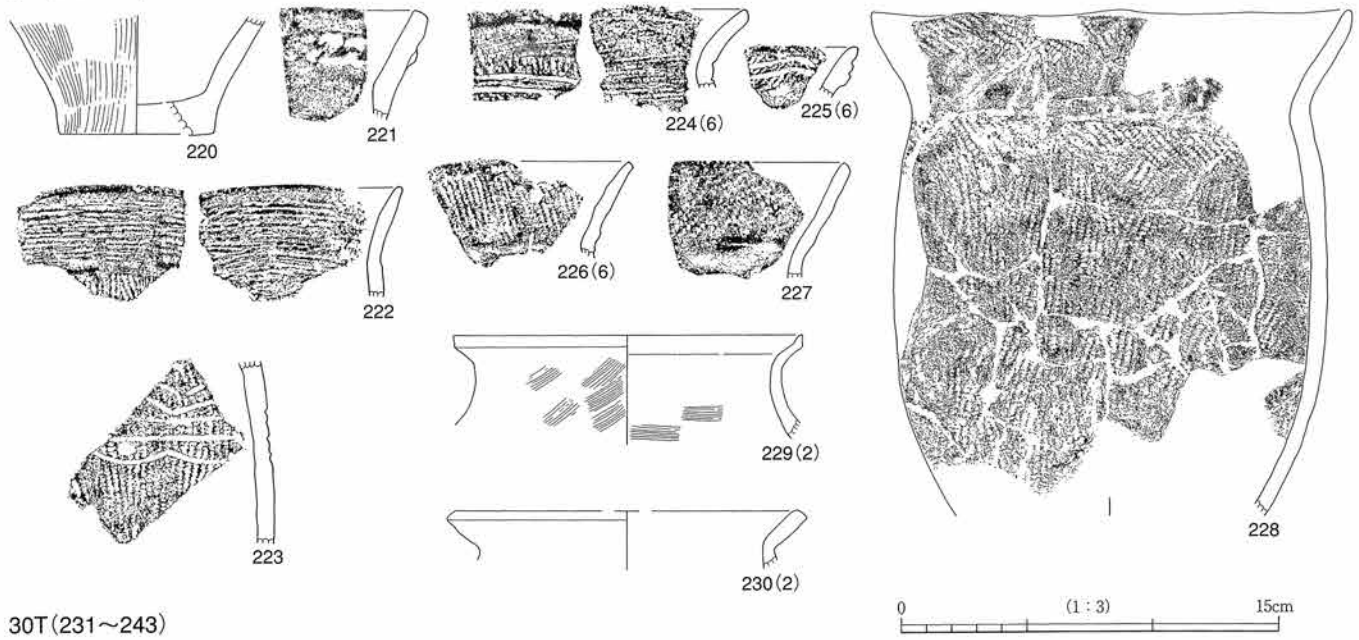
47T（197～219）
Ⅱ層（197～212）



29T（220～230）

濠 4（220～223）

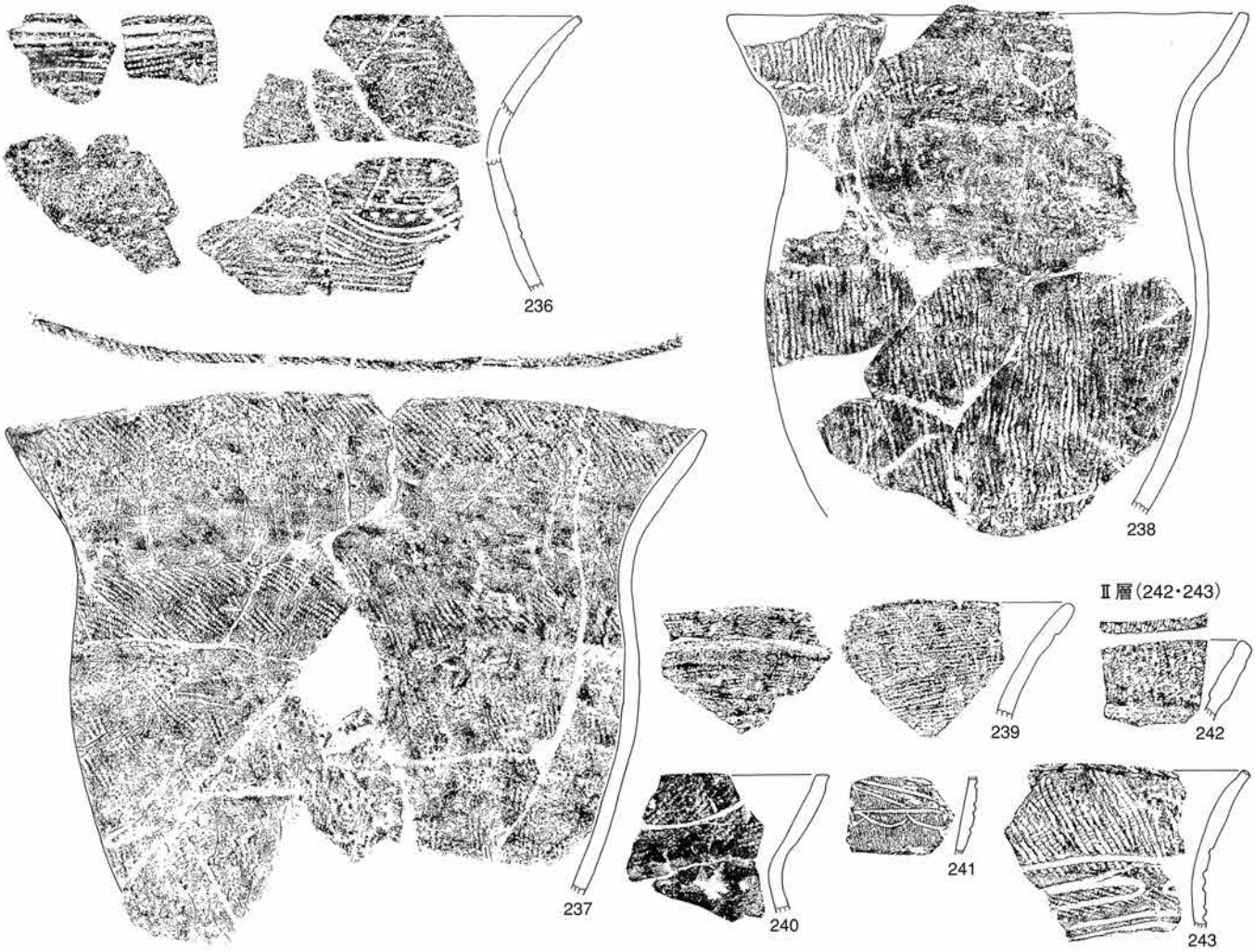
Ⅱ層（224～230）

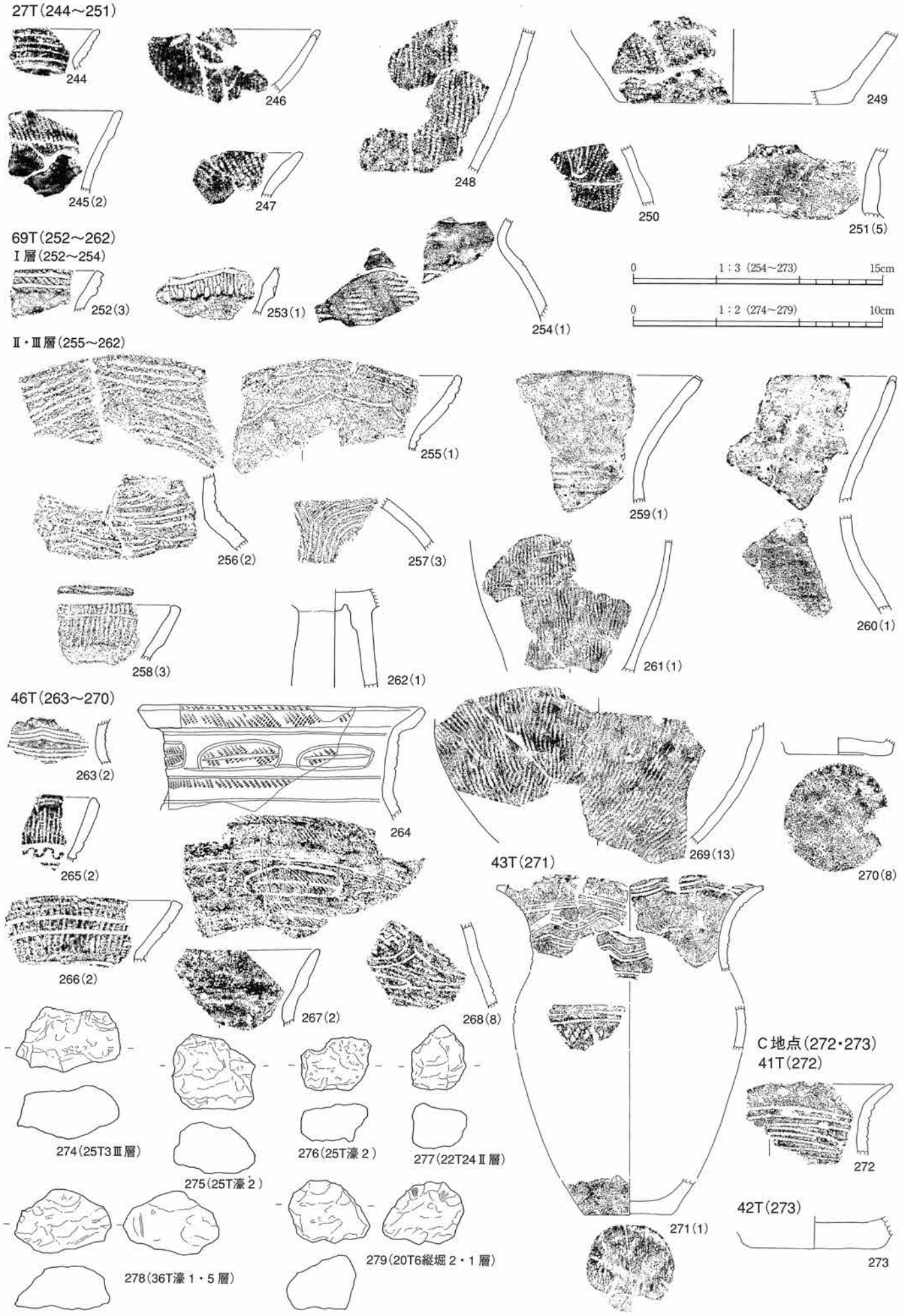


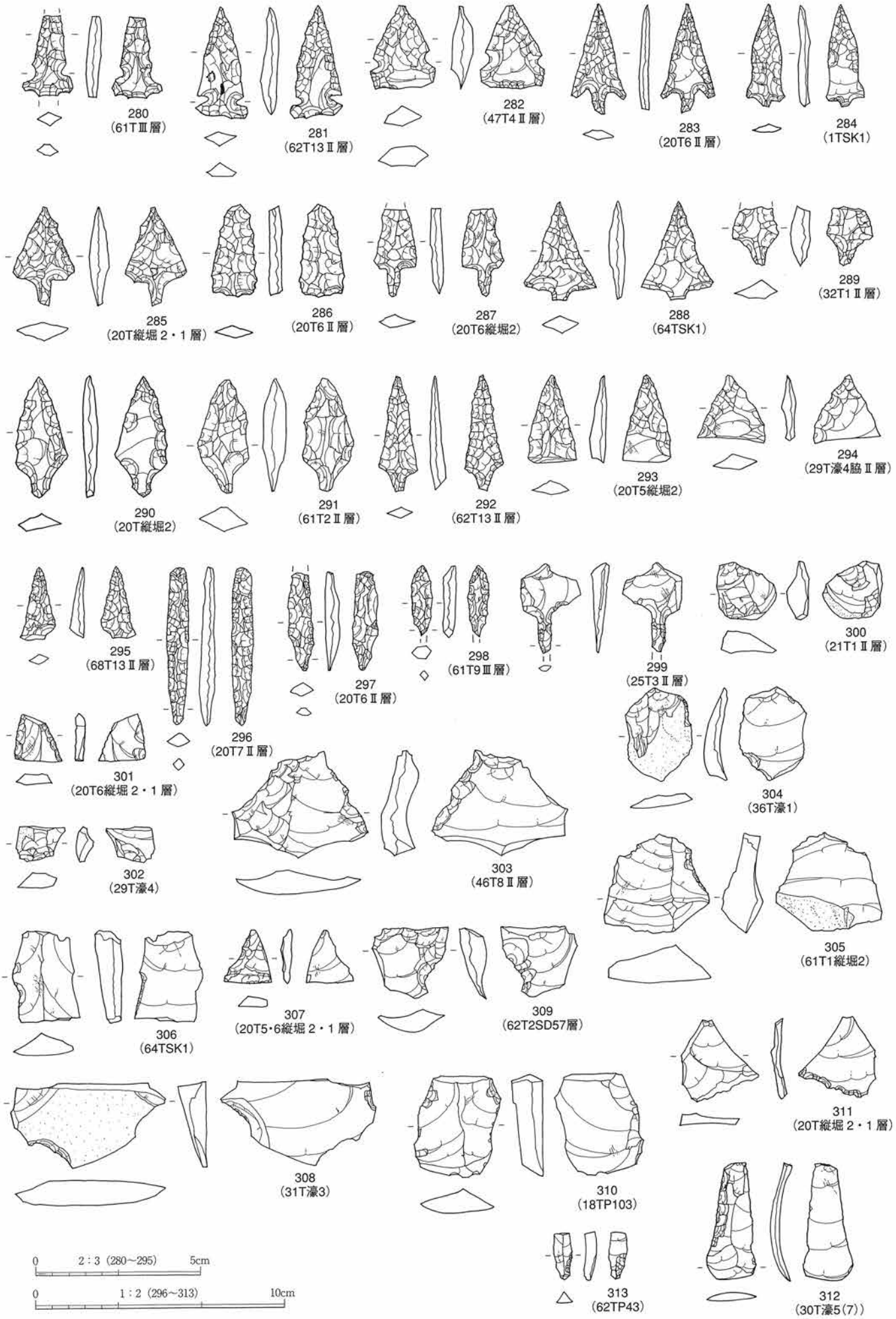
30T（231～243）

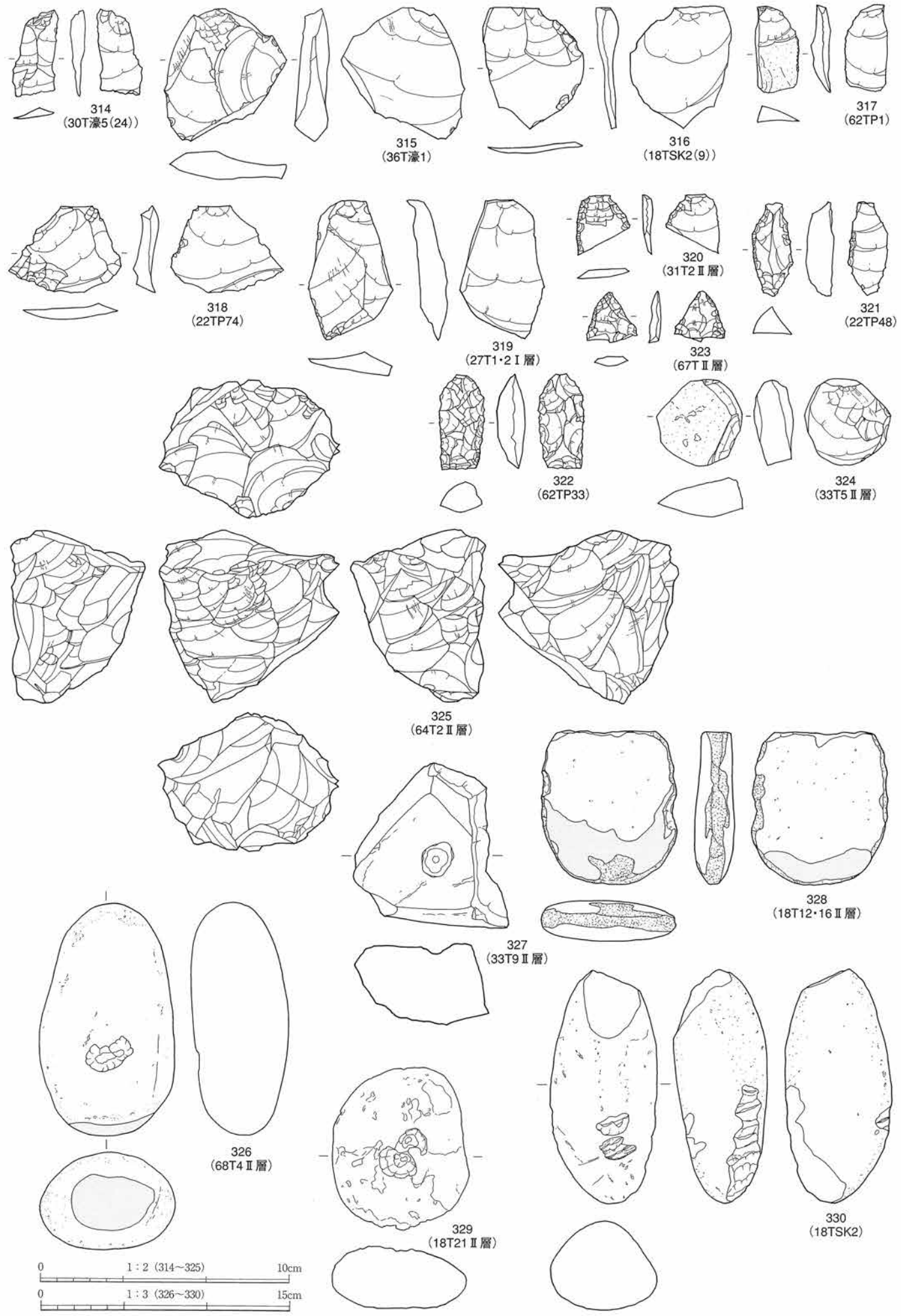
濠 4（231～235）

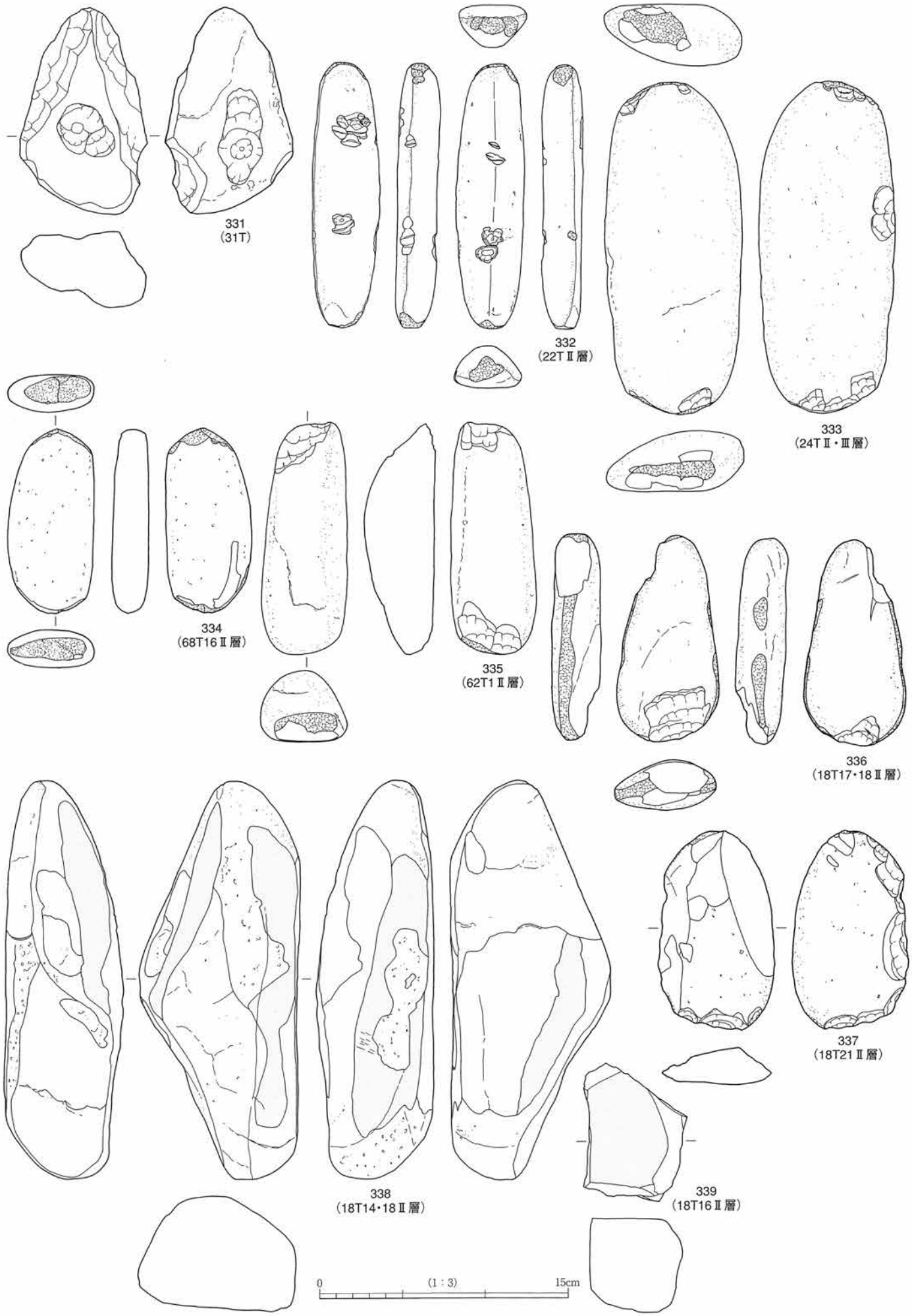
濠 5（236～241）　　5・6 層（236～238）

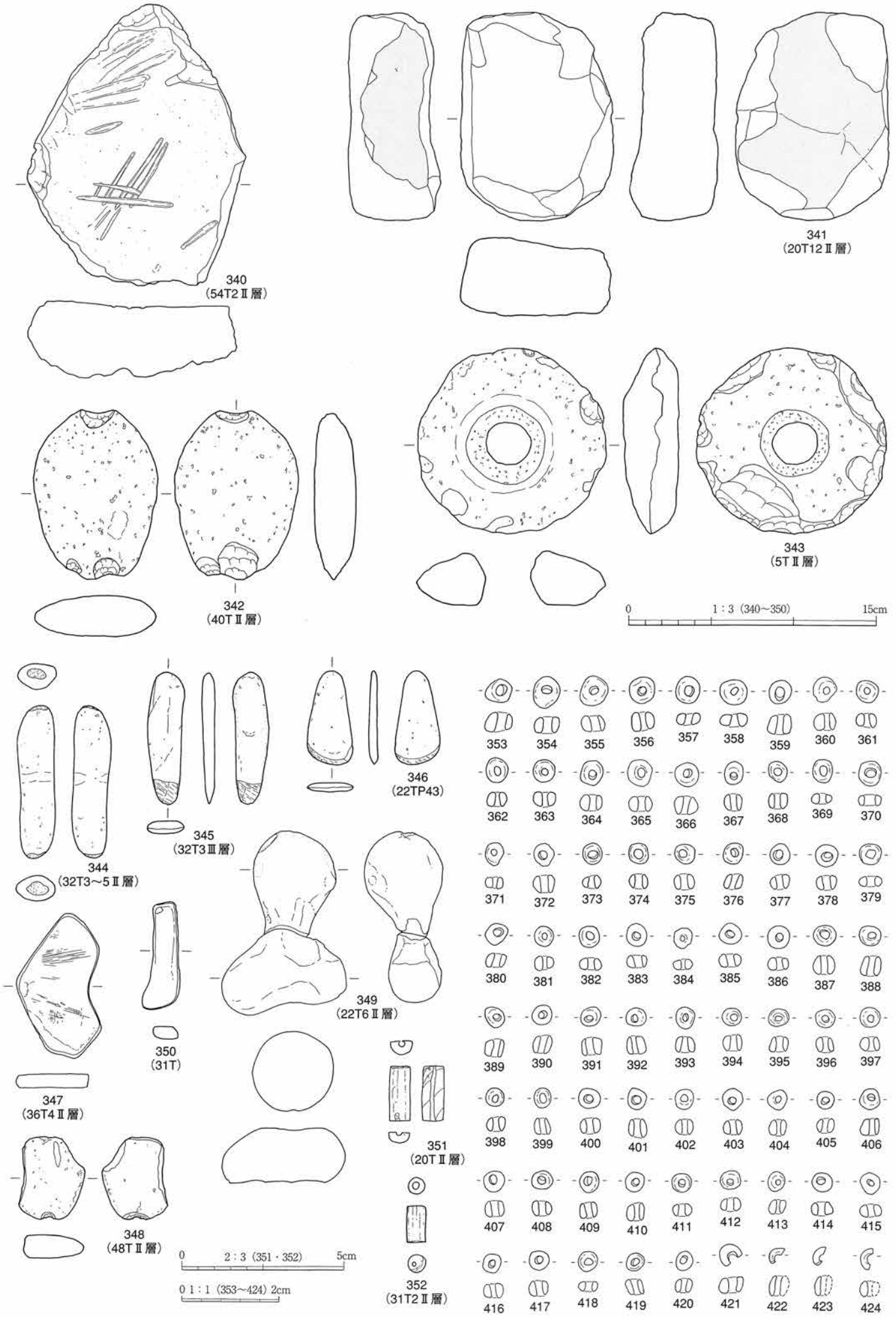


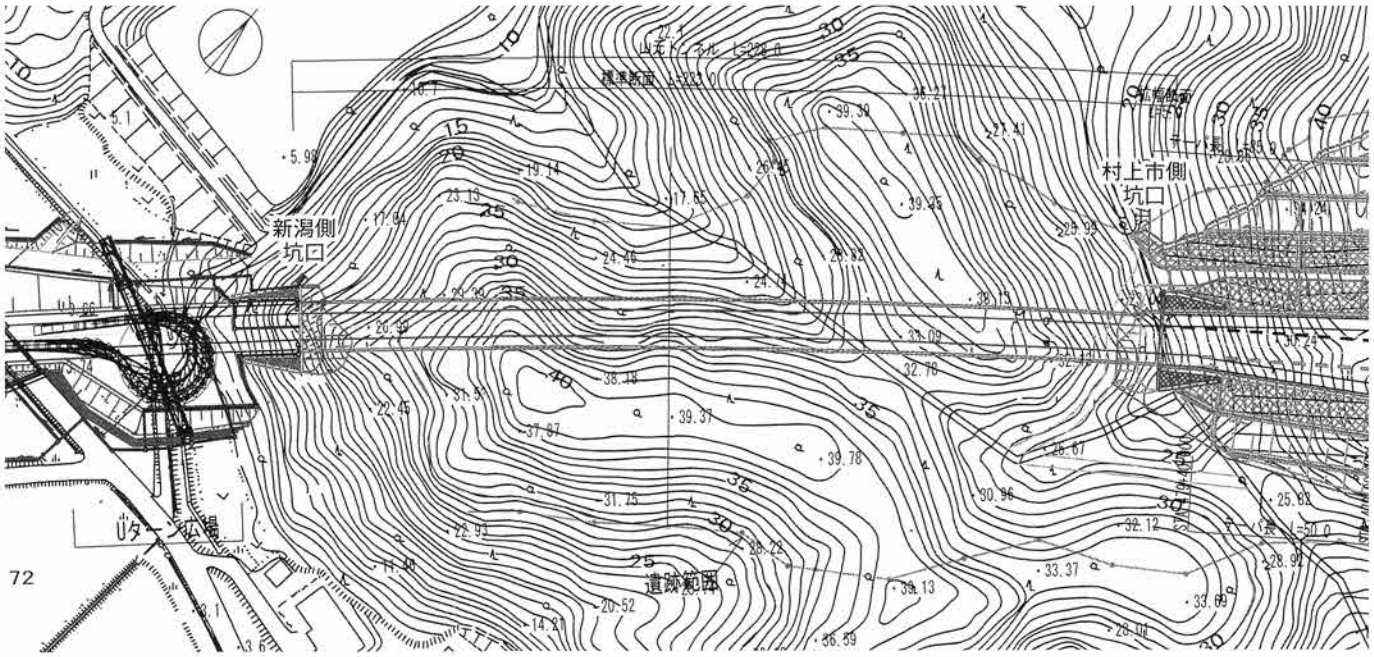

27T(244～251)
244
246
248
249
245(2)
247
250
251(5)
69T(252～262)
Ⅰ層(252～254)
252(3)
253(1)
254(1)
0　1：3 (254～273)　15cm
0　1：2 (274～279)　10cm
Ⅱ・Ⅲ層(255～262)
255(1)
259(1)
256(2)
257(3)
260(1)
258(3)
262(1)
261(1)
46T(263～270)
263(2)
264
269(13)
270(8)
265(2)
43T(271)
266(2)
267(2)
268(8)
C地点(272・273)
41T(272)
272
274(25T3Ⅲ層)
276(25T濠2)
277(22T24Ⅱ層)
275(25T濠2)
42T(273)
271(1)
273
279(20T6縦堀2・1層)
278(36T濠1・5層)

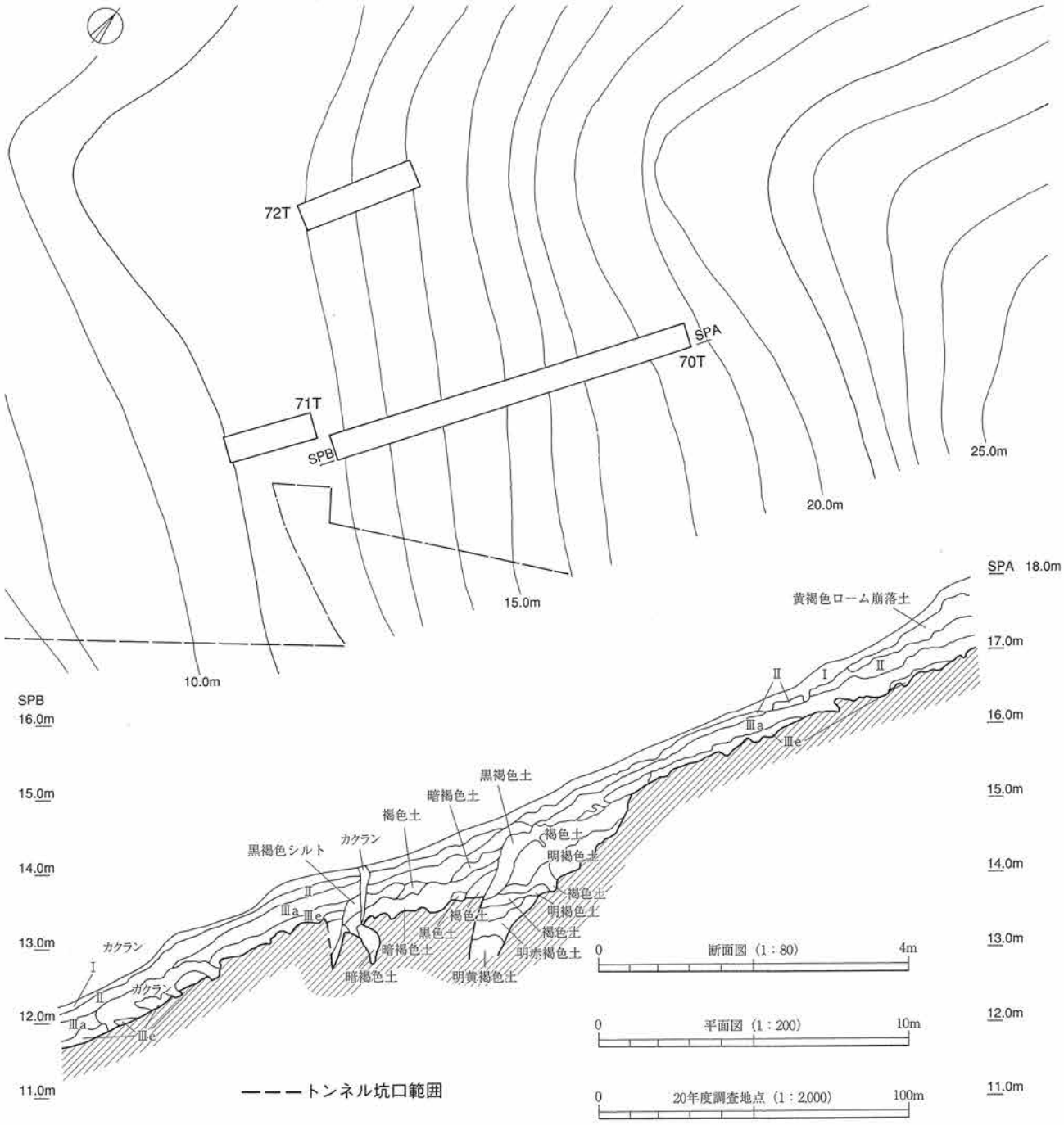

280
(61TⅢ層)
281
(62T13Ⅱ層)
282
(47T4Ⅱ層)
283
(20T6Ⅱ層)
284
(1TSK1)
285
(20T縦堀2・1層)
286
(20T6Ⅱ層)
287
(20T6縦堀2)
288
(64TSK1)
289
(32T1Ⅱ層)
290
(20T縦堀2)
291
(61T2Ⅱ層)
292
(62T13Ⅱ層)
293
(20T5縦堀2)
294
(29T濠4脇Ⅱ層)
295
(68T13Ⅱ層)
296
(20T7Ⅱ層)
297
(20T6Ⅱ層)
298
(61T9Ⅲ層)
299
(25T3Ⅱ層)
300
(21T1Ⅱ層)
301
(20T6縦堀2・1層)
302
(29T濠4)
303
(46T8Ⅱ層)
304
(36T濠1)
305
(61T1縦堀2)
306
(64TSK1)
307
(20T5・6縦堀2・1層)
308
(31T濠3)
309
(62T2SD57層)
310
(18TP103)
311
(20T縦堀2・1層)
312
(30T濠5(7))
313
(62TP43)
0　2：3（280～295）　5cm
0　1：2（296～313）　10cm

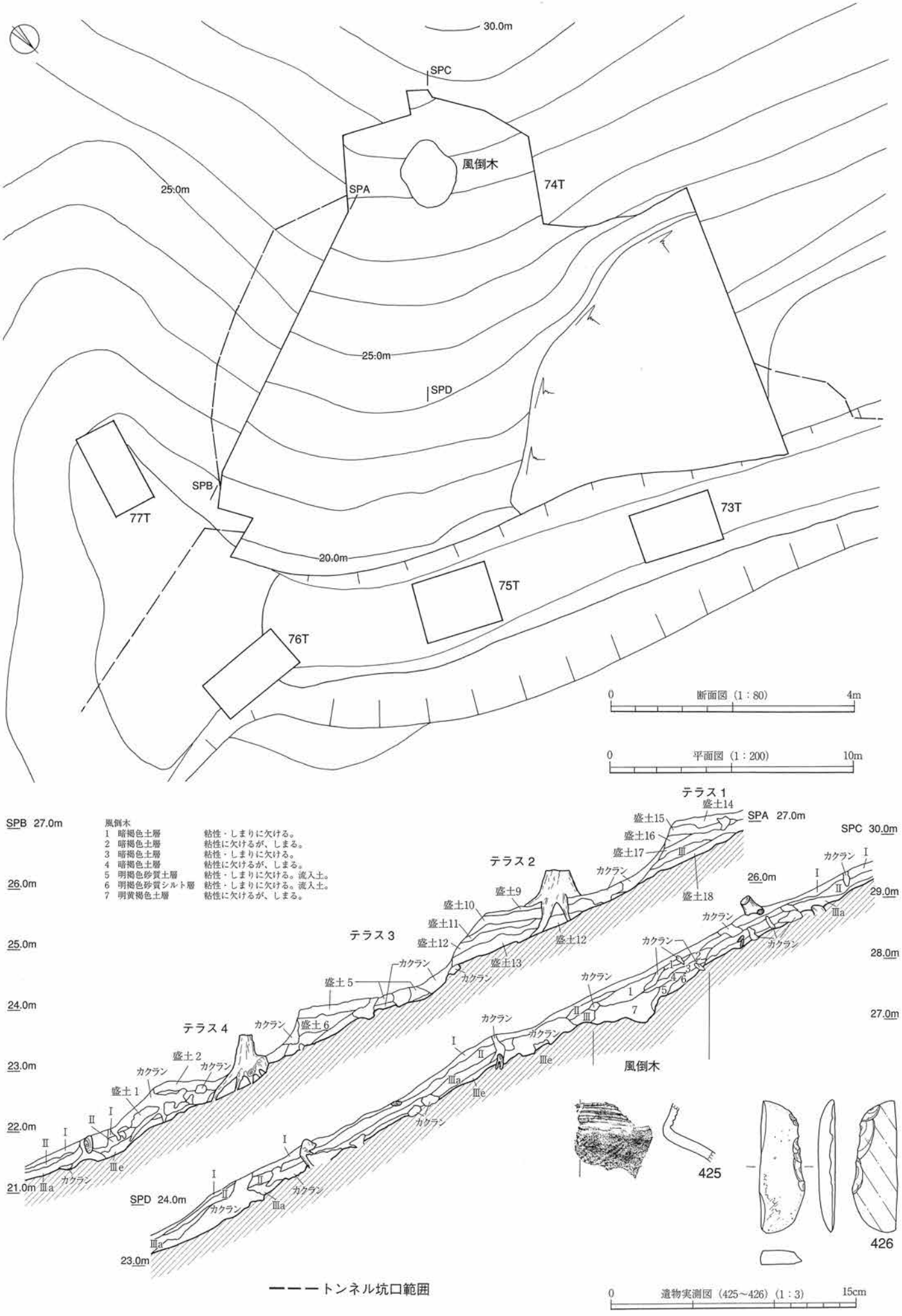

314
(30T濠5(24))
315
(36T濠1)
316
(18TSK2(9))
317
(62TP1)
318
(22TP74)
319
(27T1・2Ⅰ層)
320
(31T2Ⅱ層)
321
(22TP48)
322
(62TP33)
323
(67TⅡ層)
324
(33T5Ⅱ層)
325
(64T2Ⅱ層)
326
(68T4Ⅱ層)
327
(33T9Ⅱ層)
328
(18T12・16Ⅱ層)
329
(18T21Ⅱ層)
330
(18TSK2)
0　1：2（314～325）　10cm
0　1：3（326～330）　15cm


331
(31T)
332
(22TⅡ層)
333
(24TⅡ・Ⅲ層)
334
(68T16Ⅱ層)
335
(62T1Ⅱ層)
336
(18T17・18Ⅱ層)
337
(18T21Ⅱ層)
338
(18T14・18Ⅱ層)
339
(18T16Ⅱ層)
0
(1：3)
15cm


340
(54T2Ⅱ層)
341
(20T12Ⅱ層)
342
(40TⅡ層)
343
(5TⅡ層)
0　1：3（340～350）　15cm
344
(32T3～5Ⅱ層)
345
(32T3Ⅲ層)
346
(22TP43)
347
(36T4Ⅱ層)
348
(48TⅡ層)
349
(22T6Ⅱ層)
350
(31T)
351
(20TⅡ層)
352
(31T2Ⅱ層)
0　2：3（351・352）　5cm
0 1：1（353～424）2cm
353 354 355 356 357 358 359 360 361
362 363 364 365 366 367 368 369 370
371 372 373 374 375 376 377 378 379
380 381 382 383 384 385 386 387 388
389 390 391 392 393 394 395 396 397
398 399 400 401 402 403 404 405 406
407 408 409 410 411 412 413 414 415
416 417 418 419 420 421 422 423 424


新潟側
坑口
村上市側
坑口
遺跡範囲
72


72T
71T
70T
SPA
SPB
25.0m
20.0m
15.0m
10.0m
SPA 18.0m
SPB
16.0m
17.0m
15.0m
14.0m
13.0m
12.0m
11.0m
黄褐色ローム崩落土
黒褐色土
暗褐色土
褐色土
カクラン
黒褐色シルト
明褐色土
明赤褐色土
明黄褐色土
黒色土
Ⅰ
Ⅱ
Ⅲa
Ⅲe
断面図（1：80）
平面図（1：200）
20年度調査地点（1：2,000）
0
4m
10m
100m
ーーートンネル坑口範囲


30.0m
SPC
風倒木
74T
SPA
25.0m
25.0m
SPD
SPB
77T
73T
20.0m
75T
76T
0 断面図（1：80） 4m
0 平面図（1：200） 10m
SPB 27.0m
風倒木
1 暗褐色土層 粘性・しまりに欠ける。
2 暗褐色土層 粘性に欠けるが、しまる。
3 暗褐色土層 粘性・しまりに欠ける。
4 暗褐色土層 粘性に欠けるが、しまる。
5 明褐色砂質土層 粘性・しまりに欠ける。流入土。
6 明褐色砂質シルト層 粘性・しまりに欠ける。流入土。
7 明黄褐色土層 粘性に欠けるが、しまる。
テラス1
盛土14
盛土15
盛土16
盛土17
SPA 27.0m
SPC 30.0m
テラス2
盛土9
盛土10
盛土11
盛土12
盛土13
盛土18
テラス3
盛土5
盛土6
テラス4
盛土1
盛土2
カクラン
26.0m
25.0m
24.0m
23.0m
22.0m
21.0m
29.0m
28.0m
27.0m
風倒木
SPD 24.0m
23.0m
425
426
トンネル坑口範囲
0 遺物実測図（425～426）（1：3） 15cm

遺跡遠景（南西から）

B地点西側全景（北東から）

B地点北西斜面（北から）

B地点20T縦堀２（北から）

B地点36T濠１西側断面（東から）

B地点最西端から越後平野を望む（北東から）

遺跡遠景（南から）

B地点61T縦堀２ほか（南東から）

B地点21T縦堀１東西断面（南東から）

B地点61T縦堀２・濠２（南東から）

B地点61T縦堀２・環濠３（東から）

B地点30T濠４西側断面（東から）

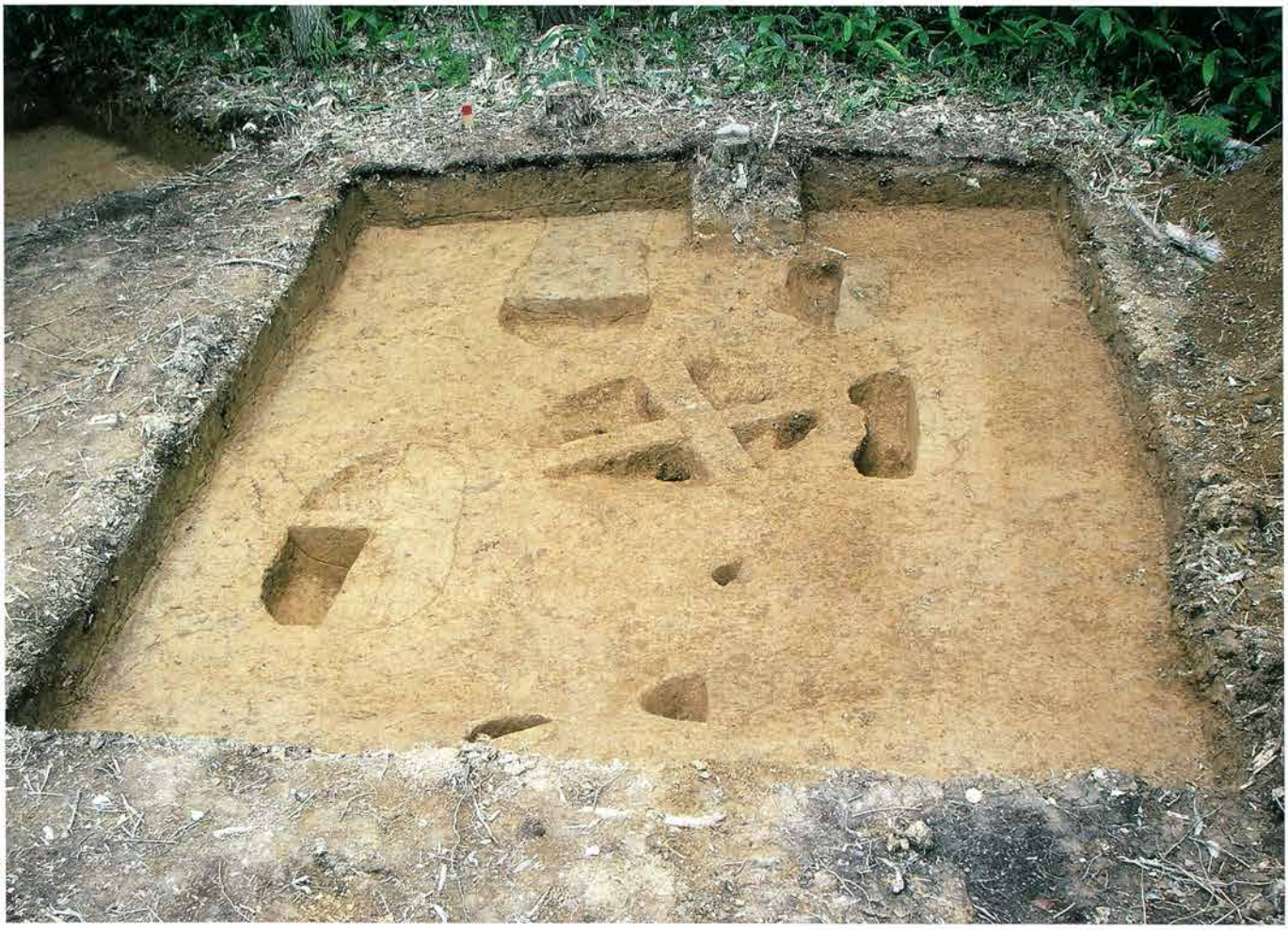
B地点30T濠５西側断面（東から）

B地点30T濠５遺物（236～238）出土状況（東から）

B地点36T濠１西側断面（西から）

B地点36T濠１遺物（101など）出土状況（南から）

A地点全景（東から）

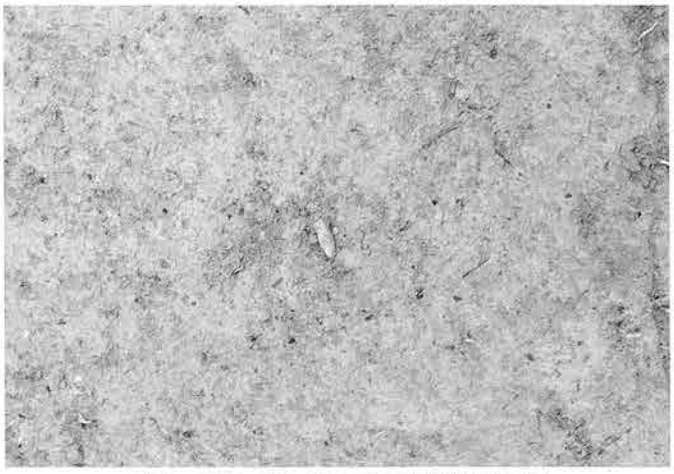


A地点１T土坑墓全景（東から）

A地点遠景（南から）

A地点西側（奥１T・手前２T）遠景（東から）

A地点１TSK１南北断面（東から）

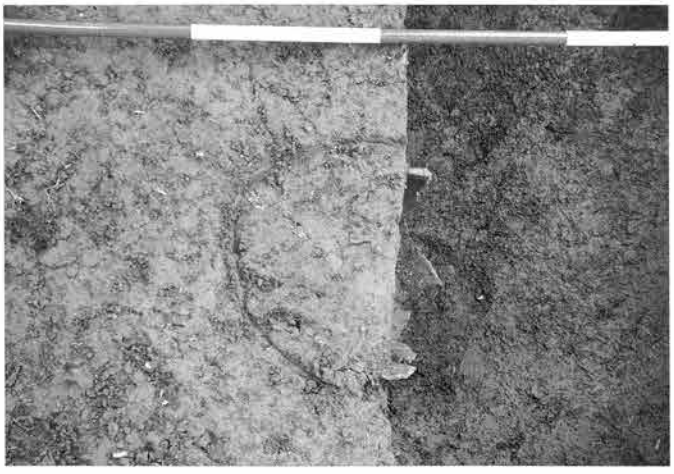


A地点１TSK１覆土上層石鏃出土状況（東から）

A地点１T土坑墓（奥左：SK１、奥右：SK２、手前：SK３）（東から）

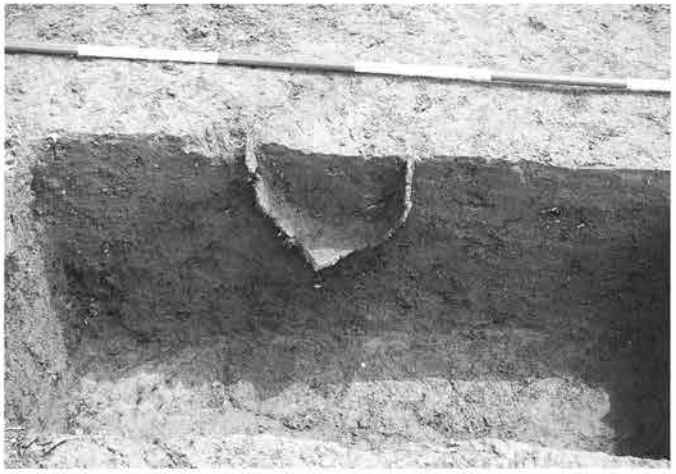
A地点２T（東から）

A地点３T（東から）



A地点３T埋甕（南東から）

A地点３Ｔ埋甕断面（南から）



A地点３Ｔ埋甕断面２（南から）

A地点５Ｔ（西から）

A地点９Ｔ（北東から）

A地点10T（北から）

A地点10T土層断面（北西から）

A地点11T（南西から）

A地点12T（北から）

A地点13T（北から）

A地点13T土層断面（北西から）

A地点14T（南東から）

A地点15T（南東から）

A地点16T（南東から）

A地点49T（北東から）

A地点17T（南から）

A地点17T土層断面（北西から）

A地点51T（東から）

A地点52T（南西から）

A地点53T土層断面（西から）

A地点56T（南東から）

A地点56T土層断面（北東から）

A地点57T土層断面（北東から）

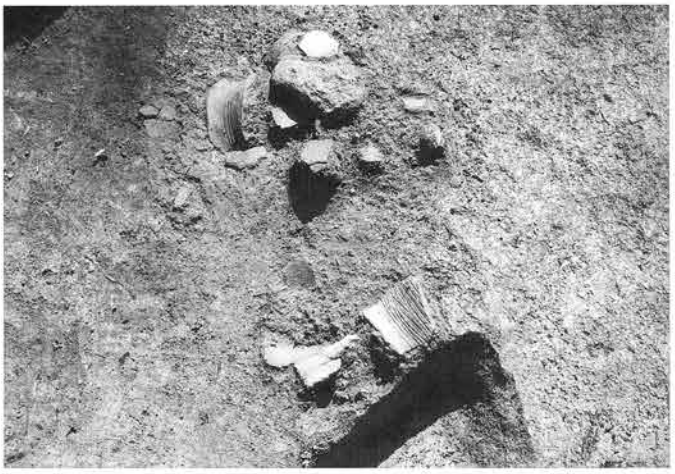
B地点43T（南東から）

B地点59T（東から）

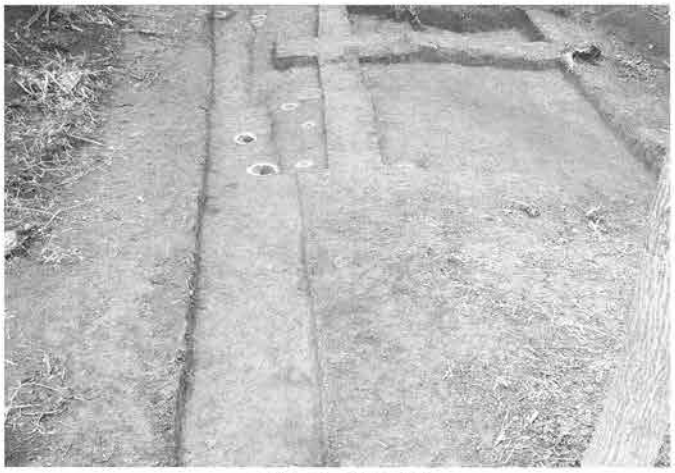
B地点18T（南西から）

B地点18T北側（南西から）

B地点18TSK２遺物出土状況１（北から）



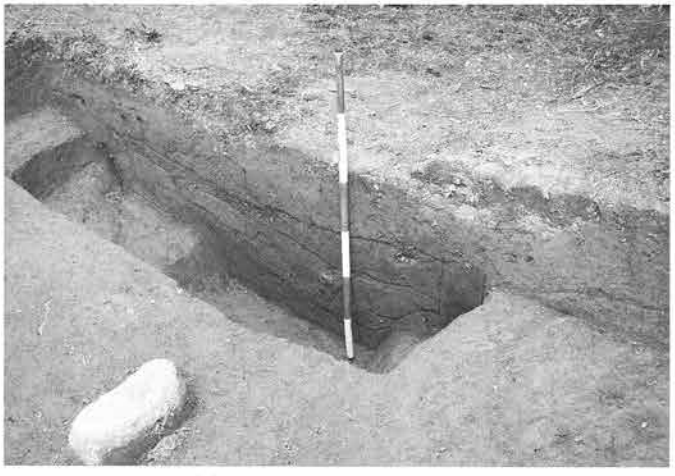
B地点18TSK２遺物出土状況２（北西から）



B地点33T（西から）

B地点19T（西から）

B地点20T縦堀２検出状況（北から）



B地点20T縦堀２土層断面（北西から）

B地点20T縦堀２遺物出土状況（北西から）

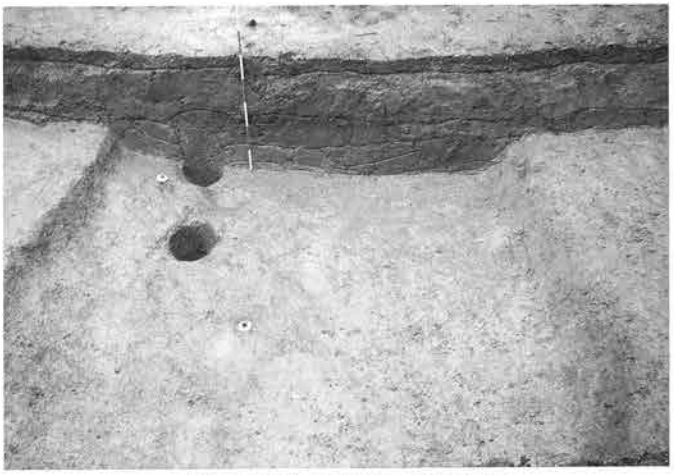
B地点20T縦堀２上層遺物出土状況（北から）

B地点20T東側（西から）

B地点20T東側P１遺物出土状況（北から）

B地点66T（南東から）

B地点65T（南東から）



B地点21T縦堀１土層断面（南東から）

B地点縦堀１（左：21T、右：68T）（東から）

B地点68T西側（南西から）

B地点68T西側土層断面（東から）

B地点68T中央（南から）

B地点34T（南西から）

B地点22T（東から）

B地点22T土層断面（南から）

B地点22TSB 1（北東から）

B地点22TSB 1（南西から）

B地点62T（北東から）

B地点62T（南から）

B地点62T土層断面（南西から）

B地点62T土層断面（南西から）

B地点63T（西から）

B地点23T（南東から）

B地点35T南側（東から）

B地点35T北側（北西から）

B地点26T（東から）

B地点26T濠１付近（東から）

B地点26T濠１土層断面（南から）

B地点26T（南西から）

B地点36T全景（北から）

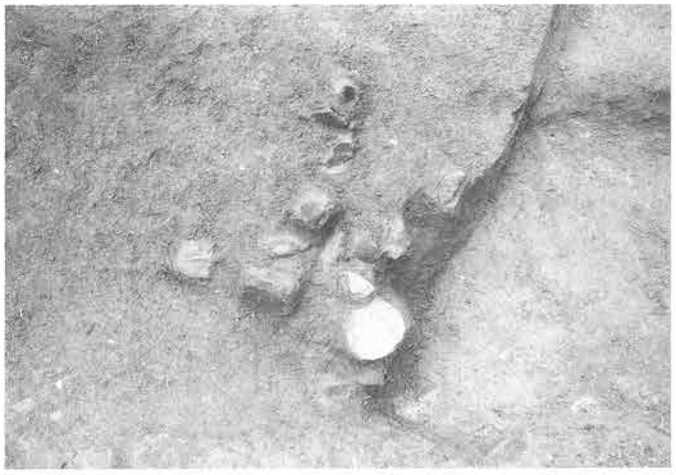
B地地点36T濠１東側土層断面（西から）

B地点36T濠１遺物出土状況１（西から）

B地点36T濠１西側土層断面（東から）

B地点25T全景（北西から）

B地点25T濠２東側土層断面（南西から）



B地点25T濠２内遺物出土状況（南西から）

B地点25T斜面（南から）

B地点61T縦堀２土層断面（南東から）

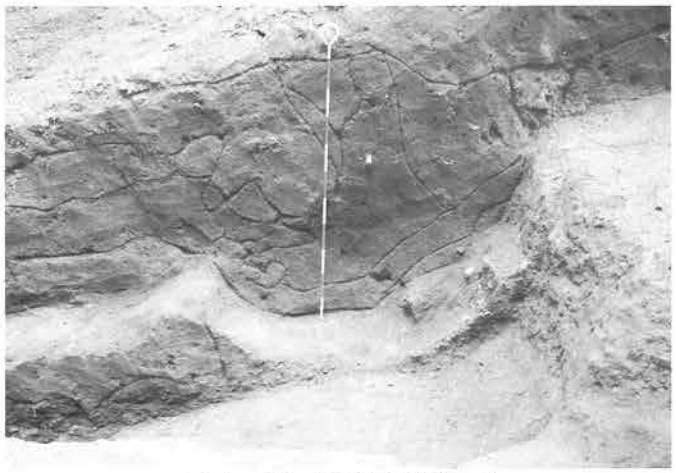
B地点61T縦堀２土層断面と遺物（131）出土状況（南東から）

B地点61T縦堀２上層の遺物（119）出土状況（南東から）

B地点61T縦堀２の上層（Ⅱ層）遺物（159等）出土状況（南東から）

B地点61T中央の土層断面（西から）

B地点61T南側の土層断面（北西から）



B地点61T濠２土層断面（北東から）

B地点61T・20T間の表土現況（南東から）

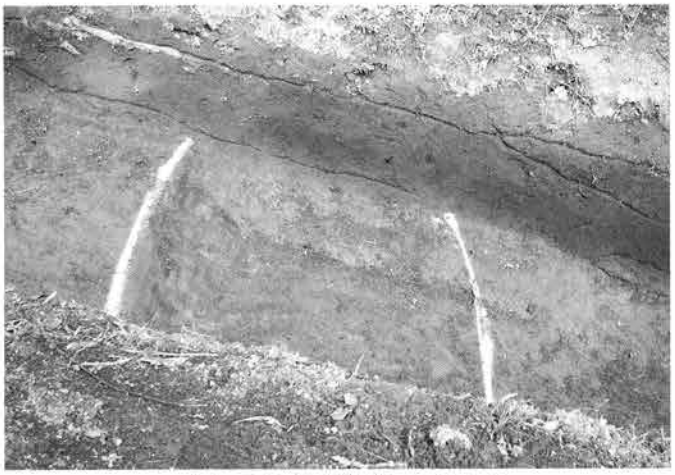
B地点南側斜面（南東から）

B地点31T斜面（南東から）

B地点31T土層断面（西から）

B地点31T濠３土層断面（南西から）

B地点32T（北西から）



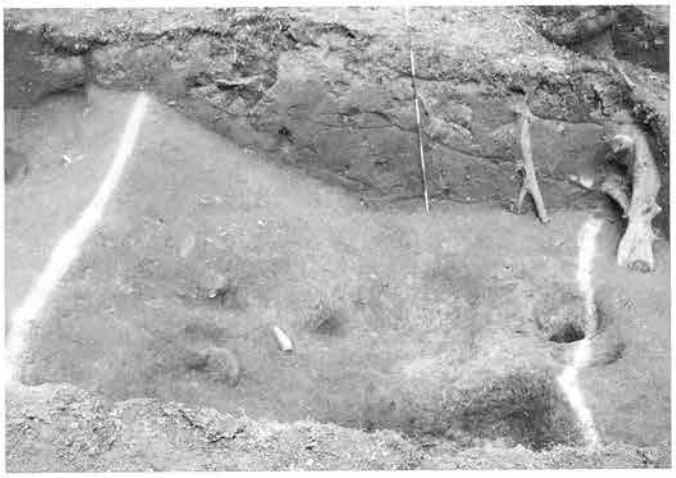
B地点32T濠３西側土層断面（西から）

B地点47T（南西から）

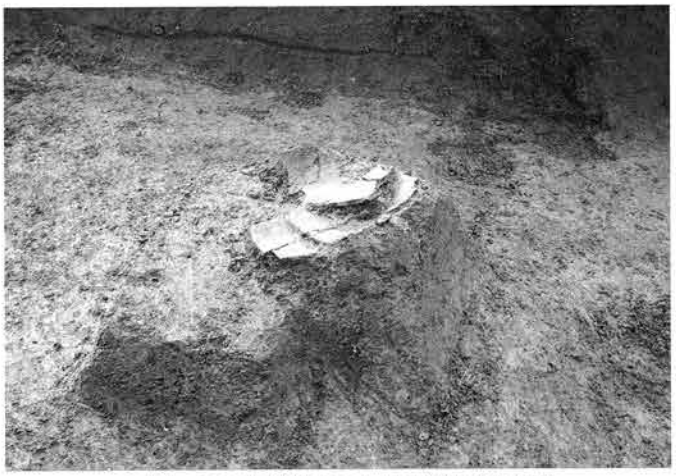
B地点47T土層断面（西から）

B地点29T（南西から）

B地点29T東側土層断面（西から）



B地点29T濠４西側土層断面（南東から）



B地点29T３Ⅱ層土器（228）出土状況（東から）

B地点北側斜面（左：30T、右27T）遠景（北西から）

B地点北側斜面（左：27 、右：69T）遠景２（北東から）

B地点30T（１）（北から）

B地点30T（２）（南から）

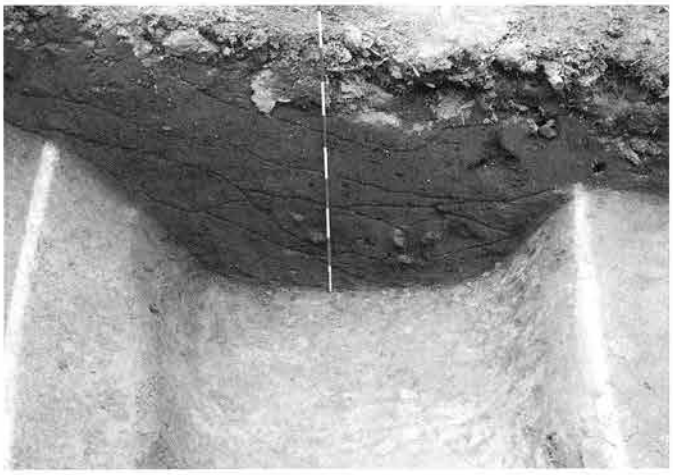
B地点30T（３）（北西から）

B地点30T（４）（北東から）

B地点30T濠４土層断面（東から）

B地点30T濠４遺物出土状況（南から）

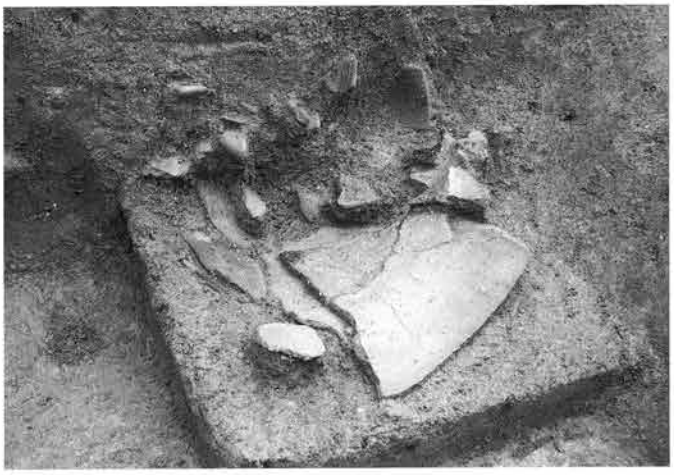
B30T濠５東側土層断面（西から）



B地点30T濠５西側土層断面（東から）

B地点30T濠５遺物（236～238）出土状況１（東から）

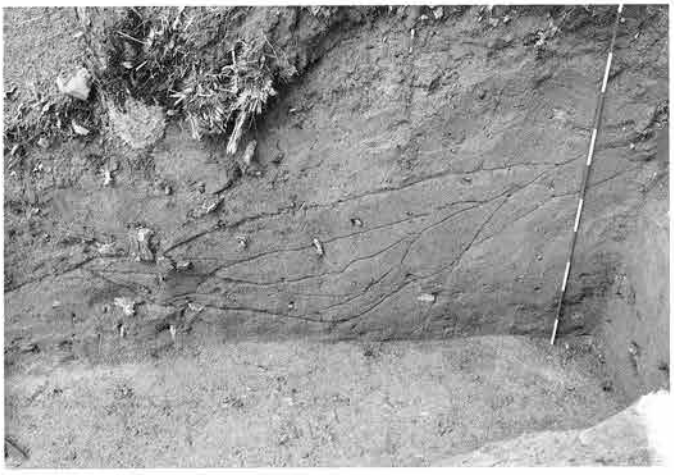
B地点30T濠５遺物出土状況２（東から）



B地点30T濠５遺物出土状況３（東から）

B地点30T濠５遺物出土状況４（南東から）

B地点27T（北西から）

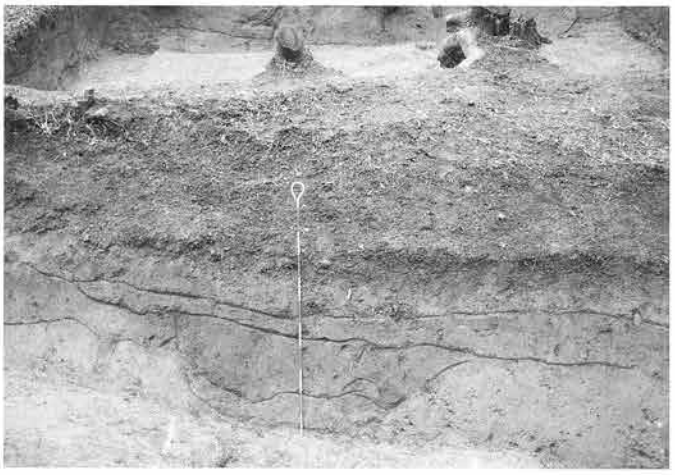


B地点27T濠５東側土層断面（西から）

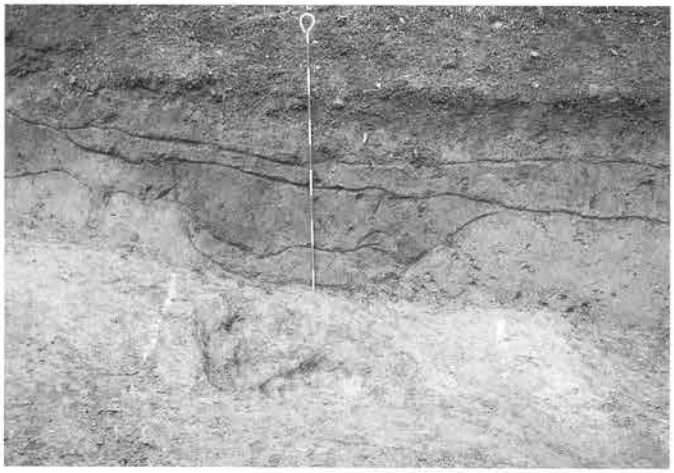
B地点67T（南東から）

B地点69T（北東から）

B地点69T南側土層断面（北西から）



B地点69T北側縦堀２土層断面（北西から）



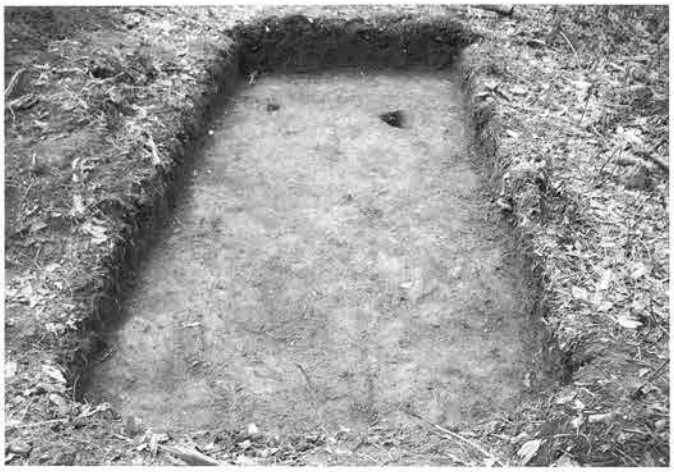
B地点69T北側縦堀２土層断面２（北西から）

B地点北側斜面縦堀２遠景１（北西から）

B地点北側斜面縦堀２遠景２（北西から）

B地点北側斜面縦堀２遠景３（北西から）

C地点37T全景（南西から）



C地点38T全景（南西から）

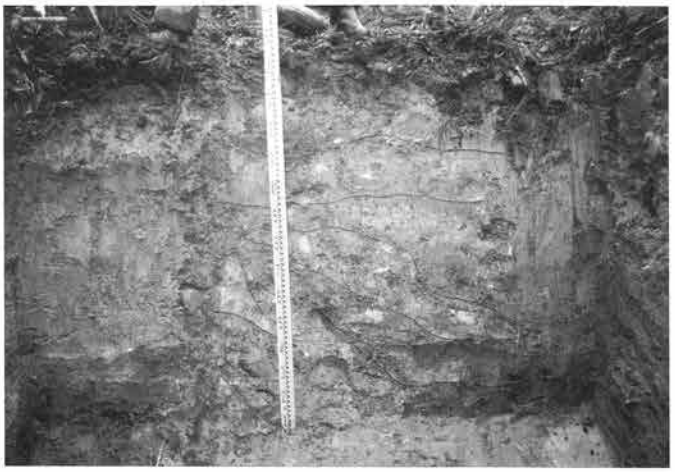
H20　70T完掘（南西から）

H20　70T北東壁土層断面（西から）

H20　74T完掘（北東から）

H20　74Tテラス1・2土層断面（北西から）

H20　74T遺物出土状況（北東から）



H20　73T西壁（東から）

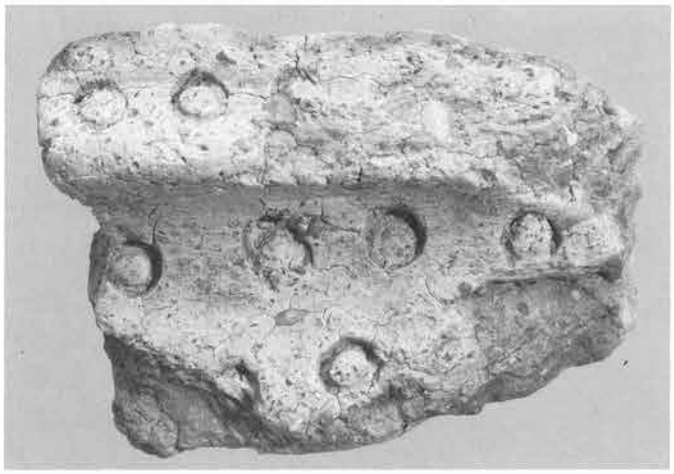
1TSK1　ガラス小玉

4

236

47

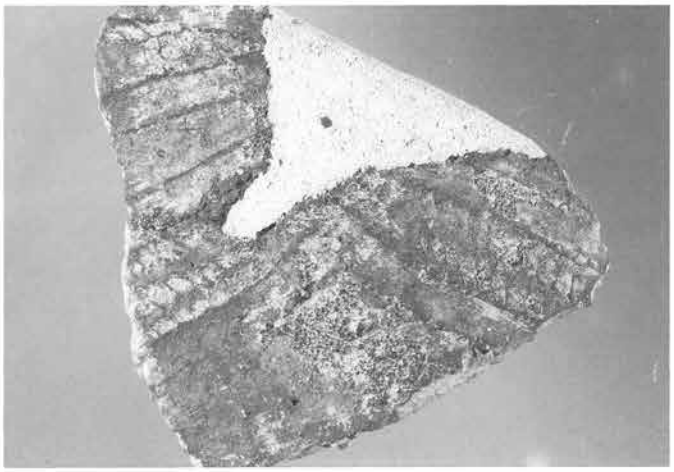
300　　282



10

12

42



117

91

109

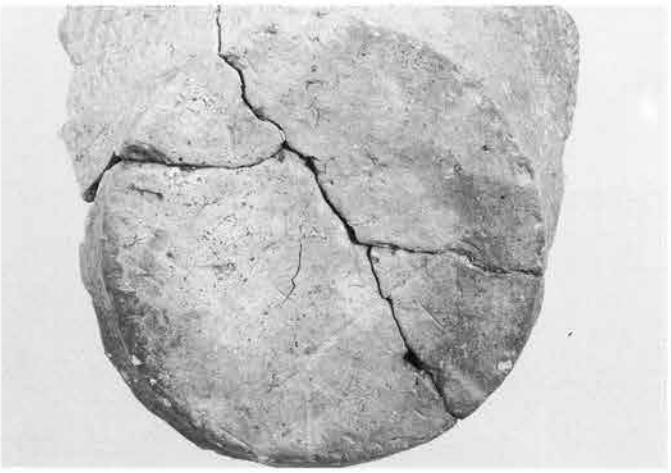
119口縁

119胴部

141

167

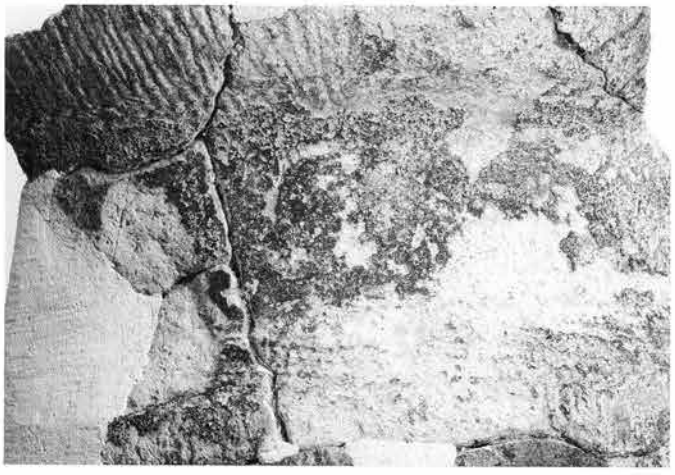
176



194

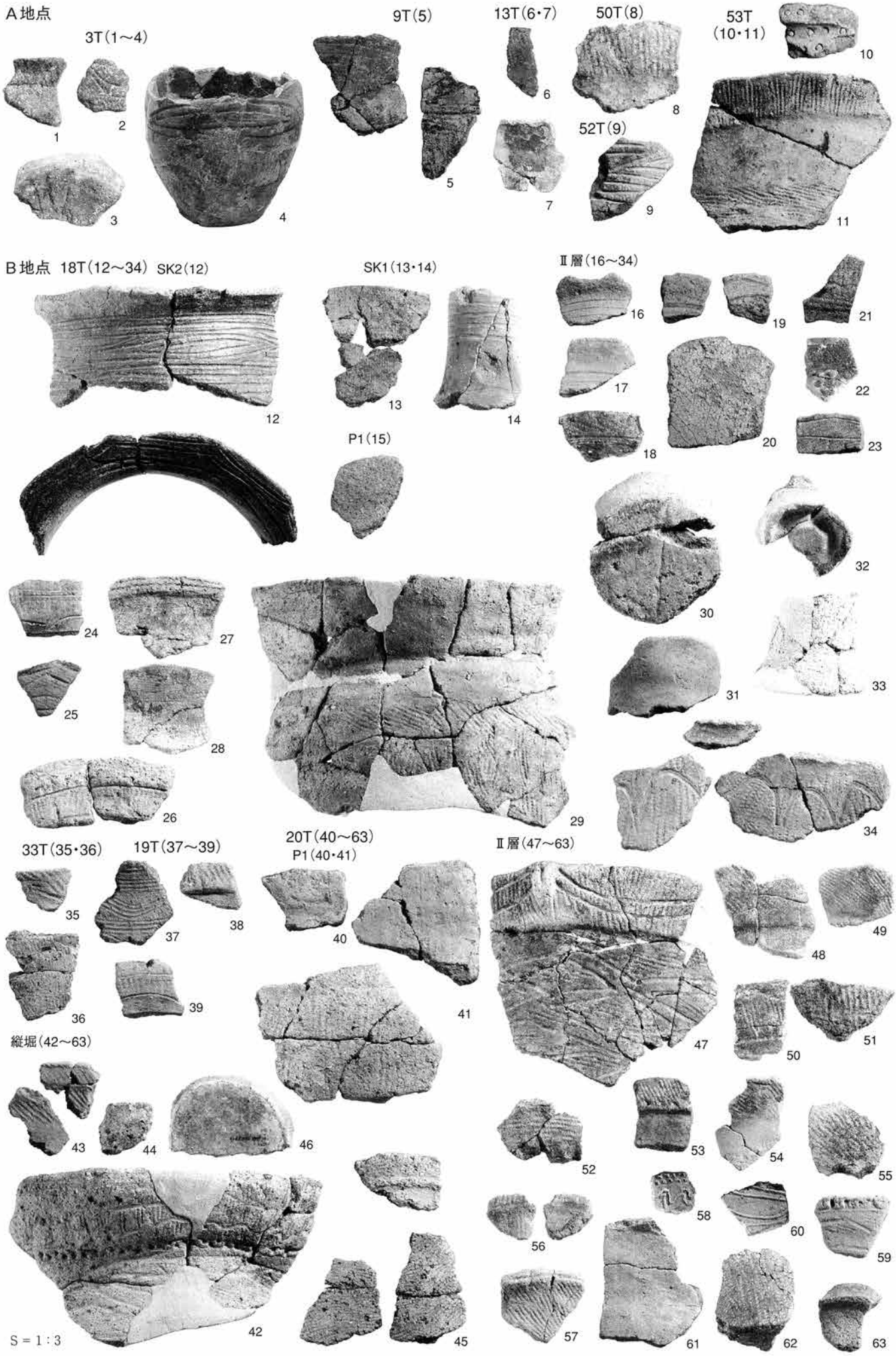
222

231

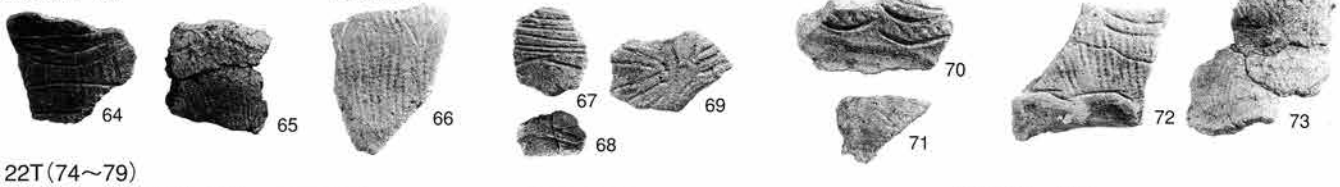


238

264

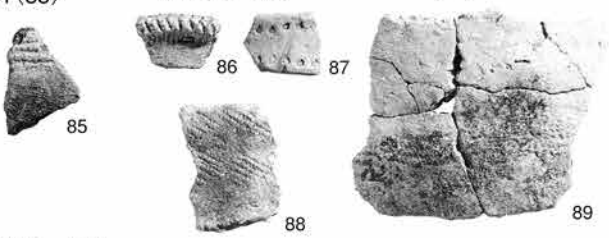

A地点
3T(1～4)
9T(5)
13T(6・7)
50T(8)
53T
(10・11)
52T(9)
B地点 18T(12～34) SK2(12)
SK1(13・14)
Ⅱ層(16～34)
P1(15)
33T(35・36)
19T(37～39)
20T(40～63)
P1(40・41)
Ⅱ層(47～63)
縦堀(42～63)
S＝1：3

66T(64・55)　65T(66)　21T(67～69)　68T(70～73)

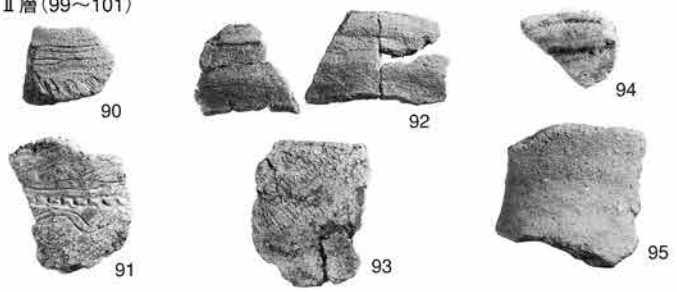


22T(74～79)
P12(74)　Ⅱ層(77～79)　P24(75)　P76(76)　62T(80～84)

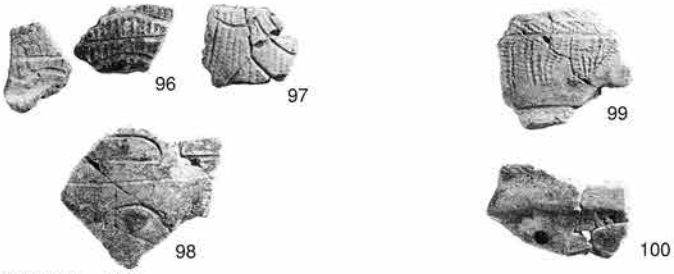
63T(85)　64T(86～88)　23T(89)



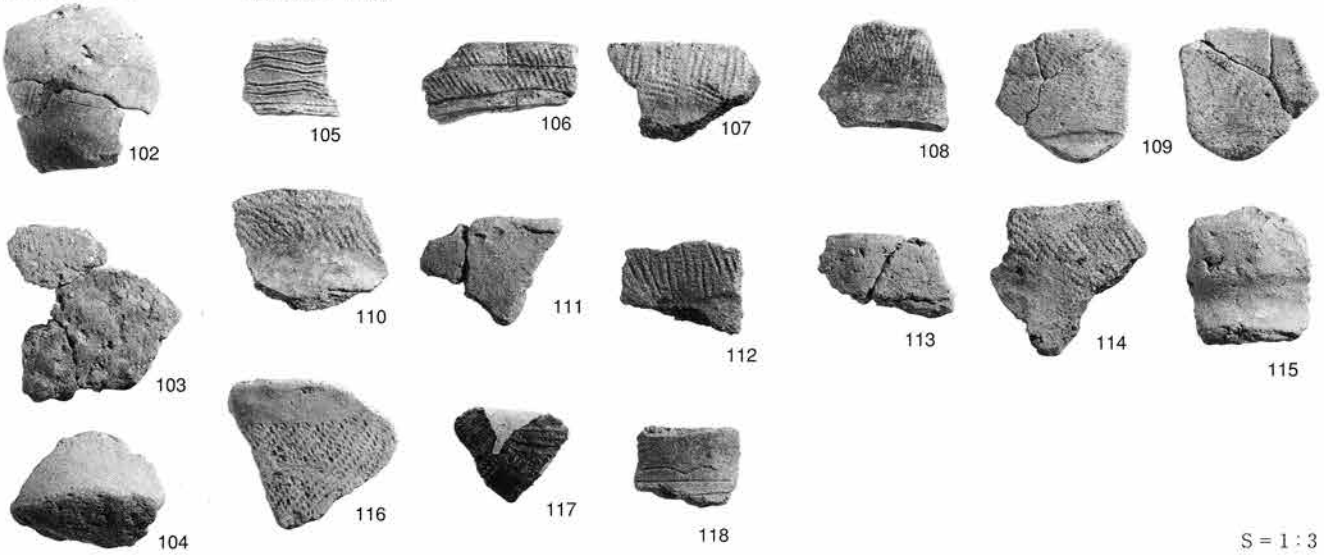
36T(90～101)
Ⅱ層(99～101)　濠1一括(92・93)　濠1・1層(94・95)



濠1・2層(96～98)　濠1・5層(99～101)

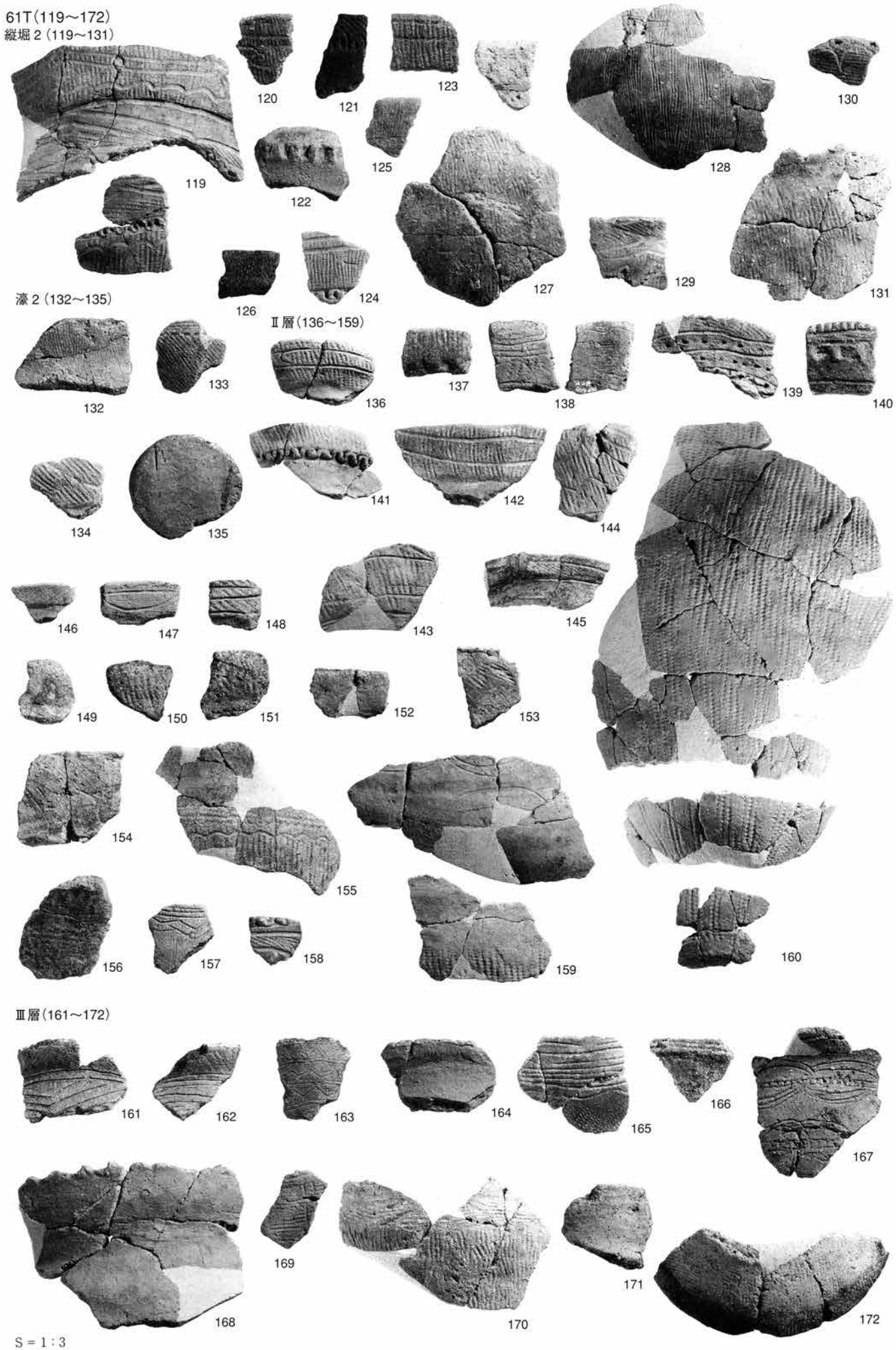


25T(102～118)
濠3(102～104)　Ⅱ層(105～118)



S＝1：3

61T(119～172)
縦堀 2 (119～131)



S = 1 : 3

31T（173～185）
濠 3（173・174）

173

Ⅱ層（175～185）

175

176

177

178

179

174

180

181

182

183

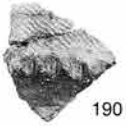
184

185

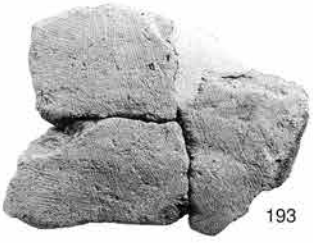
32T（186～196）

186

188


190

191


193

194

187

189

192

195

196

47T（197～219）
Ⅱ層（197・212）

197

198

199

200

201

205

206

202

203

204

210

Ⅲ層（213～219）

213

216

214

215

217

219

207

208

209

212

211

218

29T（220～230）
濠 4（220～223）

220

221

222

223

228

Ⅱ層（224～230）

224

226

225

227

229

230

30T（231～235・242・243）
濠 4（231～235）

231

232

233

234

235

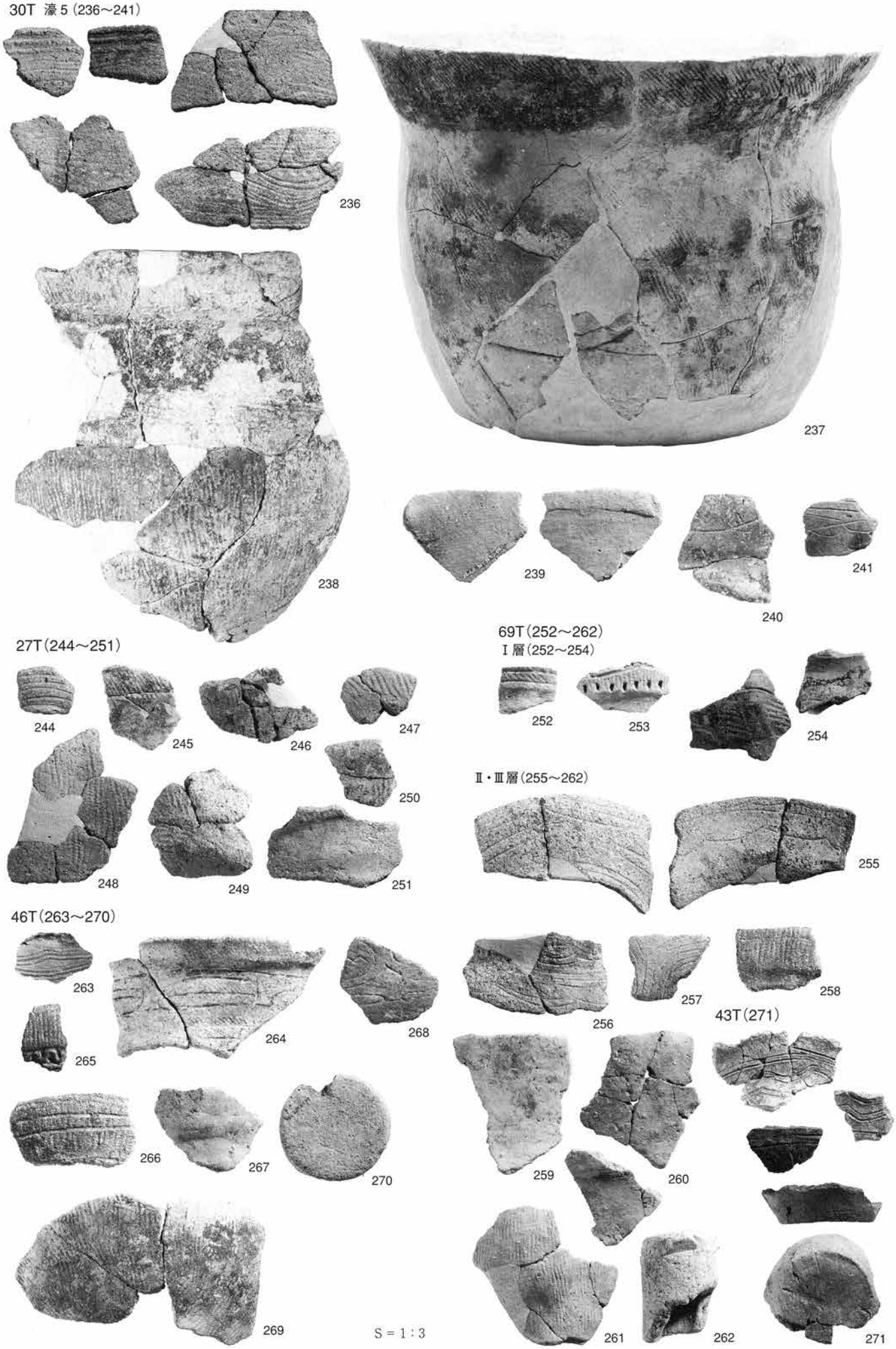
Ⅱ層（242・243）

242

243

S＝1：3

30T 濠5（236～241）



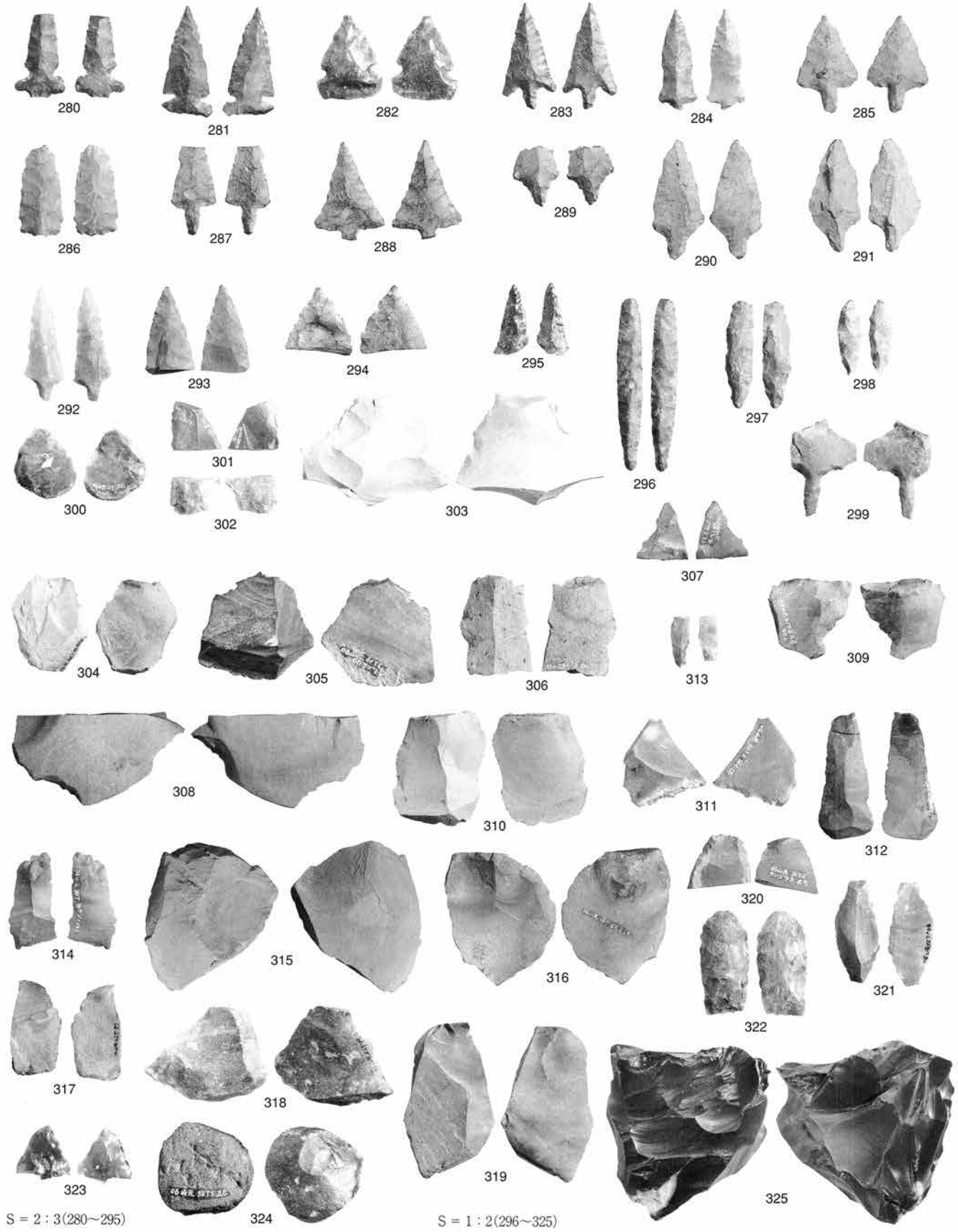
S＝1：3

C地点

41T(272)

42T(273)

S = 1 : 3(272・273)　　S = 1 : 2(274～279)



S = 2 : 3(280～295)　　S = 1 : 2(296～325)

326

327

328

329

330

331

332

334

336

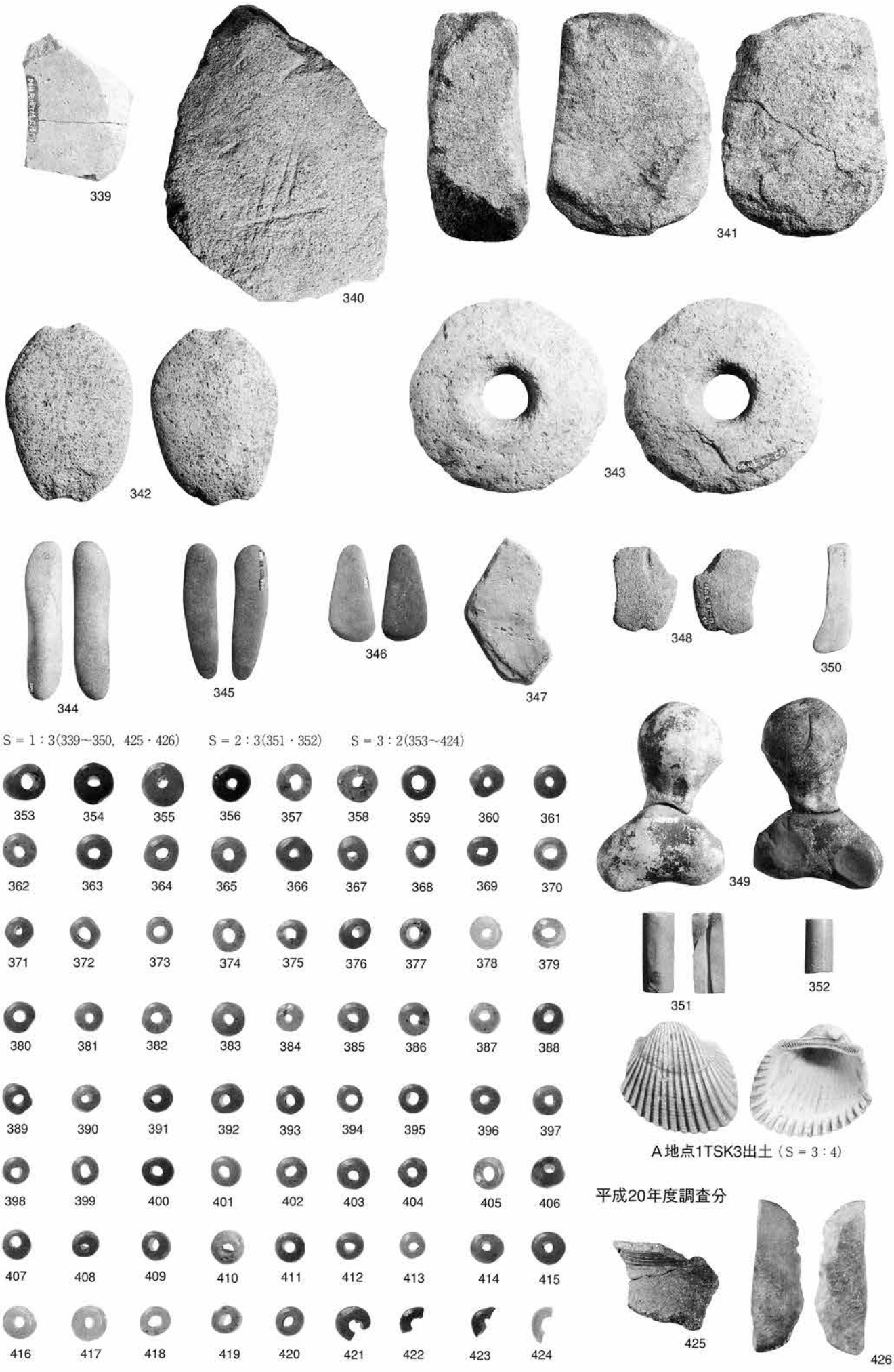
333

335

337

338

S = 1 : 3(326～338)


339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
350
S = 1 : 3(339～350, 425・426)　S = 2 : 3(351・352)　S = 3 : 2(353～424)
353 354 355 356 357 358 359 360 361
362 363 364 365 366 367 368 369 370
371 372 373 374 375 376 377 378 379
380 381 382 383 384 385 386 387 388
389 390 391 392 393 394 395 396 397
398 399 400 401 402 403 404 405 406
407 408 409 410 411 412 413 414 415
416 417 418 419 420 421 422 423 424
349
351
352
A地点1TSK3出土（S = 3 : 4）
平成20年度調査分
425
426

報告書抄録

ふりがな	やまもといせき
書名	山元遺跡
副書名	県内遺跡発掘調査報告書
巻次	I
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第199集
編著者名	滝沢規朗、澤田　敦、斎藤　準、肥塚隆保・田村朋美（奈良文化財研究所）、吉田邦夫（東京大学総合研究博物館）
編集機関	財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒956-8845　新潟市秋葉区金津93番地１　TEL　0250（25）3981
発行年月日	西暦2009（平成21）年３月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
山元遺跡（やまもと）	新潟県村上市（にいがたけんむらかみし）大字下助淵字（おおあざしもすけふちあざ）山元（やまもと）	15-2129	428	38度 12分 29秒	137度 27分 22秒	20051109～1212、20060411～0615、20080417～0508・0630～0714	1,705㎡	遺跡内容・範囲確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山元遺跡	高地性 環濠集落	弥生時代 中期後葉 ～後期後葉	環濠、縦堀２条、掘立柱建物１棟、土坑墓７基、土坑15基、溝２条、ピット495基	弥生土器（東北系、北陸北東部系、続縄文）、粘土塊、石器・石製品（石鏃、石錐、環状石斧、磨石類、砥石等）、ガラス小玉72（完形品68、半損品４）	日本海側最北の高地性環濠集落。主体となる土器は東北系で、東北系土器分布圏では初めての環濠集落を確認した。試掘確認調査を実施した段階で、遺跡の重要性から現状保存が確定しており、本発掘調査は実施していない。

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第199集

県内遺跡発掘調査報告書

山元遺跡

平成21年３月30日印刷
平成21年３月31日発行

編集・発行　新潟県教育委員会
〒950-8570　新潟市中央区新光町４番地１
電話　025（285）5511

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-8845　新潟市秋葉区金津93番地１
電話　0250（25）3981
FAX　0250（25）3986

印刷・製本　㈱ハイングラフ
〒950-2022　新潟市西区小針1-11-8
電話　025（233）0321
FAX　025（233）0322

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第199集『山元遺跡』　正誤表追加　　2019年9月追加

頁	位置	誤	正
抄録	編著者名	…斎藤　準、肥塚隆保…	…齊藤　準(埋文事業団)、肥塚隆保…
抄録	市町村コード	１５－２１２９	１５２１２
抄録	北緯	３８度１２分２９秒	３８度１２分１６秒
抄録	東経	１３７度２７分２２秒	１３９度２８分１２秒

新潟県埋蔵文化財調査報告書第199集　山元遺跡正誤表

＊図版1はB地点27T－30T間で環濠推定ラインのトーンが抜けているため、差し替え願います

ページ	範囲・行	誤	正
挿図目次	下段	第17図　・・・P47	第17図・・・P45
図版目次	中段	図版10　・・・・・68T	図版10・・・・・66T
12	第4図左端		(ﾊﾞ一標高)　39.7m
19		2　土器(図面図版・・-273・426、	2　土器(図面図版・・-273・425、
26	18行目	31T(173～184)	31T(173～185)
33	34行目	(4)不定形石器(301～322)	(4)不定形石器(301～323)
36	25行目	(8)磨石類(326～336)	(8)磨石類(326～337)
37	2行目	5点出土している(333～336)	5点出土している(333～337)
38	35行目	(12)小型特殊品(338～341)	(12)小型特殊品(344～348・426)
78		89 「トレンチ等」 23T	89「トレンチ等」 64T
78		104「器種」壺	104「器種」甕
79		116「器種」甕　　118「器種」甕	116「器種」壺　　118「器種」壺
79		173「遺構」「層位」　174「遺構」「層位」	173「遺構」濠3　　174「遺構」濠3
図版17	見出し	B地点29T	B地点29T・47T
図版37	右上	「B地点最西端」 角田山　弥彦山	「B地点最西端」 弥彦山　角田山
図版38	左列2段目	B地点61T縦掘2・環濠3(東から)	B地点61T縦掘2・濠3(東から)
図版59	左隅	縦掘(42～63)	縦掘(42～47)
図版59	右下	Ⅱ層(47～63)	Ⅱ層(48～63)
図版60	左上	P76(76)	P77(76)
図版60	左中	Ⅱ層(99～101)	Ⅱ層(90・91)
図版61	左上	Ⅱ層(136～159)	Ⅱ層(136～160)
図版62	左中	Ⅱ層(197・212)	Ⅱ層(197～212)